

青森県埋蔵文化財調査報告書 第528集

# 水上(2)遺跡Ⅱ 水上(3)遺跡Ⅱ

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2013年3月

青森県教育委員会



# 水上(2)遺跡Ⅱ 水上(3)遺跡Ⅱ

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2013年3月

青森県教育委員会



遺跡遺景（西から）



竪穴住居跡の重複状況（写真右が北）



大型建物跡 (SI-3106) (南から)



水上(2)遺跡出土土器

## 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。本報告書は、平成23年度に実施した水上(2)遺跡・水上(3)遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

水上(2)遺跡では、調査の結果、縄文時代中期を中心とする竪穴住居跡・土器埋設遺構・土坑などが発見され、大規模な集落跡であることがわかりました。また、水上(3)遺跡では、縄文時代前期から後期までの土坑・焼土遺構などが発見され、広範囲にわたり縄文時代の生活の痕跡を確認することができました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆 司

## 例 言

- 1 本書は、国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成23年度に発掘調査を実施した西目屋村水上(2)遺跡及び水上(3)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 水上(2)遺跡の所在地は青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上で、遺跡番号は343025である。また、水上(3)遺跡の所在地は青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上で、遺跡番号は343026である。
- 3 水上(2)遺跡の発掘調査は、平成18年度に第1次調査を、平成20年度に第2次調査を、平成21年度に第3次調査を、平成22年度に第4次調査を実施しており、本書は平成23年度に実施した第5次調査の発掘調査報告書である。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下の通りである。  
発掘調査期間 平成23年5月11日～平成23年11月18日  
整理・報告書作成期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、第1章、第2章、第5章を加藤隆則文化財保護主事と永瀬史人文化財保護主事が担当し、第3章を小田川哲彦総括主幹が担当した。
- 7 本書に掲載した水上(2)遺跡の土器・土製品実測図は、永瀬史人文化財保護主事が担当し、石器・石製品実測図は、加藤隆則文化財保護主事が担当した。また、水上(3)遺跡の出土遺物については、小田川哲彦総括主幹が担当した。
- 8 石器の石質鑑定は青森県立郷土館主任学芸主査 島口 天氏に依頼した。
- 9 遺物の写真撮影はシルバーフォト、フォトショップいなみに委託した。
- 10 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 11 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 12 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。(敬称略、順不同)  
西目屋村教育委員会、阿部昭典、岡村道雄、小川勝和、小倉和重、上條信彦、栗島義明、小林達雄、三宅徹也、中村 大
- 13 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく、平面直角座標第X系による。
- 14 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 15 全体図等の縮尺は、水上(2)遺跡が調査区域図を5,000分の1、調査区全体図を800分の1、遺構配置図を300分の1、水上(3)遺跡が調査区域図を2,000分の1、遺構配置図を500分の1とし、挿図ごとにスケールを示した。

- 16 遺構については、原則として検出順にその種類を示す略号と通し番号を付したが、平成18年度・平成20年度・平成21年度・平成22年度の発掘調査で使用した番号との重複をしないよう、種類別に1001からの通し番号を付した。また、整理において新規に遺構として登録したものについては、各遺構3101からの通し番号を付した。

なお、遺構に使用した略号は、以下の通りである。

S I = 竪穴住居跡 S N = 焼土遺構 S R = 土器埋設遺構 S K = 土坑 S P = ビット

- 17 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。  
 18 遺構実測図の縮尺は60分の1、拡大図は30分の1を基本とし、版面に応じて適宜変更した。挿図にはすべてスケールを示した。  
 19 遺構平面図に使用した網掛の指示は、以下の通りである。



- 20 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。  
 21 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖2006年度版』（小山正忠、竹原秀雄）を使用した。  
 22 遺物の取り上げに際しては、その種類を示す略号を付した。使用した略号は、以下の通りである。  
 P = 土器 S = 石器・石製品・自然礫  
 23 遺物実測図には、挿図毎に通しの図番号を付した。  
 24 遺物実測図の縮尺は、縄文土器は3分の1、礫石器は6分の1、剥片石器は2分の1としたが、遺物の大きさによっては適宜変更し、挿図毎にスケール等を示した。  
 25 水上(2)遺跡については、土器の破断面のうち、接合痕と考えられる部分を形状通り表現した。  
 26 水上(2)遺跡の遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下の通りである。



- 27 章末に遺構一覧表・遺物観察表を付した。計測表の( )内の数値は推定値である。  
 28 縄文原体の基本的な分類は『日本先史土器の縄紋』（山内清男1979)に準拠した。  
 29 引用・参考文献は巻末に一括した。  
 30 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。  
 31 遺物写真の縮尺は統一していない。



# 目 次

序	
例言	
目次・挿図目次・図版目次・表目次	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査と整理の経過	3
第2章 水上(2)遺跡	7
第1節 水上(2)遺跡の概要	7
第2節 基本層序	9
第3節 検出遺構と出土遺物	13
1 堅穴住居跡	13
2 焼土遺構	108
3 土器埋設遺構	111
4 土坑	111
5 ビット	122
6 出土遺物	122
遺構一覧表・遺構属性表・遺物観察表	141
第3章 水上(3)遺跡	159
第1節 検出遺構の概要と基本層序	159
1 概要	159
2 基本層序	159
第2節 検出遺構と出土遺物	161
1 土坑	161
2 焼土遺構	167
3 出土遺物	167
遺構一覧表・遺物観察表	175
第4章 自然科学分析	177
第1節 火山灰分析	177
第2節 炭化種実同定分析	179
第5章 総括	183
引用・参考文献	188
写真図版	189
報告書抄録・奥付	

## 挿図目次

図1	調査区域図	8	図51	SI-1052出土石器③	66
図2	基本層序図	9	図52	SI-1052出土石器④	67
図3	調査区全体図	10	図53	SI-1052出土石器⑤	68
図4	遺構配置図①(調査区北東部・中央部)	11	図54	SI-1053	69
図5	遺構配置図②(調査区南西部)	12	図55	SI-1054	70
図6	SI-1	14	図56	SI-1054炉・出土石器	71
図7	SI-1出土石器	15	図57	SI-1054出土石器①	72
図8	SI-1出土石器	16	図58	SI-1054出土石器②	73
図9	SI-2・出土石器・石器	18	図59	SI-1055・出土石器・石器	74
図10	SI-5・出土石器・石器	19	図60	SI-1057・出土石器	76
図11	SI-7・出土石器	20	図61	SI-1058・出土石器	77
図12	SI-8(新段階)	21	図62	SI-1059・出土石器	78
図13	SI-8(旧段階)	23	図63	SI-1059出土石器	79
図14	SI-8出土石器①	24	図64	SI-1060・出土石器	80
図15	SI-8出土石器②・石器	25	図65	SI-3101・3102	82
図16	SI-9・出土石器・石器	27	図66	SI-3101出土石器①	83
図17	SI-17・出土石器・石器	28	図67	SI-3101出土石器②・石器・土製品	84
図18	SI-19・出土石器	29	図68	SI-3102出土石器・石器	85
図19	SI-20・出土石器	30	図69	SI-3103・3104・3105	88
図20	SI-1013・出土石器・石器	30	図70	SI-3103出土石器・石器・SI-3104出土石器	90
図21	SI-1014・出土石器・石器	32	図71	SI-3103・3104出土石器	91
図22	SI-1016・出土石器①	33	図72	SI-3105出土石器・石器	92
図23	SI-1016出土石器②	34	図73	SI-3106①	93
図24	SI-1016出土石器	35	図74	SI-3106②	97
図25	SI-1017・出土石器	36	図75	SI-3106柱穴1・2出土遺物	99
図26	SI-1019・出土石器	37	図76	SI-3106柱穴3・4・5出土遺物	100
図27	SI-1020・出土石器	38	図77	SI-3106柱穴6・7出土遺物	101
図28	SI-1031・出土石器	38	図78	SI-3106柱穴8・9出土遺物	102
図29	SI-1033・出土石器	40	図79	SI-3106堆積土出土石器・石器①	103
図30	SI-1034・出土石器・石器	41	図80	SI-3106堆積土出土石器②	104
図31	SI-1035・出土石器	42	図81	SI-3107・出土石器	106
図32	SI-1036・出土石器①	43	図82	SI-3108・3109・出土石器・石器	107
図33	SI-1036出土石器②・石器	44	図83	焼土遺構・土坑・ピット	108
図34	SI-1039・出土石器・石器	45	図84	SN-3101・3102・3103・3104・出土石器	110
図35	SI-1045・出土石器	47	図85	土器埋設遺構・出土石器・石器	112
図36	SI-1045出土石器・土製品	48	図86	土坑-A群・出土石器・石器	114
図37	SI-1048・出土石器	50	図87	土坑-B群①	115
図38	SI-1048出土石器	51	図88	土坑-B群②	116
図39	SI-1049・出土石器①	52	図89	土坑-B群③・出土石器・石器	117
図40	SI-1049出土石器②・石器	53	図90	SK-14出土石器①	118
図41	SI-1050	54	図91	SK-14出土石器②	119
図42	SI-1050出土石器①	55	図92	SK-14出土石器③	120
図43	SI-1050出土石器②	56	図93	SK-14出土石器・石器④	121
図44	SI-1050出土石器③	57	図94	SP-1012・1024~1026・ 3101~3106・出土石器	122
図45	SI-1050出土石器④・石器	58	図95	遺構外出土石器①	124
図46	SI-1051・出土石器・石器①・土製品	60	図96	遺構外出土石器②	125
図47	SI-1051出土石器②	61	図97	遺構外出土石器③	127
図48	SI-1052	62	図98	遺構外出土石器④	128
図49	SI-1052出土石器・石器①	64	図99	遺構外出土石器⑤	129
図50	SI-1052出土石器②	65			

図100	遺構外出土土器⑥	130
図101	遺構外出土土器⑦・土製品	132
図102	遺構外出土土器⑧	135
図103	遺構外出土土器⑨	136
図104	遺構外出土土器⑩	138
図105	遺構外出土土器⑪・石製品	141
図106	基本層序図	159
図107	グリッド・遺構配置図	160
図108	土坑①	162

図109	土坑②	163
図110	土坑③・焼土遺構	166
図111	土坑出土遺物	170
図112	土坑・焼土遺構出土遺物	171
図113	遺構外出土土器①	172
図114	遺構外出土土器②	173
図115	遺構外出土土器	174
図116	出土土器集成図①	184
図117	出土土器集成図②	185

## 図版目次

### 巻頭図版 1

#### 巻頭図版 2

図版 1	遺跡遠景	190
図版 2	遺跡遠景・遺跡全景・基本層序	191
図版 3	SI-1	192
図版 4	SI-2・5	193
図版 5	SI-5・7・8	194
図版 6	SI-8	195
図版 7	SI-8・9	196
図版 8	SI-9・17・19	197
図版 9	SI-19・20・1013・1014	198
図版10	SI-1014・1016・1017・1019	199
図版11	SI-1019・1020・1031	200
図版12	SI-1031・1033・1034	201
図版13	SI-1034・1035・1036	202
図版14	SI-1036・1039	203
図版15	SI-1045	204
図版16	SI-1048・1049	205
図版17	SI-1049・1050	206
図版18	SI-1051・1052	207
図版19	SI-1052・1053・1054	208
図版20	SI-1054・1055	209
図版21	SI-1055・1057	210
図版22	SI-1058・1059	211
図版23	SI-1059・1060・3101	212
図版24	SI-3101・3102・3013	213
図版25	SI-3106	214
図版26	SI-3106	215
図版27	SI-3106	216
図版28	SI-3105・3107	217
図版29	SI-3108・3109・SI-1035 埋設土器	218
図版30	SR-2・1004・SP-3101	219
図版31	SK-3101~3104・SK-1021・1023	220
図版32	SK-1024・1025・1037・1038・1042・4・7	221
図版33	SK-14・322・325・1010・1013	222
図版34	SK-1034・1035・1044・1047・1048	223

図版35	SK-1049・1051・1053・1054・1057・1058・3101	224
図版36	遺構出土土器①	225
図版37	遺構出土土器②	226
図版38	遺構出土土器③	227
図版39	遺構出土土器④	228
図版40	遺構出土土器⑤	229
図版41	遺構出土土器⑥	230
図版42	遺構出土土器⑦	231
図版43	遺構出土土器⑧	232
図版44	遺構出土土器⑨	233
図版45	遺構出土土器⑩	234
図版46	遺構出土土器⑪	235
図版47	遺構出土土器⑫	236
図版48	遺構出土土器⑬	237
図版49	遺構外出土土器①	238
図版50	遺構外出土土器②	239
図版51	遺構外出土土器③	240
図版52	遺構外出土土器④	241
図版53	遺構外出土土器⑤・土製品	242
図版54	遺構出土土器 (SI) ①	243
図版55	遺構出土土器 (SI) ②	244
図版56	遺構出土土器 (SI) ③	245
図版57	遺構出土土器 (SI) ④	246
図版58	遺構出土土器・石製品 (SI)	247
図版59	遺構出土土器 (SI・SK) ①	248
図版60	遺構出土土器 (SI・SK) ②	249
図版61	土坑出土土器・遺構外出土土器	250
図版62	遺構外出土土器・石製品	251
図版63	遺跡遠景・遺跡全景	252
図版64	基本層序・遺物出土状況	253
図版65	第7・9・11・12号土坑	254
図版66	第5・6・8・13・14・15号土坑	255
図版67	第1・2・3・5・6号焼土遺構	256
図版68	土坑・焼土遺構・遺構外出土土器	257
図版69	土坑・焼土遺構・遺構外出土土器・石器	258

## 表目次

表1	SI-1052Pit 1 出土資料の器種と数量	63	表12	遺構一覧表 (その他の遺構)	144
表2	土坑-A群と新旧関係	114	表13	竪穴住居跡属性表	145
表3	石織の分類と数量	134	表14	遺物観察表 (土器)	146
表4	スクレイパーの分類と数量	134	表15	遺物観察表 (石器)	154
表5	素材剥片別の微細剥離痕跡	137	表16	遺物観察表 (土製品)	158
表6	敲磨器類の分類	139	表17	遺物観察表 (石製品)	158
表7	敲磨器類の素材種別使用面数	139	表18	遺構一覧表	175
表8	敲磨器A類の使用面数	140	表19	遺物観察表 (石器)	175
表9	敲磨器類の使用石材	140	表20	遺物観察表 (土器)	176
表10	半円状扁平打製石器の分類と数量	140	表21	時期別の住居構造	183
表11	遺構一覧表 (竪穴住居跡)	143	表22	水上(2)遺跡の石器集計表	187

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成14年に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所（以下「津軽ダム工事事務所」という。）から青森県教育庁文化財保護課（以下「県文化財保護課」という。）へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の三者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水地区内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000㎡と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センター（以下「県埋蔵文化財センター」という。）が担当して実施することになり、水上(2)遺跡は平成20年度以来継続的に発掘調査を実施している。水上(3)遺跡は平成18・19年度に発掘調査を実施した。なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は、平成20年4月に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。また、工事に伴う事前の準備や発掘調査時の安全管理などについても、その都度関係諸機関と協議を行いながら調査を進めた。

### 第2節 調査の方法

#### 1 発掘作業の方法

これまでの調査により、水上(2)遺跡は堅穴住居跡、土坑、捨て場（斜面盛土）、石棺墓等で構成される縄文時代中期の大規模な集落であることが判明している。水上(2)遺跡は広範囲かつ濃密に遺構・遺物が分布していることから、便宜的に調査区を区切って調査を進めた。水上(3)遺跡は遺構・遺物の分布が希薄であることから、トレンチ調査を先行させ、遺構が確認された付近を面的に調査した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定〕

平成23年度の調査では、平成20年度の調査で測量業者に委託して設置した基準杭を基点に、調査区内に4×4mのグリッドを設置した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット（A～Y）、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。

実測基準点となったグリッドの国土座標は、IA-0グリッドが $X=57900.000$ ・ $Y=52400.000$ 、IIA-25グリッドが $X=58000.000$ ・ $Y=52300.000$ 、IIIA-50グリッドが $X=58100.000$ ・ $Y=52200.000$ 等となる。測量原点には、測量業者のGPS測量機による3級基準点No.1-1（世界測地系で $X=59,447.727$ ・ $Y=-49,822.025$ ・ $Z=182.168$ ）、4級基準点No.1-2（ $X=59,328.712$ ・ $Y=-49,782.409$ ・ $Z=190.539$ ）、これを基準に設置したメッシュ杭M2（ $X=59,520.000$ ・ $Y=-49,840.000$ ・ $Z=180.928$ ）、M3（ $X=59,520.000$ ・ $Y=-49,820.000$ ・ $Z=180.424$ ）、M4（ $X=59,520.000$ ・ $Y=-49,780.000$ ・ $Z=181.054$ ）を使用した。レベル原点も3級基準点No.1-1、メッシュ杭M2、M3、M4を基準とし、必要に応じ実測基準点から原点移動して設置した。

#### 〔基本土層〕

遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付して呼称した。また、大別層で細別が可能な場合は枝番を採用した。

#### 〔表土等の調査〕

遺跡範囲内の表土等の調査は、これまでの調査により遺物が希薄な状況が確認されており、また、調査区が広く客土に覆われていることから、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は適宜グリッドと層位を基準に取り上げた。

#### 〔遺構の調査〕

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付して精査した。土層観察用の畦は、遺構の形態や大きさ等に応じて、基本的には四分割又は二分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要な場合はサブトレンチとともに追加設定した。

遺構内の堆積土層には算用数字を付して、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。

遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社CUBIC)を用いて、トータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図、遺構に伴う付属施設等の平面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遺り方測量等で縮尺10分の1・20分の1の実測図を作成した。

出土遺物は、遺構単位で層位を基準に取り上げることを基本とし、必要に応じてトータルステーションや簡易遺り方測量により、縮尺10分の1・20分の1のドットマップ・形状実測図等を作成した。

#### 〔写真撮影〕

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル各フィルムでの撮影及びデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリコプターや高所作業車により遺跡調査区全体の写真撮影を行った。

## 2 整理・報告書作成作業の方法

第5次調査では、縄文時代前期末葉から後期初頭の堅穴住居跡92軒、焼土遺構25基、土器埋設遺構32基、土坑59基、ピット870基、捨て場1箇所を検出し、土器・石器等の遺物が段ボール箱で925箱分出土した。堅穴住居跡を主要とする遺構の構築時期と機能的性格等の検討に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

#### 〔図面類の整理〕

遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、遺り方測量で作成した堆積土層断面図や炉跡の実測図等の図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

#### 〔写真類の整理〕

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺物の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

#### 〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

遺構内出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにし

た。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区、遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものについては、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層位等の整理をした。

#### 〔報告書掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴い使用・遺棄・廃棄の過程を提示できる資料、遺構の構築・廃絶時期等を提示できる資料、遺存状態が良好で同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種・遺跡の普遍性や変異等を提示できる資料等を主に選別した。

#### 〔遺物の観察・図化〕

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

#### 〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物実測図やその他挿図のトレースは、手作業と「トレースくん」（株式会社CUBIC）を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、手作業とデジタル機器による作業を併用した。

#### 〔遺構の検討・分類・整理〕

遺構単位に分類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関する情報を整理し、構築時期や遺構間の同時性、機能的性格、変遷過程等について検討を加えた。

#### 〔遺物の検討・分類・整理〕

遺物を時代・時期・種類別に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

#### 〔調査結果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、集落の構造や変遷過程について検討・整理した。

## 第3節 調査と整理の経過

### 1 発掘作業の経過

平成23年度の調査は、5月11日から11月18日までの期間で実施した。5月の調査当初は目屋ダムの水位上昇に伴い、標高の低い遺跡北側は水没した状況であった。このような調査上の制約から調査は、標高の高い遺跡の南側から着手した。なお、同地点は平成22年度調査終了区域の隣接区にあたる。また、遺跡北側斜面はこれまでの調査を通じて、捨て場であることが把握されており、8月上旬、目屋ダムの水位低下にあわせて、標高の低い遺跡北側斜面部の調査を開始した。

発掘調査体制は以下の通りである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	松田 守正	（平成24年3月定年退職）
次長	成田 滋彦	（平成24年3月定年退職） （現：文化財保護主幹）
総務GM	木村 繁博	（平成24年3月定年退職）
調査第二GM	川口 潤	
総括主幹	小田川 哲彦	（発掘調査担当者）

文化財保護主幹	能代谷 征則 (発掘調査担当者)
文化財保護主査	佐々木 雅裕 (現:文化財保護主幹:発掘調査担当者)
文化財保護主査	佐藤 智生 (現:県民生活文化課:発掘調査担当者)
文化財保護主査	神 昌樹 (現:文化財保護課:発掘調査担当者)
文化財保護主事	荒谷 伸郎 (発掘調査担当者)
文化財保護主事	加藤 隆則 (発掘調査担当者)
調査補助員	和田 知里 (平成24年3月退職)、最上 泰代 (平成24年3月退職)、白戸 このみ、對馬 綾子、中村 晃菜、福田 南、鈴木 清公、山田 真穂、濱田 麗奈、三上 祐賀子 (平成24年3月退職)、箕輪 匠太

#### 専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授・故人 (考古学)
調査員	葛西 勳	前青森短期大学教授 (考古学)
調査員	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文学部教授 (考古学)
調査員	島口 天	青森県立郷土館主任学芸主査 (地質学)

水上(2)遺跡及び水上(3)遺跡それぞれの発掘作業の経緯については以下の通りである。

#### 《水上(2)遺跡》

- 5月11日 調査を開始した。調査器材の搬入、調査事務所・器材庫の整備及び調査区周辺の環境整備を実施した。
- 5月上旬～ 遺構検出作業ならびに精査を実施した。調査区中央部は遺構が希薄で、近世以降の攪乱が多く見られることを確認した。
- 5月13日 度重なる降雨により調査区が水没した。
- 6月下旬～ 調査区北東部及び南西部では縄文時代の遺構が分布し、重複が著しいことを確認した。
- 7月上旬～ 北側斜面部の調査区に着手した。斜面部における厚い包含層と多量の出土遺物、また斜面上部における著しい遺構の重複を確認した。
- 8月中旬～ 作業員を増員し、北側斜面部の調査にあたる。
- 9月中旬 台風に伴う集中豪雨により、北側斜面部の調査区が水没する。
- 9月下旬～ 調査区北東部の調査が終了した。作業員を北側斜面部に投入する。
- 10月上旬～ 調査区南西部の調査が終了した。作業員を北側斜面部に投入する。
- 10月12日 株式会社シン技術コンサルに委託して、調査区域全体の空中写真撮影を実施した。
- 11月18日 今年度予定されていた調査を終了した。遺物は段ボール箱で925箱分出土した。

#### 《水上(3)遺跡》

- 9月初旬～ 調査開始に先立ち、プレハブ等を設置し、水上(2)遺跡より調査器材を搬入した。平成19年度の第1次調査時のトレンチを確認しながら、雑草木の除去に務めた。
- 9月下旬～ 第1次調査の西側隣接区域に遺構と遺物を検出したことから、その地点を主体に、面的



に調査することとした。調査区北側と西側のトレンチは、遺構・遺物の検出がなかったため遺構・遺物を検出した地点に発掘調査区を絞った。

- 10月中旬～ 不整形な土坑の他にフラスコ状土坑・焼土遺構を検出し、精査を進めた。遺物は、調査区南東側から散発的に出土した。
- 11月上旬 遺構精査の終了。第3週目には悪天候の中、撤収の準備を開始した。
- 11月18日 水上(3)遺跡の調査を終了した。遺物は段ボール箱で6箱分出土した。

## 2 整理・報告書作成作業の経過

平成23年度の調査の結果、水上(2)遺跡では縄文時代前期末葉から後期初頭の竪穴住居跡92軒、焼土遺構25基、土器施設遺構32基、土坑59基、ピット870基、捨て場1箇所を検出し、土器・石器等の遺物が段ボール箱で925箱分出土した。このうち北側斜面部は、捨て場が東西方向に続いていくことから、整理作業を遺構図面の整理、遺物整理のみに留め、当該年度調査のうち調査区北東部から南西部の約4700㎡部分を報告書刊行の対象とした。水上(3)遺跡は調査区全域を報告書刊行の対象とした。

整理・報告書作成作業は平成24年4月1日から平成25年3月31日の期間で行った。

整理・報告書作成体制は以下の通りである。

総括主幹	小田川 哲彦	(報告書作成担当者)
文化財保護主幹	佐々木 雅裕	(報告書作成担当者)
文化財保護主事	加藤 隆則	(報告書作成担当者)
文化財保護主事	永瀬 史人	(報告書作成担当者)
調査補助員	中村 晃菜、福田 南、鈴木 清公、山田 真穂、 對馬 郁美、小笠原 圭資	
整理作業員	内田 祐子、坂本 歌織、長内 績江、濱田 麗奈、 野呂 康弘、藤原 有希、須藤 智代、野澤 望、 木村 富美子、畑中 順子	

整理・報告書作成作業の経過と作業委託状況は以下の通りである。

- 4月初旬～ 遺物の洗浄・注記作業を実施した。洗浄・注記の済んだ土器について、遺構や地区ごとに順次接合・復元作業を実施し、これと併行して土器の報告書掲載遺物の選別を行った。併せて、遺構の検討・整理を開始した。また、遺構図面の修正作業も開始した。
- 5月上旬～ 洗浄の済んだ石器について分類、報告書掲載遺物の選別等を行い、台帳に登録した。
- 6月上旬～ 土器の接合・復元作業が終了し、台帳に登録した。その後、報告書に掲載する土器について、実測・拓本等の図化作業を開始した。
- 火山灰分析を、国立大学法人弘前大学理工学部教授 柴 正敏氏に依頼した。
- 7月下旬～ 報告書に掲載する土器について、実測・図化作業を株式会社アルカに委託した。
- 8月上旬～ 報告書に掲載する剥片石器について、実測・図化作業を株式会社ラングに委託した。
- 8月下旬～ 報告書に掲載する礎石器について、実測・図化作業を開始した。
- 10月上旬～ 図化作業が完了した遺物(土器)のトレースを開始した。
- 11月初旬～ 遺構実測図、遺構配置図のトレースを開始した。

- 11月上旬～ 選別した炭化種実の同定を（株）パレオラボに委託した。
- 11月下旬～ シルバーフォト・フォトショップいなみに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行った。
- 12月中旬～ 図化作業が完了した遺物（礫石器）のトレースを開始した。
- 1月中旬～ シルバーフォトに委託して、巻頭写真に用いる土器の集合写真撮影を行った。
- 1月下旬～ 原稿・版下等を揃え、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月27日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。  
最後に記録類・出土品を整理して収納をした。

## 第2章 水上(2)遺跡

### 第1節 水上(2)遺跡の概要

水上(2)遺跡は岩木川(現美山湖)の右岸に位置し、岩木川の支流である湯ノ沢川との合流点に所在する。当遺跡は、平成18年度より4次にわたる調査を実施しており、縄文時代中期前葉から末葉の竪穴住居跡と土坑を主体として、遺跡北側縁辺の斜面には、縄文時代前期末葉から中期後葉までの斜面捨て場が形成されていることが、これまでの調査で明らかになっている。

今報告書は、平成23年度に実施した第5次調査の成果についてまとめたものである。当遺跡に関する報告は昨年度より刊行しており、遺跡の環境(遺跡の位置、周辺の遺跡、地形・地質等)については、前報告(青森県埋蔵文化財調査報告書第514集)に詳しい。このため本書では、これらの項目については割愛し、第5次調査に係る事項についてのみ記載する。

今報告における調査区域は、遺跡範囲の北東部から南西部の段丘平坦面にあたる地区で、昨年度報告(前掲書)の西側及び北側隣接区の4700㎡である(図1)。

調査区の地形は大きく、南から北へ向かって緩やかに傾斜し、等高線は南西から北東方向へ走っている。今報告での標高の最高地点は、調査区南西部のSI-1048付近で標高182.1m、また最低地点は、調査区中央部のVIIK-83グリッド付近で標高179.9mであり、調査区内の標高差は約2mである。

遺跡東側の地山は昨年度の調査で、砂礫層とシルト質層が調査区を南北方向へ、交互に走っていることが明らかになっている(図2)。今年度の調査区でも、北東部では昨年度確認したシルト層が帯状に延びていることを確認し、後述するように、この地点に竪穴住居の分布が偏在することを追認している。また、調査区南側では、シルト層の帯状分布が南北から東西方向へと移行しており、図示していないが、今年度調査区の中央部分でもシルト層の東西方向への帯状分布を確認している。

今年度報告分の検出遺構は、縄文時代中期前葉から後期初頭の竪穴住居跡43軒、焼土遺構4基、土器埋設遺構2基、土坑46基、ピット19基である。遺物は、同時期の縄文土器、石器、土製品、石製品等が、段ポール換算で80箱分出土した。

竪穴住居跡の分布は、調査区北東部及び調査区西側縁辺で著しい重複を見せ、調査区中央部から南西部においては疎らである。北東部の竪穴住居跡の分布は、傾斜面の等高線に平行して広がるシルト質層(第IV層)の分布域と一致しており、水上(2)遺跡では、集落形成において地質・地形が大きく左右していたことが理解される。また昨年度も併せた遺構の時間的な分布傾向としては、段丘の西縁部では縄文時代末葉期、調査区中央部では縄文時代中期前葉から後葉が認められるようである。

検出遺構に関する特記事項としては、長軸11mを越える縄文時代中期末葉の大型建物跡(SI-3106)の発見や、これまで水上(2)遺跡の時間的下限であった縄文時代中期末葉以降の竪穴住居跡(SI-3101、縄文時代後期初頭)の発見などがあげられる。

出土遺物については、SI-1036で円筒上層d式土器の良好な一括出土資料がある。SK-14では浅い土坑ながら、半円状扁平打製石器20点、蔽磨器類10点が出土するなど、特異な様相を見せている。SI-1052内では珪質頁岩の剥片集積遺構がみられ、同一母岩の良好な接合資料となる。このほか特筆すべき資料として、線刻のある石製品が出土している。

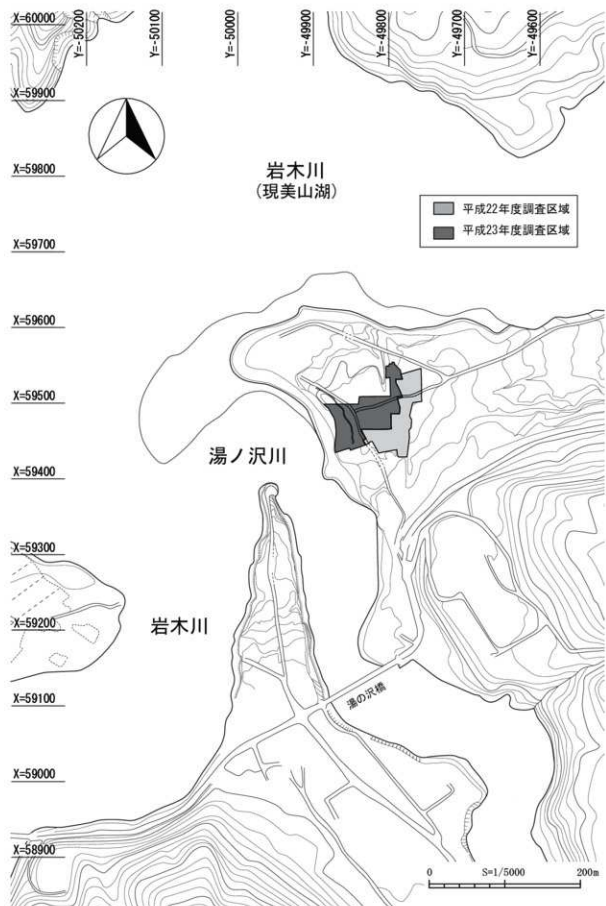


図1 調査区域図

## 第2節 基本層序

第5次調査では、調査区内の2カ所において基本層序図を作成した(図2)。基本層序の理解は、昨年度報告第514集と基本的には共通しているが、新たに次のことが明らかになった。基本層第Ⅱ層の上部に観察される粒子について、これまで白頭山火山灰(B-Tm)の混入が想定されていたが、今回同層について自然科学分析を実施した結果、その存在が確定されるに至った。詳細は第4章第1節に譲るが、これにより同層の堆積時期の下限は平安時代と考えられる。

なお本書では、第Ⅱ層上部に堆積した白頭山火山灰混入層を第Ⅱ層の範疇で捉え、第Ⅱa層とした。前後の層より明るみの強いこの層は、調査において比較的識別しやすく、本遺跡の調査区全域で確認でき、埋まりきらない竪穴住居跡の堆積土上層(SI-1054等)でも確認される。このほか、湯ノ沢川を挟んだ対岸の砂子瀬遺跡(青森県埋蔵文化財調査報告書第513集)や、岩木川上流に位置する大川添(2)遺跡(同第515集)などでも、同一の色調、土質をもった土層を確認しており同層が広域に分布していたことが予想されるが、前掲二遺跡の自然科学分析では、白頭山火山灰は検出されていない。

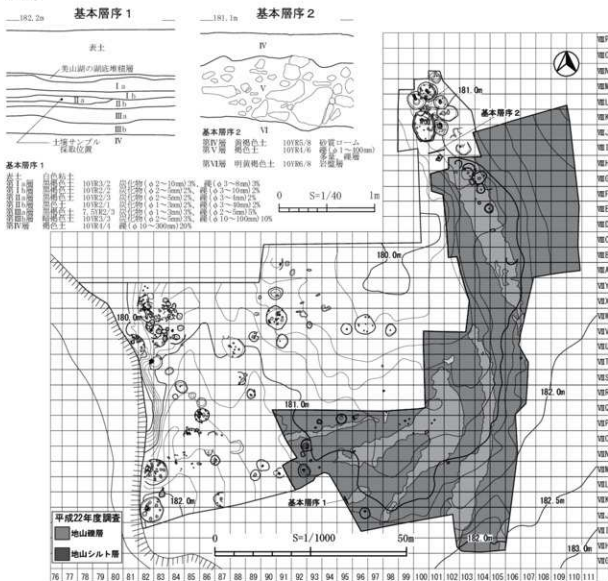


図2 基本層序図



**平成23年度調査**  
(今報告第528集)

- 竪穴住居跡 43軒
- 焼土遺構 4基
- 土器埋設遺構 2基
- 土坑 46基
- ピット 19基

**平成22年度調査**  
(前回報告第514集)

- 竪穴住居跡 12軒
- 焼土遺構 3基
- 土器埋設遺構 1基
- 土坑 8基
- ピット 8基

図3 調査区全体図

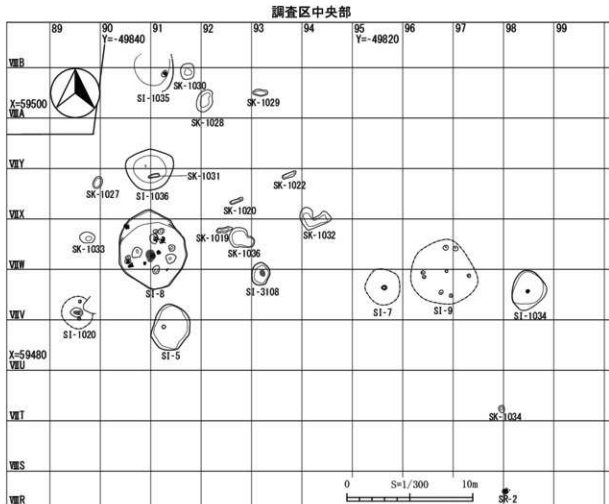
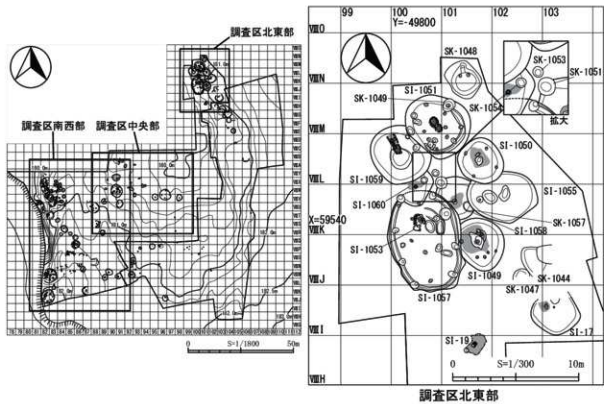


図4 遺構配置図①(調査区北東部・中央部)

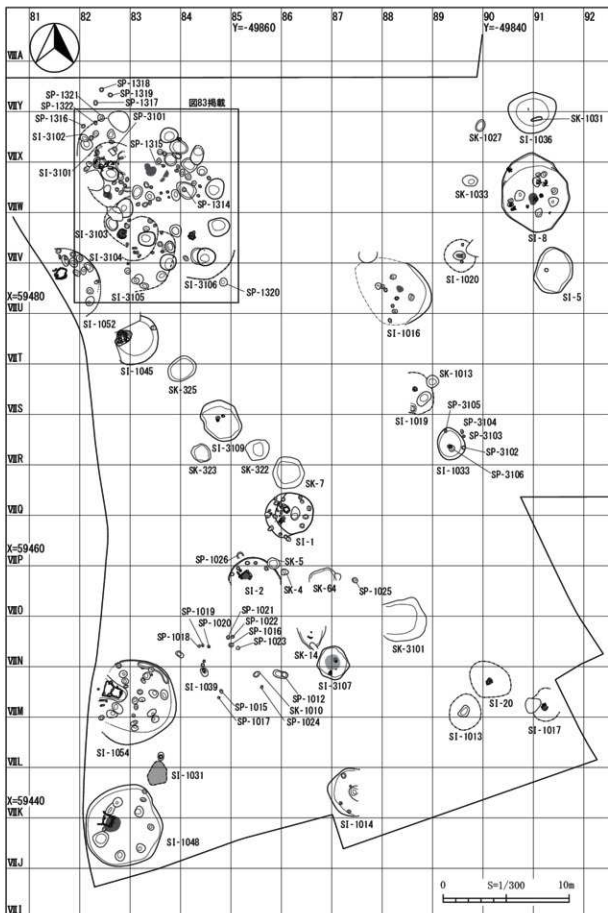


図5 遺構配置図②(調査区南西部)



### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は43軒検出した。調査時点で竪穴住居跡として登録した遺構数は48軒である。その後の調査、整理作業の過程で、屋内の構成施設（炉、柱穴、床や壁、竪穴掘り込み等）を持たず、竪穴住居としての条件を満たさないものについては整理段階で抹消した。特にⅦV～ⅦX-82～84グリッド付近では、遺構上部の削平が進んでいたことに加え、黒色土中に掘り込まれた竪穴住居跡や焼土遺構、土坑・ピットが著しく重複していたことから、遺構の確認は困難を極めた。この地点においては当初、複数の竪穴住居跡として調査を進めていたものでも、同一の竪穴住居跡と判断できた遺構については統合し、新規に番号を振り直した（SI-3101～3106）。また、当初SK（土坑）と判断していたが、調査の結果、竪穴住居跡と判断されたものも含んでいる（SI-3107～3109）。

以下では、まず本項で取り扱う43軒の竪穴住居跡の概要を示し、その後遺構毎の記述を進める。なお章末（第11表、141頁）には、竪穴住居跡の属性表を示したのでこちらも併せて参照願いたい。

**時期** 確認した竪穴住居跡43軒のうち時期が明らかなのは33軒である。内訳は円筒上層b式期－1軒、円筒上層c式期－3軒、円筒上層d式期－5軒、円筒土層e式期－1軒、榎林式期－6軒、大木10式併行期－16軒、後期初頭期－1軒である。

**分布** 本章第1節でも触れたように、竪穴住居跡は調査区北東部の段丘平坦部、および調査区西側の段丘縁辺で著しく重複している。時期的には、円筒上層式期は調査区中央付近に疎らに分布し、榎林式期は調査区北東部で著しく重複している。また榎林式期までは、段丘平坦面の地山シルト層に大きく左右された分布を見せ、大木10式併行期には礎層部である段丘西側縁辺に位置を移している。

**平面形と規模** 平面形の明らかな竪穴住居跡32軒のうち、長円形のを2軒（SI-1057、SI-3106）検出した。このほかはいずれも円～楕円形で、全体の9割以上を占めている。SI-1057、SI-3106の平面形は、いずれも南北方向に長軸をもつ長円形である。SI-3106は推定長軸11mを超える大型建物跡で、直径1mを超える柱穴規模はその他の竪穴住居のそれとは隔絶されている。長軸8mを越える規模のSI-1057もまた、その他の住居とは異質であるが柱穴規模は大きくない。

**主軸方位** 炉跡、柱穴配置、平面形等で軸方向を明らかにできた19軒のうち、北西方向へ軸が振れている住居は9軒、北東方向は1軒である。その他8軒（表中右）は東方、西方のいずれに振れるか特定できないが、軸が南北方向ではなく、 $15^{\circ}$ ～ $60^{\circ}$ 位の値で振れているのが特徴といえる。

**柱穴配置** 柱穴配置の明らかな例は30例で、内訳は2本柱穴－2例、4本柱穴－6例（うち1軒は5本の可能性あり）、6本柱穴－2例、8本柱穴－1例、9本柱穴－1例、壁柱穴－2例で、柱穴2本未満を含む柱穴無しが16例である。

**炉** 50例確認した。炉形態の判断できたものの内訳は、地床炉13例、石囲炉16例、土器埋設炉8例、石囲炉と土器埋設炉が複合したもの2例である。石囲炉は方形を意識したもの7例、これに「ハ」の字状の石組が設置するもの3例、方形と円形の中間形態（隅丸方形）6例を確認した。

**屋内配石** 長円礎を2個使い、床面に「二」の字に平行配置させた竪穴住居内の配石で、本報告書では「屋内配石」とした。SI-1、SI-1052、SI-1054で3例を確認した。検出位置はいずれも炉跡付近で、炉石と一致した配置方向をとり、両者の関係性がうかがえる。

SI-1 新段階 (図6~8)

**【位置・確認】** 調査区南西部、VMP・Q-85・86グリッドに位置し、第IV層で検出した。遺構の上部は明確に確認できず、検出面付近ないしはこれよりやや上部に床面があったものと思われる。なお、一点鎖線で図示した範囲は貼床の範囲である。

**【重複】** 遺構の重複はないが、新旧の建替えが見られる。

**【形状・規模】** 長軸3.8m、短軸3.3mの東西にやや長い楕円形で、床面積は9.3㎡である。

**【壁・床面】** 遺構上部の削平により壁は失われている。遺構検出時点で第1号炉跡の炉石がやや浮い

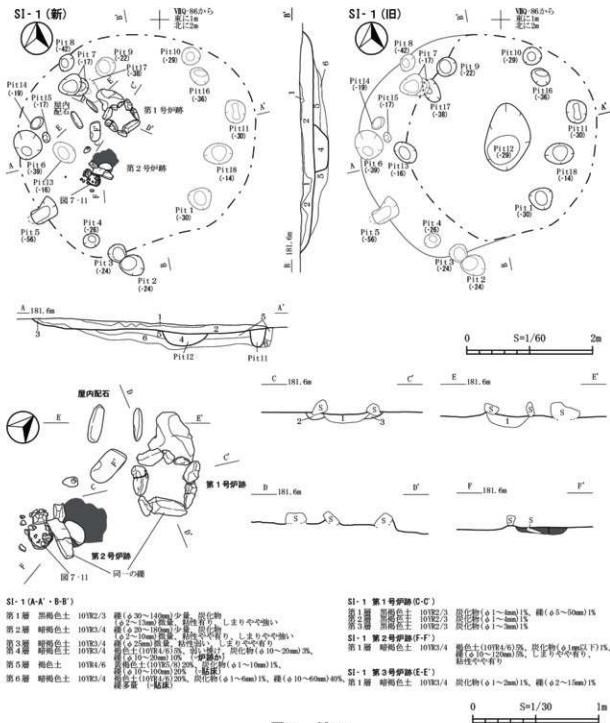


図6 SI-1

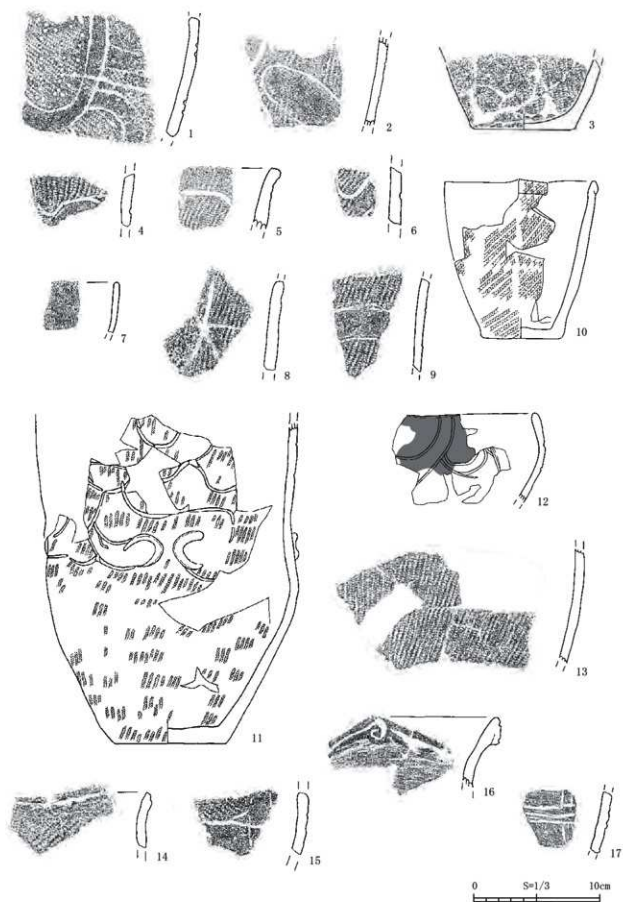


图7 SI-1出土土器

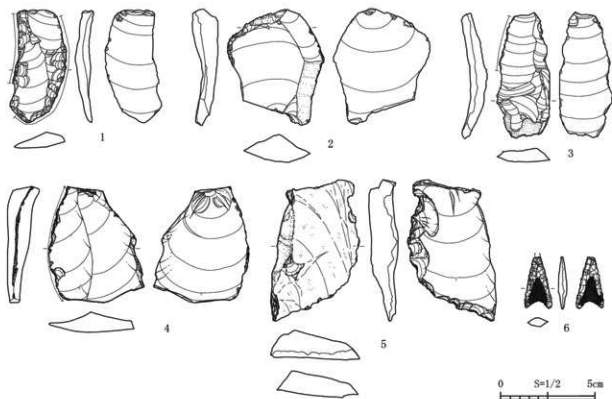


図8 SI-1出土石器

ていたことから、床面にも一部削平が及んでいるものと思われる。

【炉】堅穴中央やや西寄りで石囲炉を2基検出した。第1号炉跡は腰8個を方形に配置した石囲炉で、規模は長軸53cm、短軸49cmである。炉石はやや被熱が見られるが、炉内はほとんど被熱が見られない。掘方は床を掘り込んでおり、構築順序は①貼床敷設→②掘方掘削→③炉石配置となる。第2号炉跡は、第1号炉跡の南西に位置している。石囲炉と思われ、残存した2個の炉石のうち1個が第1号炉跡の炉石と接合する。火床面は44×38cmの範囲で良く被熱し、焼成厚は6cmである。遺存状況から推測すれば第2号炉跡が古く、第1号炉跡は堅穴住居廃絶時まで機能していたものと思われる。

なお、第1号炉跡からは炭化子嚢を検出している（第4章第2節参照）。

【柱穴・ピット】ピットは18基検出した。新段階の住居に確実に伴うピットはPit 2～8、14、15の9本で、その他のピットは新旧いずれの段階に伴うか明らかにできなかった。主柱穴は不明だが、深さ30cmを越えるピットが6本（Pit 1・5・6・8・11・16）あり、主柱穴となる可能性がある。

【その他の施設】第1号炉跡の北西側で屋内配石を確認した。床面を掘り込み、長軸25～30cmの長円礫2個を25cmの間隔で平行に配している。配石の方向は第1号炉跡西辺に一致しN-44°-Wである。

【堆積土】遺構上部の削平により、堆積土は検出していない。

【出土遺物】床面、貼床より縄文土器、石器が少量出土した。図7-11は、第2号炉跡南西の床面から出土し、本段階の住居の廃絶時期に近い遺物と考えられる。縄文時代中期末葉の大本10式併行段階に比定され、沈線による弧状文と鱗状の貼付文を特徴としている。同12は無文地に沈線による弧状文が施された深鉢の口縁部片である。文様部分を中心に赤く彩色されており、漆状の塗膜が認められた。同17は、文様から十腰内1式に比定される。

石器は石鏃2点、スクレイパー7点、二次加工剥片6点、微細剥離剥片11点が出土した。図8-1・2は背面加工のスクレイパーで1は二側縁、2は一側縁に加工が施され、ともに微細剥離も見られる。3・4は微細剥離剥片、5は二次加工剥片、6は無茎石鏃でアスファルトが付着する。

【時期】床面出土遺物から、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属すると思われる。

#### SI-1 旧段階 (図6～8)

【位置・確認】SI-1 新段階の下層で確認した。東半部は新段階と壁を共有する。Pit12の堆積土に弱い焼けが見られ、これが本段階に伴う炉跡と思われる。一点鎖線で図示した範囲は貼床の範囲である。

【形状・規模】東西3.1m、南北3.3mのほぼ円形で床面積は6.3㎡である。

【壁・床面】褐色土および暗褐色土(第5・6層)を貼って床としている。第5層上面が床面で、新段階の構築時に壁が失われたものと考えられる。

【炉】Pit12は炉の掘方の可能性がある。規模は長軸106cm、短軸70cm、深さ20cmである。

【柱穴・ビット】炉の可能性のあるPit12を除き7基検出した。主柱穴および柱穴配置は不明である。

【出土遺物】貼床より遺物が少量出土している。このうち、縄文土器5点を図示した。図7-1は、磨消縄文と刺突文を用いていることから、縄文時代中期末葉の大木10式併行期に位置づけられる。

【時期】貼床出土遺物より、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属すると思われる。

#### SI-2 (図9)

【位置・確認】VII0-84・85、VIII-85グリッドに位置する。南側は明確に確認できなかった。

【重複】SK-5と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。

【形状・規模】住居南半が確認できず、平面形は不明である。規模は残存部で東西4.1mである。

【壁・床面】壁は北半のみ検出した。立ち上がりの最高所は西壁で43cmである。床は炉跡周辺のみを深く掘り込み、暗褐色シルト土(第6層)を貼って床面とし、竪穴周囲は地山を直接床面としている。

【炉】西寄りで石囲炉を検出した。礎7個を方形に配した石囲炉で、長円礎の長軸方向を横に向けて並べている。また南西辺の北側延長上には長円礎1個が配置され、平面形は「**ㄣ**」となっている。炉石内側および炉内は極めてよく被熱し、炭化物(第4層)が集積している。規模は長軸1.1m、短軸1.0m。第5層は火床面で焼成厚5cm未満である。

【柱穴・ビット】ビットは壁のやや内側に4基検出した。壁際に柱穴が巡る柱穴配置と思われる。

【堆積土】第1・2層が竪穴堆積土、第3・4層が炉内堆積土である。

【出土遺物】炉跡北側の床面から図9-3が出土した。底部以外は欠失しているが、底面にござ目編み(一超え一滑り)の圧痕を残している。石器は、スクレイパー2点、二次加工剥片1点が出土している。図9-5は、縦長剥片の両側縁を背腹両面から加工している。

【時期】床面出土土器(図9-3)の特徴から、縄文時代中期末葉大木10式併行期の可能性が考えられる。

#### SI-5 (図10)

【位置・確認】VIII・V-91グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【形状・規模】南北3.5m、東西3.0mの南北に長い楕円形で、床面積は6.5㎡である。

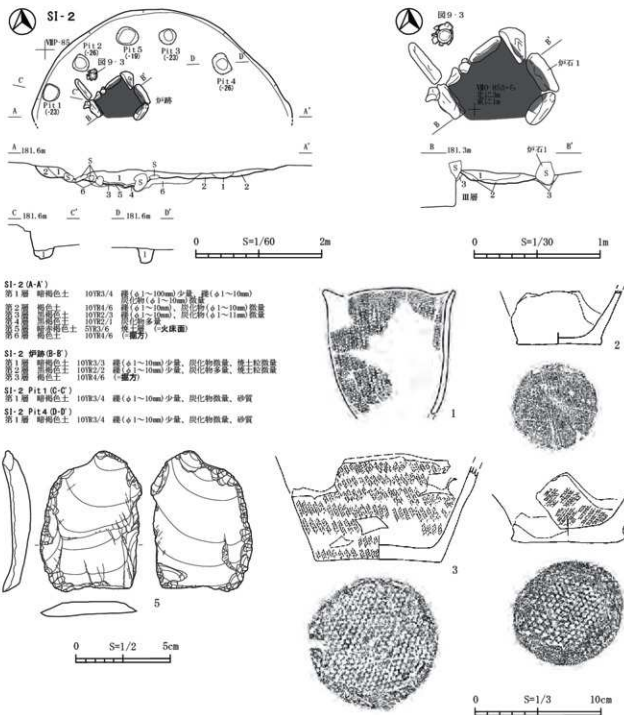


図9 SI-2・出土土器・石器

【壁・床面】壁は全体を確認し、最高所は北壁で53cmである。床は地山を直接床面としている。

【炉】なし

【柱穴・ピット】ピットは1基検出した。Pit 1の規模は長軸30cm、短軸28cm、深さ10cmである。

【堆積土】第1~7層が暗褐色土や褐色土の堅穴堆積土、第8・9層がPit 1堆積土である。

【出土遺物】床面及び堆積土より、縄文土器、石器が出土した。石器は台石1点が出土した。図10-4は安山岩製の台石で、磨痕は1面、また敲打痕は表裏2面の主に礫の周縁部分で顕著に見られる。

【時期】出土遺物から時期の判断は困難である。

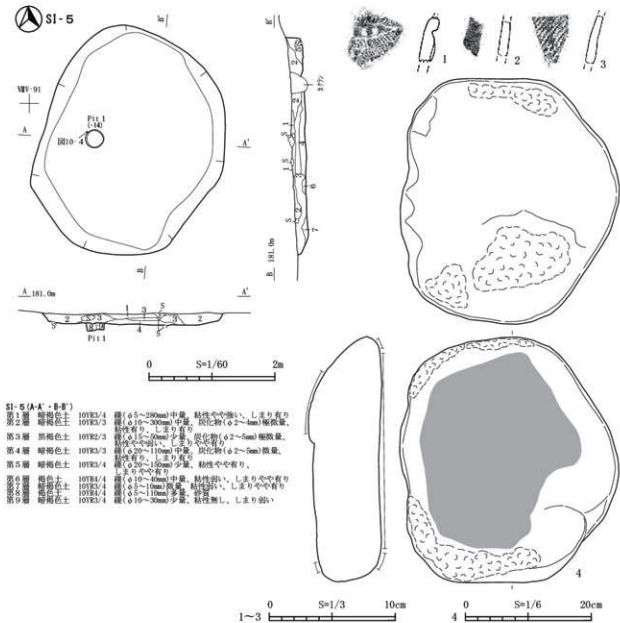


図10 SI-5・出土土器・石器

## SI-7 (図11)

【位置・確認】調査区中央部南寄り、VII-95グリッドに位置し、第IV層で検出した。遺構上部は削平により失われ、検出したのは貼床の一部である。土器埋設炉のレベルおよび層位から判断すれば、検出面付近が床面と考えられる。なお一点鎖線で示した範囲は貼床の残存範囲である。

【形状・規模】平面形および規模は、残存部で東西2.7m、南北2.9mの円形、床面積は6.2㎡である。

【壁・床面】壁は削平により未検出である。床は褐色土(第2層)を貼って床面としている。

【炉】竪穴中央より土器埋設炉を1基検出した。胴部下半を欠いた土器を、長軸46cm、短軸37cmの楕円形の掘方に正位に埋設している。図11-1の口縁部の欠損は、機能時からのものか後世の欠かかは不明である。埋設炉掘方は貼床によって覆われており、構築順序は①掘方掘削→②土器埋設→③貼床敷設となる。なお、炉内から種類を特定できない炭化種実と炭化種子を検出している(第4章第2節参照)。

【柱穴・ビット】なし。

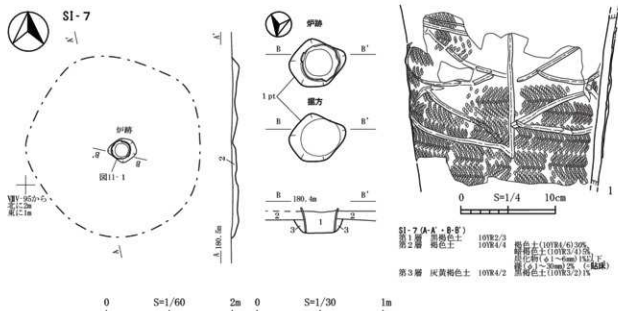


図11 SI-7・出土土器

【堆積土】第1層は炉内堆積土、第2層は貼床、第3層は埋設土器の掘方埋土である。

【出土遺物】炉に埋設された図11-1のほか、第1層中より縄文土器片、石器が少量出土した。1は、4単位の垂下した粘土紐とその間を埋めるモチーフを特徴とする。

【時期】炉体土器の文様要素(素文隆帯)から、縄文時代中期中葉円筒上層d式期に帰属すると思われる。

#### SI-8 新段階 (図12・14・15)

【位置・確認】VIIV~X-90・91グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】重複は見られないが、新旧の建替えがある。本段階は旧段階の住居を北側に拡張しており、東壁、南壁、西壁の三方は旧段階と共有している。主柱穴、その他のピットは新段階の貼床除去時(第8層下面)で確認しており、新段階の床面で検出した主柱穴、ピットはないが、旧段階と柱が共有されている可能性もあり、主柱穴、ピットは両段階の図に掲載した。

【形状・規模】東西5.7m、南北5.2mの南北にやや長い楕円形で、床面積は23.8㎡である。

【壁・床面】壁は全体を確認した。立ち上りの最高所は西壁で28cmである。床は古段階の床面に暗褐色土(第8層)を貼って床面としている。記録はしていないが、全体的に床面の硬化が見られ、Pit 1-4、Pit 3-4を結んだラインの外側での硬化は特に著しい。

【炉】竪穴中央で地床炉を検出した。平面範囲は捉えられなかったが、断面観察により異なる色調の焼け面2枚を確認し、炉跡の新旧と捉えた。炉跡(新)は、長軸95cm、短軸68cmの範囲で焼けており、焼成厚11cmである。炉跡(旧)はその下層に位置し、焼成厚は7cmである。

【柱穴・ピット】本段階の床面で検出した主柱穴及びピットはなく、Pit 1~8は旧段階の貼床除去時(第8層下面)で確認している。位置関係及び規模等からPit 1・2・3・4の4本が主柱穴と捉えられるが、Pit 5・6(ないし7)・8の3本も主柱穴となる可能性があり(南西にはこれに対応するピットを確認することはできなかった。Pit 4が共有している可能性がある)、柱穴配置はPit



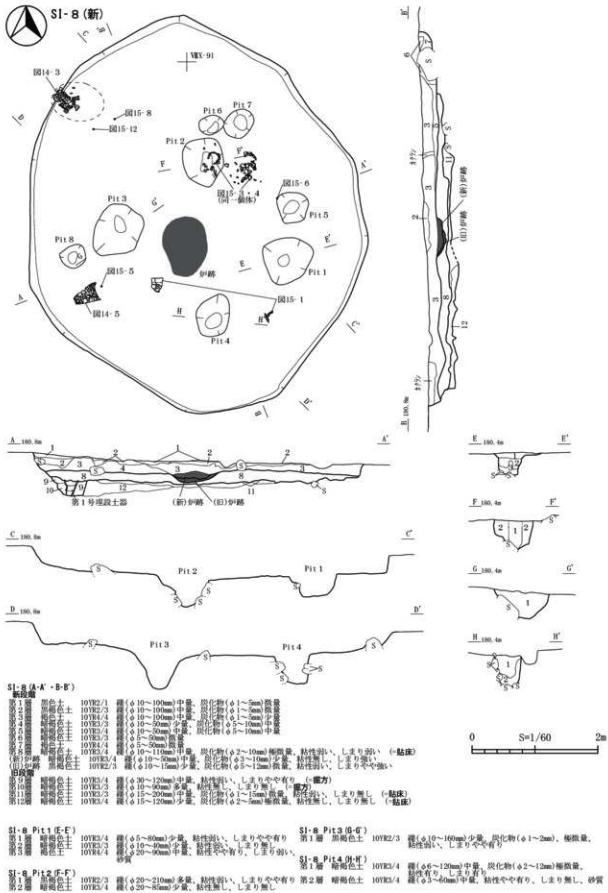


図12 SI-8 (新段階)

1・2・3・4の平面形方形の4本柱と、Pit5・6(7)・8・4の平面形台形の4本柱を想定することができる。それぞれの柱穴配置が新旧いずれの段階に伴うものかは明らかにできなかった。

【堆積土】第1～7層が堅穴堆積土で、第8層が貼床である。

【出土遺物】堆積土、床面、貼床より多数の土器、石器が出土した。図14-3は本段階の床面出土遺物である。3は、上半部に隆帯によるモチーフと、隆帯脇に施されるキャクピラ状の刺突文が特徴的な円筒上層c式土器である。堆積土出土の5は、素文の隆帯と縄文を押捺した隆帯によるモチーフを主体とする。波状突起部には、円筒土器通有の楕円形の貫通孔が開けられているが、外面部分に厚みのあるリング状の粘土帯が貼り付けられていることにより、外観からは視認できない。時期は、文様等の要素から円筒上層d式期に位置づけられる。石器は、石鏃3点、石錐3点、石匙2点、スクレイパー4点、石核3点、二次加工剥片8点、微細剥離剥片9点、磨石1点が出土した。

図15-5は今回報告分で唯一の赤鉄鉱製の石鏃である。8・9は横型の石匙である。10・11は石錐で、10は剥片端部に両側から加工し、11は剥片端部の一部を加工して錐部を作出している。

【時期】床面出土遺物より、本段階の廃絶時期は縄文時代中期中葉円筒上層c式期と考えられる。

#### SI-8 旧段階 (図12～15)

【位置・確認】SI-8新段階の下層で検出した。

【形状・規模】東西5.0m、南北5.1mの楕円形で、床面積は20.7㎡である。

【壁・床面】壁は北側以外の三方を確認した。立ち上りの最高所は西壁で37cmである。床は暗褐色土(第11・12層)を貼って床面としている。

【炉】炉は検出していないが、第1号埋設土器の土器内には焼土が堆積しており炉の可能性はある。

【柱穴・ピット】前述(20頁)のとおりである。

【その他の施設】中央に2基、西壁寄りに1基の計3基の埋設土器を検出した。第1号埋設土器の土器内堆積土には多量の焼土が見られる。いずれも貼床を掘り込んでおり、構築手順は①貼床敷設→②掘方掘削→③土器埋設となる。

第1号埋設土器は、底部を欠いた円筒上層b式の深鉢(図14-1)を正位に埋めている。第2号埋設土器は、口縁部文様帯及び胴部下半を欠いた、胴部上位だけの深鉢(図15-2)を正位に埋めている。第3号埋設土器は、底部を欠いた円筒上層b式の深鉢(図14-2)を倒立させ埋めている。

【堆積土】第8層は本段階の堅穴堆積土で、新段階の貼床である。第11・12層は本段階の貼床である。

【出土遺物】第1～3号埋設土器のほか、貼床から縄文土器、石器が少量出土した。このほか床面では珪質頁岩の原石(1,510g)が出土している。

【時期】埋設土器の時期から円筒上層b式期と思われる。

【SI-8のまとめ】SI-8は新旧の建替えのある住居である。旧段階には埋設土器3基と主柱穴、新段階には炉跡(新旧あり)が伴い、床面や堆積土からは遺存状況の良い土器が出土している。旧段階は埋設土器の時期から円筒上層b式期で、また新段階は床面出土遺物より円筒上層c式期である。

#### SI-9 (図16)

【位置・確認】ⅧV・Ⅷ-96・97グリッドに位置し、第IV層で検出した。遺構上部の削平が進んでお

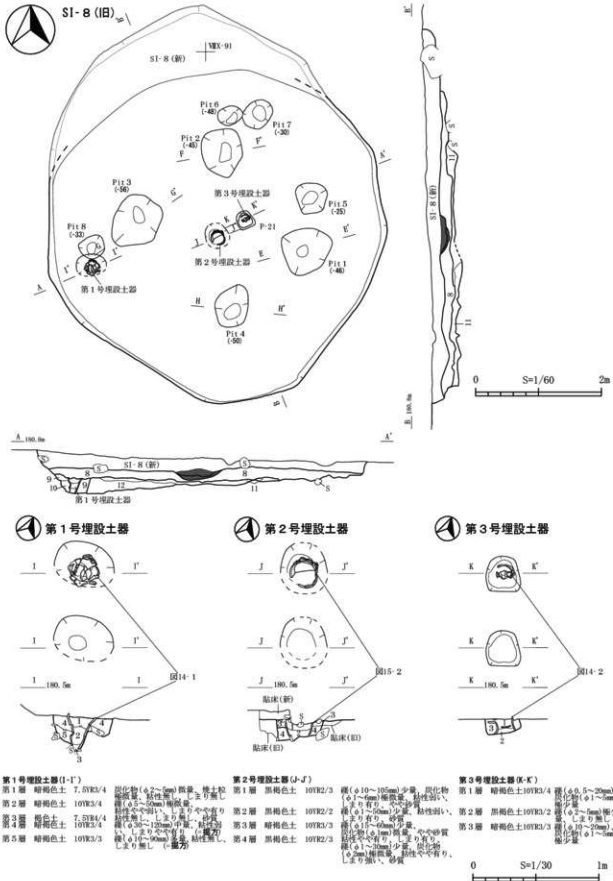


図13 SI-8 (旧段階)

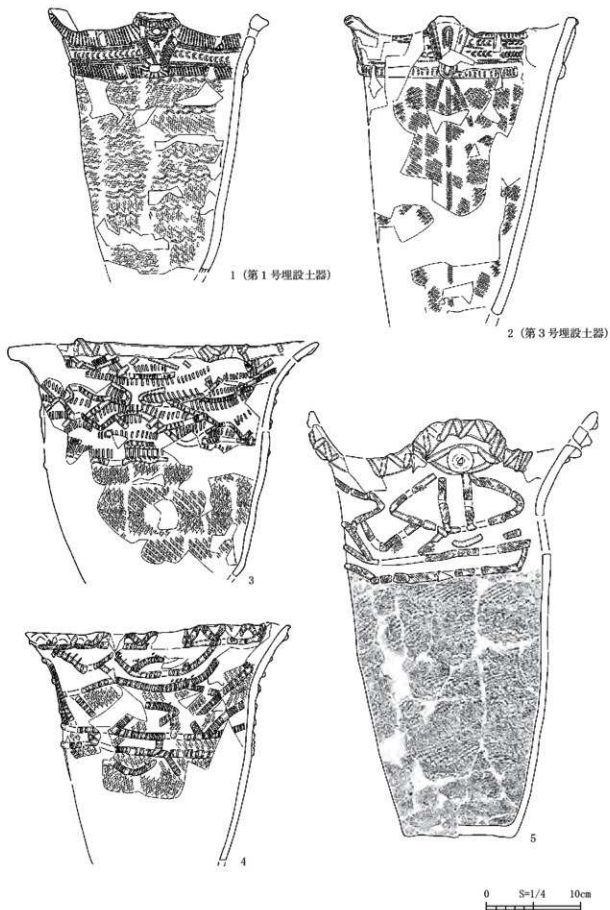


圖14 SI-8出土土器①

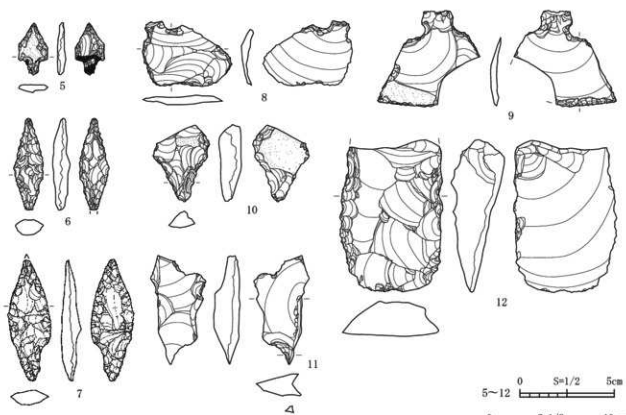
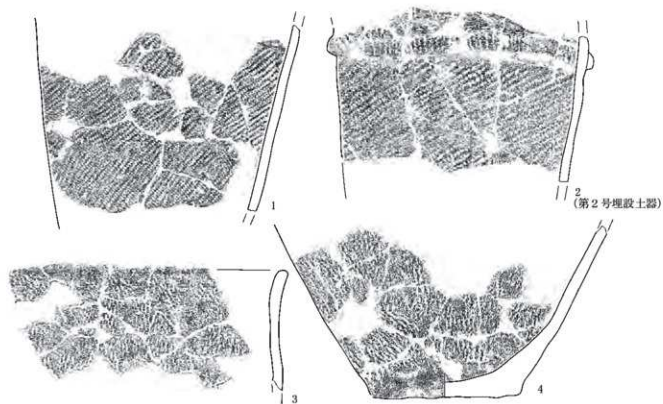


图15 SI-8出土土器②·石器

り、検出面付近では貼床（掘方埋土）のみが残存している状況である。

【形状・規模】東西5.4m、南北5.1mの円形で、床面積は17.8㎡である。

【壁・床面】遺構上部の削平により壁は未検出で、床は検出面より上位にあったものと思われる。

【炉】ほぼ中央に土器埋設炉を1基検出した。遺構上部削平のため、土器は器高10cm程度しか残存していない。炉体土器は底部を欠いた個体がいわれている。炉内からは、オニグルミの炭化種を検出した（第4章第2節参照）。

【柱穴・ピット】ピットは7基検出した。いずれも支柱穴とみられ、建替えが想定される。柱穴配置は、方形4本柱（Pit1・4・5・7）や台形4本柱（Pit2・3・6・7）などが考えられる。

【堆積土】第1・2層は炉内堆積土で、第3層は貼床である。第2層は炭化物が集積している。

【出土遺物】炉体土器（図16-1・2）のほか、第1層より少量の土器片、土製品と石器が出土している。石器はスクレイパー3点、二次加工剥片9点、微細剥離剥片18点、台石1点が出土し、台石1点を図示した。図16-5は凝灰岩質砂岩の台石で磨痕が2面、敲打痕が1面に観察される。

【時期】炉体土器は胴部上半が欠失しているが、間隔の広い縄文地文や明瞭な接合痕（図16-2）等の特徴から、縄文時代中期末葉大木10式併行期と考えられる。

#### SI-17（図17）

【位置・確認】VIII-102・103グリッドに位置し、第IV層で検出した。北側は明確に確認できなかった。

【形状・規模】北側は確認できず、残存部では東西3.5m、南北3.4mの隅丸方形である。北東壁や南西壁の方位は西側へ41°振れている。

【壁・床面】壁は北壁以外の三方を確認した。壁立ち上りの最高所は東壁で40cmである。床は褐色土（第5層）を全面に5～10cm程度貼って床面としている。北側で一部硬化面が見られる。

【炉】炉は明確にできなかったが、堅穴北側で3カ所の小規模な被熱範囲を確認した。床の硬化範囲とも一致しており小規模な炉跡の可能性もある。

【柱穴・ピット】なし。

【堆積土】第1～4層が堅穴堆積土で、第5層が貼床である。

【出土遺物】床面および堆積土より、縄文土器、石器が出土した。図示したのは、縄文土器12点、石器1点である。硬化範囲東側の床面では、底部のみの土器（図17-4）を確認した。内底面には黒色土（C-C' 第2層、炭化物層）を確認している。またこのほか、堆積土中からは顕著な外傾接合痕と直立した器形を特徴とした縄文時代中期末葉期の口縁部片（図17-1）が出土しており、床面からは縄文時代中期後葉期とみられる4や10が出土している。石器は、石鏃1点、両面調整石器1点、微細剥離剥片1点が出土した。図17-3は凹基の無茎石鏃である。

【時期】床面出土の図17-4・10から、縄文時代中期後葉榎林式期に帰属するとみられる。

#### SI-19（図18）

【位置・確認】VIII・I-101グリッドに位置し、第IV層で検出した。遺構上部は削平により失われており、炉跡およびその周辺の硬化した貼床、ピットを1基検出した。一点鎖線は貼床範囲である。

【形状・規模】貼床は東西1.8m、南北1.3mの範囲で検出した。



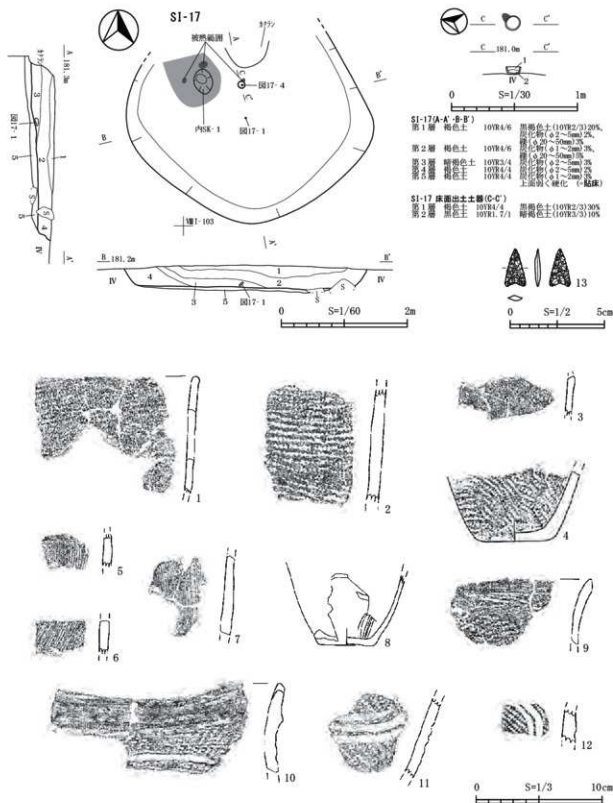


図17 SI-17・出土土器・石器



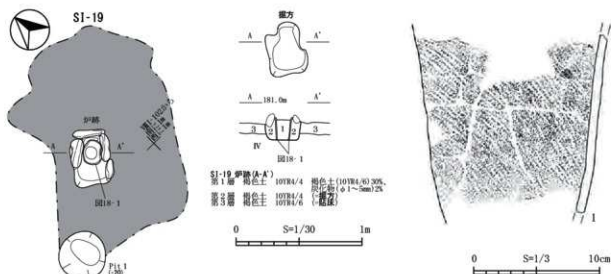


図18 SI-19・出土土器

【炉】土器埋設を伴う石囲炉を1基検出した。土器は、掘方北寄りに正位に埋設している。炉石は長円礫4個を、長軸方向を横に向けて方形に配置している。掘方は貼床（第3層）を掘り込んでおり、構築手順は①貼床敷設→②掘方掘削→③土器埋設→④掘方埋め戻し・炉石設置となる。掘方規模は長軸40cm、短軸30cm、深さ15cmである。

【柱穴・ピット】ピットは1基検出した。

【堆積土】第1・2層が炉跡関連土層で、第3層は貼床である。

【出土遺物】堆積土の大半が削平されているため、遺物の出土量はわずかである。縄文土器は、図18-1を示した。石器は、二次加工剥片1点が出土した。

【時期】炉体土器の直線的な胴部の器形や、縄文を横方向に施文する特徴から、縄文時代中期中葉円筒上層式後半期（円筒上層d～e式期）と推測される。

#### SI-20（図19）

【位置・確認】VIII・N-89・90グリッドに位置し、第IV層で検出した。削平が進み、遺構上部は失われており、炉跡及び貼床（掘方埋土）のみ検出した。一点鎖線は残存していた貼床の範囲である。

【形状・規模】貼床の範囲は東西3.1m、南北3.0mの楕円形である。この面積は7.4㎡である。

【炉】石囲炉を1基検出した。長軸10～20cm程度の礫7個を方形に配している。規模は長軸42cm、短軸38cmで、火床面は弱く被熱している。遺存状況が悪く、石囲炉掘方と貼床の関係は不明である。

【柱穴・ピット】なし。

【堆積土】堆積土は残っていない。第1層は炉の火床面である。

【出土遺物】出土遺物はわずかである。縄文土器は2点図示した。図19-1は、貼床中より出土した口縁部片で、直立した器形と縄文地文が特徴である。同2も、同じく貼床中より出土した底部片で、底面には網代痕が残されている。

【時期】出土遺物より、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属する可能性がある。

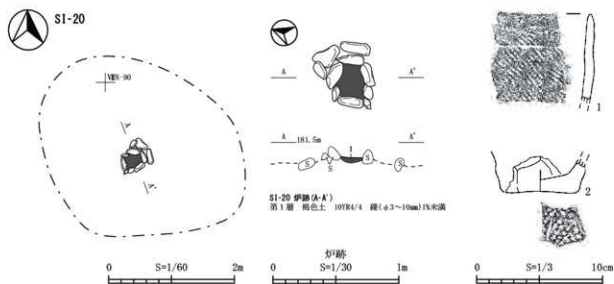


図19 SI-20・出土土器

SI-1013 (図20)

【位置・確認】VII・M-89グリッドに位置し、第IV層で検出した。削平が進んでおり、遺構上部は失われている。本来的には検出面ないしはこれよりやや上位に床面があったものと思われる。一点鎖線で図示した範囲は貼床（掘方埋土）の残存範囲である。

【形状・規模】東西2.9m、南北2.5mの楕円形に貼床が残存し、この面積は5.6㎡である。

【壁・床面】壁は検出していない。第2・3層は貼床で暗褐色土を主体に20cm程度残存している。

【炉】Pit 1に弱い焼け面が見られることから、これが炉であった可能性がある。Pit 1の規模は、長軸95cm、短軸65cm、深さ25cmである。

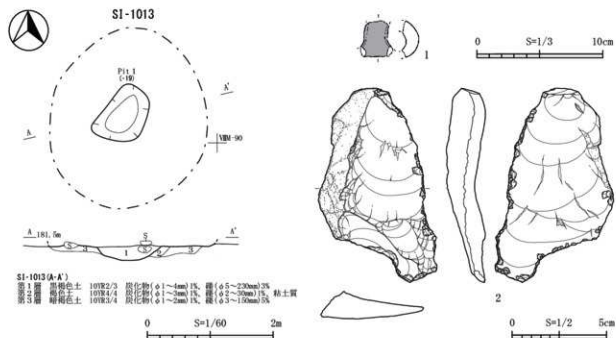


図20 SI-1013・出土土器・石器

【柱穴・ピット】Pit 1 以外は検出していない。

【堆積土】第1層はPit 1の堆積土で、第2・3層は貼床である。

【出土遺物】縄文土器、石器、土製品が微量出土した。縄文土器は堆積土中より出土した1点を図示した(図20-1)。1は、壺形土器に付されていたとみられる小型の橋状把手である。内外面共に赤色に塗られている。石器はスクレイパー1点、二次加工剥片3点、微細剥離剥片1点が出土し、両面加工のスクレイパー(図20-2)1点を図示した。一側縁の打点と対向する端部に加工を施している。

【時期】帰属時期は不明であるが、図20-1は縄文時代中期末葉大木10式併行期の可能性がある。

#### SI-1014 (図21)

【位置・確認】VK-86・87グリッドに位置し第IV層で検出した。東半部は明確に確認できなかった。

【形状・規模】南北3.8m、東西は残存部で2.4mである。

【壁・床面】壁は西側半分を確認した。壁立ち上がりの最高所は西壁で35cmである。床は堅穴中央をやや深く掘り込み、暗褐色土(第4層)を貼って床面とし、堅穴周囲は第IV層を直接床面としている。

【炉】中央やや北寄りで地床炉を1基検出した。直径20cmの円形に被熱しており、焼成厚7cm。炉内から、炭化子囊を検出している(第4章第2節参照)。

【柱穴・ピット】ピットは3基検出した。Pit 1・2は主柱穴で、柱穴配置は4本柱の可能性が高い。

【その他の施設】堅穴中央で土坑(SK-1)を1基検出した。東側は明確に確認できなかった。長軸115cm、深さ19cmである。

【堆積土】堅穴中央に暗褐色土主体の第1層、壁際に褐色土主体の堆積土(第2層)を確認した。

【出土遺物】遺物は少量出土した。縄文土器は特徴的な10点を図示した。石器は、微細剥離剥片が1点(図21-1)出土した。比較的大型な剥片の長軸方向の一边に微細剥離が見られる。

【時期】床面直上より隆帯による胸骨文を施した円筒上層d式(図21-2)、堆積土中より沈線を主要な文様要素とする円筒上層e式(同5~9)が出土していることから、円筒上層d~e式期と推測される。

#### SI-1016 (図22~24)

【位置・確認】VII T~V-87・88グリッドに位置し、第IV層で検出した。北側が一部攪乱により失われているほか、西側半分は遺構上部が削平され、壁が失われている。一点鎖線で図示した範囲は貼床残存範囲である。

【形状・規模】残存部の推定で長軸6.6m、短軸5.0mの卵形ないしは楕円形で、床面積は21.7㎡である。柱穴配置及び平面形からみた主軸方位はN-38°-Wである。

【壁・床面】壁は東側の一部のみ確認した。北側から西側にかけては壁が失われており、貼床の残存範囲を図示している。壁立ち上がりの最高所は東壁で20cmである。床はほぼ全面に暗褐色土(第5層)を15cm程度の厚さで貼っている。

【柱穴・ピット】ピットは8基検出した。Pit 4・5・6・7の4本が主柱穴と思われる。

【炉】堅穴中央やや南東寄り、4本の主柱穴を結んだ範囲内で地床炉と土器埋設炉の計2基を検出した。第1号炉跡は地床炉で、長軸55cm、短軸43cmの範囲で被熱しており、焼成厚は5cmである。第2

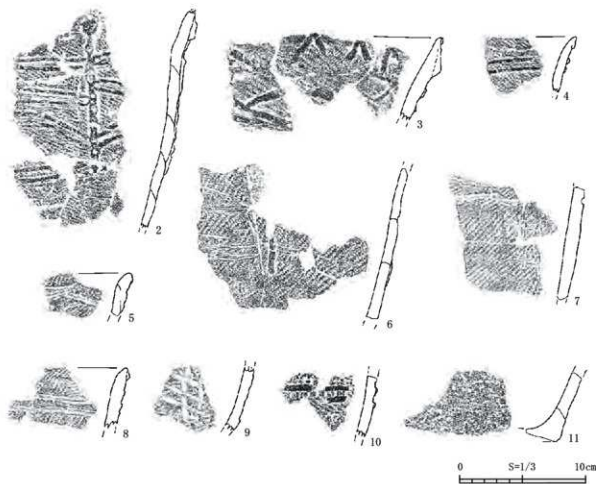
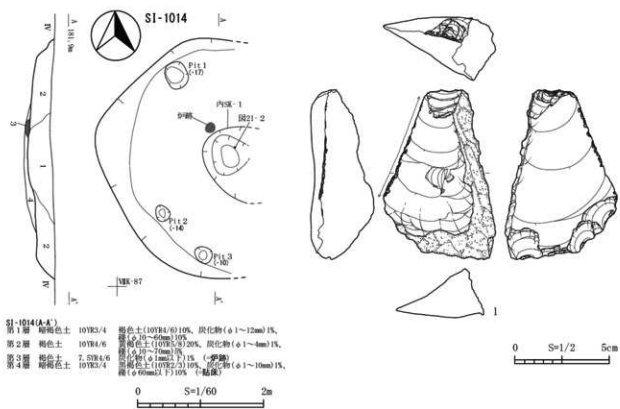


図21 SI-1014・出土土器・石器

号炉跡は土器埋設炉で、4本の主柱穴の中央に位置している。口縁部及び胴部下半を欠いた円筒上層c式の深鉢(図22-1)を正位に埋めている。掘方は貼床により覆われ、構築順序は①掘方掘削→②土器埋設→③貼床敷設となる。炉内からはクリの炭化種実を検出した(第4章第2節参照)。

【堆積土】第1～4層が暗褐色土主体の堅穴堆積土である。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土した。縄文土器は、図22-2や図23-2～7など、床面から多数出土している傾向が認められる。石器は、石鏃1点、石槍2点、石筈1点、スクレイパー3点、二次加

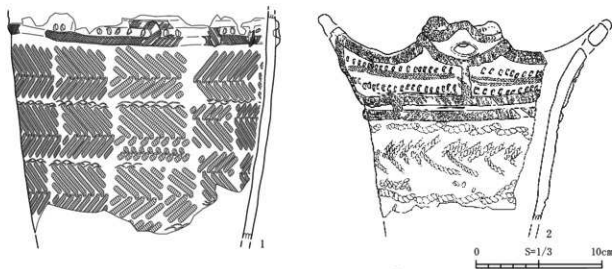
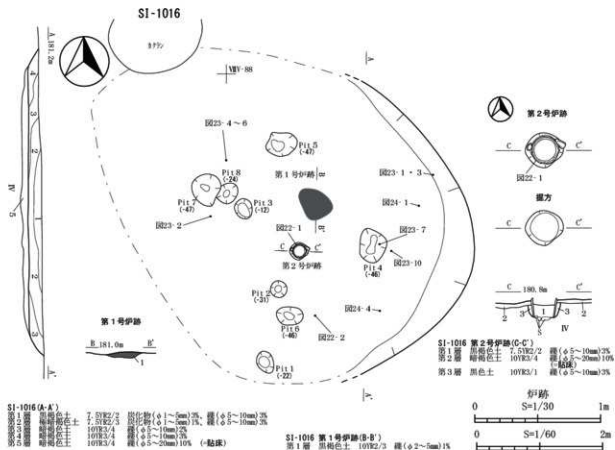


図22 SI-1016・出土土器①

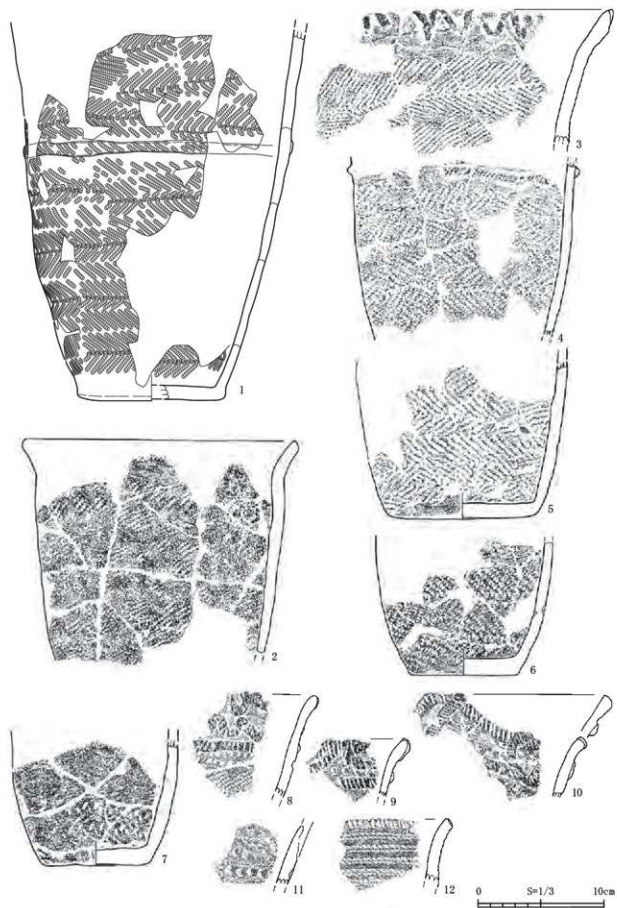


图23 S1-1016出土土器②

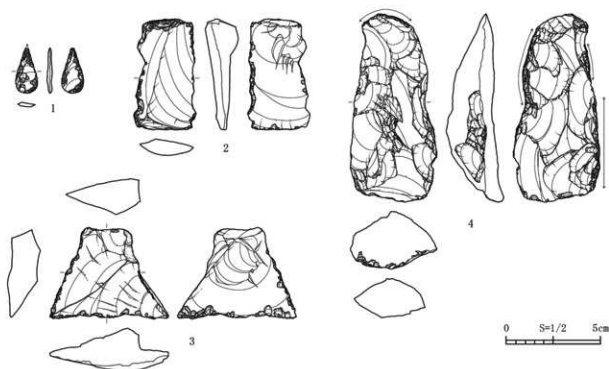


図24 SI-1016出土石器

工剥片1点、微細剥離片2点、凹石1点が出土した。図24-1は円基の無茎石鏃である。同2・3は両面加工のスクレイパーで、2は二側縁に、3は一側縁及びこれと隣接する辺に剥離を施している。4は石筥に分類したが機能面となる辺に明瞭な加工が見られない。

【時期】 炉体土器(図22-1)及び床面出土土器(同2)から円筒上層c式期に比定される。

#### SI-1017 (図25)

【位置・確認】 VII-91、VIII-90・91グリッドに位置し、第IV層で検出した。西側の一部は擾乱により失われているほか、遺構上部が削平され、遺構検出面付近が堅穴住居床面となっている。このため壁は全面で残っておらず、図示した一点鎖線は貼床(掘方埋土)の範囲である。東側は一部で範囲が不明である。

【形状・規模】 東西2.6m、南北2.0mの楕円範囲で貼床が残存している。

【壁・床面】 上部の削平により壁は検出していない。床は褐色土(第2・3層)を15cm程度貼って床面としている。

【炉】 中央に石囲炉を1基検出した。東側は炉石が失われている。平面形は方形を基調としているが、石材の形状は塊状もしくは不整形の礫であり、長円礫の長軸を横に向けて配するタイプの方形石囲炉とは異なる印象を受ける。規模は東西、南北ともに48cmである。火床面は33×24cmの範囲で被熱し、焼成厚は4cmである。石囲炉の構築にあたっては掘方を設けず、堅穴掘方の掘削及び床面敷設に伴い炉石を設置している。

【堆積土】 堆積土は見られなかった。第1層は炉の火床面、第2・3層は貼床である。

【出土遺物】 貼床から縄文土器、石器が少量出土した。このうち土器は2点図示した。

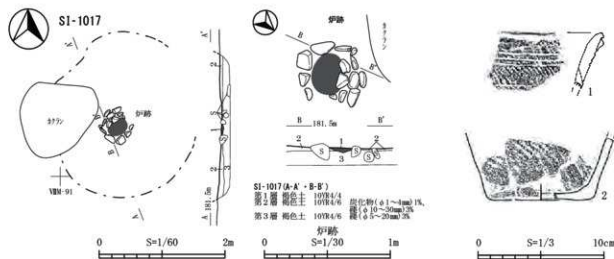


図25 SI-1017・出土土器

【時期】時期を判断できる遺物の出土はなく、時期は不明であるが、貼床から榎式期の土器破片が出土していることから構築の時期はこれ以降と思われる。

SI-1019 (図26)

【位置・確認】VIII-88・89グリッドに位置し、第IV層で検出した。西側半分は攪乱により失われている。また遺構上部の削平も進んでおり、遺構検出面付近ないしはこれより上位に床面があったものと考えられる。このため壁は全面で残っておらず、一点鎖線で示した範囲は残存した貼床（掘方埋土）の範囲である。

【重複】SK-1013と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。

【形状・規模】残存部で南北3.26m、東西1.85m、残存部の面積は7.2㎡である。

【壁・床面】壁は全体が失われている。床は褐色土・暗褐色土（第3・4層）を貼って床面としている。

【炉】中央で土器埋設炉を1基検出した。直径35cm程度の楕円形の掘方に胴部以下を欠いた縄文土器の深鉢（図26-1）を正位に埋めている。掘方の深さは20cmである。検出時点では土器の全周が残っていたが、被熱のため遺存状況が極めて悪く、検出時同様の状態で復元することができなかった。

【柱穴・ピット】ピットは1基検出した。Pit 1は長軸130cm、短軸80cm、深さ31cmである。

【その他の施設】壁穴の両側で付属施設を検出した。付属施設は床面を浅く掘り窪めて、ここに褐色土（C-C' 第1層）を円形の土手状に10cm程度盛り上げており、中央部は窪んでいる。

【堆積土】第1・2層はPit 1の堆積土、第3・4層は貼床である。

【出土遺物】炉体土器のほか、貼床より縄文土器、石器が少量出土した。炉体土器の図26-1は、地文として結束第1種のLR・RL縄文が施された後、粘土紐による弧状文が重層的に施されている。

【時期】素文の粘土紐を主要要素とした炉体土器から、円筒上層d式期に比定される。

SI-1020 (図27)

【位置・確認】VIII-V-89グリッドに位置し、第IV層で検出した。東側一部は攪乱により失われてい



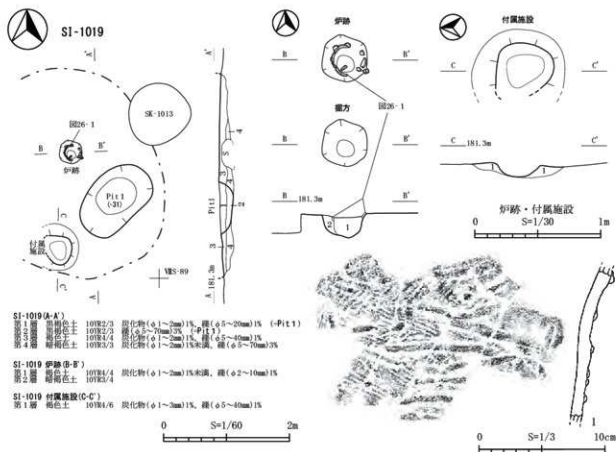


図26 SI-1019・出土土器

る。遺構上部が削平され、遺構検出面付近が堅穴住居の床面と考えられる。このため壁は全体で検出できず、一点鎖線で図示した範囲は貼床（掘方埋土）の範囲である。

【形状・規模】東西2.6m、南北2.5mの円形で、床面積は4.9㎡である。

【壁・床面】壁は全体が失われている。床は暗褐色土（第3層）を10cm程度貼って床面としている。

【炉】中央に地床炉を1基検出した。掘方を伴っており中央部が東西56cm、南北30cmの長円形範囲で被熱している。焼成厚7cmである。

【柱穴・ビット】ビットは2基検出した。炉を挟んで対の位置関係にあり支柱穴の可能性もある。

【堆積土】第1層は炉の火床面、第2層は炉の掘方、第3層は貼床である。

【出土遺物】縄文土器が少量出土し、このうち2点を図示した。図27-1は、円筒上層d式の土器片である。平縁の口縁部に隆帯による波状文が施され、胴部には結束第1種R・L縄文が横方向に施されている。

【時期】貼床より口縁部文様に素文の隆帯を用いた図27-1が出土していることから、縄文時代中期中葉円筒上層d式期以降に当たると推測される。

#### SI-1031 (図28)

【位置・確認】VMK・L-83グリッドに位置し、第V層で炉跡と硬化した貼床を検出した。

【形状・規模】遺構上部が削平されているため形状及び規模は不明である。

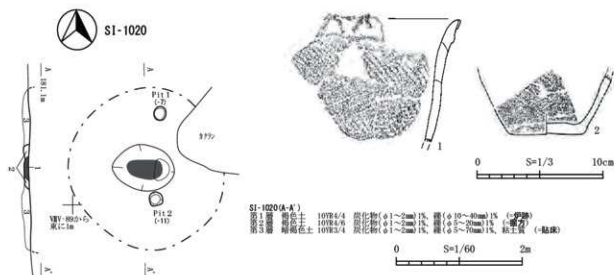


図27 SI-1020・出土土器

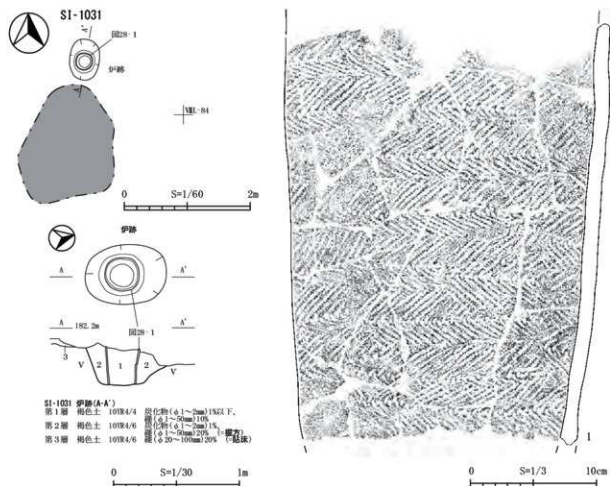


図28 SI-1031・出土土器

【壁・床面】壁は残存していない。床は褐色土(第3層)を5cm程度貼り、上面には硬化が見られる。  
 【炉】貼床の北側に土器埋設炉を1基確認した。炉体土器は底部を欠いた円筒上層式期の深鉢(図28-1)を、南北に長い長円形の掘方(長軸64cm、短軸47cm、深さ31cm)の中央部分に据えている。

遺構の上部は削平されて遺存状況は悪いものの、床面との標高差から推せば、炉体土器は口縁部も欠いていたと考えられる。土器埋設炉部分に貼床はなく両者の構築順序は不明である。なお、第1層から不明炭化種実を検出している（第4章第2節参照）。

【堆積土】第1・2層は土器埋設炉の炉内堆積土及び掘方で、第3層は貼床である。

【出土遺物】炉体土器以外の遺物はほとんど出土していない。炉体土器は胴部上半から下半のみのもので、羽状縄文が施された土器である。石器は石槍1点が出土した。

【時期】炉体土器の特徴から、縄文時代中期中葉円筒上層c～d式期と思われる。

#### SI-1033 (図29)

【位置・確認】VII-89グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【形状・規模】東西2.6m、南北2.1mの円形で、床面積は2.7㎡である。

【壁・床面】壁は全体を確認した。壁立ち上りの最高所は西壁で26cmである。床は地山を直接床面としている。

【炉】堅穴中央に土器埋設炉を1基検出した。底部を欠いた深鉢（図29-1・2）を、東西にやや長い長円形（長軸40cm、短軸30cm、深さ10cm）の掘方の中央に据えている。検出時点で胴部は全周していたものの遺存状況が極めて悪く、検出時点同様には復元できず破片として掲載した。

【堆積土】堆積土は褐色土の単層（第1層）である。

【出土遺物】炉体土器のほか、堆積土第1層より縄文土器、石器が少量出土した。図29-1・2は同一個体で、直線的な口縁部や明瞭な接合痕、間隔の空いた縄文地文等の特徴より、大木10式併行期と思われる。石器はスクレイパー1点、微細剝離片1点が出土している。

【時期】炉体土器の特徴より、縄文時代中期末葉大木10式併行期と思われる。

#### SI-1034 (図30)

【位置・確認】VII-98グリッドに位置し、第IV層で検出した。遺構上部の削平が進んでおり、南東部は壁が失われている。このため破線部は貼床範囲からの推定である。

【形状・規模】長軸2.8m、短軸2.7mの楕円形で、床面積は4.8㎡である。

【壁・床面】壁は南東部を除いて確認できたが、遺存状況は極めて悪い。壁の残りは全体的に5cm未満である。床は全面に褐色土（第4層）を10cm程度貼って床面としている。

【炉】堅穴のほぼ中央に土器埋設炉を1基検出した。炉体土器は円筒上層d式期のほぼ完形の深鉢を、土器より一回り大きな掘方（直径38cm、深さ23cm）に正位に埋めている。土器埋設炉の掘方は貼床で覆われており、構築手順は①掘方掘削→②土器埋設→③貼床敷設となる。

【堆積土】第1・2層は堅穴堆積土で、第3層は炉内堆積土である。

【出土遺物】炉体土器のほか、堆積土、貼床から縄文土器、石器が出土した。図30-7は炉跡出土の凹石で楕円形縄の3面を使用している。

【時期】炉体土器は、主要文様に素文の隆帯を用いていることから、縄文時代中期中葉円筒上層d式期に帰属するものと推測される。

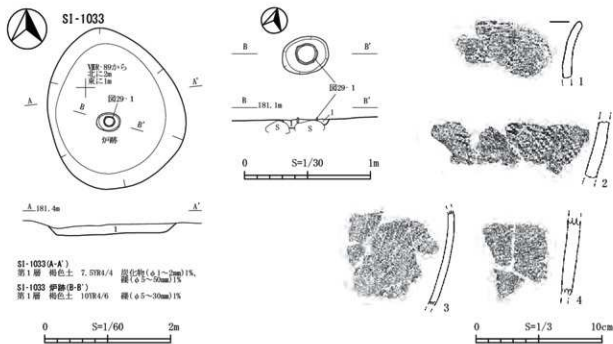


図29 SI-1033・出土土器

SI-1035 (図31)

【位置・確認】ⅧA・B-90・91グリッドに位置し、第IV層で検出した。北側は明確に確認できなかった。土層は北側で観察した結果、第2層の暗褐色土を確認した。当初第1層を堅穴堆積土、第2層を貼床と認識していたが、第1層上面で炉などの施設を検出し得なかったことから、両層ともに貼床(掘方埋土)の可能性もある。以下では当初の認識のまま第1層を堆積土、第2層を貼床として記述を進める。

【形状・規模】平面形は明らかでない。東西3.1m、南北は残存部で2.1mである。

【壁・床面】壁は東側のみ確認した。壁の立ち上がりは5cm未満である。床は全面に暗褐色土(第2層)を10~15cm程度貼って床面としている。

【炉】なし。

【その他の施設】南東壁寄りで埋設土器を1基検出した。推定長軸60cm程度、深さ16cmの掘方に、胴部上半の欠失した縄文土器の深鉢(図31-1)を正位に埋めている。

【堆積土】堅穴堆積土は暗褐色土(第1層)の単層である。

【出土遺物】遺物は、埋設土器のほかは土器、石器ともに出土量は少量である。土器は2点図示した。図31-1は地文として結束第1種のRL・LR縄文を横位に回転軸文している。このほか堆積土中からは、縦走する縄文地文に沈線によるモチーフが施された土器片が出土しており(図31-2)、榎林式と推測される。石器は二次加工剥片1点、微細剥離剥片1点が出土した。

【時期】埋設土器の時期から、縄文時代中期中葉円筒上層c~d式期以前と推測される。

SI-1036 (図32・33)

【位置・確認】ⅧX・Y-90・91グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】SK-1032と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。

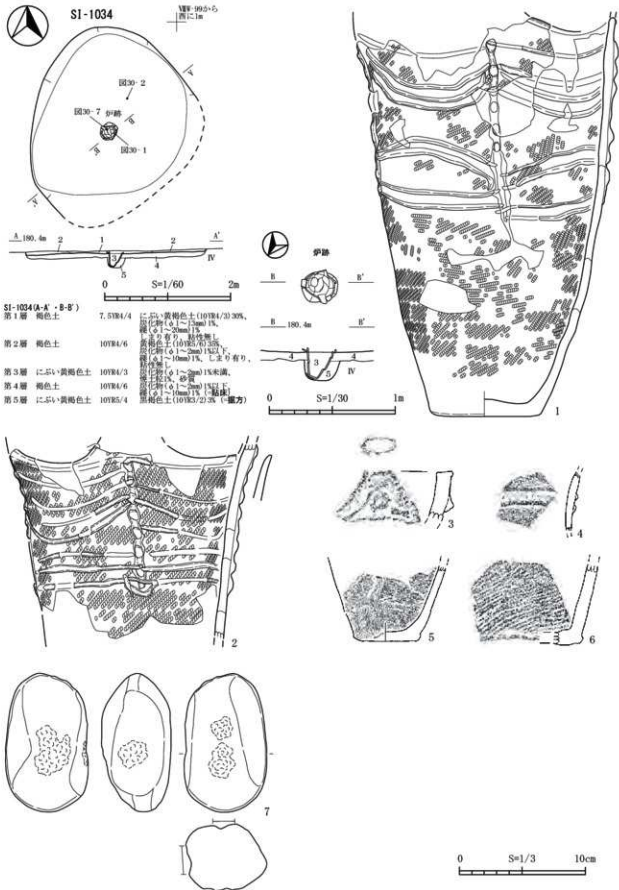


図30 SI-1034・出土土器・石器

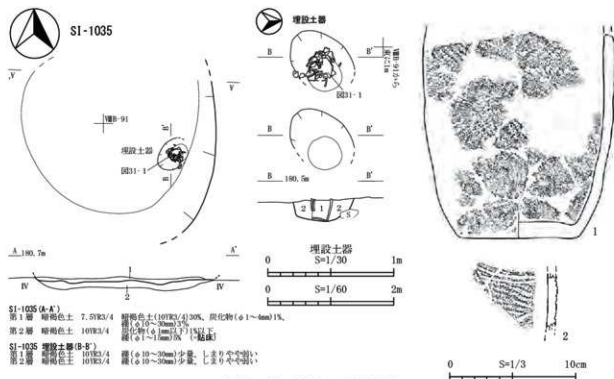


図31 SI-1035・出土土器

【形状・規模】東西3.8m、南北3.2mの楕円形で、床面積は4.4㎡である。

【壁・床面】壁は全体を確認した。壁は外側へ向かって広がっており、立ち上がりの最高所は東壁で80cmである。床は暗褐色土（第7層）を全面に薄く貼って床面としている。

【炉】竪穴中央やや西側で地床炉を1基確認した。被熱範囲はよく赤変しているが、20×10cm程度の極めて小さな不整形範囲である。

【柱穴・ピット】なし。

【堆積土】第1～6層が竪穴堆積土、第7層は貼床である。第3層は炭化物をやや多く含んでいる。

【出土遺物】床面、堆積土、貼床より縄文土器、石器が出土した。図32-1～3は、床面から出土した一括性の高い完形ないしは略完形の土器である。1・3は、横位に展開する羽状縄文を地文とし、口縁部文様帯に素文の隆帯による波状文や弧線文を施したものである。1は、文様が多層的に重なり合って複雑なパターンを呈するが、単位文様毎に施文順序を観察すると、①口唇部・頸部に隆帯を貼付し、文様帯を区画→②波状把手を基点に弧線文aを施文→③対向弧線文を施文→④弧線文bを施文→⑤菱形文・頸部区画上に短隆帯→⑥把手間をつなぐ弧線文c・頸部区画下に波状文、となる(図33)。また、橋状把手の上部には、①V字状→②逆V字状→③M字状の順に粘土紐を重ね合わせて文様が表現される。なお、1の内部からは、炭化子囊が検出されている(第4章第2節参照)。

2は隆帯による波状文と縄文の側面圧痕を特徴とする。石器は、石筈1点、スクレイパー1点、二次加工刮片1点、微細刮片2点、敲石1点が出土し、このうち石筈1点を図示した。

【時期】床面出土一括資料より、縄文時代中期中葉円筒上層d式期に廃絶されたものと思われる。

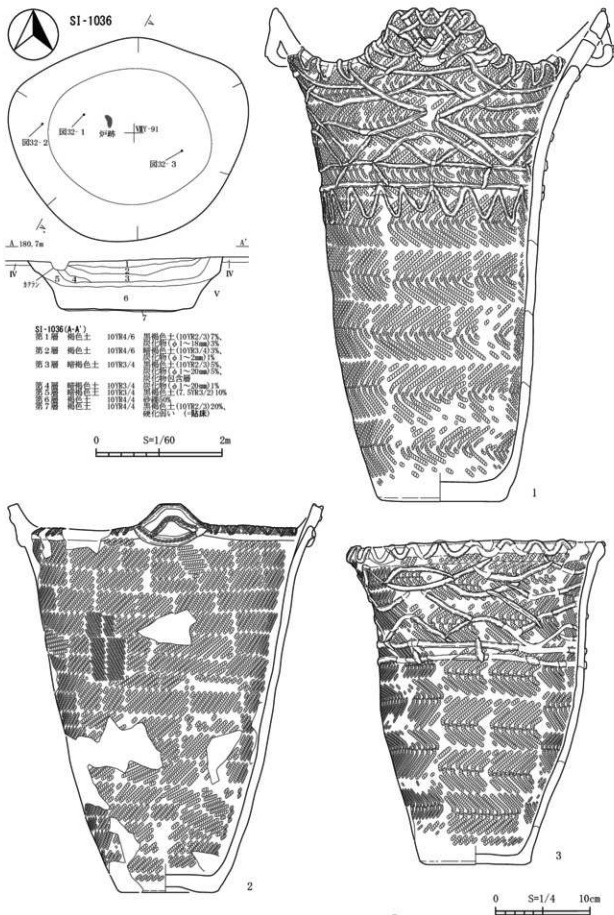


圖32 SI-1036・出土土器①

図32-1

展開模式図

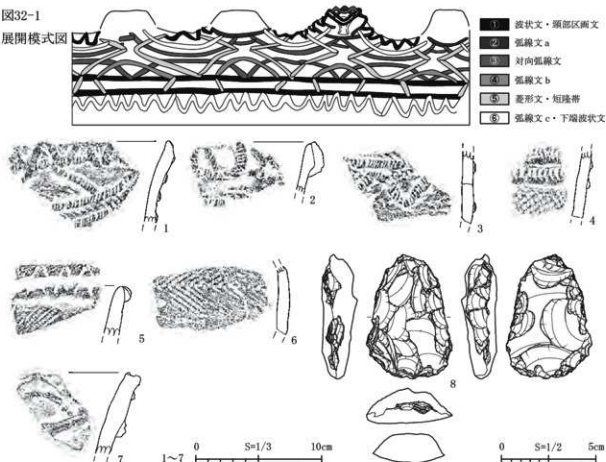


図33 SI-1036出土土器②・石器

SI-1039 (図34)

【位置・確認】 VIIⅧ-84・85、VIIⅨ-83～85グリッドに位置する。土器埋設炉と周辺に分布する暗赤褐色土及び褐色土（第1・2層）分布範囲を堅穴住居跡と認定した。またこれらの周囲に分布するピット群は当初単独のものと捉えていたが、この分布が土器埋設炉近辺にのみ限定され、離れると分布が途切れることから、図示したピット12基を本住居関連のピット群と捉えることとした。

【形状・規模】 検出されたのは土器埋設炉とピットのみのため、形状・規模は不明である。

【壁・床面】 遺構上部の削平が進んでおり、壁は検出できなかった。第1・2層は本堅穴住居の貼床（掘方埋土）と思われる。

【炉】 土器埋設炉を1基検出した。炉体土器は底部から胴部上半まで残存する大木10式併行期の深鉢で、南北にやや長い長円形の掘方（長軸73cm、短軸52cm、深さ29cm）の北側に寄せて正立させている。炉体土器の南北には土器を囲むようにして円礫や扁平礫4点が並べられており、石囲を伴う土器埋設炉であった可能性が高い。土器埋設炉の構築手順は、①掘方掘削→②土器設置→③掘方埋め戻し→④貼床の敷設+礫の配置となる。

【柱穴・ピット】 ピットは12基検出したが主柱穴は不明である。

【出土遺物】 炉体土器のほか、貼床から縄文土器、石器、石製品が出土した。図34-1は磨消縄文を基調とした弧状文や刺突文が施されており、縄文時代中期末葉大木10式併行期に相当する。



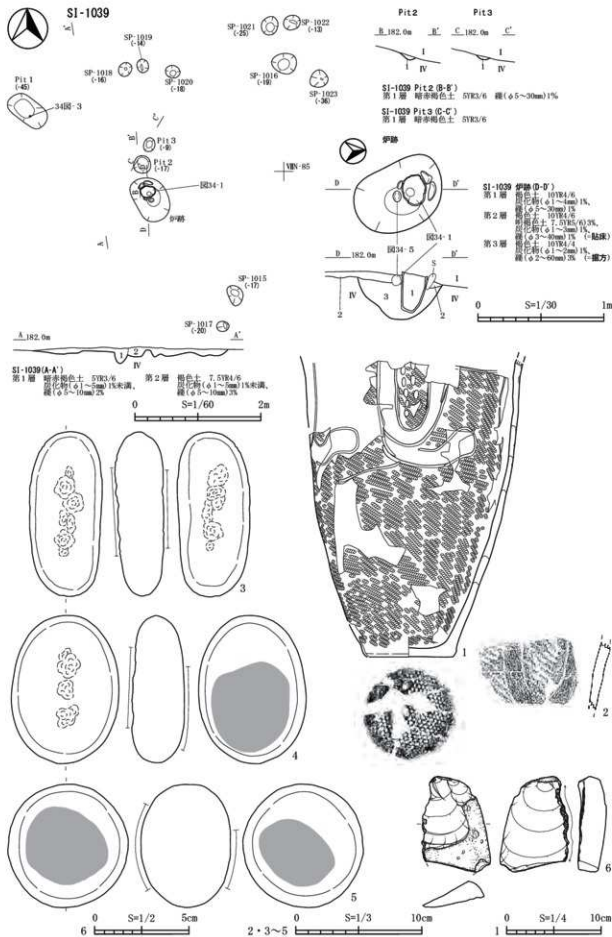


图34 SI-1039・出土土器・石器

石器はスクレイパー1点、微細剥離剥片3点、凹石1点、磨石1点、敲磨器A類1点が出土し、礫石器3点を図示した。図34-5は、炉体土器の脇に並べられた礫のひとつで、二面使用の磨石である。3は二面使用の凹石、また4は凹石と磨石の複合機能を持つ石器である。

【時期】炉体土器より、縄文時代中期末葉大木10式併行期と思われる。

#### SI-1045 (図35・36)

【位置・確認】調査区西側の段丘縁辺、VII-82・83グリッドに位置している。第IV層で検出した。北側及び西側は攪乱により失われている。

【形状・規模】残存部で東西4.0m、南北3.3mであるが、平面形は直径4m程度の円形と思われる。

【壁・床面】壁は東側から南側にかけて検出した。全体的に壁は緩やかに外側へ開いている。立ち上がり最高の南壁で22cmである。床は、竪穴中央部に暗褐色土(第6層)を貼って床面とし、外周は地山を直接床面としている。

【炉】竪穴西側で石囲炉を1基検出した。図35右上に示したように、検出時点では20個以上のサイズ、形状の異なる礫が並んで出土したが、礫の大きさや配置状況、被熱の有無で炉石を判断した。観察の結果、被熱した礫は方形基調の石囲炉の東辺のみ二列(①-②列と③-⑥列)に配されていることから、東側の炉石だけを外側列(③-⑥)から内側列(①-②)に修築したものと判断した。なお、東側を除くその他三辺の炉石は両段階で共有されていたものと考えられる。それぞれの段階の石囲炉の規模は、南北軸は74cm、東西軸は旧段階が73cm、新段階が52cmである。よって平面形は旧段階が正方形に近く、新段階は南北にやや長い方形となる。石囲炉はこの部分のみ貼床を掘り抜いており、構築手順は①貼床敷設→②掘方掘削→③炉石配置となる。断面B-B'では第1～8層に分層できた。第1層は炉内堆積土、第2層は火床面、第3～8層が掘方埋土である。なお、炉内1層からオニグルミの炭化種実や炭化子葉を検出している(第4章第2節参照)。

【柱穴・ピット】ピットは東壁で1基検出した。

【堆積土】断面A-A'では6層に分層し、第1～5層は褐色土及び暗褐色土の竪穴堆積土である。

【出土遺物】縄文土器11点、石器9点、土製品1点を図示した。床面や壁際からは、磨消縄文と多数の刺突文で構成される図35-2や3、堆積土中からも同様の刺突文が施された土偶(図36-1)が出土するなど、型式上のまとまりがあることが確認できる。図36-1は土偶の胴部片である。残存する部分で長さが10.8cm、幅が10.5cmあり、完存すれば推定長20cm以上の比較的に大型の土偶であったと思われる。円形の貼付文で乳房が表現され、その上部には弧状文が粘土紐で装飾されている。正面や背面は無数の刺突文で文様が施されており、背面には点列による渦巻文などが表現されている。

石器は、石錐1点、スクレイパー3点、二次加工剥片1点、微細剥離剥片5点、磨製石斧1点、敲石b類1点、半円状扁平打製石器1点、凹石1点が出土した。図36-2は石錐で錐部先端は欠損している。3・4は両面加工のスクレイパーで、3は一側縁と隣接する側縁を、また4は縦長剥片の二側縁に加工を施している。5は石英質頁岩製の敲石、6・7は縦長剥片の両側縁に微細剥離のある剥片で、9は半円状扁平打製石器である。同8は片岩製の磨製石斧で、片面側は完全に欠損している。同10は扁平円礫の2面を使用した凹石である。

【時期】床面出土遺物より、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属すると思われる。

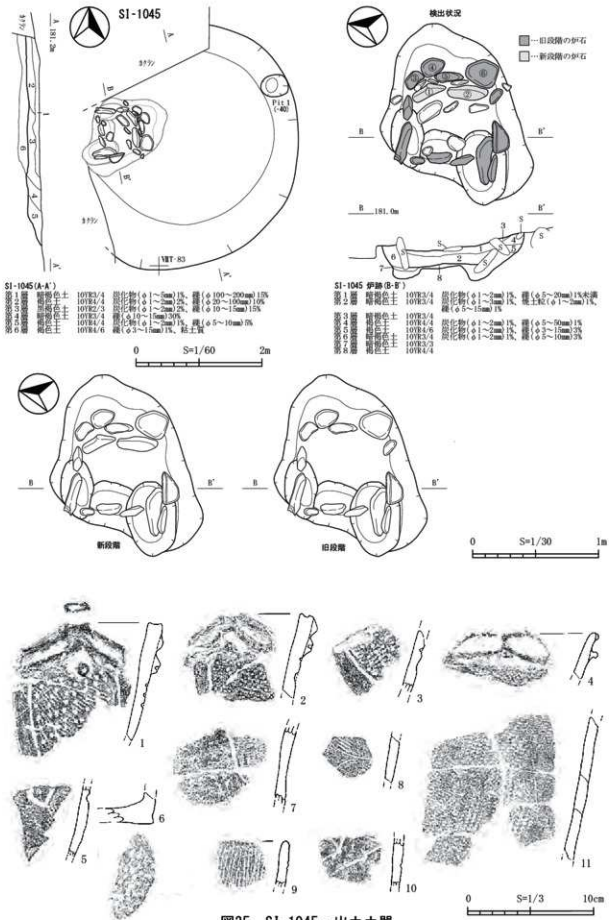


図35 SI-1045・出土土器

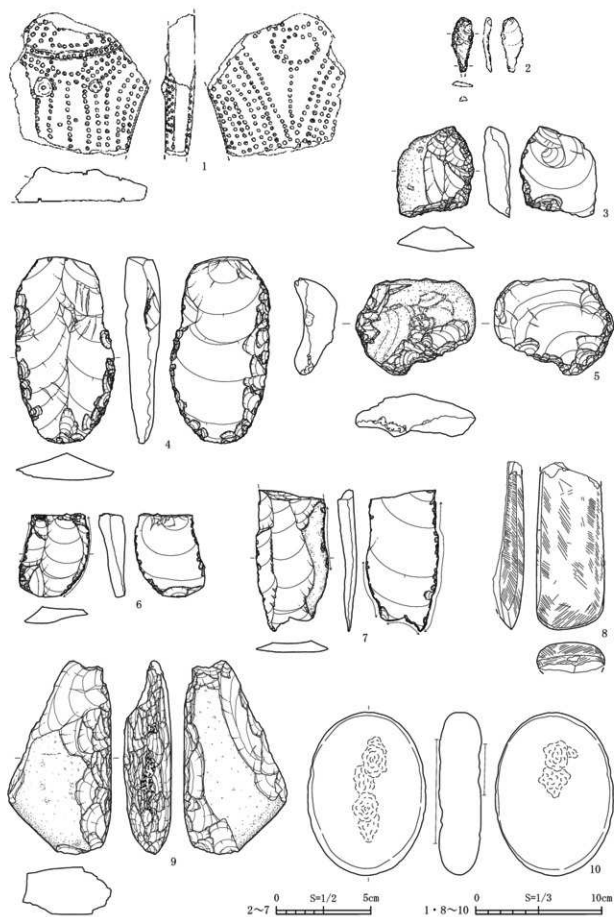


图36 SI-1045出土石器・土製品

## SI-1048 (図37・38)

【位置・確認】ⅧJ・K-82・83グリッドに位置し、第IV層で検出した。竪穴上部に攪乱が入り込んでいたため、堆積土上部は記録していない。

【形状・規模】東西6.2m、南北6.6m。南北にやや長い楕円形で、床面積は26.7㎡である。

【壁・床面】壁は全体で確認した。壁立ち上がりは外側に向かって緩やかに開いており、最高所は西壁で床面からの高さは45cmである。床は全面に褐色土（第1層）を貼って貼床としている。

【炉】西壁寄りに石囲炉（第1号炉跡）と地床炉（第2号炉跡）を検出した。新旧関係は、第2号炉跡が第1号炉跡よりも新しい。第1号炉跡は、方形の石囲部の西側にハの字状に礎が取り付けられている（以下「石組部」）。炉石は長軸20～40cm程度の長円礎を主体に、長軸を横に向けて並べている。石囲部内の東側と炉石内側がよく被熱している。石囲部の規模は南北80cm、東西94cmで西側の石組部を含めた全長は106cmである。石組部の中心を中央とした場合の主軸方向はN-76°-Wである。

第2号炉跡は第1号炉跡の東側で重複している。平面形は南北にやや長い楕円形で、極めて良く被熱している。規模は長軸132cm、短軸114cmで焼成厚12cmである。新旧関係は第1号炉跡よりも第2号炉跡の方が新しく、居住段階の途中で炉を改築したものと考えられる。A-A'断面では第2号炉跡の明確な掘方を観察できず、また貼床下にも地山を掘り込むような掘方が見られない。また先行する第1号炉跡の火床面にも第2号炉跡構築の際の痕跡が見られないことから、第1号炉跡の機能停止後、小規模な改変で第2号炉跡を構築したものと推測される。

【柱穴・ピット】ピットは10基検出した。Pit 1～6、9の7本が主柱穴と思われる。柱穴配置は、炉の主軸を中心にPit 3とPit 4、Pit 2とPit 5、Pit 1とPit 6・9が対向する配置の、六角形（亀甲形）とみられる。なおPit 6とPit 9の新旧関係は不明である。

【堆積土】堆積土上部に攪乱が入り込んでいたため堆積土上部の記録はない。第1a層は第1号炉跡、また第1b層は第2号炉跡に関する土層である。第2層は第1号炉跡の掘方、第3層は貼床である。

【出土遺物】縄文土器14点、石器6点を図示した。縄文土器は、図38-1～7が縄文時代中期末葉期、8～13が縄文時代中期中葉期に位置づけられる。同1は、折返し口縁と直線の器形、2は鱗状の貼付文を特徴とする。石器は、石槍1点、石錐2点、石匙1点、スクレイパー3点、二次加工剥片4点、微細剥離片16点、磨製石斧2点が出土した。図37-1・2は石錐、3・5はスクレイパー、6は小型の磨製石斧である。4は石槍としたが、片面は加工がほとんど施されていない。6は片岩製の磨製石斧で片面は欠損もしくは未加工である。刃部は一部で確認できるが先端部までは残存していない。長さ130mm、幅25mmである。

【時期】炉の重複関係から、時期は少なくとも新旧の2段階がある。床面からは円筒上層d式期の土器と大木10式併行期の土器が出土しているが前者は混入と理解され、時期は縄文時代中期末葉大木10式併行期と判断される。

## SI-1049 (図39・40)

【位置・確認】ⅧJ・K-101・102グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】西側でSI-1057と重複し、新旧関係はSI-1057の方が新しい。西壁の一部は失われている。

【形状・規模】一部は失われているが、東西4.3m、南北3.7mの楕円形と見られ床面積は8.1㎡である。

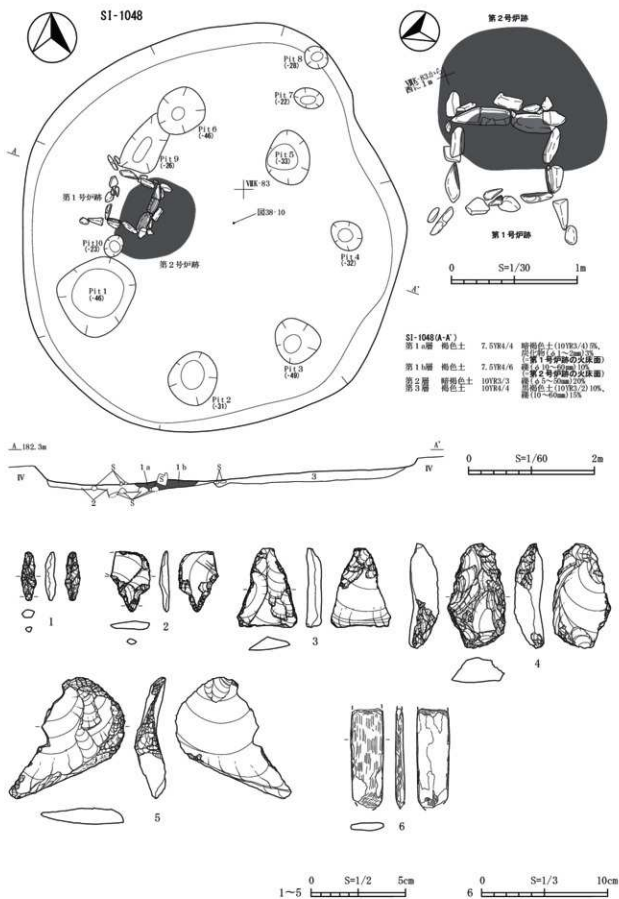


図37 SI-1048・出土石器

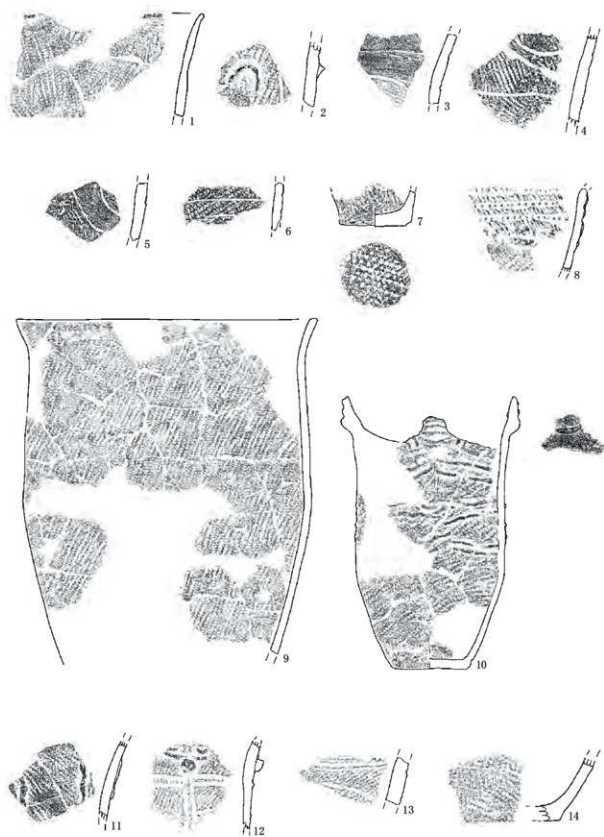


图38 SI-1048出土土器

【壁・床面】壁は西壁を除きほぼ全体を確認した。壁は外側へ向かって緩やかに開いて立ち上がる。立ち上がりの最高所は北壁で床面から48cmである。床は全面にぶい黄褐色土(第8層)を15cm程度貼って床面としている。

【炉】ほぼ中央で地床炉を1基検出した。炉跡より先行して掘り込まれたSK-1の埋土(第6層)上面を火床面としている。長軸42cm、短軸36cmの楕円形範囲で被熱しており、焼成厚は6cmである。

【柱穴・ピット】ピットは6基検出した。深度は浅く、やや配置がずれるがPit 1・2・5・6の4本が主柱穴と見られ、柱穴配置は4本柱である。

【その他の施設】堅穴のほぼ中央に土坑を2基(SK-1・SK-2)検出した。両土坑は重複関係にあり、新旧関係はSK-1が新しくSK-2が古い。SK-1は貼床(第5層)を掘り込んでおり、埋土の上面には炉が構築されている。一方、SK-2は貼床に覆われていることから、構築順序は、古い方からSK-2→貼床(第8層)→SK-1→炉跡となり、SK-1は貼床敷設から炉の使用開始までという極めて限定された時間に掘り込まれ、埋められている。平面形及び規模は、SK-1は不整形で長軸167cm、短軸90cmで深さ25cm。SK-2はSK-1に壊されており定かでないが、残存部の長軸90cm、深さは22cmである。

【堆積土】堆積土は4層に分層した。第1～4層が褐色土主体の堅穴堆積土である。

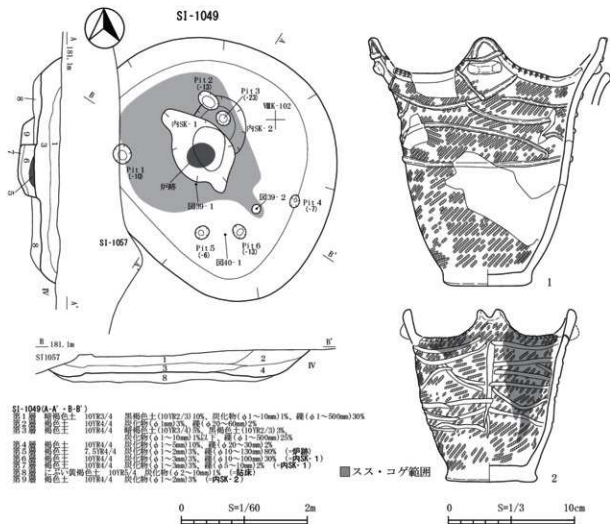


図39 SI-1049・出土土器①



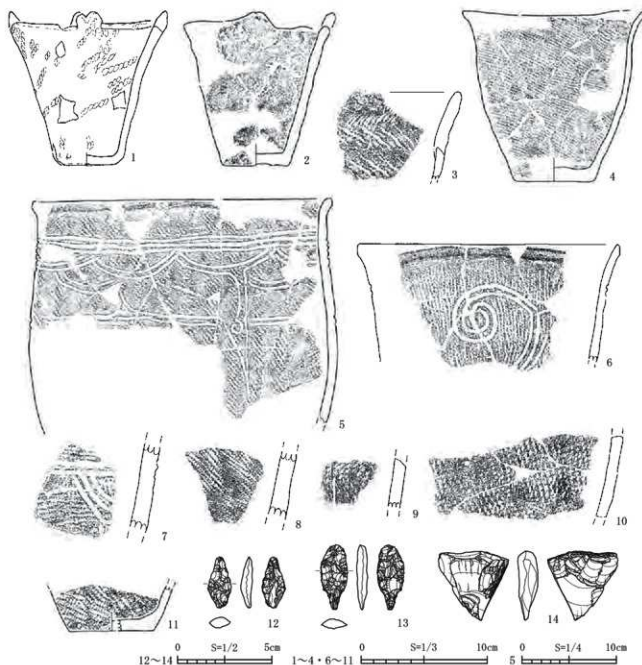


図40 S1-1049出土土器②・石器

【出土遺物】縄文土器13点、石器3点を図示した。床面上より、20cm未満の比較的に小型の土器が複数出土している状況（図39-1・2、図40-1）が認められた。特に、図39-2は、床面に伏せられた状態で出土しており（図版17）、沈線を主要な文様要素とする縄文時代中期中葉の円筒上層e式に比定される。図40-1・2も、図39-2と類似の器形、サイズであることを考慮すれば、同時期の可能性がある。図39-1は、素面の隆帯を文様要素とした円筒上層d式、図40-4は、単軸絡条体による撚糸文が施された縄文時代中期後葉椀林式である。堆積土中からは、図40-5～11のような沈線による弧線文や渦巻文を主要なモチーフとする椀林式が複数出土している。

石器は石鏃2点、石槍2点、石核2点、二次加工剥片7点、微細剥離剥片5点が出土しており、このうち3点を図示した。図40-12は無茎石鏃である。13は両面調整の石器で端部に対称的な抉りが入る。両面調整の石器で、作出方法に石鏃基部との共通性が見られ石鏃と判断したが、先端部に問題を残す。

【時期】床面より出土した土器には複数の型式が認められるが、逆に伏せられた状態で出土した図39-2の状況を勘案すれば、当該堅穴の廃絶時期は縄文時代中期中葉円筒上層e式期と見られ、以後、時間的経過の中で中期後葉複式土器が廃棄されたと推測される。

#### SI-1050 (図41~45)

【位置・確認】ⅧL-101・102グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】南側でSI-1055と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

【形状・規模】東西3.8m、南北3.5mの円形で、床面積は3.4㎡である。

【壁・床面】壁は全体を確認した。A-A'断面では、北西側がほぼ垂直に、南東側がなだらかに立ち上がる。立ち上がりの最高所は南壁で39cmである。床は、掘方全体ににびい黄褐色土(第4層)を10cm程度貼って床面としている。SK-1の周囲は硬化面が見られる。

【炉】SK-1は浅い皿状の落ちくぼみで、周囲は硬化面が発達している。焼け面が顕著ではないが、SK-1脇にわずかな被熱範囲が見られる。これらの状況や被熱痕跡から、SK-1の位置に炉が存在したものと推測される。SK-1の北側には長円礎(長軸40cm、短軸20cm)が貼床を浅く掘りくぼめて設置され、炉周辺における何らかの施設であった可能性があるが、使用痕跡が観察できず図示はしていない。

【柱穴・ビット】ビットは4基検出した。主柱穴と見られ、柱穴配置は平面方形の4本柱である。4本柱を基準とした際の主軸方位はN-19°-Wである。

【その他の施設】SK-1は長軸70cm、短軸56cm、深さ5cmの浅い掘り込みで炉関連の施設と思われる。

【堆積土】第1~3層が堅穴堆積土で暗褐色土を主体としている。

【出土遺物】堆積土中より20kgを超える大量の土器や石器が出土した。床面から出土したものは見られない。まとまりのある個体が多いことから、ほぼ完形の状態で多数の土器が投棄されたと理解される。縄文土器は24点図示した。図42-1~3・5、図43-2は、いずれも球形形の器形で口縁部文様は

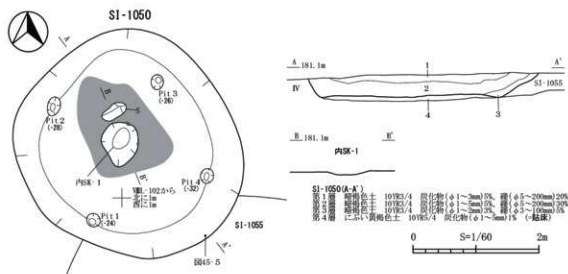


図41 SI-1050

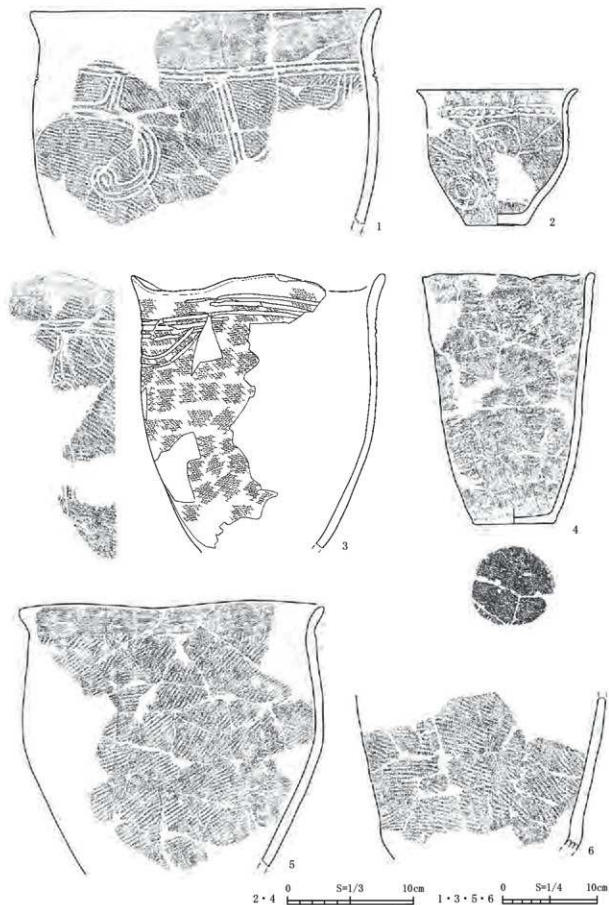


图42 S1-1050出土土器①

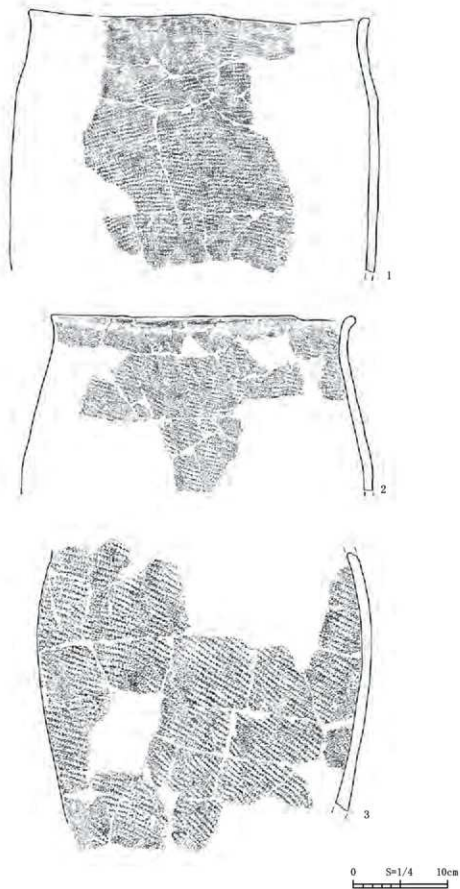


图43 S1-1050出土土器②

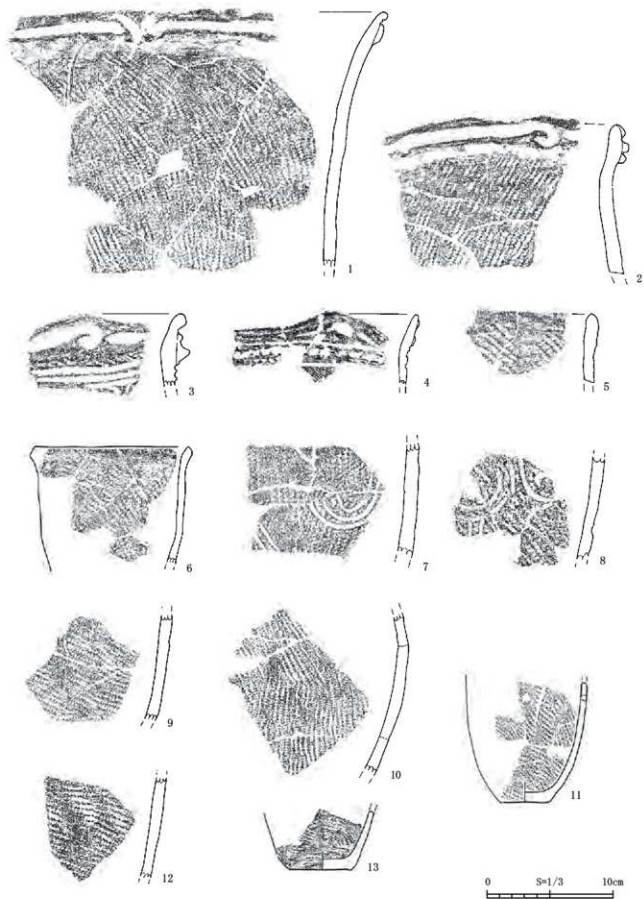


图44 SI-1050出土土器③

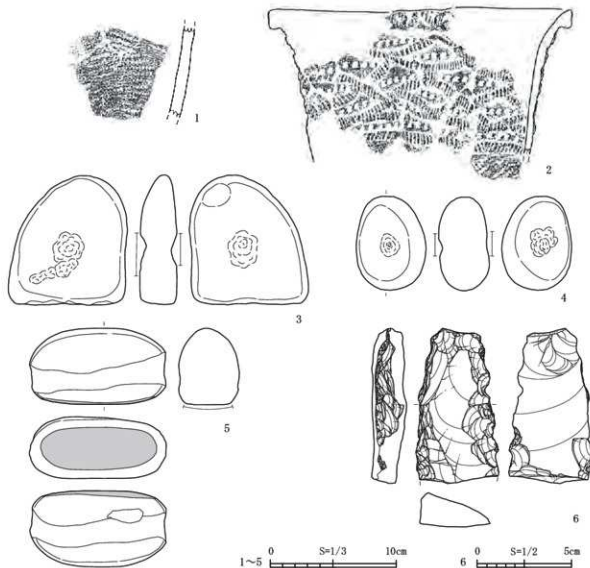


図45 SI-1050出土土器④・石器

無文である。このうち図42-2は、器高が20cm未満の小型土器で、燃糸地文と頸部に円形刺突が施されている。

石器は、石織2点、石槍1点、スクレイパー2点、石核1点、二次加工剥片2点、微細剥離剥片4点、石冠1点が出土し、このうち4点を図示した。図45-3・4は凹石で、3は扁平磯、4は小型の円磯の2面を使用している。同5は北海道式石冠である。器体には敲打成形による幅12~25mm程の浅いくぼみが全周する。機能面には磨痕が顕著に観察される。長さ111mm、幅61mm、高さ50mmである。同6は縦長剥片を素材としたスクレイパーで、長軸方向の二側縁に加工が施されている。

【時期】出土遺物から、縄文時代中期後葉榎林式期に比定される。

SI-1051 (図46・47)

【位置・確認】ⅧL・M-100・101グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】SI-1059、SK-1049と重複し、新旧関係はSI-1059よりも新しく、SK-1049よりも古い。

【**形状・規模**】東西5.5m、南北4.4mの楕円形を基調とし、床面積は12.2㎡である。

【**壁・床面**】壁は、SK-1049に一部が壊されていることを除きほぼ全体を確認した。壁立ち上りの最高所は南壁で59cmである。床は全面にぶい黄褐色土（第7層）を貼って床面としている。

【**炉**】竪穴中央で炉を2基検出した。第1号炉跡と第2号炉跡は重複しており、新旧関係は第1号炉跡の方が新しい。第1号炉跡は石囲炉で平面形は南北方向にやや長い角のとれた方形（隅丸方形）である。炉石は長軸15～25cm程度の長円礫を9個用い、長軸を横に向けて並べている。南側は炉石の途切れた箇所があり、抜き取りの可能性もある。炉石は全体的に内側が良く被熱しており、火床面も極めて良く被熱している。炉の掘方は貼床を掘り込んでおり、構築手順は①貼床敷設→②炉の掘方掘削→③炉石設置となる。石囲炉の規模は、長軸84cm、短軸72cmで、床面から火床面までの深さ9cm。火床面は40×34cmの範囲で被熱しており、焼成厚3cm程度である。1号炉跡からはオニグルミ、クリの炭化種実を検出している（第4章第2節参照）。

第2号炉跡は、南北方向にやや長い隅丸方形の掘方と火床面を検出した。北側は第1号炉跡により壊されている。掘方の形態的な類似から、第2号炉跡は、機能時点では第1号炉跡と似た形状の石囲炉であったと推測される。炉の規模は、残存している東西方向で60cmであり、第1号炉跡よりは一回り小規模であったと思われる。火床面は46×40cmの範囲で極めて良く被熱している。

【**柱穴・ピット**】ピットは17基検出した。深さが20cm未満のピットが8基、30cmから46cmまでのものが7基あり、後者が支柱穴の可能性もある。新旧の炉跡の存在から建替えも想定され、この際に柱穴位置が移動している可能性も考えられるが、炉の軸方向や柱穴の平面位置から、基本的な柱穴配置は、平面形が台形の4本柱（Pit 1・2・15（または3）・4）ないしはこれにPit 7・17の2本を加えた六角形の6本柱のいずれかの可能性が考えられ、主軸方位はN-38°-Wである。

【**壁周溝**】竪穴の南半で幅30～50cmの壁周溝を検出した。床面からの深さは5cm未満である。

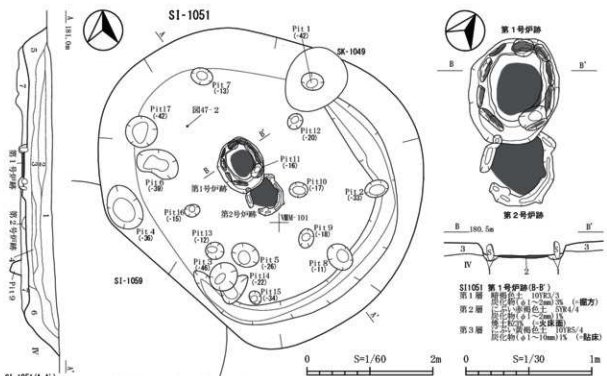
【**堆積土**】第1～6層が竪穴堆積土である。第3層と第4層は、暗褐色土が主体で黄褐色のロームブロックを含んでいる。第6層はぶい黄褐色土が主体の壁際堆積土である。

【**出土遺物**】縄文土器、石器合わせて10kg以上の遺物が出土した。床面から出土した遺物はなく、ほぼすべて堆積土中からの出土で、一部は完形に近い状態で廃棄されている。このうち縄文土器3点、石器1点、土製品1点を図示した。

図46-1は、胴部に最大径がある深鉢形土器で、頸部に鋭角に施された刺突文、沈線による十字文、剣先文を主要なモチーフとする。同4は、土器片を加工した土器片製円盤である。

石器は、石槍3点、石錘1点、石核1点、二次加工剥片5点、微細剥離片4点、敲磨器2点、石皿1点が出土し、このうち4点を掲載した。図46-5は石槍で、全体的に調整が粗く未製品の可能性がある。図47-1は石錘とした。同2は緑色凝灰岩製の敲磨器で、扁平楕円礫の表裏両面を凹石として使用し、1面には長軸方向の擦痕が無数に観察され、凹みが2面に見られる。同3は竪穴北側の床面で出土した凝灰岩製の石皿である。敲打により機能面を作出するが、使用痕跡に乏しい。

【**時期**】出土土器の中には若干の円筒上層式土器がみられるが、図46-1・2をはじめとして大半の土器が縦面に回転施文された縄文地文と、沈線を主体としたモチーフで構成されており、おそらくは縄文時代中期後葉複林式期に帰属すると思われる。



SI-1051 (A) 1 10YR3/3 炭化物 (φ1~2mm) 25% 礫 (φ10~50mm) 25%  
 2 10YR3/3 炭化物 (φ1~2mm) 25% 礫 (φ20~350mm) 10%  
 3 10YR3/3 炭化物 (φ1~2mm) 10% 礫 (φ10~40mm) 25%  
 4 10YR3/3 炭化物 (φ1~2mm) 25% 礫 (φ10~20mm) 25%  
 5 10YR3/3 炭化物 (φ1~2mm) 25% 礫 (φ10~20mm) 25%  
 6 10YR3/4 炭化物 (φ1~10mm) 15% 礫 (φ10~200mm) 7%  
 7 10YR4/4 炭化物 (φ1~10mm) 10% 礫 (φ20~30mm) 2%  
 8 10YR4/4 炭化物 (φ1~10mm) 1% (粘床)

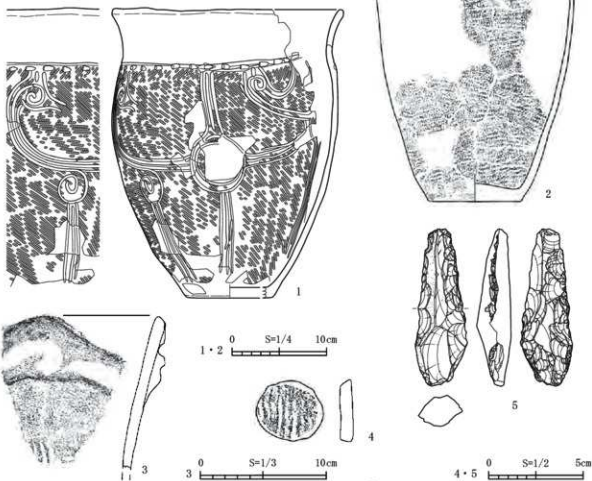


図46 SI-1051・出土土器・石器①・土製品



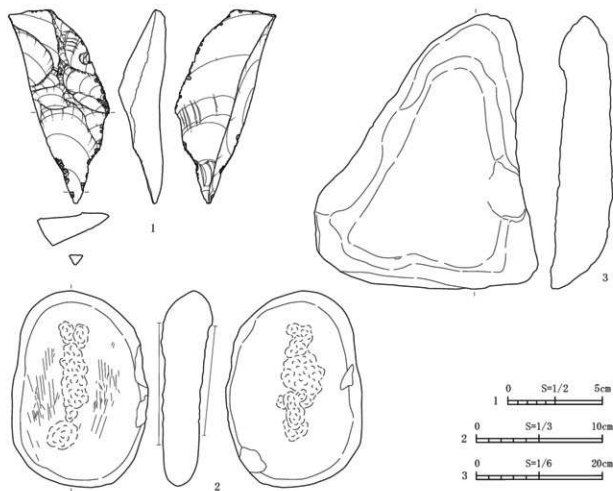


図47 SI-1051出土石器②

## SI-1052 (図48～53)

【位置・確認】調査区西側の段丘縁辺に位置し、ⅧU・V-81・82グリッドに所在し、第IV層で検出した。遺構上部が削平されているほか、西側は後世の流出等により失われている。壁や堆積土は一部でしか確認できず、破線で図示した範囲は貼床（掘方埋土）分布範囲からの推測である。

【形状・規模】遺構の遺存状況が悪く、平面形は不明であるが残存部で南北5.9m以上である。

【壁・床面】壁は東側を除いて大半が攪乱によって欠失している。壁立ち上りの最高所は東壁で42cmである。床面はおおむね平坦で褐色土や暗褐色土（第3～6層）を全面に貼って床面としている。

【炉】堅穴中央北寄りの位置から石囲炉を1基検出した。長軸15～20cm程度の比較的細かな礎を長軸105cm、短軸90cmの隅丸方形に配している。炉石は被熱が見られるが、火床面の被熱は顕著ではない。掘方は、平面範囲を図示し得なかったが、断面観察では貼床を掘り込んでおり、構築順序は①貼床敷設→②掘方掘削→③炉石配置となる。

【柱穴・ピット】ピットは11基検出し、このうち6基（アミ落とし部）は床下で検出したものである。剥片集積遺構を除き、深さが40cm前後となるピットが4基（Pit 3・4・7・10）あり主柱穴の可能性はあるが、堅穴西側は削平されており柱穴配置は不明である。また壁際に巡るピット5基（Pit 4・6・7・11・12）についても深さが一様でなく、壁際の柱穴列であるかは不明である。

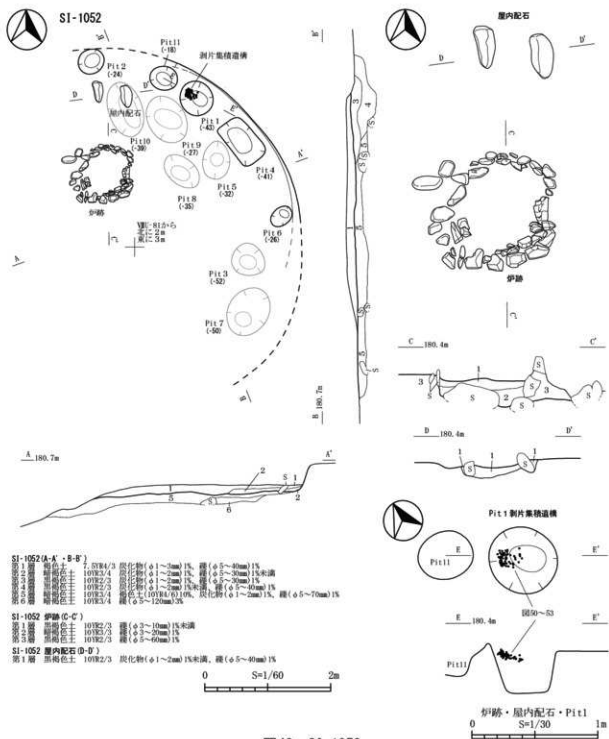


図48 SI-1052

【堆積土】第1・2層が褐色土及び暗褐色土を主体とする堅穴堆積土である。

【出土遺物】遺物は堆積土中からやや多く出土したほか、Pit 1は測片集積遺構である。縄文土器は出土量も少なく、ほぼすべてが小破片である。このうち4点を図示した。図49-1・2は大木10式併行期の口縁部片であり、2には弧状の沈線が施されている。同3・4は円筒上層c~d式土器である。堆積土から出土した石器は、石鏃10点、石錘1点、スクレイパー1点、石核1点、二次加工測片9点、微細刻離測片10点である。図49-17の腹面には光沢が見られる。

Pit 1 の剥片集積遺構では、珪質頁岩の剥片が床面に近い堆積土上層で出土した。総点数は70点(852g)で、互いが間層を挟むことなく密集している(図版19)。砕片等は出土していない。

表1は剥片集積遺構出土の全資料について器種内容をまとめたものである。剥片70点のうち、接合関係のあるものは12組35点(467g)、接合関係を持たない剥片が35点(385g)あり、それぞれに二次加工のある剥片及び微細剥離のある剥片を含んでいる。石材はいずれも珪質頁岩で、複数の母岩を含んでいる。

接合資料12組の器種とその数量は同表右のようになり、多いもので剥片8点、少ないもので剥片2点の接合関係がある。これらのうち7組の接合資料とこれを構成する剥片、及び接合関係のない資料から二次加工剥片4点を図50～53に掲載した。

接合資料1は8点の剥片で構成される。接1-1(以下「接○」は略)を作出後、作業面を移動させ、2～6までを連続的に作出した後、作業面を移動させ7を作出。再び作業面を戻し8を作出している。1～4には微細剥離が見られる。

接合資料2は3点の剥片で構成される。2から3への作出にはわずかに作業面を移動させている。3に不連続の二次加工、1・2に微細剥離が見られる。

接合資料3は4点の剥片で構成される。1～4までを同一の作業面で連続的に作出している。作業面に対する左右両側には稜面近くの風化部が見られ、この位置関係から推測すれば母岩となる礫は比較的小規模(10cm未満)なものと思われる。1～3には微細剥離が見られる。

接合資料4は3点の剥片で構成される。1を作出後、作業面を移動させ、2・3を連続的に作出している。1・2の背面側には風化部内面の赤褐色の酸化部が見られる。2・3で微細剥離が見られる。

接合資料5は、2点の剥片で構成される。2は正面、裏面ともに背面となっており、剥片剥離過程の残核である。2の裏面では、左下方向から剥離が行われている。いずれも二次加工が見られる。

接合資料6は3点の剥片で構成される。接合資料6の正面には1の主要剥離面が観察され、裏面には3の主要剥離面が観察されることから、剥片剥離過程で1の石核と2・3の石核(あるいは1・2の石核と3の石核)が分離後、それぞれの石核で打面を変えて剥片剥離が進行した資料と考えられる。

接合資料7は2点の剥片で構成される。1・2を同一の作業面で連続的に作出している。1に二次加工、2に微細剥離が見られる。

このほか、非掲載とした接合資料は5組あり、いずれも2点の剥片で構成されている。図53-1～4には接合関係をもたない剥片のうち二次加工の見られるもの4点すべてを掲載した。

図53-1は矩形剥片の二側縁に、両面から不連続な剥離を施した二次加工剥片である。同2は矩形剥片の二側縁に微細な剥離を連続的に施した二次加工剥片である。同3は縦長剥片末端の二側縁に、あたかも石匙のつまみ部のような挟入部を作出した二次加工剥片である。極めて薄い剥片でかつ挟入の程度も弱いため石匙とするには困難である。4は矩形剥片の二側縁に二次加工が見られる。

表1 SI-1052Pit 1 出土資料の器種と数量

接合関係	有	二次加工	器種												計				
			微細剥離	剥片	計	接合No.	1	2	3	4	5	6	7	8		9	10	11	12
有	4	14	17	35	8	3	4	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	35
無	4	4	27	35			1			2		1							4
計	8	18	44	70	5	2	2	2		2	1								14
					剥片	3		2	1		1		2	2	2	2	2	2	17
					重量(g)	138	84	29	31	20	28	20	37	16	14	29	21	467	

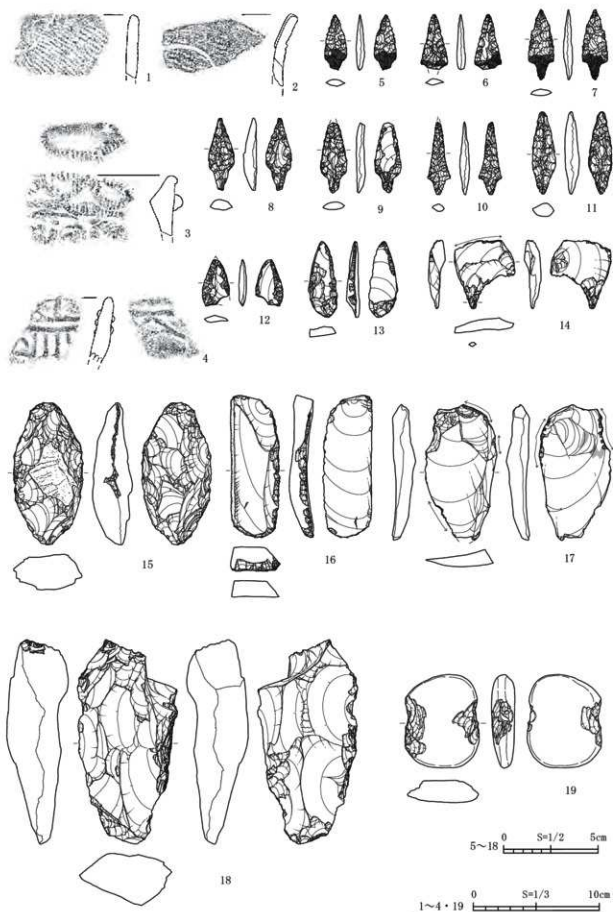


図49 SI-1052出土土器・石器①

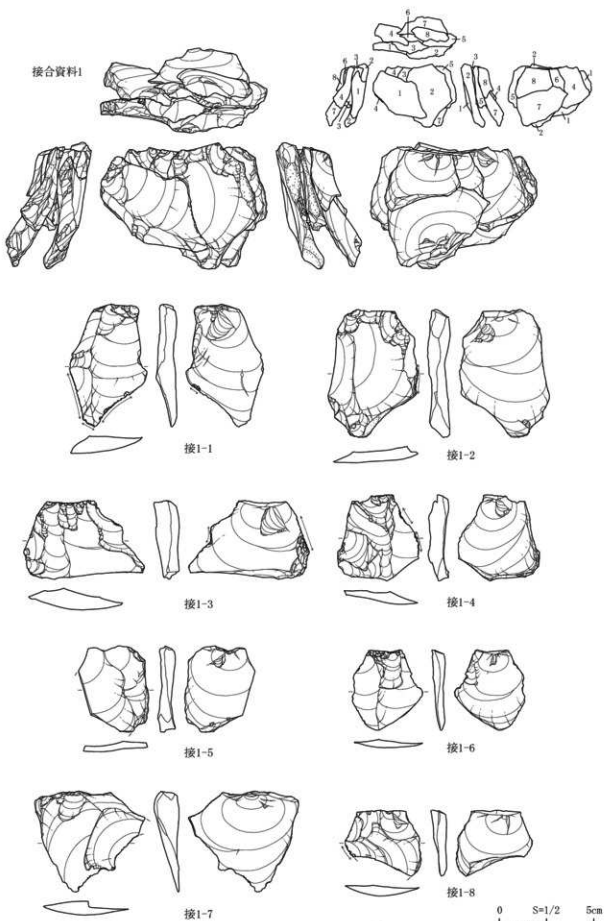
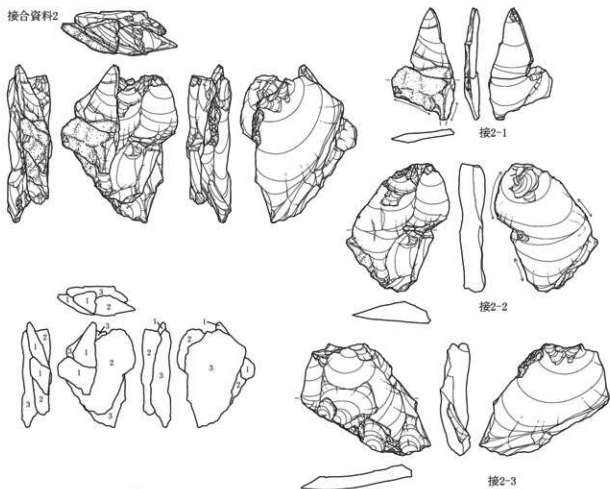


図50 S1-1052出土石器②

接合資料2



接合資料3

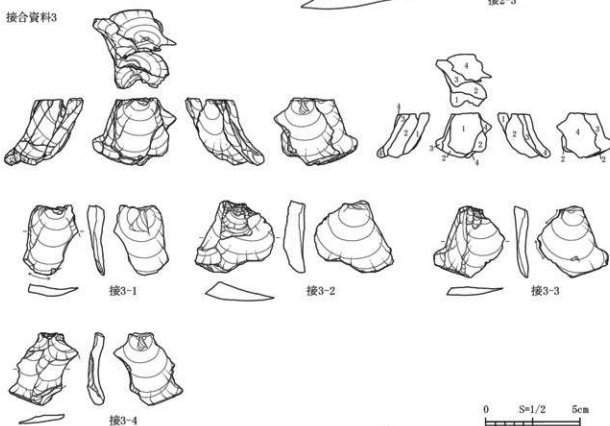
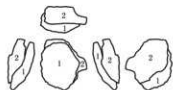
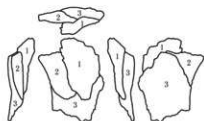
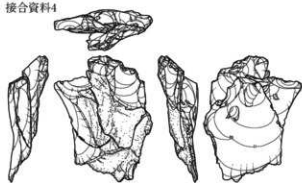
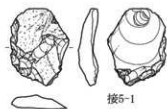
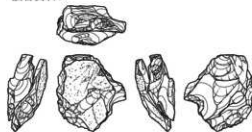


図51 S1-1052出土石器③

接合資料4



接合資料5



接合資料6

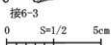
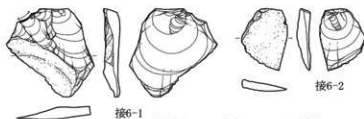
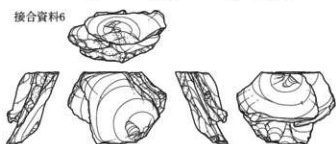


图52 S1-1052出土石器④

接合資料7

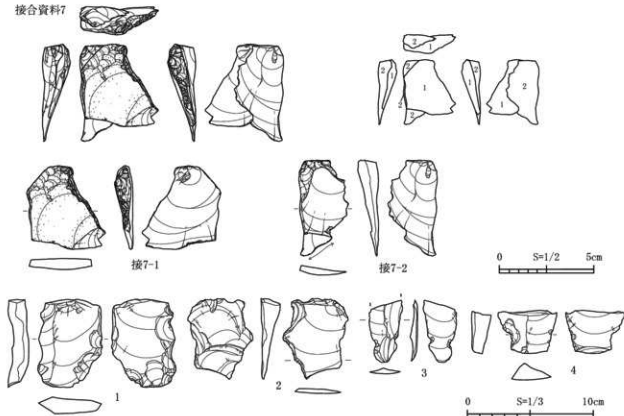


図53 SI-1052出土石器⑤

【剥片集積遺構のまとめ】珪質頁岩の剥片70点(862g)の集合で、35点の剥片で12組の接合関係がある。母岩は複数認められ、二次加工剥片及び微細剥離剥片を含んでいる。また碎片等は見られない。これらの状況から剥片群は、石器製作の残滓というより便宜的使用のために蓄えられた剥片と想定される。

【時期】出土した土器の量が少なく、明確に時期を決定づける証拠は認められない。ただし数量的には縄文時代中期末葉期の土器片がもっとも多く、次いで縄文時代中期後葉の榎林式土器が認められることから、当住居の廃絶時期は縄文時代中期末葉の可能性がある。

SI-1053 (図54)

【位置・確認・重複】ⅧJ・K-100・101グリッドに位置する。SI-1057床面の下層で検出した。新旧関係はSI-1057の方が新しく、本遺構の上部は削平されている。検出したのはピット6基、SK(土坑)、溝で、炬は確認できなかったが、検出状況及び位置関係よりこれらを堅穴住居跡と捉えた。

【形状・規模】遺構上部の削平により、平面形は不明である。規模は柱穴および溝の配置から、東西3.7m以上、南北4.0m以上と考えられる。

【壁・床面】壁及び床は全体が失われている。

【柱穴・ピット】ピットは6基検出した。Pit 1～5の5本ないしはここからPit 2を除いた4本が主柱穴と思われ、柱穴配置は不整五角形の5本柱ないしは台形の4本柱と思われる。なおPit 6としたものは溝跡の一部である。



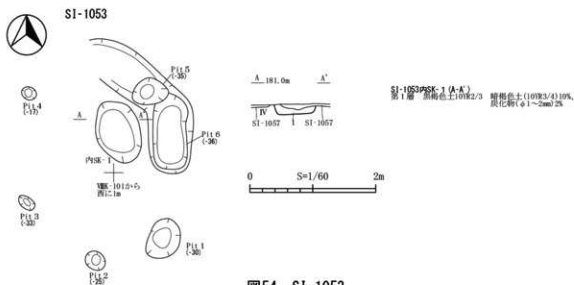


図54 SI-1053

【壁周溝】北西側に幅70cm、深さ15cmの溝跡を確認した。壁周溝の可能性はある。

【その他の施設】SK-1は、支柱穴を結んだ空間内の北東部に位置している。平面形は楕円形で、規模は長軸103cm、短軸70cm、深さ23cmである。

【堆積土】削平によってほぼ全面の堆積土が失われている。

【時期】本遺構と重複するSI-1057が縄文時代中期後葉の複式式期であることから、遺構の新旧関係より複式式期がそれ以前の時期に帰属するものとみられる。

#### SI-1054 (図55～58)

【位置・確認】調査区西縁、VIII～N-82・83グリッドに位置し、第IV層で検出した。西へ向かって急激に落ち込む段丘縁辺に位置し、西側は削平により失われている。

【形状・規模】東西6.9m、南北6.2mの楕円形で、床面積は26.6㎡である。

【壁・床面】壁は西側を除きほぼ全体を確認した。西壁は崩落によって失われている。壁立ち上がりの最高所は南壁で56cmである。床はほぼ全面に暗褐色土(第9層)を貼って床面としている。

【炉】竪穴の西壁寄りに石囲炉を1基検出した。平面形は方形を基調とした石囲部西側に、ハの字の石組部が付属する。石囲部は長軸30cm程度の長円礫の長軸を横に向けて配置し、台形状に10cm程度下がっており、上面は良く締まっている。掘方は長軸190cm、短軸126cmの台形状で、床面からの深さは23cmである。石組部南側には、石組部と同じ向きに礫を並べた屋内配石が見られる。

なお、炉(C-C'第1層)から、オニグルミの炭化核を検出している(第4章第2節参照)。

【柱穴・ピット】ピットは23基検出した。規模や平面位置などから、Pit22・23を除くほぼすべてのピットが支柱穴とみられ、柱穴配置は平面形が六角形の6本柱と思われる。竪穴の中心から六方向に放射状に分布する柱穴の位置関係から、最低でも3回以上の建替えがうかがえる。また中央に位置するPit12・14～16の4本も、補助的な柱穴であったものと思われる。

【主軸方向】炉の長軸方向及び柱配置の軸方向より、主軸はN-70°-Wである。

【壁周溝】北側の一部に幅25～50cm、深さ33cmの溝を検出した。

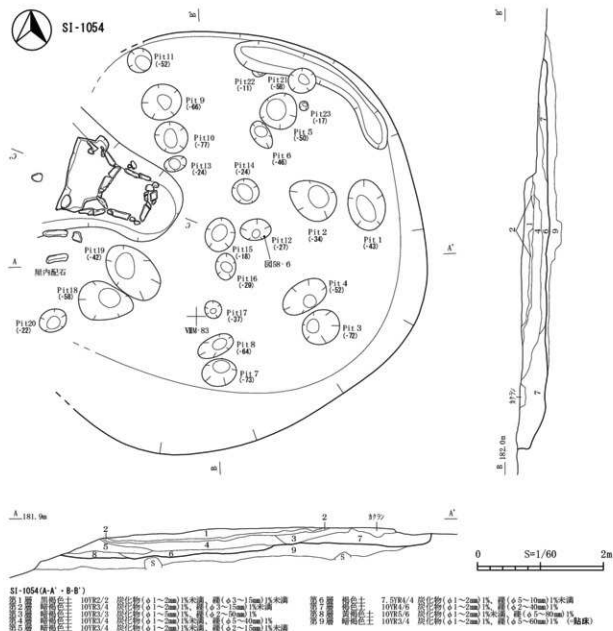


図55 SI-1054

【その他の施設】 炉跡の南側に屋内配石を検出した。配石は長軸35~40cm程度の長円鏡2個を、30cmの間隔で平行に並べている。鏡の向きは石囲炉の石組部南側の鏡の向きと一致している。

【堆積土】 第1~8層が暗褐色土主体の堅穴堆積土である。第2層では火山灰分析を実施しており、白頭山火山灰(B-Tm)が含まれていることを確認した(第4章第1節参照)。第II A層に相当する。

【出土遺物】 炉内堆積土より土器が数点出土したほかは、大半が堆積土中から出土している。第5層と第8層からの出土が顕著であり、8割の土器がこれらの層から出土している。完形に近い個体は図56-1を除いては少なく、ほとんどが小破片である。1は器高が21cmを計る壺形土器であり、第8層中から横倒しの状態で出土した(図版20)。器壁が3~4mmと薄く、底部にはこざ目編み(一超え一潜り)の圧痕が残る。地文には、単筋RL縄文が頭部では横位に、胴部では斜位に施されている。時期は、縄文時代中期末葉大木10式併行に比定される。同3・4は中期後葉椀林式土器である。

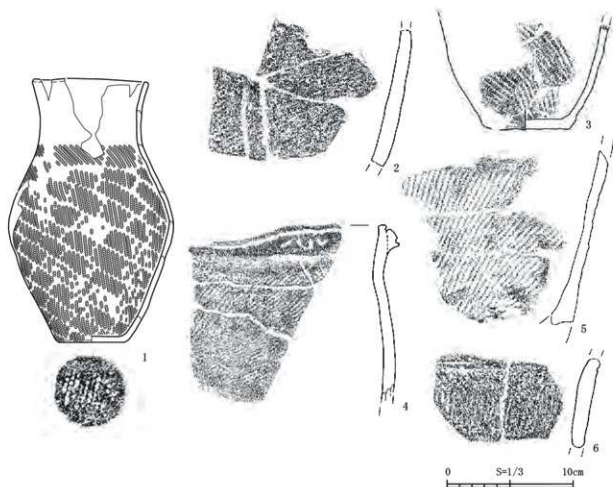
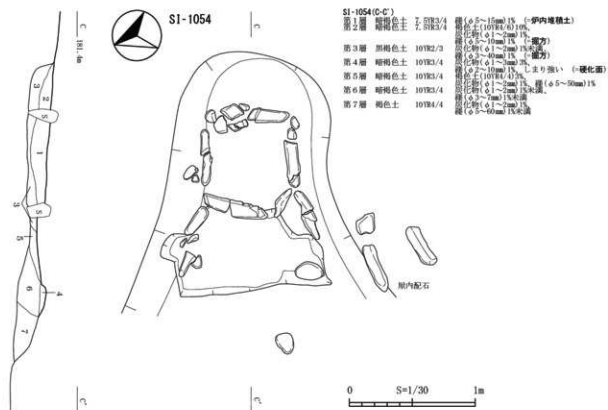


図56 S1-1054炉・出土土器

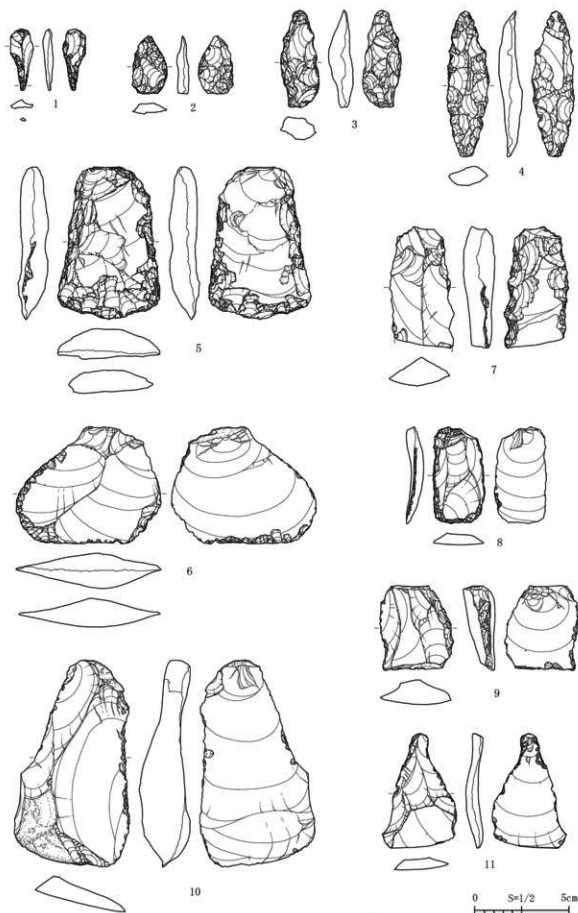


图57 SI-1054出土石器①

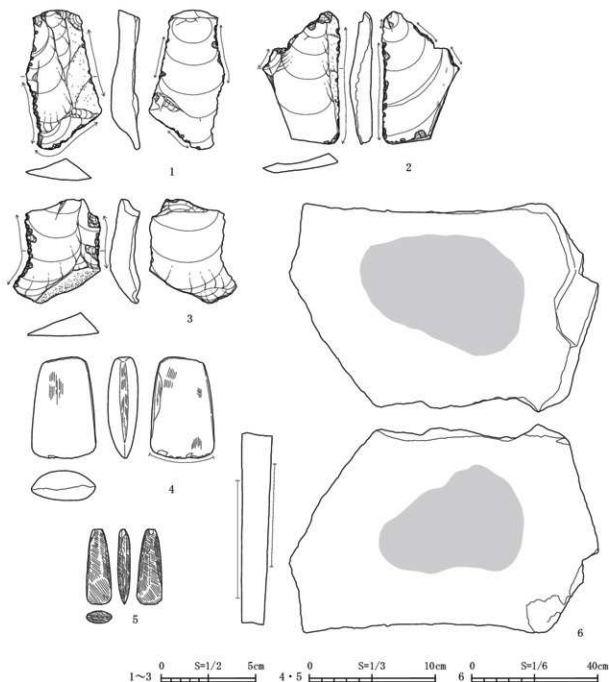


図58 SI-1054出土石器②

石器は、石鏃1点、石槍2点、石錐1点、石匙1点、石鏃1点、スクレイパー9点、二次加工剥片11点、微細剥離剥片13点、磨製石斧2点、磨石1点、台石1点が出土した。図57-1は石錐で、同2は無茎石鏃である。同3・4は石槍、5は石鏃である。同6～9はスクレイパーで、6は横長剥片、7～9は縦長剥片を素材としている。同10及び図58-1・2は微細剥離剥片に分類した。いずれも縦長剥片を素材としており、10・11は縦長剥片の長軸方向の一侧縁に、図58-1・2は二側縁以上に微細剥離が観察される。図58-3は背面の二側縁に加工のあるスクレイパーである。

図58-4は緑色片岩製の磨製石斧で二次的な被熱が見られ刃部は摩滅している。長さ82cm、幅52cm、厚み24cmである。同5は緑色凝灰岩製の小型の磨製石斧で、長さ60cm、幅20cm、厚み10cmであ

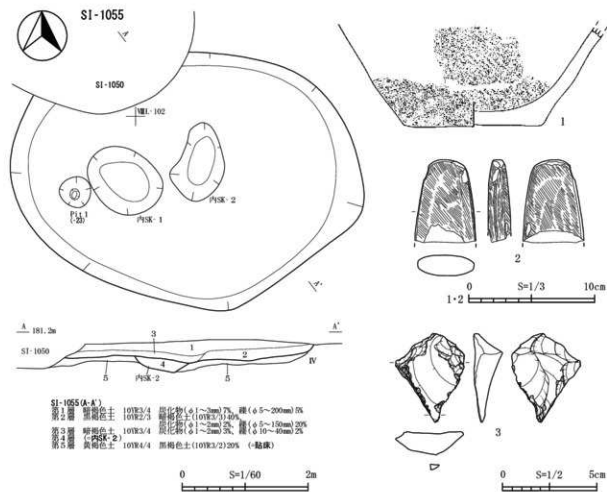


図59 SI-1055・出土土器・石器

る。図58-6はPit12脇の床面から出土した流紋岩製の台石で、台形状の扁平な割石の両面中央に顕著な磨痕が見られる。

【時期】堆積土中から出土した土器の中には、図56-3・4といった縄文時代中期後葉とみられる土器片が複数認められるが、壁際堆積土の第8層からは中期末葉に位置づけられる図56-1がほぼ完形の状態で出土している。柱穴配置や炉形態は南側に隣接するSI-1048(中期末葉期)と共通し、当該期の建物跡の特徴を示している可能性がある。以上、出土遺物及び住居構造から、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属すると推測される。

#### SI-1055 (図59)

【位置・確認】VMK・L-101・102グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】北側でSI-1050、西側でSK-1057と重複し、新旧関係はSI-1050よりも古く、SK-1057よりも新しい。北側はSI-1050により失われている。

【形状・規模】東西5.7m、南北4.0mの東西にやや長い長円形で、床面積は14.1㎡である。

【壁・床面】壁は北側を除いたほぼ全体を確認した。壁立ち上りの最高所は37cmである。床は全面に黄褐色土(第5層)を15~20cmの厚さで貼って床面としている。

【炉】なし。

【柱穴・ピット】ピットは堅穴の西側で1基検出した。

【その他の施設】堅穴の中央で土坑を2基検出した。床面（第4層）を掘り込んでおり、掘削は貼床敷設後である。SK-1は長軸122cm、短軸96cmの不整形で、深さは19cmである。SK-2は長軸126cm、短軸74cmの楕円形で、深さは26cmである。

【堆積土】3層に分層した。第1～3層が暗褐色土主体の堅穴堆積土である。

【出土遺物】遺物はすべて堆積土中から出土しており、縄文土器、石器が少量出土した。このうち、縄文土器は1点を図示した。図59-1は、底部のみ遺存した縄文土器片である。胴部にかけて大きく開く器形や縦位に展開する縄文地文から、榎林式に比定される。石器は、石鏃1点、石槍3点、石錐1点、二次加工剥片3点、微細剥離剥片1点、磨製石斧1点、敲石1点が出土した。図59-2は緑色凝灰岩製の磨製石斧で、刃部側は欠損している。同3は石錐である。

【時期】出土遺物は少量で大型の破片も見られないが、図59-1をはじめとして縄文を縦位に施したものが多く、縄文時代中期後葉榎林式期に帰属する可能性がある。

#### SI-1057 (図60)

【位置・確認】ⅧJ・K-100・101グリッドに位置し第IV層で検出した。遺構上部は削平されている。

【重複】SI-1049・1058・1060と重複するほか、堅穴中央の床面下層でSI-1053と重複している。いずれの遺構よりも新しいが、SI-1060と重複する北側は壁及び壁周溝を確認できなかった。

【形状・規模】平面形は長軸8.1m、短軸5.8mの南北に長い長円形で、床面積は33.7㎡である。また主柱穴を結んだ空間の面積は26.1㎡である。

【壁・床面】壁は遺構上部の大半を削平により失っているほか、SI-1060と重複する北壁一部は確認できなかった。床は全面に褐色土（第2層）を貼って床面としている。

【炉】堅穴北寄りで石囲炉を1基検出した。炉石は一部が残存しており、抜き取りの可能性がある。掘方は炉石を配置する箇所のみ床面を掘り込んでいる。掘方の平面形は隅丸方形で、規模は長軸130cm、短軸90cmである。炉石及び炉内の一部で被熱が見られる。

【柱穴・ピット】ピットは12基検出した。主柱穴はPit 1～4、6・7・9・11の8本と思われ、いずれも壁周溝内ないしはこれよりやや内側に位置し、堅穴主軸を中心にPit 1-11、Pit 2-9、Pit 3-7、Pit 4-6が対向する。それぞれの柱間距離は図60中右表のとおりである。主柱穴の規模は直径50～90cm、深さ31～75cmである。このほか北側で重複するSI-1060のPit 1は、位置的には本堅穴内で見つかっている。帰属を判断できずSI-1060で掲載しているが、本堅穴のPit 4-6間に位置するPit 5と、炉跡を挟んで対向する位置にあり、本堅穴住居に関連したピットの可能性もある。

【壁周溝】北側の一部を除き、床面をほぼ全周している。規模は幅25～45cm、深さは23cmである。

【堆積土】第1層が褐色土主体の堅穴堆積土で、上部はほとんど削平されている。

【出土遺物】縄文土器、石器が少量出土した。出土遺物の総量は1kgに満たない。土器は時期が判別可能な資料を中心に3点図示した。図60-2はLR縄文を縦位に施した後、やや太い沈線を弧状に施したもので、同3は同様の沈線で懸垂文を描いた後に、横方向に弧線文を付加したものである。いずれも縄文時代中期後葉榎林式土器に比定される。石器は、二次加工剥片3点、敲磨器1点が出土した。

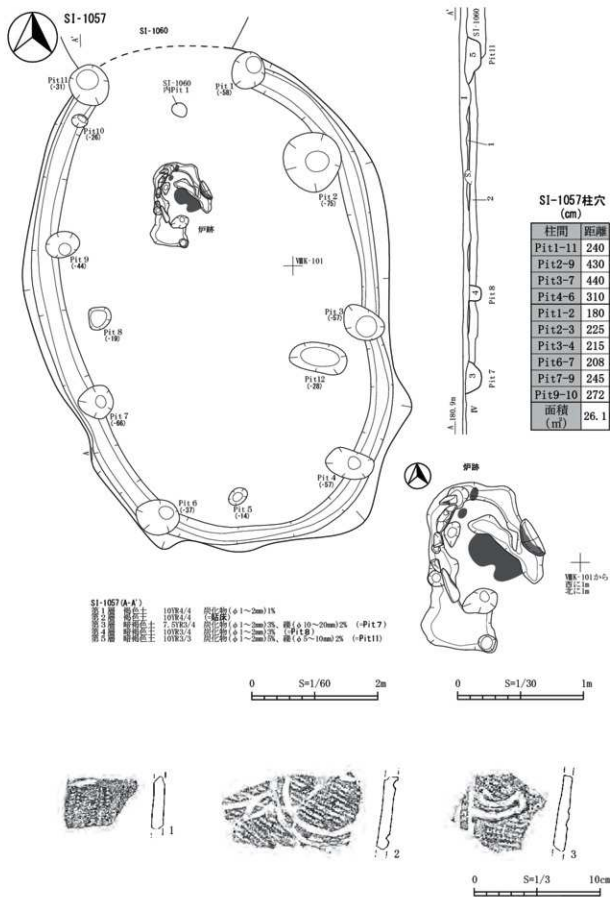


図60 SI-1057・出土土器



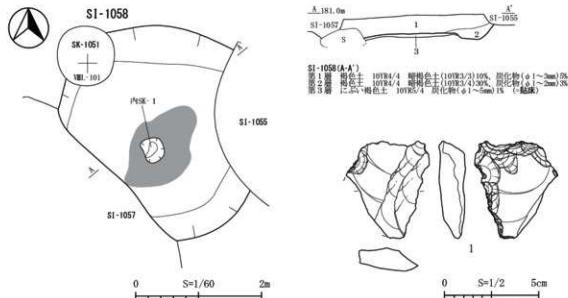


図61 SI-1058・出土石器

【時期】出土遺物が少量であり、時期を決定する確実な資料はない。ただし、堆積土中から縦位の縄文地文に沈線によるモチーフが施された土器が多く認められることから、縄文時代中期後葉複式期に属する可能性がある。

## SI-1058 (図61)

【位置・確認】VMK-100・101、VML-101グリッドに位置し、第IV層で検出した。

【重複】東側でSI-1055・SK-1054、西側でSI-1057、北側でSK-1051と重複する。新旧関係はいずれの遺構よりも古く、各箇所を他遺構により壊されている。

【形状・規模】他遺構との重複による欠失が多く、平面形及び規模はともに不明であるが、残存部から推せば、規模及び平面形は、直径3.5m程度の円形と思われる。

【壁・床面】壁は一部が残存しており、立ち上がりの最高所は北壁で30cmである。床は堅穴のほぼ全面にぶい黄褐色土(第3層)を5cm程貼って床面としている。堅穴中央のSK-1周辺は硬化が著しい。

【炉】なし。硬化面の位置からSK-1は炉に関する遺構の可能性もあるが詳細は不明である。

【柱穴・ビット】なし。

【堆積土】2層に分層した。第1・2層は褐色土を主体とする堆積土で、第2層は壁際堆積土である。

【出土遺物】堆積土中より縄文土器、石器が少量出土した。石器はスクレイパー1点、二次加工剥片2点、磨石2点、敲石1点が出土した。図示したのは1点である。図61-1は縦長剥片を素材としたスクレイパーで、腹面の二側縁に加工が見られ、長軸方向の側縁には特に連続的な加工が観察される。

【時期】出土遺物からは時期を明らかにできないが、SI-1057との重複関係により縄文時代中期後葉複式期以前の時期に属するものとみられる。

## SI-1059 (図62・63)

【位置・確認】VML・M-99・100グリッドに位置し、第IV層で検出した。

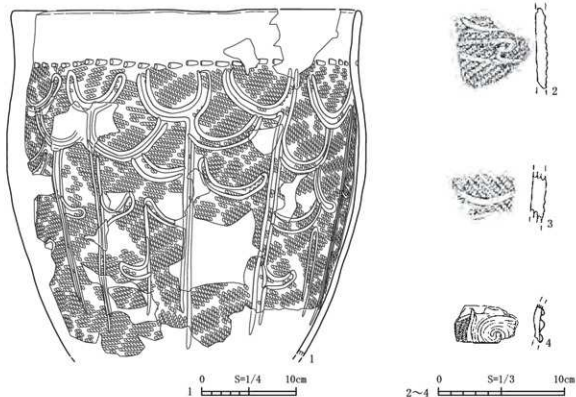
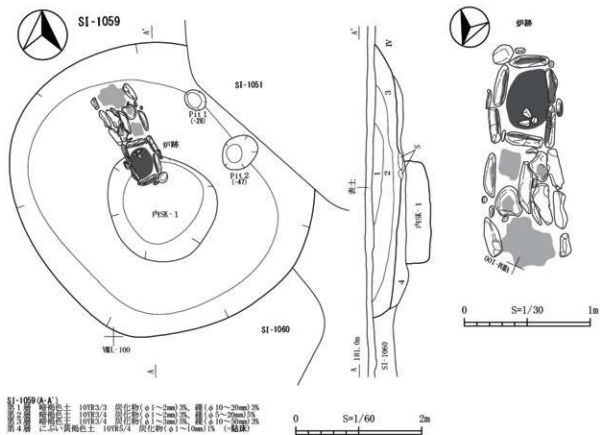


图62 SI-1059・出土土器

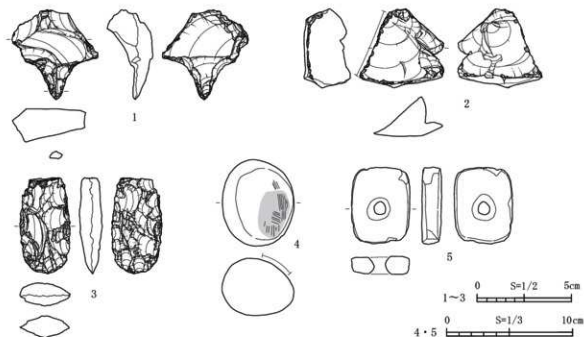


図63 SI-1059出土石器

【重複】北側でSI-1051、南側でSI-1060と重複し、SI-1051よりも古く、SI-1060よりも新しい。

【形状・規模】平面形は円形で、炉の中心を主軸とした長さ4.6mで、これと直行する東西方向は他遺構に壊されており不明である。床面積は10.5㎡で、主軸方向はN-25°-Wである。

【壁・床面】壁は北東部以外を検出した。壁立ち上りの最高所は北壁で床から52cmである。床は全面にぶい黄褐色土（第4層）を10～30cmの厚さで貼って床面としている。

【炉】堅穴北寄りに石囲炉を1基検出した。炉跡は、南北に長い方形の石囲部の北側に、外側に向かってわずかに開く台形状の石組部（前庭部）が取り付く構造である。石囲部は長軸30cm程度の長円礫6個を、礫の長軸方向を横に向け、単軸方向を上に向けて配置している。北側の石組部もこれと接続するように、外側の礫5個は長円礫の長軸方向を横に向け、短軸方向を上に向けて立て並べている。一方で石組部内側の礫4個は、扁平な円礫ないし長円礫5個を用い、扁平な面を上に向けて配置している。石組部内側の礫配置のない箇所は著しく硬化している。石囲炉の内部は全体が良く被熱、赤変しており、炉石も良く被熱している。石組部には被熱は見られない。炉の規模は石囲部で長軸72cm、短軸48cm、石組部の規模は長軸95cm、最大幅は北側で68cmで石囲部幅よりやや広い。石囲部と石組部を合わせた規模は167cmである。掘方は貼床を掘り込んでおり、構築順序は①貼床敷設→②掘方掘削→③炉石配置となる。炉内からはオニグルミの炭化核を検出している（第4章第2節参照）。

【柱穴・ピット】ピットは北東部の壁立ち上がり部分で2基検出した。

【堆積土】3層に分層した。第1～3層は暗褐色土主体の堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土及び貼床から縄文土器、石器、石製品が出土した。縄文土器は、すべて堆積土中から出土している。このうち4点を図示した。図62-1～3は、縄文時代中期後葉複林式土器である。1は、口縁部が無文の大型深鉢で、頸部には横方向から施された刺突文、胴部には太い沈線による懸垂文と弧線文が施されている。2は、沈線による剣先文が施されている。4は隆帯による渦巻文が施されていることから、大木8b式に比定される。

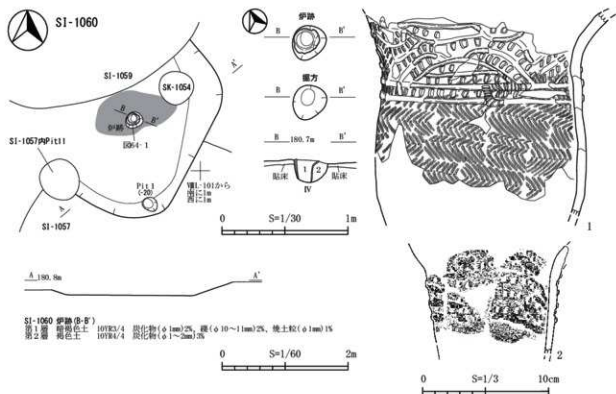


図64 SI-1060・出土土器

石器は石錐1点、石筥1点、二次加工剥片3点、微細剥離片3点、敲石1点、磨石1点が出土した。図63-1は石錐で、2は微細剥離片、3は石筥である。4は緑色凝灰岩製の円筒の1面を使用した磨石で、磨痕のほか擦痕も見られる。図63-5は凝灰岩製の石製品で、形状は角のとれた方形で中央に両側からの穿孔が見られる。長さ67cm、幅49cm、厚さ18cmである。

【時期】出土遺物より縄文時代中期後葉榎林式期に帰属すると思われる。

#### SI-1060 (図64)

【位置・確認】ⅧK・L-100グリッドに位置している。各箇所では他遺構との重複により失われている。

【重複】SI-1057、SI-1059とSK-1054と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。

【形状・規模】残存部の規模で長軸3.0mである。

【壁・床面】壁は重複するSI-1059によって北側半分が失われている。壁立ち上がりは、A-A'の土層断面では緩やかである。床は黄褐色土を貼って床面とし、炉跡周辺では硬化面が発達している。

【炉】竪穴中央より土器埋設炉を1基検出した。底部を欠いた円筒上層c式の深鉢を正位に埋めている。掘方の規模は、長軸28cm、短軸26cm、深さ15cmである。掘方は貼床を掘り込んでおり、構築順序は①炉掘方掘削→②土器埋設→③貼床敷設となる。なお、1層からクリの炭化果実、子葉を検出している(第4章第2節参照)。

【柱穴・ピット】ピットは1基検出した。前述のとおりPit 1は南側で重複するSI-1057の範囲内に位置する。帰属は明らかにできなかったが、当該遺構に帰属する可能性もある。

【出土遺物】遺物は少量であり、多くが堆積土中から出土している。このうち縄文土器2点を図示し

た。図64-1は炉体土器で底部は欠失している。素文の粘土紐と刺突文、結束第1種R・Lの縄文地文を特徴としている。同2は小型土器とみられ、口径は約13.5cmである。1と同様に、素文の粘土紐と刺突文が主要な要素であるが、地文は用いられていない。

【時期】出土遺物より、縄文時代中期中葉円筒上層c式期に帰属するとみられる。

#### 調査区西側縁辺、VII～VIII-82～84グリッドに分布する遺構群について

上記9グリッドに位置する堅穴住居跡6軒、焼土遺構4基、土坑15基、ピットを検出した。この地区は多種多量の遺構が黒色土中に繰り返し掘り込まれ、複雑な重複状況を見せており、遺構の把握については困難を極めた。そのため遺構の検出、遺構番号の命名から、その後の調査、遺構図面の整理、出土遺物の整理等を経て報告書刊行に至るまで、遺構として登録を抹消したものと複数の異なる遺構を統合し、新規に番号を振り直したものもある。また上記のような状況から、本来存在していながら認識できなかった遺構も多数存在しているものと思われる。

このような地区のため、土坑やピットについては、堅穴住居に伴うものか、後世に掘り込まれたものであるか、帰属の有無や新旧関係の判断について、すべての遺構で実施し得なかった。このため堅穴住居内のピットについては、当該住居に伴う可能性のあるものすべてに堅穴住居のピットとしてPit番号を振り、本項にて掲載、報告している。

#### SI-3101 (図65～67) ※旧SI-1038・1046・1047

【位置・確認】調査区の西縁部、VII・X-82グリッドに位置し、第IV層で検出した。遺構検出時点では、異なる色調の土層が分布し、複数の炉跡が存在したことから数軒の堅穴住居跡の重複と捉え、SI-1038・1046・1047として調査を進めたが、その後の調査や遺構・遺物の整理事業の成果から、ひとつの堅穴住居跡と判断した。東半分及び西側の一部は遺構上部の削平を受け失われており、検出面付近が床面と思われる。一点鎖線で図示した範囲は、貼床残存範囲である。

【重複】北側はSI-3102、南側はSI-3103、東側はSI-3106と重複し、本遺構がもともと新しい。

【形状・規模】残存部で南北5.1m。床面積は不明だが、直径5m程度の円形と思われる。

【壁・床面】壁は存在していない。床は黒褐色土（第9層）を10cm程度敷設して床面としている。

【炉】石囲炉を2基、地床炉を1基検出した。第1号炉跡は、堅穴中央やや北寄りに位置する石囲炉である。10～30cm程度の大小の礫10点余りを、角のとれた方形（隅丸方形）に配している。構築手順は、①床面敷設→②掘方掘削→③炉石設置となる。規模は長軸64cm、短軸47cmで焼成厚は5cmである。

第2号炉跡は、第1号炉跡の西側に隣接する石囲炉で、同炉跡よりも古い段階の炉である。火床面、掘方とともに炉石の一部が残っている。残存状況からは平面形、規模等は判断できない。火床面は22×20cmの範囲で被熱し、焼成厚5cmである。第3号炉跡は堅穴南寄りに位置する地床炉である。北側は攪乱により失われている。長軸84cm、短軸47cmの長円形範囲で被熱し、焼成厚は7cmである。Pit 3と重複し、本炉跡の方が新しい。

【柱穴・ピット】堅穴の西側と中央東寄りにピットを14基検出した。主柱穴は不明である。

【堆積土】第1層が炉内堆積土、第2・3層が堅穴堆積土、第4層が炉の掘方、第7～9層が堅穴掘方である。なおA-A'断面では後述するSI-3106大型建物跡の柱穴9との新旧関係がうかがえる。



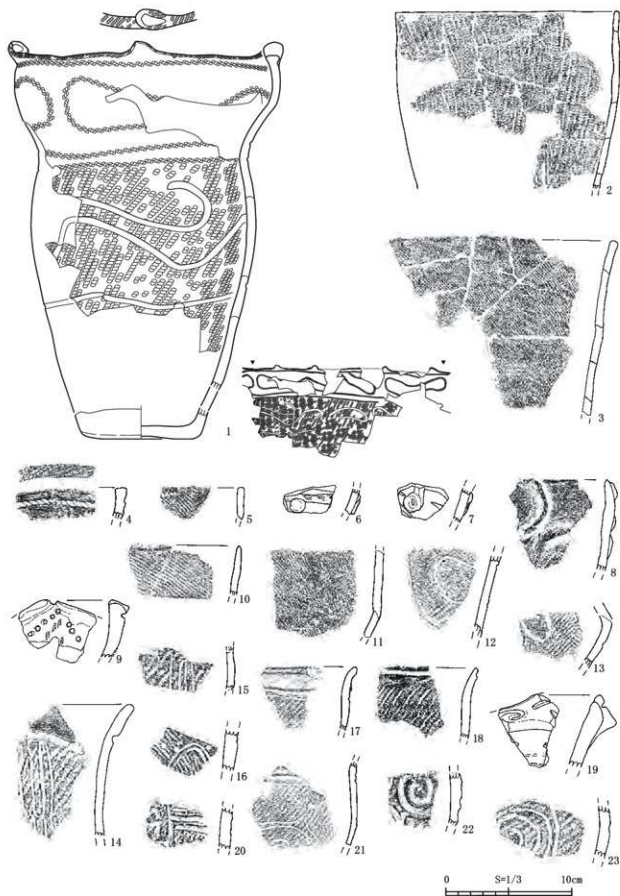


图66 SI-3101出土土器①

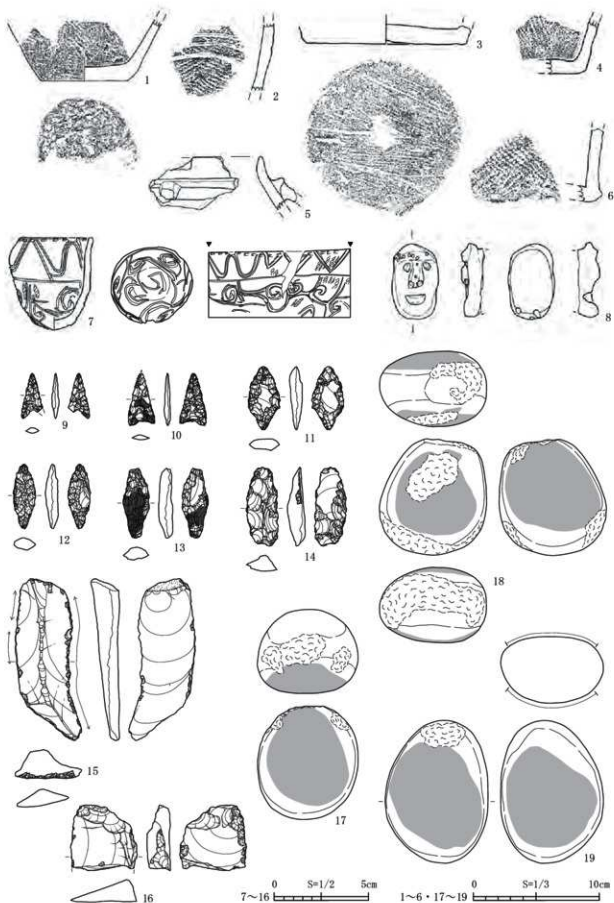


图67 SI-3101出土土器②・石器・土製品



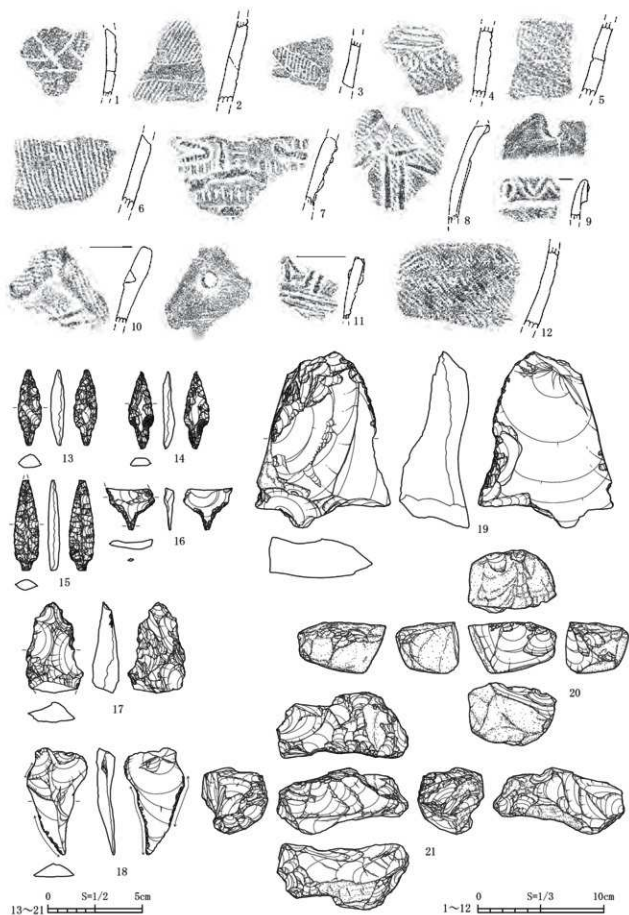


图68 SI-3102出土土器・石器

【**出土遺物**】堆積土を中心に縄文土器、石器、土製品が出土している。このうち、縄文土器は29点を図示した。図66-1は、第1号炉跡上より横倒しの状態で出土した深鉢形土器である。縄文地文に太い沈線による曲線文が描かれる点は、後期初頭のいわゆる「弥栄平式」の要素に相当するが、器形及び口縁部に施された単節縄文の側面圧痕は、弥栄平式よりも古い後期初頭「牛ヶ沢(3)式」の特徴であり、中間的な様相を示している。また1の直下からは、丸底のミニチュア土器(図67-7)がほぼ完存の状態で出土した(図版24)。胴部中位の沈線を境に、口縁部には波状、あるいはジグザグの模様と刺突文、胴部には波頭文が施されている。口縁部文様は牛ヶ沢(3)式に多用されるジグザグのパターンと共通しており、1とも共存関係にあることから同時期の可能性が考えられる。同5~13は大木10式併行、同14~16は最花式、17~23は榎林式に比定され、貼床や堆積土より混在した状態で出土している。石器は石鏃5点、石槍1点、スクレイパー1点、微細剥離剥片1点、敲磨器類3点を図示した。図67-9・10は無茎石鏃、同11~13は有茎石鏃である。同10・13には基部にアスファルトが付着している。

図67-8は、土偶の顔面部分である。長さは4cm。眉と鼻梁は粘土を貼付して立体的に、目、鼻孔、口は刺突で表現されている。眉と鼻梁には刺突文が施されているが、施文が右眉に集中しており非対称を呈している。時期は、縄文時代中期末葉と推測される。

【**時期**】炉跡上より出土した図66-1・4から縄文時代後期初頭に帰属すると思われる、今報告の竪穴住居跡の中ではもっとも新しい。

#### SI-3102(図65・68) ※旧SI-1044

【**位置・確認**】VII-X-82グリッドに位置し、第IV層で検出した。東西両側は削平により失われている。褐色土の分布範囲として確認しており、一点鎖線で示した範囲は貼床残存部である。

【**重複**】南側でSI-3101・3106と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。

【**形状・規模**】削平及び重複のため全体の形状、規模は不明である。

【**壁・床面**】遺構検出面付近が床面と思われ、壁は削平により失われている。床は礫を多く含む褐色土(第12層)を貼って床面としている。

【**炉**】検出していない。

【**柱穴・ピット**】ピットは6基検出した。主柱穴は不明である。

【**堆積土**】堆積土は見られなかった。第11・12層は貼床である。

【**出土遺物**】貼床より、縄文土器、石器が出土した。このうち、縄文土器は12点を図示した。円筒上層式土器(図68-7~12)が多数認められるが、図68-1のような磨消縄文を用いた縄文時代中期末葉の土器片も確認されている。石器は9点を図示している。図68-13~15は有茎石鏃である。図68-16は石鏃で先端部は欠けている。17は石槍と思われ基部側は欠損している。19は比較的大型で厚みのある縦長剥片の一侧縁に両面加工が施されたスクレイパーである。20・21は石核である。20は風化面の観察より、5cm程度原礫であったものと思われる。

【**時期**】出土状況より、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属すると思われる。

## SI-3103 (図69～71) ※旧SI-1037

【位置・確認】ⅧV・W-82グリッドに位置し、第IV層で検出した。東側は削平により失われており、半円状の暗褐色土分布範囲として確認した。遺構検出面付近が床面であり、壁はなく、一点鎖線で示した範囲が貼床の範囲である。竪穴の北寄りに長軸120cm、短軸105cmの大型礎が存在する。竪穴住居の構築にあたっては、この礎を除くことなく屋内に取り込んでいる。

【重 複】北側はSI-3101、南側はSI-3104、また東側は大型建物跡であるSI-3106と重複している。新旧関係はSI-3101よりも古く、その他の遺構よりも新しい。このほかSK-1056と重複している。

【形状・規模】残存部での最大長軸は南北方向で2.4mである。

【壁・床面】遺構上部の削平により壁は全体が失われており、遺構検出面付近が床面と考えられる。床は暗褐色土（第3～5層）を20～30cm程度貼って床面としている。

【炉】竪穴南寄り、石囲炉1基、地床炉1基を検出した。第1号炉跡は石囲炉で、炉石は長円形礎5個と長軸15～25cm程度に分割した台石（図71-2）の破片6片の長軸を横に向け、方形に並べ立てて配置している。石囲炉の掘方はなく、構築にあたっては床面の敷設と併行して設置されたものとみられる。規模は長軸77cm、短軸74cmで、炉内は極めて良く被熱している。焼成厚は12cmである。

【柱穴・ピット】ピットは3基検出した。主柱穴は不明である。第1号炉跡の直下のPit 3は、層位的に判断すれば、本来下位の遺構のSI-3104に属するものであろう。

【堆積土】第1層は炉内堆積土である。

【出土遺物】床面や堆積土中より縄文土器、石器が出土した。このうち、縄文土器は12点を図示した。図70-1～4は、単軸糸条体1類を用いて格子目模様を表現している。同5は、頸部に縄文の側面圧痕、胴部に単節縄文を施文している。石器は5点を図示した（図70・71）。図70-13は縦長剥片を素材とした石匙である。長軸方向の側縁には、微細な剥離が連続している。14は縦長の微細剥離剥片で、長軸方向の二側縁に微細剥離が観察される。15～17はスクレイパーで、15・16は片面加工、17は両面加工である。図71-1は磨石で円礎の2面を使用している。同2は第1号炉跡の炉石として転用された台石で、転用時には6片（以上）に分割されている。

【時 期】出土遺物より、縄文時代中期末葉大木10式併行期に属すると思われる。

## SI-3104 (図69～71) ※旧SI-1028・1029

【位置・確認】ⅧV-83グリッドに位置する。SI-3103の下位で検出した。西側は遺構上部が削平されており、検出面付近が床面と思われる。

【重 複】北側はSI-3103と、東側はSI-3105及び大型建物跡のSI-3106と重複している。新旧関係はSI-3105よりも新しくSI-3103・3106よりも古い。竪穴の東側ではSI-3106柱穴7が本遺構の床面を壊している。

【形状・規模】長軸3.7mの楕円形で、西側は失われているため床面積は不明である。

【壁・床面】壁は平面的には確認できず、A-A'の断面観察でのみ確認した。

【炉】竪穴南側の検出面直下で石囲炉1基を検出した。炉石は2個残存しているが平面形は判別つかない。火床面は直径30cmの円形に被熱している。

【柱穴・ピット】ピットは3基検出したが、主柱穴は不明である。

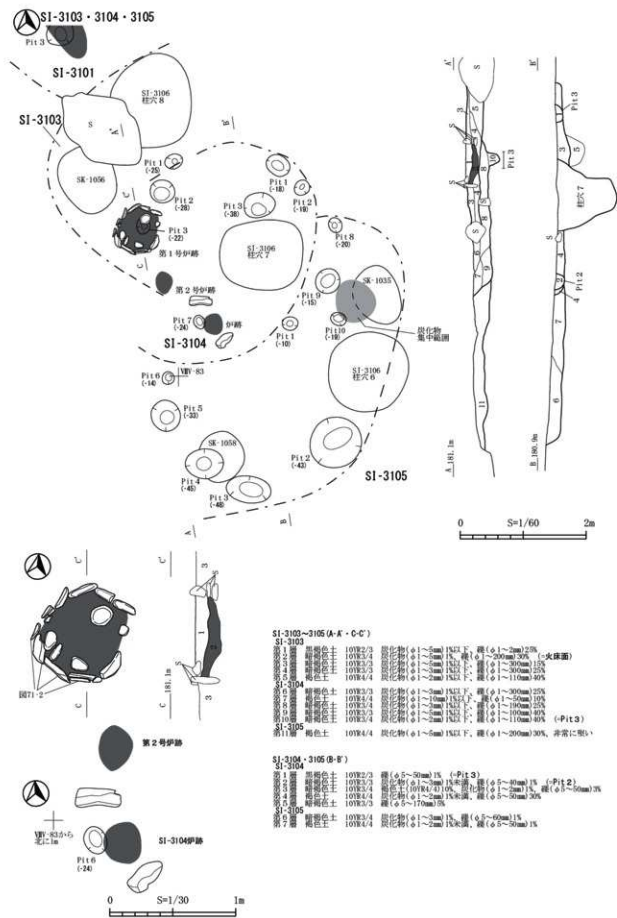


図 69 SI-3103・3104・3105

【壁周溝】なし。

【堆積土】第1号炉跡の検出面から判断すれば、A-A' 第6～8層及びB-B' 第3・4層は貼床(掘方埋土)と判断される。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土し、このうち縄文土器は8点を図示した。図70-18は内面に鱗状の貼付文が施されている。19はボタン状の貼付文と刺突文、21は刺突文と赤彩が施されている。石器は台石1点、石皿1点を図示した。図71-3は長さ28.7cm、幅11.1cmのやや扁平の長円鏝で両面に長軸方向の擦痕が無数に、また片面の一部に顕著な磨痕が観察される。手に保持して運動させるには不十分な大きさで、置いて使用したものと判断しここでは台石に含めた。同4は緑色凝灰岩製の石皿で、敲打成形により機能面を作出している。機能面には黒色物質が付着している。

【時期】出土遺物は大木10式併行のものが最新である。遺構重複状況では、同じ中期末葉のSI-3106よりも古いと判断し、時期は縄文時代中期末葉大木10式併行期で、SI-3106よりも古いと判断できる。

#### SI-3105 (図69・72) ※旧SI-1030・1032

【位置・確認】VIIU・V-83グリッドに位置する。SI-3103の下位で検出した。西側は削平されている。

【重複】北側でSI-3104と、東側ではSI-3106大型建物跡と重複している。新旧関係はいずれの遺構よりも古い。竪穴の東側ではSI-3106の柱穴6が本遺構の壁・床面を壊している。

【形状・規模】削平や遺構の切り合いにより各箇所が失われているため、平面形、規模は不明である。

【壁・床面】遺構上部の削平により壁は確認できなかった。A-A' の第11層、B-B' の第6・7層は竪穴堆積土ではなく貼床で、床面は遺構検出面付近ないしはそれより上だった可能性が高い。

【炉】炉は検出していないが、竪穴東側で直径約30cmの炭化物集中範囲を確認した。被熱は見られず炉であるか不明である。

【柱穴・ピット】ピットは10基検出したが主柱穴は不明である。

【壁周溝】なし。

【堆積土】A-A' 第6～9層が竪穴堆積土、第10層はPit 3の堆積土である。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。縄文土器は12点を図示した。図72-1・3・8・9は、縄文地文に沈線と波状、もしくは弧状にモチーフが描かれており、いずれも大木10式併行に比定される。5は耳状の突起が付いた口縁部片で、外面には刺突文が多数施されている。11は壺形土器の一部と思われ、最花式に比定される。

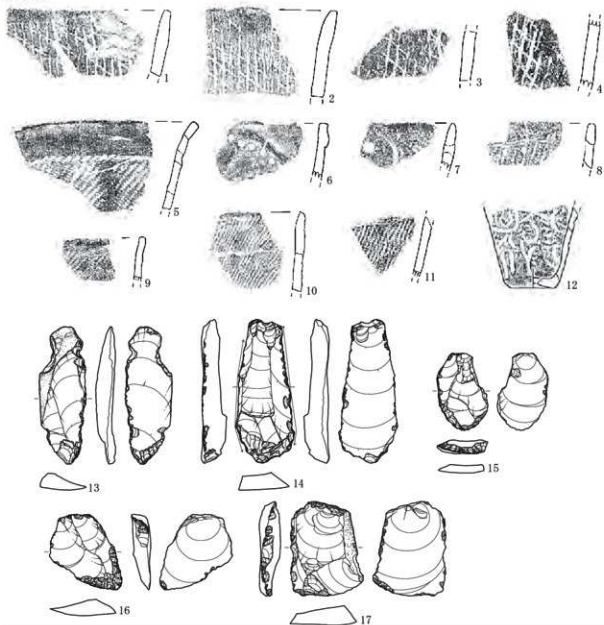
石器は7点図示した。図72-13は無茎石鏝、同14は有茎石鏝である。15・16は石槍で、17・18はスクレイパーである。17は縦長剥片の背面が原礫面となっており、二側縁に連続する深い二次加工が施されている。腹面には打点側に微細な剥離が見られる。図72-19は小型の磨製石斧で、長さ35mm、幅10mm、厚み6mmである。

【時期】出土遺物の構成から、縄文時代中期末葉大木10式併行期に帰属すると思われる。

#### SI-3106 (図73～80) ※旧SI-1021・1022・1024～1027・1040・1043

【位置・確認】VIIU-83・84、VIIV-W-82～84、VIIIX-83・84グリッドに位置する。調査当初この位置で堆積土の異なる複数の円形範囲を確認し、竪穴住居跡の重複と判断して調査を進めたが、調査の結

SI-3103



SI-3104

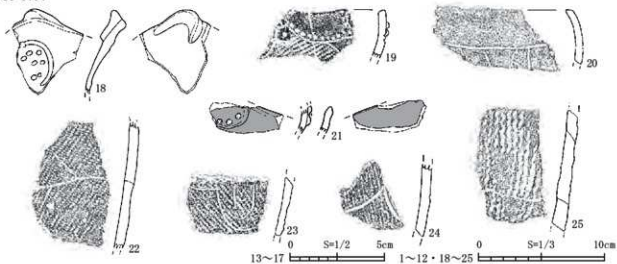
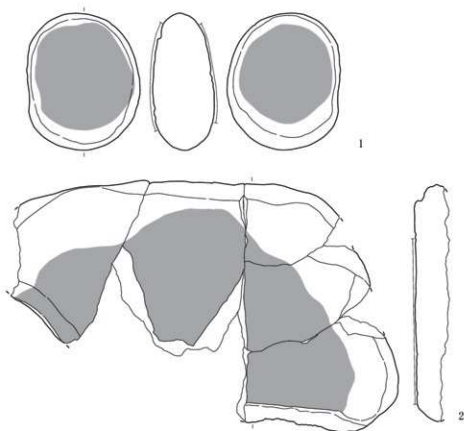


图70 SI-3103出土土器・石器・SI-3104出土土器

SI-3103



SI-3104

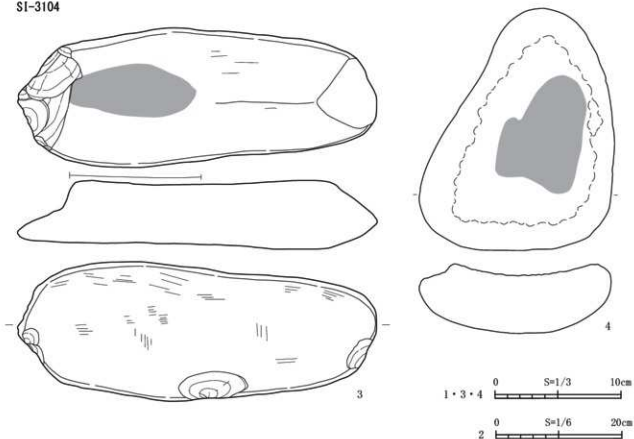


图71 SI-3103・3104出土石器

SI-3105

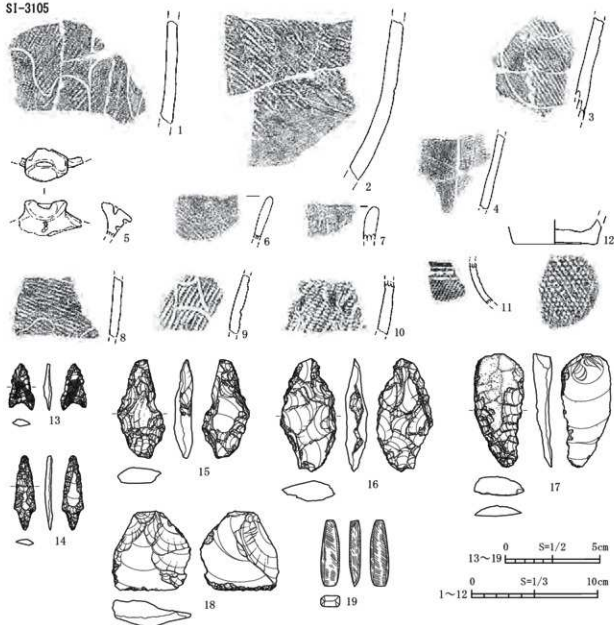


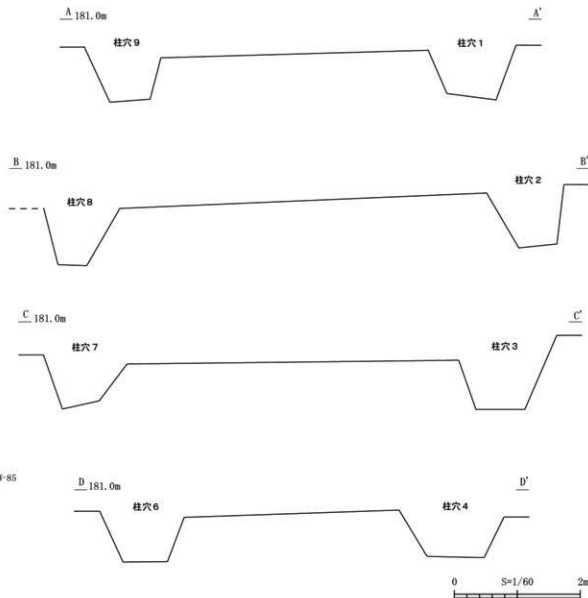
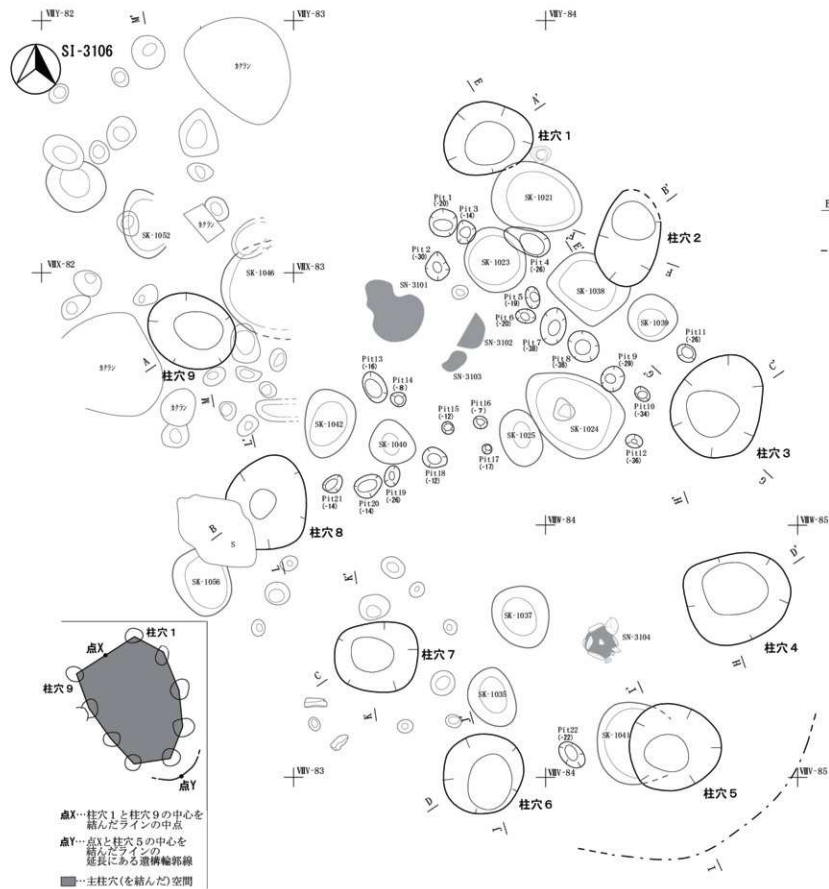
図72 SI-3105出土土器・石器

果、堅穴住居と認定するだけの施設(炉や硬化面、柱穴)は見られなかった。加えて、下層から複数の堅穴住居跡にまたがるように、長軸100cmを超える規模の柱穴群が並んで見つかり、複数の堅穴住居群と捉えていた範囲と一致していたことから、堆積土の異なる円形範囲は、個々の堅穴住居の重複ではなく、大規模な柱穴群によって構成される堅穴住居跡の堆積土の一部であると判断した。

他遺構との重複状況が著しく、また各箇所遺構の削平も進行している。このため平面形は、南側では遺構の輪郭を捉えられたが、東西及び北側の三方では遺構の形状を捉えることができなかった。

【重複】西側でSI-3101・3103～3105の4軒と重複し、新旧関係はSI-3101・3103よりも古く、SI-3104・3105よりも新しい。このほかSK-1021・1023・1038・1039・1024・1025・1035・1037・1041・1042・1040・1046の12基が、柱穴1～9を結んだ範囲内(以下「主柱穴空間」)で見つかっている。SK-1021・1038・1041は、それぞれ柱穴1、柱穴2、柱穴5と直接重複し、新旧関係は柱穴よりも新しい。





SI-3106柱穴関連 属性表

(単位はcm)

遺構名	旧遺構名	柱概	長軸	短軸	深さ	底面标高(m)	柱間	距離	柱間	距離
柱穴 1	SK1018	×	143	115	92	179.7	1 - 2	262	1 - 9	545
柱穴 2	SK1017	×	150	89	85	179.8	2 - 3	326	2 - 8	742
柱穴 3	SK1014	×	166	144	123	179.6	3 - 4	280	3 - 7	665
柱穴 4	SK1015	×	167	141	89	179.9	4 - 5	285	4 - 6	494
柱穴 5	SK1026	×	145	139	88	179.9	5 - 6	288		
柱穴 6	SK1012	×	130	127	85	179.8	6 - 7	277		
柱穴 7	SK1043	●	132	98	84	179.7	7 - 8	295		
柱穴 8	SK1050	×	140	120	113	179.7	8 - 9	294		
柱穴 9	SK1055	▲	142	113	94	179.7				
										面積 (主柱穴空間)
										56.3㎡

※柱概欄 ●=柱概あり ▲柱穴あり

図73 SI-3106①

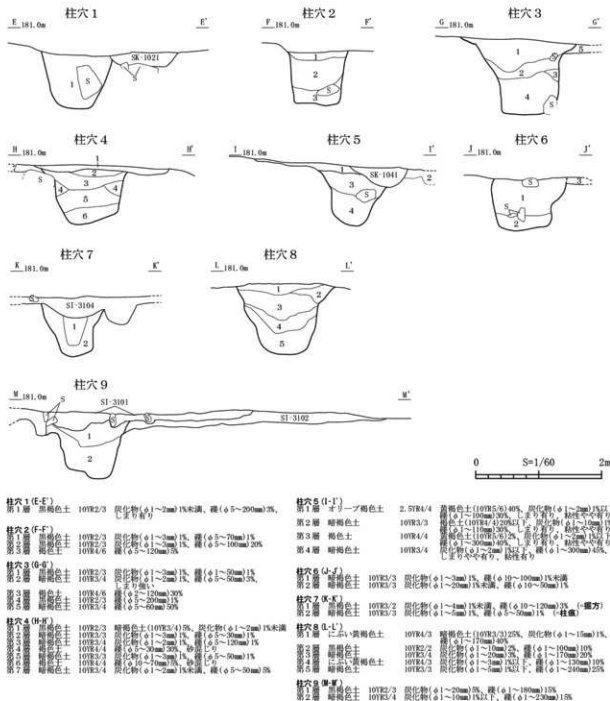


図74 SI-3106②

主柱穴空間では、焼土遺構を4基検出している。SN-3101~3103は柱穴2~8の中央、またSN-3104は柱穴4~6の中央に位置している。詳細は次項「2 焼土遺構」に譲るが、焼土遺構の検出面が柱穴群の検出面より低く、両者の直接的な関係は明らかでない。

【形状・規模】柱穴配置及び南側で検出した遺構の輪郭等から、平面形は長円形と思われる。特に長軸方向の柱筋は、直線ではなく外側に向かってやや張り出しているため、長軸方向は胴張り形状であったと推測される。

竪穴住居としての規模は、長軸(点X-Y間の距離)は11.3m以上、短軸(柱2~8の柱間距離)

は7.5m以上、また主柱穴空間の面積は56.3㎡で、実際の床面積はこれ以上だったものと推測される。なお主柱穴の規模に関しては、図73に属性表を用意したのでそちらに譲る。

主軸方向は、点X-Yを主軸としたときの方向でN-32°-Wである。

【壁・床面】著しい重複状況及び遺構上部の削平のため、壁・床面は確認できなかった。

【炉】前述のように主柱穴空間で焼土遺構を4基検出しているが、本遺構に伴うものかは不明である。

【柱穴・ビット】主柱穴を9本、その他のビットを22基検出した。前述のように主柱穴に関する属性は図73中の表に示したため、ここでは概要に留める。主柱穴の規模は長軸130~160cm程度、短軸90~140cm程度、検出面からの深さは85~120cm程度で、その他のビット群と比べても突出している。柱穴の底面標高は、179.6~179.9mと30cm程度の誤差で極めて良くまとまっている。柱痕は柱穴7で検出し、柱の当りは柱穴9で確認できた。柱穴7の柱痕規模は直径35~40cm、柱穴9での当りの規模は直径30~35cmである。

なお主柱穴以外の小規模なビット22基は、焼土遺構(SN-3101~3103)付近にのみ偏在することから、確認はできなかったがこの部分のみ別の遺構が存在した可能性がある。

【壁周溝】なし。

【堆積土】柱穴の検出面の上層には、円筒上層c式から大木10式併行の土器片を多く含んだ30~40cm程度の遺物包含層が堆積しており、この層中に多数の土坑やビット、焼土遺構などが掘り込まれている。確認できなかった堅穴住居跡も多数存在していたものと推測されるが、これらの柱穴上層の遺物包含層を本遺構の堆積土として取り扱った。

【出土遺物】柱穴及び堆積土から、縄文土器、石器、土製品が出土している。出土遺物については、個別の柱穴1~9と堆積土を分けて掲載した。出土土器の概要を示すと、柱穴出土遺物でもっとも時期の下る資料は大木10式併行期の土器である。破片ではあるが柱穴1~9のいずれからも数点から十数点出土している。なお直接時期を示すものではないが、堆積土出土遺物でも、もっとも時期の下る資料は大木10式併行期の土器である。

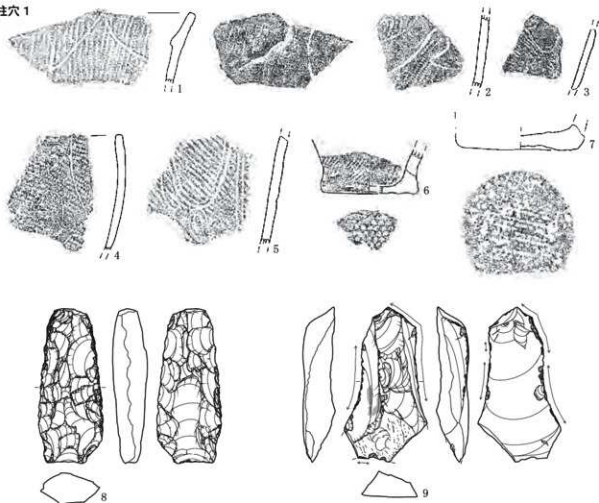
図75~78は柱穴出土遺物、図79・80は堆積土出土遺物である。

柱穴より出土した縄文土器は多数あり、このうちの103点を図示した。全体として縄文地文に細い沈線による文様が施文されたもの、もしくは磨消縄文が基調となるものが多い。図75-1は、内面には鱗状の貼付文、外面には沈線による弧状文が施されている。同18は、頸部に橋状把手が付く壺形土器であり、外面は赤彩されている。図76-5は、縄文の末端結節が縦位に施されている。出土した底部片には複数種の網代痕が認められ、ござ目編み(一超え一潜り)の圧痕は図75-6・7、図77-12・25、図78-19・20、図79-22・23・25など、もっとも数が多い。他には、図77-21よりもじり編みの圧痕、図79-24より木葉痕が確認されている。図79-15は脚付土器である。底部に4個の脚部が付き、胴部には沈線が縦位、あるいは斜位に施されている。

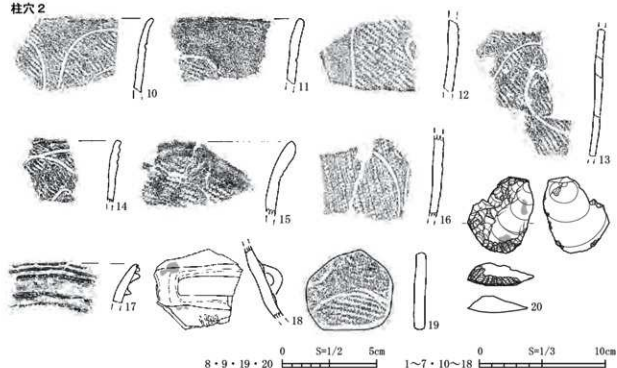
柱穴出土の石器は、石鏃4点、石槍2点、石匙1点、スクレイパー4点、二次加工剥片7点、微細剥離剥片12点である。また堆積土出土の石器は、石鏃4点、石槍1点、石錐1点、石匙1点、スクレイパー5点、二次加工剥片2点、微細剥離剥片5点、磨石2点。敲石1点、敲磨石1点である。

図75-8は石槍、同9は微細剥離剥片、同20はスクレイパーである。図76-13は石錐、14は打点側の両側縁に抉りに入った縦型の石匙である。長軸方向の側縁には微細剥離が認められる。同19は二次

柱穴 1



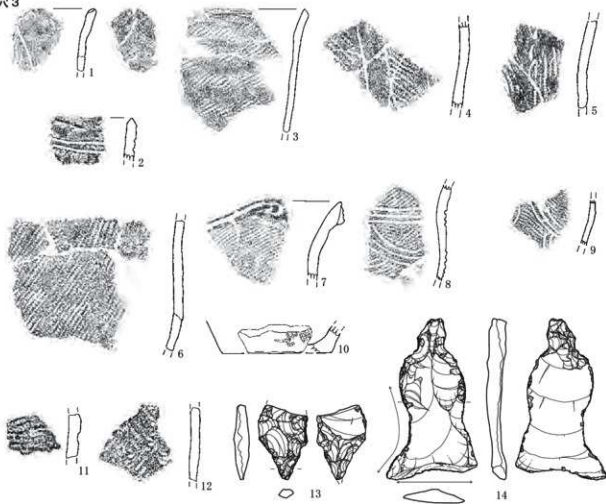
柱穴 2



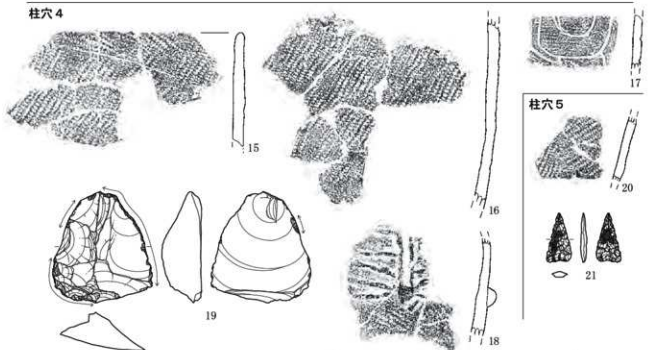
8・9・19・20 0 S=1/2 5cm 1~7・10~18 0 S=1/3 10cm

図75 SI-3106柱穴1・2出土遺物

柱穴 3



柱穴 4



柱穴 5

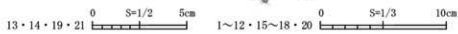
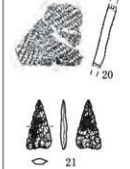
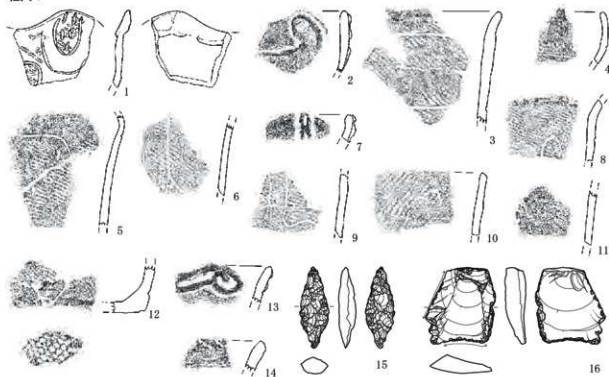


図76 SI-3106柱穴 3・4・5 出土遺物

柱穴6



柱穴7

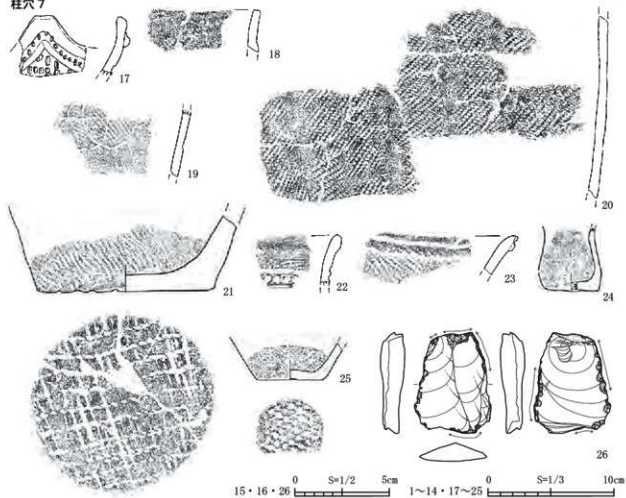
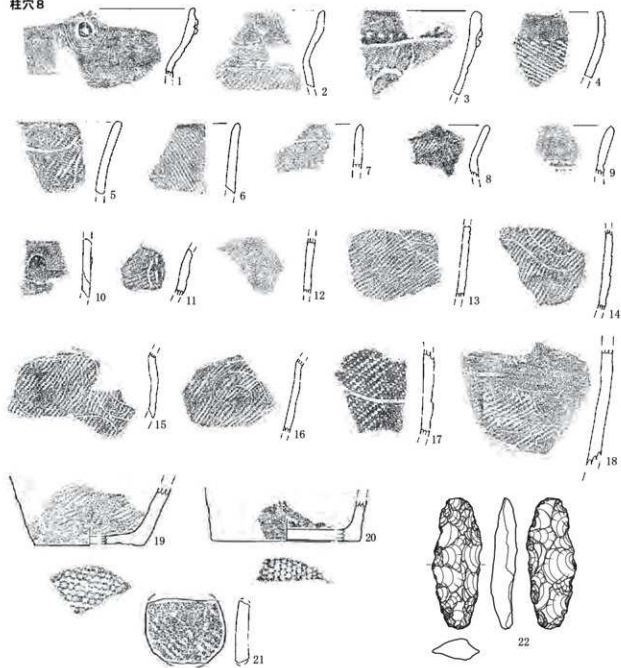
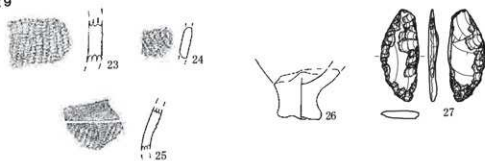


图77 SI-3106柱穴6・7出土遺物

柱穴 8



柱穴 9



21・22・26・27  $S=1/2$  5cm 1~20・23~25  $S=1/3$  10cm

図78 SI-3106柱穴8・9出土遺物

## 堆積土



図79 SI-3106堆積土出土土器・石器①



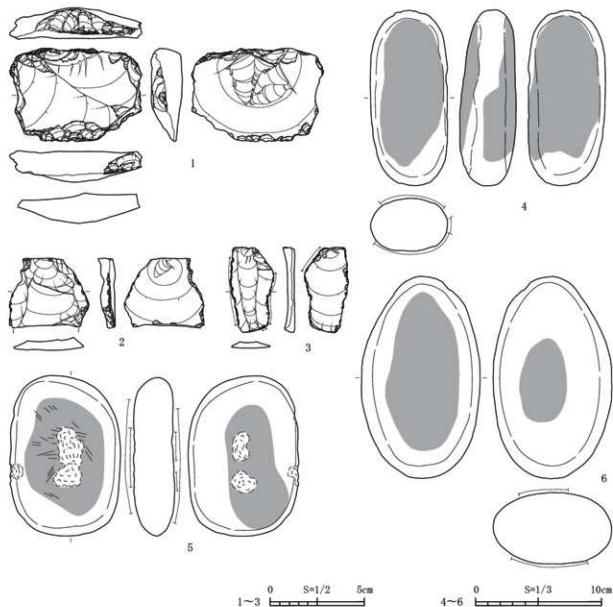


図80 SI-3106堆積土出土石器②

加工剥片で部分的に微細剥離が観察される。同21は無茎石鏃である。図77-15は有茎石鏃、16は両面加工のスクレイパーで、長軸方向とこれに直行する辺の二側縁に加工が見られ、部分的に微細剥離も観察される。図77-26はスクレイパーである。図78-22は石槍で、27は石槍に分類した。

図79-26・27はそれぞれ無茎石鏃と有茎石鏃である。28はつまみ部のある石鏃である。29・30はスクレイパーで、29は長軸方向の一側縁に片面のみ加工されている。30も片面加工のスクレイパーであるが、長軸方向に施された剥離が打点と対向する辺まで連続し、急角度の刃部が作出されている。またこれと反対側の長軸辺には微細剥離も見られる。図80-1はスクレイパーに分類したが刃部形成の不連続さにやや難を残す。横長剥片の長軸方向二側縁に不連続な加工を施している。2・3は微細剥離剥片で2は矩形剥片、3は縦長剥片を素材としている。4～6は敲磨器類で、4・6は長円礫の2面を使用した磨石である。4は部分的に3面（側面も）使用している。5は磨石と凹石の複合機能を

もつ石器である。扁平円礫の2面+側面(部分的)に敲打痕、1面に弱い磨痕が観察される。

土製品は4点出土している。図75-19、図78-21は土器片加工円盤、図77-24、図78-26はそれぞれ壺形、脚付きのミニチュア土器である。

【時期】柱穴1～9の出土遺物から、大木10式併行期以降の構築であることは確実である。加えて、後期初頭期であることがほぼ確実なSI-3101との重複状況から、構築は縄文時代中期末葉期である。

#### SI-3107 (図81) ※旧SK-2

【位置・確認】VII-N-86・87グリッドに位置し、第IV層で検出した。当初はSK(土坑)として調査を進めたが、炉跡、貼床及び硬化面が確認されたため、堅穴住居跡と判断した。

【重複】なし。

【形状・規模】東西2.3m、南北2.5mの楕円形で、床面積は3.7㎡である。

【壁・床面】壁は全体を確認し、立ち上がりの最高所は西壁で20cmである。床は全面に褐色土(第5層)を平均15cm程度貼って貼床としている。堅穴外周を除いた中央部で硬化が著しい。

【炉】中央やや東寄りで地床炉を1基検出した。規模は長軸20cm、短軸15cmの範囲で被熱しており、焼成厚は7cmである。

【柱穴・ビット】なし。

【壁周溝】なし。

【堆積土】第1～4層が黒褐色土及び褐色土を主体とする堅穴堆積土である。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土した。堅穴南側の床面から図81-1が潰れた状態で出土し、炉跡付近からは図81-6が出土した。1は、4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器で、口縁部上半に文様帯が集中する点が特徴的である。文様には、粘土紐を用いて①3本単位の貼付文→②口縁部区画文→③S字文が順に施文されている。地文には単節RL縄文が横位に施されている。図81-2・3(同一個体)は、中期後葉榎林式土器の文様構成に近似するが、横方向に施される縄文地文や胸骨文に類するモチーフなど円筒上層式期の要素も認められることから、いわゆる「中の平1式」(鈴木1998)、「榎林1式」(小保内2008)に位置づけられる。石器は、二次加工剥片が3点出土した。

【時期】出土遺物や出土状況より、縄文時代中期中葉円筒上層e式期から後葉榎林式期への移行期に帰属すると推測される。

#### SI-3108 (図82) ※旧SK-127

【位置・確認】VII-V-93グリッドに位置し、第IV層で検出した。当初はSK(土坑)として調査を進めたが、底面より炉跡を検出したため堅穴住居跡と判断した。

【重複】なし。

【形状・規模】東西1.8m、南北1.3mの楕円形で床面積は1.2㎡である。

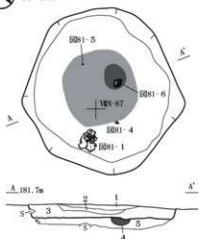
【壁・床面】壁は全体を確認し、西壁で55cm残っている。床は地山を直接床面としている。

【炉】堅穴中央やや東寄り地床炉を1基検出した。長軸52cm、短軸40cmの範囲で被熱している。

【柱穴・ビット】なし。

【壁周溝】なし。

SI-3107



SI-1037(A-A')

第1層	黒褐色土	10YR2/3	炭化物(φ4mm)稀散量、	鏝(φ2~30mm)少量
第2層	褐色土	10YR4/4	炭化物(φ3mm)稀散量、	鏝(φ6~30mm)少量
第3層	褐色土	10YR4/6	炭化物(φ3mm)稀散量、	鏝(φ2~30mm)少量
第4層	赤褐色土	5YR4/6	炭化物(φ3mm)稀散量、	鏝(φ1~20mm)少量
第5層	褐色土	10YR4/4	炭化物(φ3mm)稀散量、	鏝(φ1~50mm)少量

0 S=1/60 2m

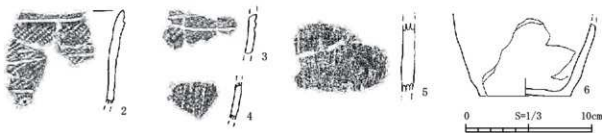
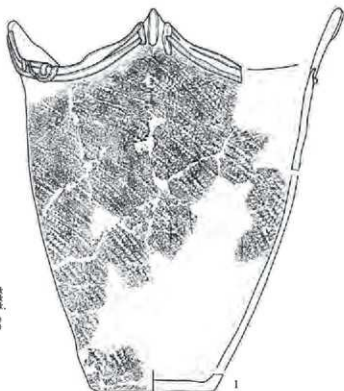


図81 SI-3107・出土土器

【堆積土】第1～3層が褐色土ないしは暗褐色土の堅穴堆積土である。

【出土遺物】縄文土器が少量出土したが、いずれも遺存状況が悪く図示したものはない。石器は出土していない。

【時期】時期の判別ができる資料に乏しく、時期は不明である。

SI-3109 (図82) ※旧SK-326

【位置・確認】VIII-84グリッドに位置し、第IV層で検出した。調査当初はSK(土坑)として調査を進めたが、底面で炉跡を検出したことから堅穴住居跡と判断した。

【重複】なし。

【形状・規模】東西3.5m、南北2.7mの楕円形で、床面積は5.2㎡である。

【壁・床面】床面はやや凹凸が見られ、北側は緩やかに上昇していく。壁立ち上がりも緩やかな地点と急斜度で立ち上がる地点とがあり一様でない。立ち上がり最高所は西壁で20cmである。床は地山を直接床面としている。

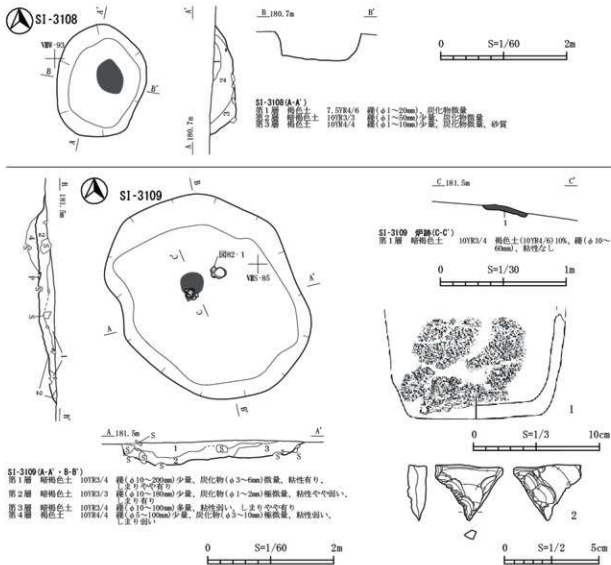


図82 SI-3108・SI-3109・出土土器・石器

【炉】ほぼ中央で地床炉を1基検出した。規模は直径35cmの円形範囲で焼成厚5cmである。

【柱穴・ビット】なし。

【壁周溝】なし。

【堆積土】第1~4層が堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土中より、少量の縄文土器、石器が出土した。縄文土器は1点を図示した。図82-1は、炉の北東側床面より出土した深鉢形土器で、底部を除いた上半部が欠失している。上半部に向かってやや膨らむ器形で、地文には単節RL縄文が斜位に施されている。明黄褐色の色調と胎土に多量の小礫を含んでいる点が特徴的であり、土器型式として縄文時代中期後葉以降に相当する可能性がある。

石器は石錐1点、二次加工刮片1点、微細刮離刮片1点が出土し、図82-2の石錐1点を図示した。

【時期】出土遺物も少なく時期を決定づける資料はないが、床面より出土した図82-1から、縄文時代中期後葉以降に帰属する可能性がある。

## 2 焼土遺構

調査区西側、VII-84、VII-83グリッドで4基検出した。SN-3101～3103は地床炉で、SN-3104は石囲炉である。検出地点は、竪穴住居跡の著しく重複する地点であり、また周囲には床面とも考えられる硬化した土層が広がる箇所もあるため、いずれも本来的には竪穴住居跡の炉跡であったものと思われる。なおいずれの遺構も、SI-3106大型建物跡を構成する主柱穴を結んだ空間内にあり、SN-3101～

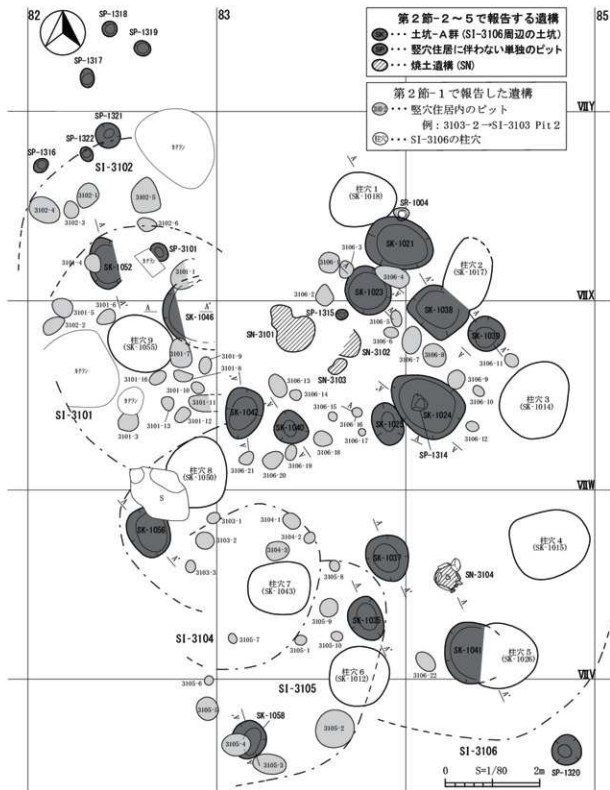


図83 焼土遺構・土坑・ピット

3103は柱穴1・2と柱穴8・9の中心、SN-3104は柱穴4と柱穴6の中央という位置関係にあるが、焼土遺構の検出面標高は柱穴のそれよりやや低い位置にあり、両遺構の関係は不明である。

#### SN-3101 (図84)

【位置・確認】VIIW-83グリッドに位置している。SN-3102・3103とは隣接し検出面標高はやや低い。

【形状・規模】平面形は瓢箪型で、本来は二箇以上の焼け面であった可能性もある。長軸は南北方向110cm、焼成厚5cm程度の範囲で被熱した地床炉である。

【出土遺物】なし。

【時期】出土遺物はなく時期は不明だが、周辺では縄文時代中期末葉期の遺物が出土している。

#### SN-3102 (図84)

【位置・確認】VIIW-83グリッドに位置している。SN-3103とは隣接し検出面標高も同じである。

【形状・規模】平面形は楕円形で、長軸60cm、短軸30cmの範囲で被熱した地床炉で、焼成厚は3cm未満である。

【出土遺物】なし。

【時期】出土遺物はなく時期は不明だが、周辺では縄文時代中期末葉期の遺物が出土している。

#### SN-3103 (図84)

【位置・確認】VIIW-83グリッドに位置している。SN-3102とは隣接し検出面標高も同じである。

【形状・規模】平面形は楕円形で、長軸40cm、短軸20cmの範囲で被熱した地床炉である。

【出土遺物】なし。

【時期】出土遺物はなく時期は不明だが、周辺では縄文時代中期末葉期の遺物が出土している。

#### SN-3104 (図84)

【位置・確認】VIIY-84グリッドに位置している。

【形状・規模】長軸15～35cm程度の長円礫を円～楕円形に配した石囲炉である。規模は南北62cm、東西53cmである。炉内は全体的に被熱しており、焼成厚5cm程度である。炉石の一部に図84-1の石皿を用いている。

【出土遺物】図84-1は凝灰岩製の石皿で、有縁脚付である。脚は高さ5～10mm、縁は幅25mm、高さ6～8mm、皿部の厚さ35～40mmに作出されている。両面で磨痕がみられるほか、機能面側でススや黒色物質の付着が見られる。

【時期】出土土器がなく時期は不明であるが、断面図B-B'において本遺構が、直接重複関係のないSI-3106柱穴5を覆う堆積土を掘り込んでいることから、SI-3106（縄文時代中期末葉期）以降であることは確実である。当該期以降に出現するとされる有縁脚付の石皿を炉石に再利用していることも調和的である。

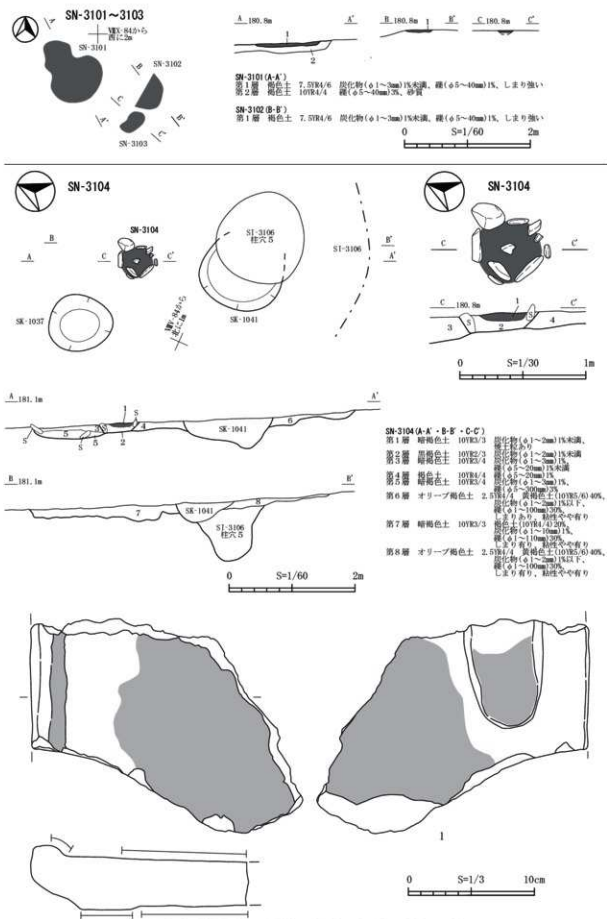


図84 SN-3101・3102・3103・3104・出土石器

### 3 土器埋設遺構

#### SR-2 (図85)

【位置・確認】調査区中央南寄り、VIII-98グリッドに位置する。

【形状・規模】長軸46cm、深さ20cmの掘方に、胴部下半を欠失した縄文土器の深鉢(図85-3)を正位に埋めている。

【堆積土】3層に分層した。第1・2層は土器内堆積土で第3層は掘方埋土である。

【出土遺物】図85-3・4が出土した。3は口縁部から胴部上半までの土器で、口径は推定27cm、残存高は28cmである。全面に縄文が施文された粗製の深鉢で、胴部中位がわずかに膨らむ器形である。土器の大きさに比して器厚は薄く、平均して6mm程度である。縄文地文は単節LRで、縦位、斜位と多方向から回転施文される。4もLR縄文が施されており、3とは同一個体の可能性がある。

【時期】出土土器の文様は地文のみであるため確実ではないが、器形、肥厚する口縁部、地文の施文方法などから、縄文時代中期後葉の可能性もある。

#### SR-1004 (図85)

【位置・確認】調査区西側、VIII-83・84グリッドに位置する。SI-3106柱穴1と西側で隣接しており、新旧関係は本遺構の方が古い。

【形状・規模】長軸32cm、短軸27cmの楕円形の掘方に、縄文土器の深鉢を正位に埋めている。

【堆積土】2層に分層した。第1層は土器内堆積土で第2層は掘方埋土である。

【出土遺物】埋設土器のほか、有茎石鏃が1点出土している。図85-2は基部が凸基となる有茎石鏃で先端部は欠損している。基部にはアスファルトが付着している。図85-1は、文様が隆帯と刺突文によって構成され、施文順序は、①隆帯による波状文、曲線文の施文→②幅3mmの角棒状工具による刺突文の充填、もしくは胴部に0段多条RL縄文の横方向施文→③隆帯上にヘラ状工具による刻み、となる。一部はLの単軸絡条体が用いられている(図85-1右側)。これらは隆帯と刺突文によるモチーフを主体としていることから、円筒上層c式に比定される。

【時期】刺突文を主体とした要素から、縄文時代中期中葉円筒上層c式期に比定される。

### 4 土坑

今報告の調査区において、土坑として調査したのは55基である。このうちVII-VIII-82~84グリッドに位置する9基(旧SK-1018、1017、1014、1015、1026、1012、1043、1050、1055)については、規模や配置、柱痕跡の存在からSI-3016大型建物跡を構成する柱穴と判断したため、本節「1 堅穴住居跡」でそれぞれ柱穴1~9として報告している(92~105頁)。このため、本項では上記の9基を除いた46基を報告の対象とする。

対象の土坑46基は、調査区中央部や北東部に位置する単体の土坑群と、SI-3106大型建物跡周辺の、遺構が密集する地点に分布する大小の土坑群に大きく分けられる。後者は検出位置やその状況からSI-3106大型建物跡やその他の堅穴住居跡を構成する施設の可能性がある。このため、以下では対象の土坑46基について、遺構密集地点においてその他の堅穴住居跡と関連する可能性のある土坑(土坑-A群)と単独の土坑(土坑-B群)とに整理して報告する。



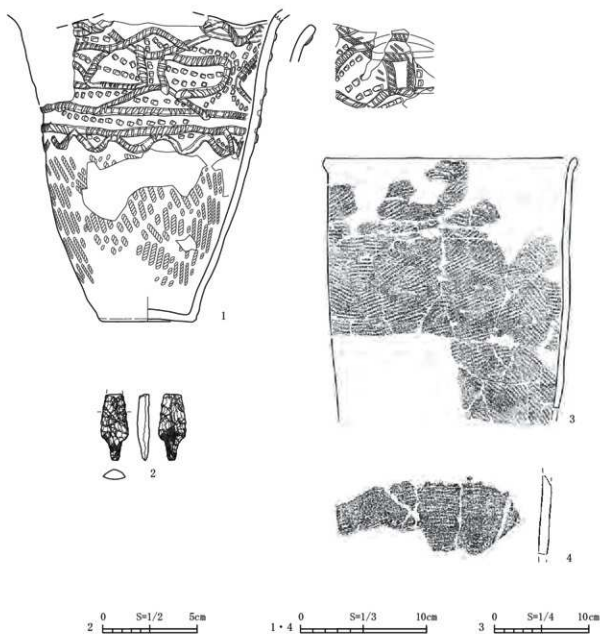
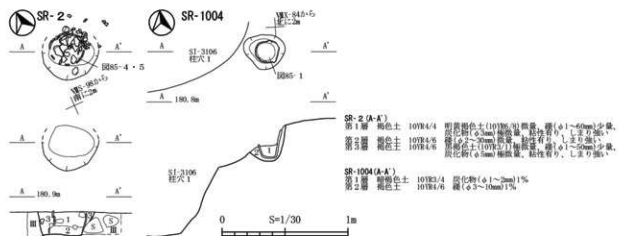


図85 土器埋設遺構・出土土器・石器

## 土坑-A群 (図83・86)

VII～VIII-82～84グリッドの、遺構が密集する地域に位置した15基で、堅穴住居跡に伴う可能性のある土坑である。図83に平面図を、図86に断面図及び出土遺物を示した。

平面形は円形から楕円形で、長軸は160～80cmとばらつきはあるが、深さは30～40cm程度の浅い皿状のものが多く、遺構の重複状況が著しく、すべての土坑において新旧関係を把握できたわけではないが、明らかにできたものを表2(114頁)に記した。

出土遺物について、土器は時期決定できるものを中心に図示しており、いずれも大木10式併行期に位置づけられる。図86-1・2はSK-1021出土土器であり、1は沈線による弧状文、2はやや肥厚する口縁部に刺突文が施されている。同3・4は、SK-1037出土土器であり、いずれも磨消縄文が用いられている。5・8はSK-1040出土遺物である。5には磨消縄文が用いられている。8は片面加工のスケレイパーで、縦長剥片の背面三側縁に加工を施している。

図86-6はSK-1023出土の有茎石鏃である。同7はSK-1056出土の有茎石鏃で、石鏃長軸の辺が弓状に反った形状をしており、今回報告する出土資料中には同様の形態のものは見られない。

## 土坑-B群 (図87～93)

いわゆる単独の土坑で31基がこれに該当する。調査区西側の段丘縁辺付近での分布はみられず、調査区中央部に散漫に分布し、北東部では堅穴住居跡と重複するものも見られる。調査区中央部の土坑は浅い皿状のものや小規模なものが多い。堆積土や出土遺物から縄文時代以降と判断されたものはないが、近世以降のピットや溝などと分布域が一致していることから、これらの時期のものを含んでいる可能性はある。

以下では、特筆される遺構としてSK-1048とSK-14の2基を記述し、その他の遺構に関しては章末の表12の遺構一覧表(144頁)に譲るものとする。

## SK-1048 (図89)

【位置・確認】調査区北東部、VIII・N-101グリッドに位置している。第IV層で検出した。

【形状・規模】遺構は第IV層から掘り込まれており、第V層の礫層も40cm程度掘り抜かれている。遺構検出面での平面形は楕円形で、底面形状は円形である。検出面での規模は長軸298cm、短軸225cm、底面の規模は、長軸160cm、短軸140cmで、深さは約80cmである。底面は平坦で壁は外側に開いている。北側には奥行70～80cm、幅30cmほどの突出部と、これを挟んだ位置にピット2基が見られる。

【堆積土】堆積土上部の図化はしていないが、遺構検出面では、直径10～40cm程度の大小の円礫が密集する。図化した堆積土下層では3層に分層できた。第2層には炭化物をやや多く含む。

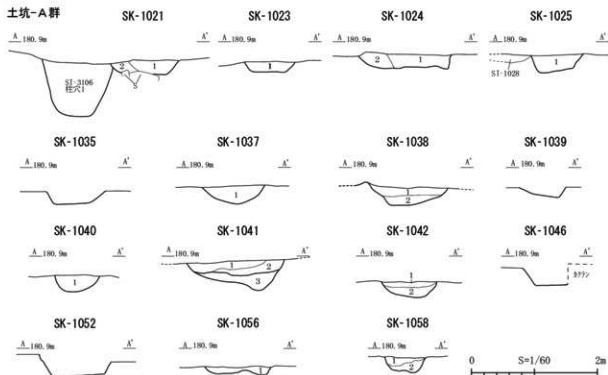
【出土遺物】出土遺物はなく時期は不明である。

## SK-14 (図87・90～93)

【位置・確認】調査区西側、VIII-86グリッドに位置し、北側は擾乱により失われている。

【形状・規模】北側は失われているため平面形は不明である。残存する規模は、東西240cm、南北112cm、深さ27cmである。底面はおおむね平坦で、壁立ち上がりは外側に向かって緩やかに開いている。

【堆積土】遺構上部は記録していないが、確認した範囲では暗褐色土の単層である。



- SK-1021(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ30~25mm)20%  
第2層 暗褐色土 10YR2/4 炭化物(φ1~4mm)1%、礫(φ5~60mm)3%
- SK-1023(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~3mm)1%、礫(φ5~50mm)1%
- SK-1024(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR2/3 炭化物(φ1~2mm)1%、礫(φ5~20mm)1%未満  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2mm)1%、礫(φ5~90mm)1%
- SK-1025(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~3mm)1%、礫(φ5~60mm)1%
- SK-1037(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ5~100mm)50%
- SK-1038(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2mm)1%、礫(φ5~150mm)1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2mm)以下1%、礫(φ20~150mm)10%

- SK-1040(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2mm)1%未満、礫(φ5~70mm)2%
- SK-1041(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1mm以下)1%、礫(φ5~60mm)5%  
第2層 暗褐色土 10YR4/6 炭化物(φ1mm以下)1%、礫(φ5~90mm)10%  
第3層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~125mm)20%
- SK-1042(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6)10%、炭化物(φ1~2mm)1%以下  
第2層 暗褐色土 礫(φ1~150mm)30%、砂質  
第3層 暗褐色土 礫(φ1~200mm)30%
- SK-1056(A-A')  
第1層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR2/2)0%、炭化物(φ1~6mm)1%以下  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2mm)1%、礫(φ5~70mm)20%  
第3層 暗褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~5mm)以下、礫(φ1~100mm)40%

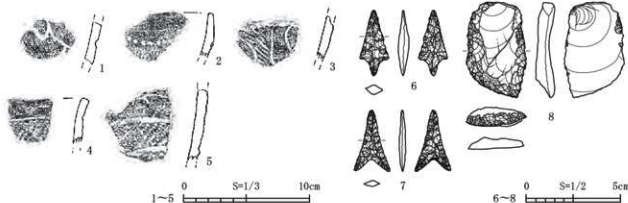
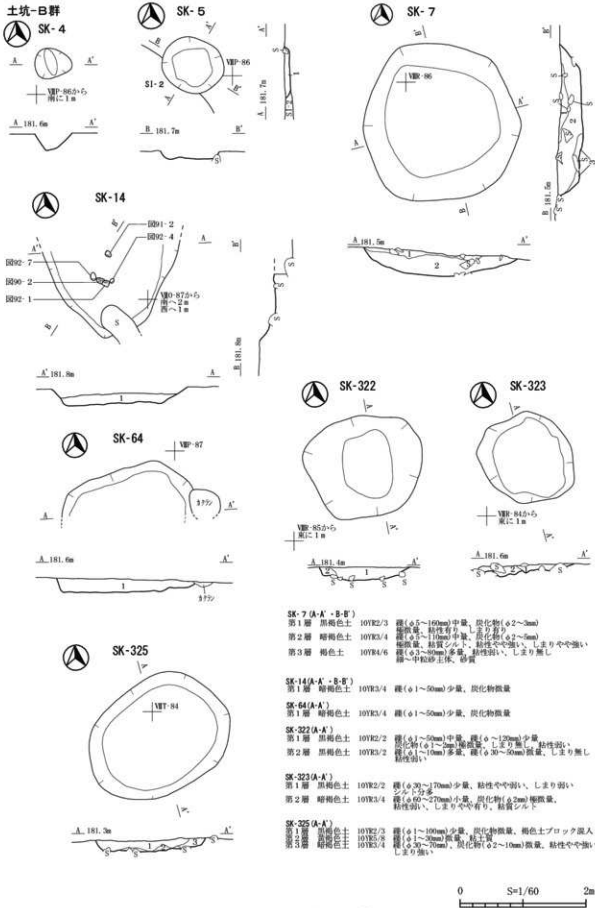


図86 土坑-A群・出土土器・石器

表2 土坑-A群と新旧関係

土坑A群との重複遺構	グリッド	重複遺構との新旧関係					
SI-3101	VIIW・X-82	SK-1046	SK-1052				
SI-3103	VIIW-83	SK-1056					
SI-3105	VIIU・V-83	SK-1035	SK-1058				
SI-3106	VIIW~X-82・83	SK-1021	SK-1023	SK-1024	SK-1025	SK-1037	
		SK-1038	SK-1039	SK-1040	SK-1041	SK-1042	

重複遺構より  
SK 新しい  
SK 古い  
SK 新旧不明



- SK-7 (A-A'・B-B')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ5~10mm)中量、炭化物(φ2~3mm)散在量、粘性有り、しまり有り  
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ5~10mm)中量、炭化物(φ2~3mm)散在量、粘質シルト、粘性やや強い、しまりやや強い  
 第3層 褐色土 10YR4/6 礫(φ3~80mm)多量、粘性強い、しまり無し  
 礫~中粒砂上層、砂質
- SK-14 (A-A'・B-B')**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~50mm)少量、炭化物微量
- SK-64 (A-A')**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~50mm)少量、炭化物微量
- SK-322 (A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~50mm)中量、礫(φ~120mm)少量、炭化物(φ1~2mm)微量、しまり無し、粘性弱い  
 第2層 暗褐色土 10YR3/2 礫(φ1~10mm)多量、礫(φ30~50mm)散在、しまり無し、粘性弱い
- SK-323 (A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ30~170mm)少量、粘性やや弱い、しまり弱い  
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ60~270mm)少量、炭化物(φ2mm)微量、粘質シルト、粘性弱い、しまりやや有り、粘質シルト
- SK-325 (A-A')**  
 第1層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ1~100mm)少量、炭化物微量、褐色土ブロック散在  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~30mm)散在、粘質シルト  
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ30~70mm)、炭化物(φ2~10mm)散在、粘性やや強い、しまり強い

図87 土坑-B群①

土坑-B群

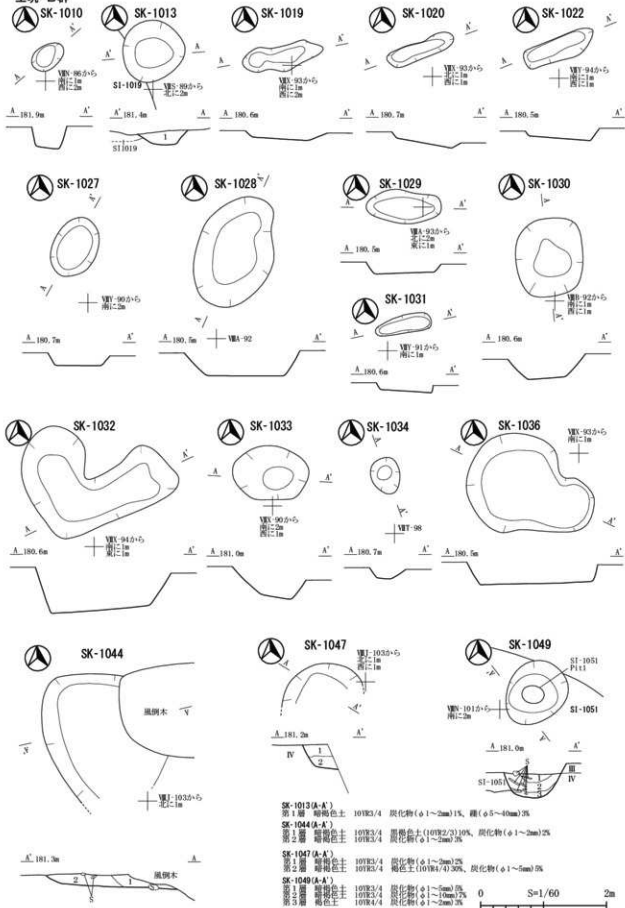
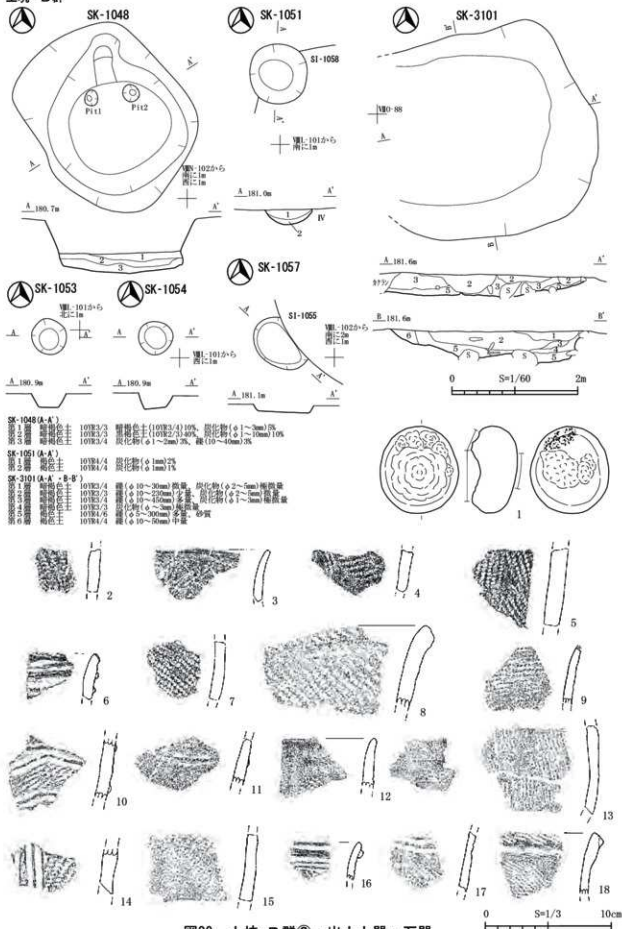


図88 土坑-B群②

## 土坑-B群



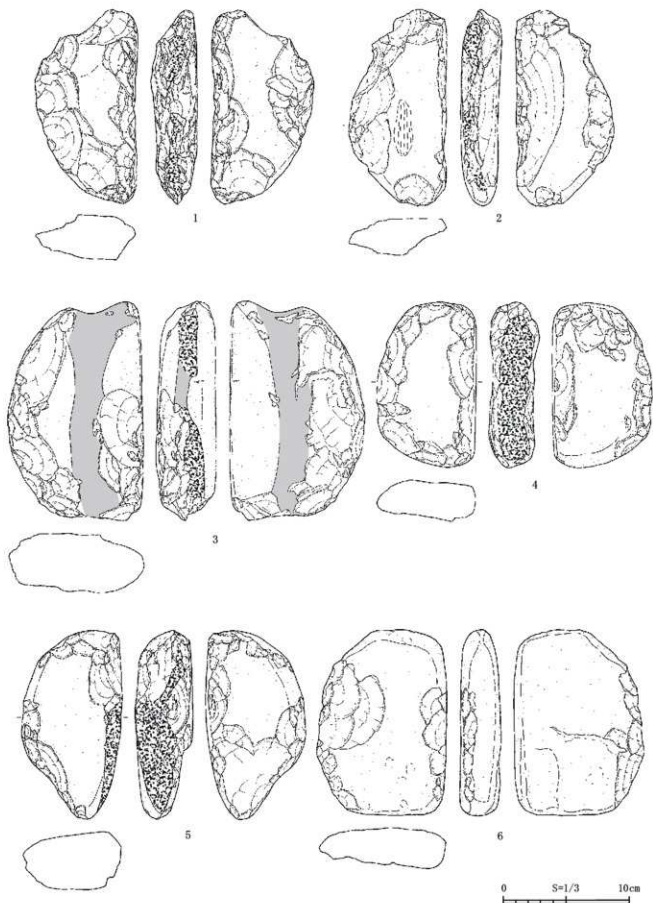


図90 SK-14出土石器①

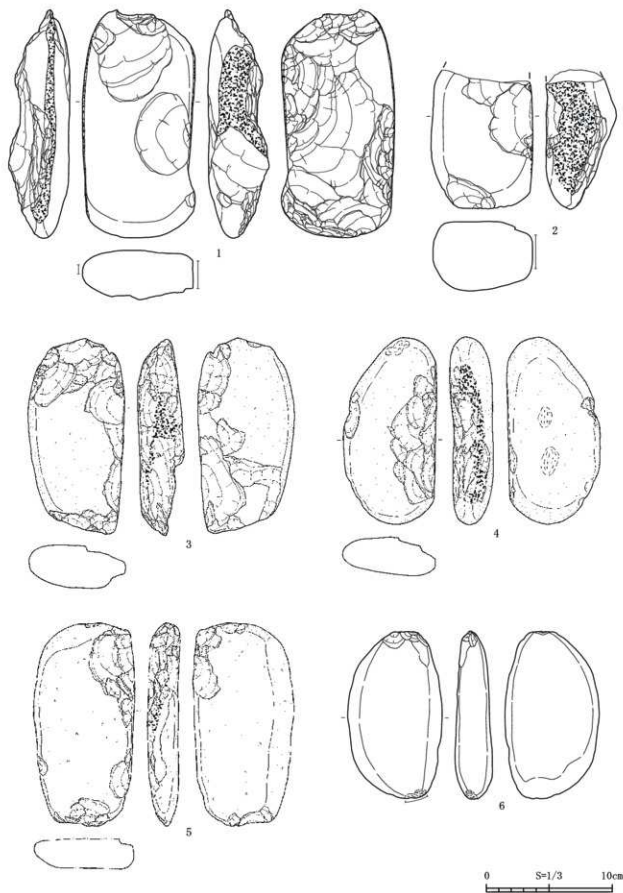


図91 SK-14出土石器②



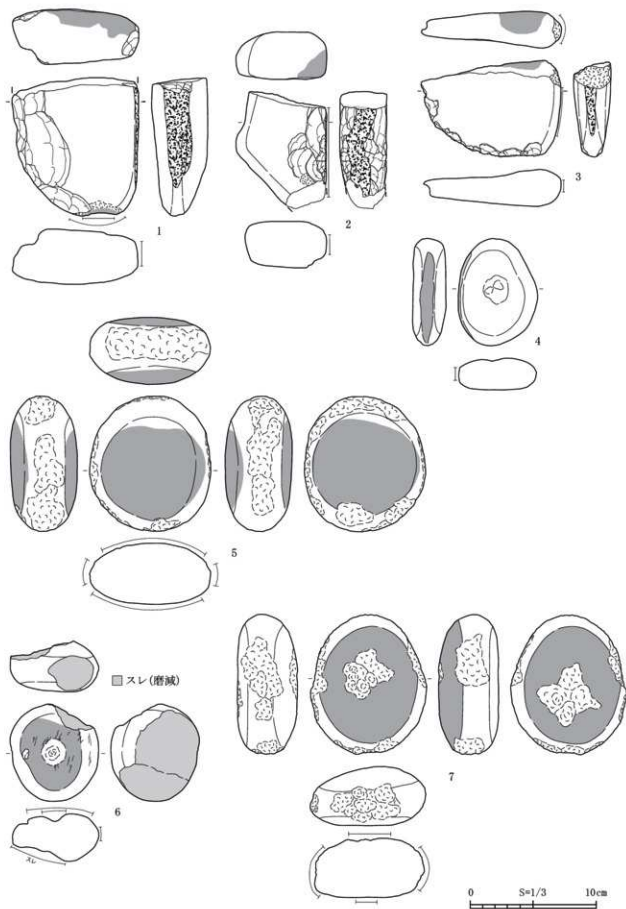


図92 SK-14出土石器③

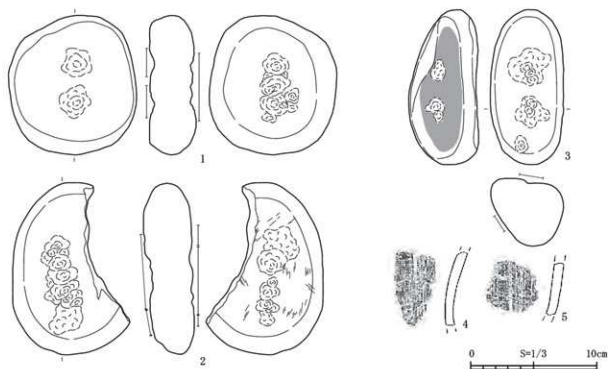


図93 SK-14出土土器・石器④

【出土遺物】2点の縄文土器片及び多量の石器が出土した。縄文土器2点は、確認面と堆積土中から出土しており、すべて図示した。図93-4・5は、同一個体の胴部片である。4には外傾の接合痕が認められ、くびれが明瞭な器形である。いずれも器面には櫛歯状の条線が縦位に施され、胎土には粒径2～3mmの白色粒子が多量に含まれている。

石器は半円状扁平打製石器20点、磨石3点、凹石1点が出土しており、この内半円状扁平打製石器15点、磨石・敲石7点を図示した(図90～93)。半円状扁平打製石器は、完形・半完形資料11点、欠損資料9点が出土した。完形・半完形資料の11点のうち図90-6、図91-6の2点については、機能面となるべき礫側面に使用の痕跡が見られず、未製品ないし未使用品と思われる。欠損資料9点のうち3点は欠損部に磨りが見られ(図92-1～3)、92-3には敲打痕も見られる。

礫の両側縁が機能面となる資料は3点出土しており、このうち1点(図91-1)を図示した。図90-3は礫を全周する浅い溝状の平滑面が見られ、使用方法に関係する製作痕跡と考えられる。このほか礫表面に敲打痕の見られる資料が2点(図90-2、91-4)出土した。両資料ともに特定の範囲にざらつきのある荒れが見られる。

敲磨器類は9点出土し、磨石2点、凹石2点、敲磨器A類4点、同D類1点を確認した。磨石のうち1点(図92-4)は礫の側面を機能面とするものである。92-6、93-2は欠けた礫を素材とした石器で、92-6は欠け口全体にスレが見られ、93-2は礫の欠け口に沿って凹みが形成されている。

【時期】櫛歯状の条線地文をもつ土器は縄文時代中期後葉最花式期に相当するが、わずかな出土量と出土状況を考慮すれば混入の可能性もあり、明確な時期の決定は困難である。

## 5 ビット

ビットは19基検出している。調査区西側、VIII～VIIY-82～84グリッドの遺構集中区付近で検出したビット9基（SP-1314～1322）については図83、その他10基については図94に掲載した。

SP-3101は当初、土器埋設遺構として調査を進めていたが、土器の出土状況や遺存状況からビットとして番号を振り替えて報告している。図94-1は、円筒上層c式期の小型の深鉢で、長軸45cm、短軸30cm、深さ18cmのビット内にほぼ正位の状態で出土した。しかし、土器の大半が既に失われていること、ビット底面よりも浮いて出土していることなどを考慮し、土器埋設遺構とは異なるものと判断した。

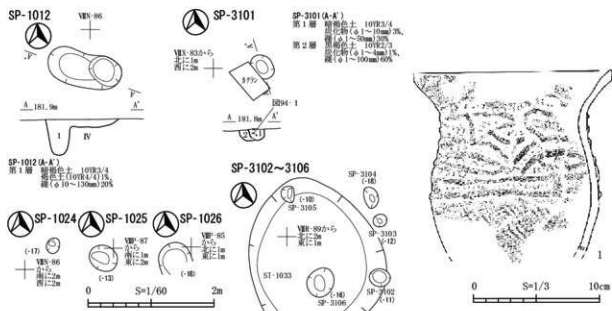


図94 SP-1012・1024～1026・3101～3106・出土土器

## 6 出土遺物

遺物は、縄文時代前期末葉から後期中葉の縄文土器、同時期の石器、土製品、石製品が、段ボール80箱分出土した。本項ではこれらの遺物のうち、遺構外出土物について図95～105に示し、遺構内外の出土遺物全体の概要（傾向と特徴）を型式や器種ごとに記述していくこととする。

### (1) 土器

今調査の結果、総点数22,000点以上、総重量281kg程の土器片が出土し、その内訳は遺構内出土土器が19000点以上、総量205kg、第1層および遺物包含層である第2層・第3層を出土層準とする土器が3000点以上、総量76kgである。

本調査区内より出土した縄文土器は、前期末葉の円筒下層d式から後期中葉とみられる土器まで幅広く認められた。このうち、主体となるのは遺構を伴う中期中葉から末葉である。調査区中央や北東側では、2011年度の調査成果と同様に中期中葉から中期後葉の土器が出土したが、調査区南西側では大型建物跡であるSI-3106をはじめとして中期末葉期の遺構・遺物が多数出土し、中央や北東側とは異なる様相が認められた。出土土器の分類については、本調査区で得られた資料から第I群、第II群・・・と順に呼称することを検討していたが、未調査区域を残していることから、最終的な出土物の

構成が判明するまでは分類記号は使用せず、土器型式ごとに諸特徴を述べる。

#### 前期末葉円筒下層 d 式～中期初頭上層 a 式土器 (図23-12、図95-1～5・10)

縄文時代前期末葉円筒下層 d 2式から中期初頭上層 a 式の土器片が、わずかに確認されている。ただし、大半が表面採集によって得た資料であることから、あくまでも参考資料である。

図95-1～4は前期末葉円筒下層 d 式に比定される。1は、単軸絡条体の側面圧痕と同一工具による端部圧痕を交互に施文している。4は、口縁部文様帯に多軸絡条体とみられる側面圧痕が施されている。同2・3は、口唇部に縄文施文、口縁部には単軸絡条体による側面圧痕がみられる。10は、山形の突起と把手が付されていたとみられる口縁部片で、3本に束ねた1段の縄(L・L・L)が押圧されている。1・4・10は胎土に繊維を含んでいる。

#### 中期前葉円筒上層 b 式土器 (図14-1・2、図15-2、図95-8・9・11・12・17)

円筒上層 b 式土器は、縄文原体を馬蹄形に押圧する手法が流行する段階である。本調査区内からの出土は比較的少なく、遺構に伴うものは調査区中央部のSI-8のみである。当住居跡古段階の床面に、図14-1と図15-2は正位に、図14-2は逆位に埋設されていた。いずれも底部が欠失しており、埋設時には打ち欠かれていた可能性がある。1・2は共に、幅の狭い口縁部文様帯や直線的に開く胴部からなるが、地文や胴部文様、突起部分の貫通孔の有無などその文様構成には差異がみられる。図95-8は、遺構外から出土した大型深鉢の口縁部片である。口縁部から突き出た突起部分に大柄な橋状把手と菱形に隆帯が付されている。隆帯で区画された口縁部内には、数条に束ねた無節Rの縄文原体を押圧した文様と、2本に束ねた同一原体を馬蹄形に押圧した文様が施されている。口唇部と隆帯上にも2本に束ねた同一原体を等間隔に押圧している。図95-11・12の口唇部には、単軸絡条体による押圧文が施されている。

#### 中期中葉円筒上層 c 式土器 (図14-3・4、図22-1・2、図23-8～11など)

円筒上層 c 式土器は、通常口縁部文様帯に棒状や竹管状の工具で刺突文を充填する段階である。文様を構成する隆帯上には、単軸絡条体の押圧かヘラ状工具による刻みが施されていることが多く、素文は相対的に少ない。SI-8・SI-1016・SI-1060などc式期に比定される遺構が複数確認され、それに伴って土器の出土量も増加している。b式よりも口縁部文様帯の幅が広くなり、胴部半ば近くまで広がるもの(図85-1など)も認められる。胴部地文は、羽状に展開する結束第1種のRL・LR縄文が施される例が大半である。SI-8やSI-1060の土器を観察すると、刺突文と隆帯の装飾には複数のパターンがあり、その組み合わせによって装飾効果が大きく異なっている。SI-8・SI-1016出土の土器(図14-3・4、図22-1・2)では、単軸絡条体の押圧、もしくは刻みが施された隆帯が主体的であるが、SI-1060出土の図64-1・2では素文の粘土紐が主体であり、c式の中でも多様性が認められる。刺突文についても、施文具の種類や先端の加工の仕方によって複数の形状が認められ、角形(図95-6・7・14・16)、爪形(図95-15・18・19、図96-5・6)、円形(図95-13)を基調とするものなどがある。遺構外から出土した図95-16は、素文の隆帯とキャタピラ状の刺突文が特徴であり、内面には盲孔と同質とみられる横長の沈線が描かれている。

#### 中期中葉円筒上層 d 式土器 (図11-1、図21-2～4、図30-1～4、図32-1～3、図38-10・11、図39-1、図96-1、図97-4・5・8・10など)

円筒上層 d 式土器は、c式で主流であった刺突文が消失し、隆帯のみによって主要文様が描かれる

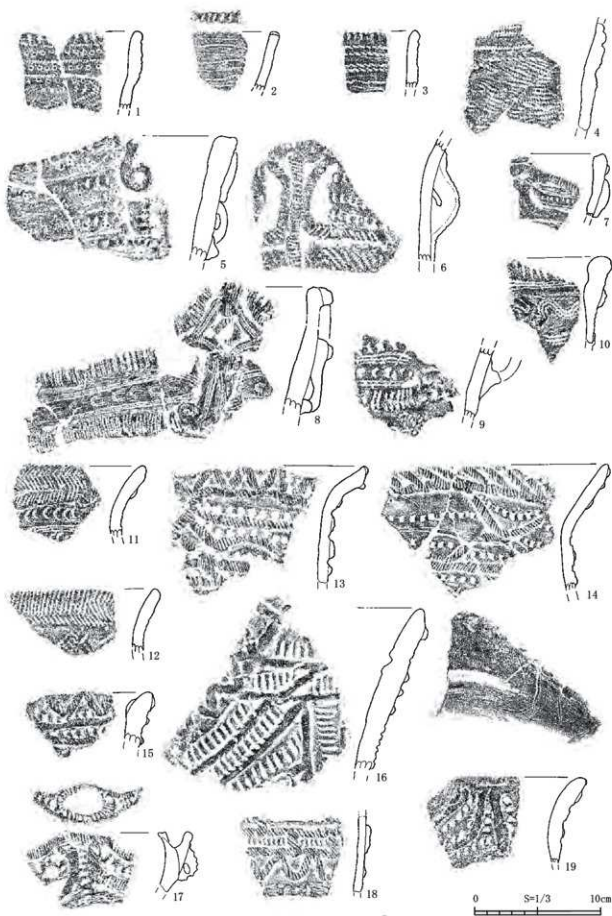


図95 遺構外出土器①

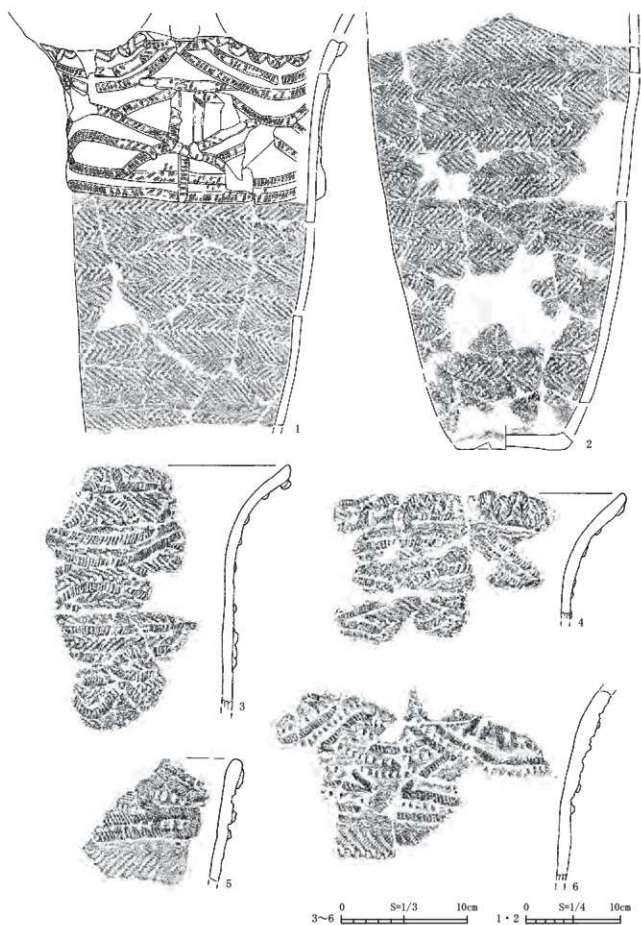


図96 遺構外出土土器②

点を主な特徴とする。文様帯幅はさらに広がる傾向がある。本調査区では出土量が多く、遺構も多数検出されている。d式に帰属する遺構はSI-7・SI-1019・SI-1020・SI-1034・SI-1036である。このうちSI-1036は、床面から完形に近い土器がまとまって出土しており、一括性が高い資料といえる。図32-1は、今調査で出土した土器の中で最大であり、口径38cm、器高51.4cmを測る。4単位の台形突起には貫通孔が開けられているが、孔の部分にY字状の橋状把手が付けられているため、外面からは見えない。口縁部文様帯には、隆帯による弧線文や菱形文が交差するように貼り付けられ、それぞれの重なり効果で複雑なパターンが表現されている。おおよその施文順序と文様の割付方法は観察から推測できるため、図33上段にそれを模式化した。これを見れば、4単位の台形突起を割り付けの基点としながら、各種文様が規則的に施されていることが分かる。さらに頭部区画文に付された短隆帯は、文様帯下端の波状文を均等に割り付けていくための目印といえる。このことは、短隆帯の“\”と“/”の間にほぼ3単位ずつ波状文が施されていることから確認される。

このほか、図96-1・3・4、図97-2は、隆帯上に単軸絡条体の側面圧痕が施されている。一方で、図11-1(SI-7)、図21-2(SI-1014)、図30-1・2(SI-1034)、図97-8(遺構外)は、いずれも器面を4つに区分する縦方向の隆帯と隆帯間をつなぐモチーフで構成されており、上述の図32-1や同2などとは文様の割り付け方法が大きく異なっている。

**中期中葉円筒上層e式土器**(図21-5~9、図38-12・13、図39-2、図40-1・2、図97-6・7・9・11~13、図98-1~6・8~13など)

円筒上層e式土器は、d式の主要要素であった隆帯の使用頻度が減少し、代わって沈線が主体的に用いられる段階である。e式に帰属する遺構は少ないが、土器の出土量は比較的が多い。サイズが小さい土器の割合が増加するほか、口縁部に付される突起文様にも多様性がみられるようになる。

SI-1049では、床面上より当該期の小型の土器が複数個体出土した。図39-2は器高13.8cm、推定口径12.3cmの深鉢で、床面上に倒置されていた。二股の山形突起が付されているが、その下部に本来装飾されていた円形貼付文は剥落して痕跡のみ確認できる。突起下に、沈線による懸垂文が施され、その脇には横方向の沈線や弧線文が施文されている。深鉢としては非常に小型であるが、煮沸に使用されており、外面には内容物が吹きこぼれた痕跡が明瞭に残されている。図40-1も、二股の山形突起が付された口径12.6cm、器高13.5cmの深鉢である。

突起の形状には、図40-1と同様に二股の山形状のもの(図98-6)や、幅広で二股の山形突起をもつもの(同4・5)、先鋭で三角形状のもの(図97-9)、台形のもの(図98-8・9)、五角形状のもの(図98-1・2)、先端がM字状のもの(同3)などがみられる。いずれの突起も厚みがなく、概して平板である点が特徴である。図97-5・6・12・13には、沈線を主体としたモチーフがなく、縄文地文のみで構成されている。

**中期中葉円筒上層e式と中期後葉榎林式の中間的要素をもつ土器群**(図81-1~3)

いわゆる「中の平1式」(鈴木1998)、近年では「榎林1式」(小保内2008)と呼ばれる一群で、円筒上層e式と榎林式双方の特徴をもつものがこれに含まれる。本調査区内からも確認できた範囲で3点出土している。図81-1は、SI-3107の床面から出土した口径26cm、器高34.5cmの深鉢形土器である。4単位の尖鋭の波状口縁をもち、胴部がやや膨らむ器形である。文様は、①波頂部に3単位の貼付文→②2本の粘土紐で口縁部を区画→③区画内にS字文、の順に施されている。地文には、単節RL縄

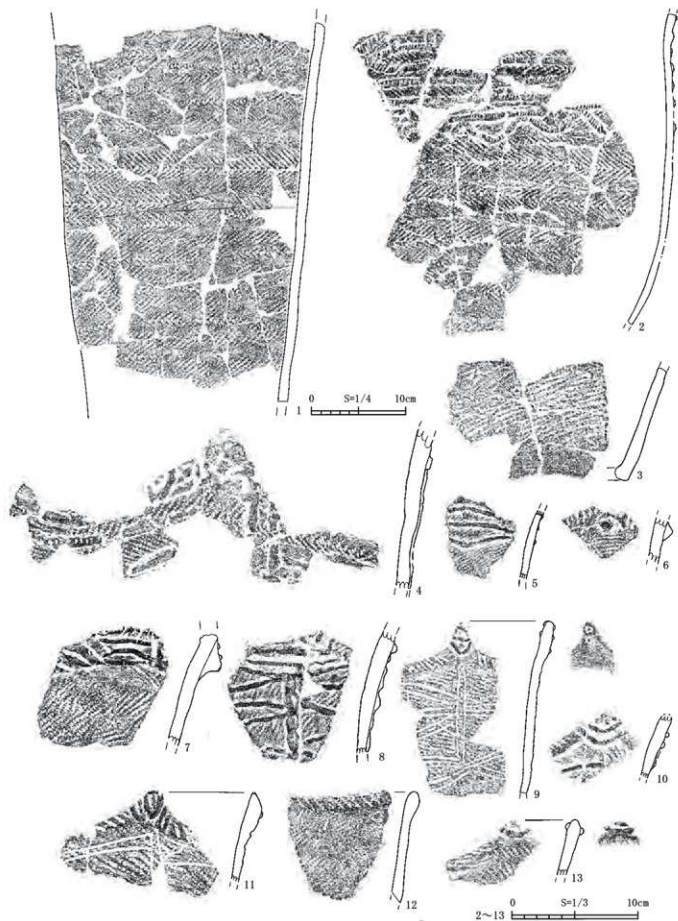


図97 遺構外出土土器③



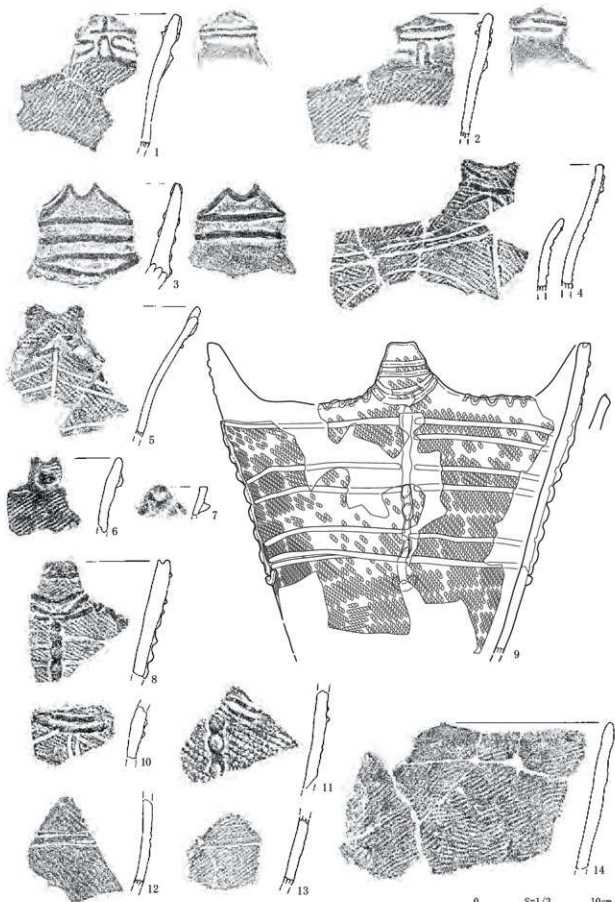


図98 遺構外出土土器④

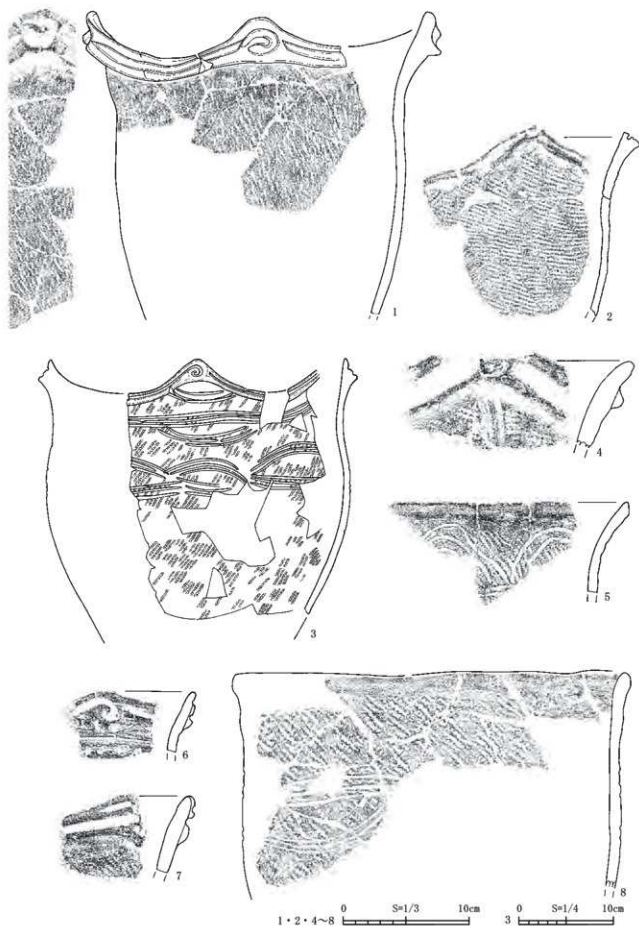


図99 遺構外出土器⑤

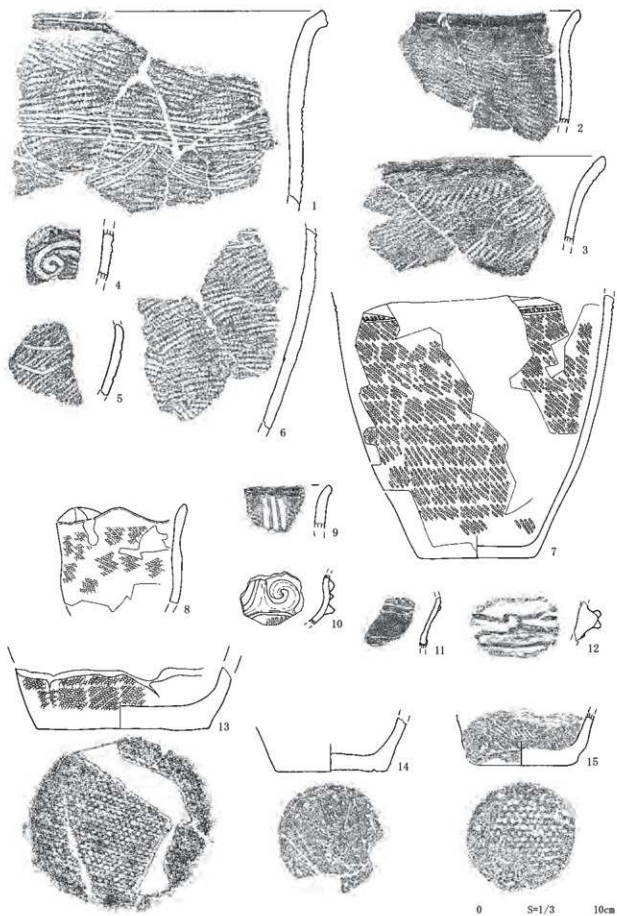


图100 遺構外出土土器⑥

文が横位、または斜位に施文される。波頂部に付される貼付文、および横位に展開する縄文地文は円筒上層式の要素であるが、口縁部文様帯を区画する隆帯とS字文、胴部が膨らむ器形は外来の大木式土器系統の要素であり、円筒上層式から椀林式へと移行していく様相を示している。同遺構の床下から出土した図81-2・3も同様の資料といえ、口唇部に引かれる沈線や文様構成は椀林式の要素であるが、モチーフが胸骨文に類する点と縄文を横位に施文する点は円筒上層式の要素である。

**中期後葉椀林式土器** (図7-16、図17-9~12、図25-1、図40-5~11、図42-1~6、図43-1~3、図44-1~13、図46-1~3、図56-4、図99-1~8、図100-1~9など)

外来の大木式土器の影響下に成立した土器群であり、文様は沈線による渦巻文や弧線文を基調とし、胴部が膨らむ器形に特徴がある。今調査で検出した当該期の遺構は、明確なものでSI-17・SI-1050・SI-1051・SI-1055・SI-1057・1059の6軒である。中期末葉期よりも検出遺構数は少ないが、土器の出土総量はもともと多い。このうちSI-1050は良好な出土状態を示している。SI-1050から出土した土器は、堆積土中に大量に投棄されたような状況で出土しており、一括性の高い資料群といえる。図44-1~4のように、隆帯と凹線による口縁部文様をもつ土器がみられるが、多くは口縁部文様をもたない土器で構成されている(図42-1~5、図43-1・2、図44-6)。図42-5、図43-1・2は、口縁部を除くほぼ全面に縄文が施された粗製土器とみられ、1・2は器高が推定で40cmを上回る大型個体である。他の遺構においても、SI-1051の図46-1、SI-1059の図62-1など口縁部が無文で胴部に文様が集約される土器が多く確認される。

遺構外からは図99-1~8、図100-1~9などが出土している。図99-3は、推定口径31cm、器高30cm以上の深鉢形で、隆帯と蕨手状の沈線による口縁部文様と胴部上半に施される連続弧線文からなる。成形や施文も丁寧に行われており、椀林式の中でも古相を示すものといえる。

**中期後葉最花式土器** (図17-5~7、図66-14~16、図72-11、図93-4・5)

中期中葉以降では、当該土器群の出土量ももともと少なく、確実に当該期に帰属する遺構もみられないが、同定できる土器は調査区南西側より出土する傾向がある。ここでは、他時期の遺構内より出土した9点を取り上げた。図66-14~16は、SI-3101から出土している。14は、口縁部が波状を呈し、緩やかに外反する深鉢形土器の一部で、口唇部は折返されることによって肥厚している。施文は、①0段多条のR L縄文→②沈線による懸垂文・U字状文→③鋭角の刺突文、の順に施される。15は別個体であるが、14と同様の地文と文様が施文されている。16は、竹管状工具による逆U字状の沈線が施された後、器面に対して直角に施された刺突文が横方向にめぐる。図72-11は、SI-3105より出土した壺形土器の一部とみられ、施文は、①R L縄文→②頭部に2本の平行する沈線→③沈線間を充填する刺突文、の順に施される。このほか、図17-5~7、図93-4・5は、櫛歯のような工具で縦位の条線が施されることを特徴としており、最花式土器に伴う粗製土器の一種と考えられる。

**中期後葉大木8b式土器** (図62-4、図100-10~12)

数量は多くないが、在地の土器群とは異なる系統の大木8b式土器が出土している。図100-10・12は、口縁部の一部で、10は隆帯による渦巻文、12は厚みのある隆帯で口縁部が区画されている。12の口縁部上には蕨手状の沈線が施されている。11は、無文帯となる頭部の一部とみられ、口縁部は隆帯によって区画されている。器壁の薄さや胎土の違いからいずれも搬入品と考えられる。

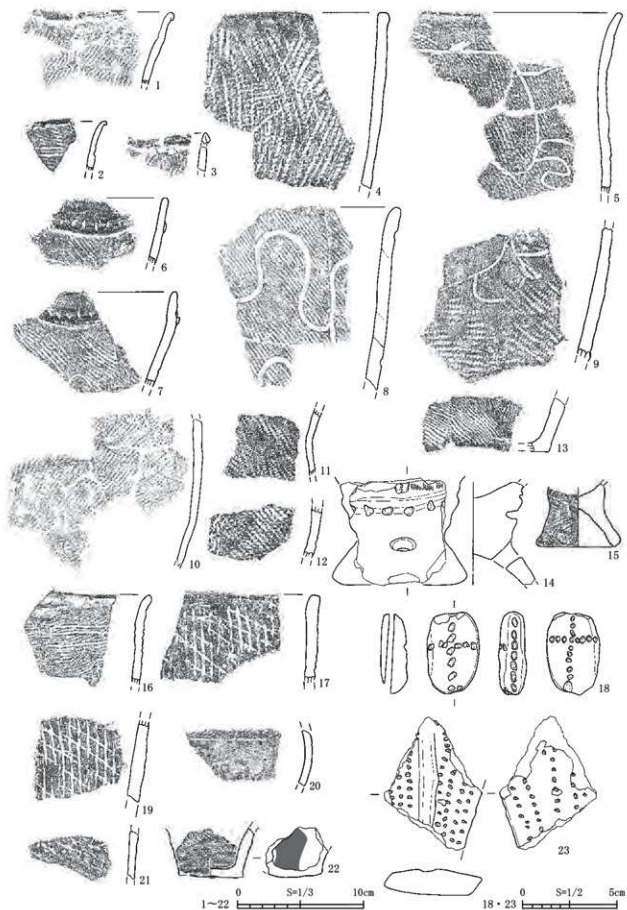


图101 遺構外出土土器⑦・土製品

### 中期末葉大木10式併行土器 (図7-11、図34-1、図35-1・2、図70-18・19、図77-1・17など)

今調査区内で当該期に帰属する遺構は総計で16軒検出された。その大半が調査区西側に集中しており、遺物もこれに伴って多数出土している。土器は、縄文地に沈線によるU字・S字といったアルファベット文をモチーフに、磨消縄文を採用するタイプと採用しないタイプが複雑に組み合わせる様相を呈しており、当遺跡でも同様の状況が認められた。非磨消縄文には、図7-11や図72-1・9などがある。11は、胴部中位がややくびれて下位が膨らむ器形であり、鱗状の突起が貼付されている。磨消縄文を主体としたものについては図34-1がある。1は、U字とJ字を組み合わせたような文様で、U字間には二列に併行する刺突文が施されている。刺突文が施される資料は多く、SI-1045出土の図35-1・2、SI-3104出土の図70-18・19、大型建物跡であるSI-3106出土の図77-1・17などがあり、それぞれ文様構成にヴァリエーションがある。このほか、単輪絡条体によって格子目模様を表現する一群(図70-1~4・図101-17・19)や、鱗状の隆帯が食い違い状に貼り付けられている土器(図66-8)などが出土している。これらは、後期初頭まで下る可能性も考えられる。

### 後期初頭に相当する土器群 (図66-1・4・6・7)

当該期に比定される土器は少量であるが、確実に遺構に伴うものが調査区西側のSI-3101の床面より2個体出土しており、これまでに本遺跡で検出した遺構の中でもっとも新しい時期に当たる。これについては別章を参照のこと(第2章・第5章)。このほか、後期初頭の可能性がある6・7が同遺構より出土している。6は、粘土紐が横方向に貼付された後、ボタン状の貼付文・刺突文が施されている。7も同様に貼付文と刺突文が施されている。

### 後期前葉十腰内I式土器 (図7-17、図35-10)

調査区西側のSI-1とSI-1045の堆積土中より、当該期に帰属するとみられる土器片が2点出土している。図7-17は、無文地に沈線による文様が描かれている。施文順序は3本の沈線を横位に施文→2本の沈線を縦位に施文、となる。図35-10も同様に、無文地に2本の平行する沈線が「く」の字状に施されている。

### 後期中葉に相当する土器群 (図101-20)

調査区西端のVIII-81グリッドより、後期中葉とみられる土器片が1点出土している。沈線が横方向に施された後、単節LR縄文が横位に施文される。内面には漆状の赤黒色の塗膜が認められた。器形は鉢形を呈していたとみられる。

### 型式を特定できない土器群 (図101-14~16、21・22)

ここでは、小片、もしくは情報が断片的であるために型式の特定ができないものや、上述の型式とは異なる系統とみられる土器等を一括して取り上げる。図101-14は、脚付の深鉢か鉢形土器とみられ、腰部には刺突文がめぐり、脚部には推定4単位の貫通孔が開けられている。胎土等から中期後葉に位置づけられる可能性がある。同15は、底径が6.6cmの小型の脚付土器であり、全面無文である。同16は、調査区西側のVIII-81グリッドから出土した口縁部が波状の深鉢形土器片で、クランク状の2本の沈線が交差している点が特徴的である。同21は、調査区西側のVIII-81グリッドから出土した胴部片で、一見、網代の圧痕のようにみえるが、おそらくは2種の縄による単輪絡条体を用いられている。同22は、底径が5cmの小型土器で、外面は無文である。内面には、側面から底面にかけて黒色で光沢のある膜状の物質が付着しており、漆の可能性もある。

## (2) 石器

石器は、剥片石器18,370g(定型石器類2,650g、不定型石器類15,720g)、石核5,860g、剥片61,460g、礫石器134,200g、珩質頁岩の原石1,510gが出土した。総重量にして221,400gである。本項ではこれらのうち遺構外出土石器について図示し、遺構内外を含めた石器全体の傾向や特徴を記す。

**石 鏃** (図102-1～16) 尖頭形状をした小型の両面調整石器。便宜的に長軸50mm未満のものとしたが、これを超えるものでも形状や基部の作出、剥離の様相などが同様のものについては本器種に含めている。出土数量は88点で、表3には基部形態別の数量を示した。有茎石鏃42点、無茎石鏃34点、欠損により基部不明のもの12点である。大きさは有茎が23～85mmで平均39mm、無茎が15～49mmで平均27mmである。石材は赤鉄鉱1点(図15-5)、黒曜石1点(図102-13)ではほかはすべて珩質頁岩である。アスファルトの付着は21点(約25%)で確認できた。図102-13は黒曜石製の無茎石鏃で、今回報告分では最小(15mm)である。

表3 石鏃の分類と数量

	基部形状	数量	アスファルト
有茎	平基	7	3
	凸基	35	10
	尖基	10	1
無茎	凹基	2	0
	平基	2	1
	凹基	19	7
	基部不明	12	0
	総計	87	22

**石 槍** (図102-17～23) 尖頭形状をした大型の両面調整石器で、便宜的に長軸50cmを超えるものを石槍とした。25点出土し、19点掲載した。形状は長軸：短軸比が2：1程度の本葉状(図102-20・21等)、3：1程度の柳葉状(図46-5、図57-4、図102-22等)があり、大きさ50mm前後の小型の石槍(図102-17・19等)がやや多く見られるのも特徴である。

**石 筥** (図102-24～26、図103-1・2) 両面調整された石器のうち、一端が直線状(直刃)あるいは弧状(円刃)となる石器で、全体的な形状としては短冊形、楕形がある。12点出土し10点掲載した。**両面調整石器** 両面調整された石器のうち、前述の石槍か石筥のいずれかに分類されるが、欠損のため分類不能のもので、37点出土している。大きさ、剥離の様相から多くは小型の石槍と思われる。

**石 錐** (図103-3～7) 剥片の一端に断面形が菱形となる先端部が作出される石器で、錐部への加工の程度により以下のように分類した。それぞれの資料数は以下のとおりである。

剥片端部の両側を加工して先端部を作出するもの 14点(図103-3～5等)

鋭利な剥片端部の片側、一部を加工し先端部を作出するもの 9点(図103-6・7等)

出土数量は23点で、19点掲載した。端部両側を加工するもののうち、図37-1は剥片全体に加工を施し棒形状となるもので、今回報告資料中では同様のものではなく本資料1点のみである。

**石 匙** 素材剥片の一端につまみ部の作出される石器で、つまみ部に対し縦長形状のもの(縦型)と横長形状のもの(横型)がある。8点出土し、縦型が6点、横型が2点である。うち比較的遺存状況の良い7点を図示した。つまみ部作出の程度が弱くても、限定的な調整の位置から抉り部作出が読み取れるもの(図57-11や図104-8)も、本器種に含めている。

**スクレイパー** (図103-8～12、図104-1～7)

剥片の縁辺に連続的な剥離により刃部を作出する石器で、剥離面及び剥離部位により以下のように分類した。

I類 両面加工 a一側縁 b二側縁 cその他

II類 背面加工 a一側縁 b二側縁 cその他

III類 腹面加工 a一側縁 b二側縁 cその他

表4 スクレイパーの分類と数量

I	両面加工	削器	一側縁	二側縁	その他	計
			16	20	7	
II	背面加工	掃器	1	0	4	5
		削器	41	11	0	52
III	腹面加工	掃器	3	0	12	15
		削器	18	6	5	29
		掃器	1	1	1	3
		計	80	38	29	147

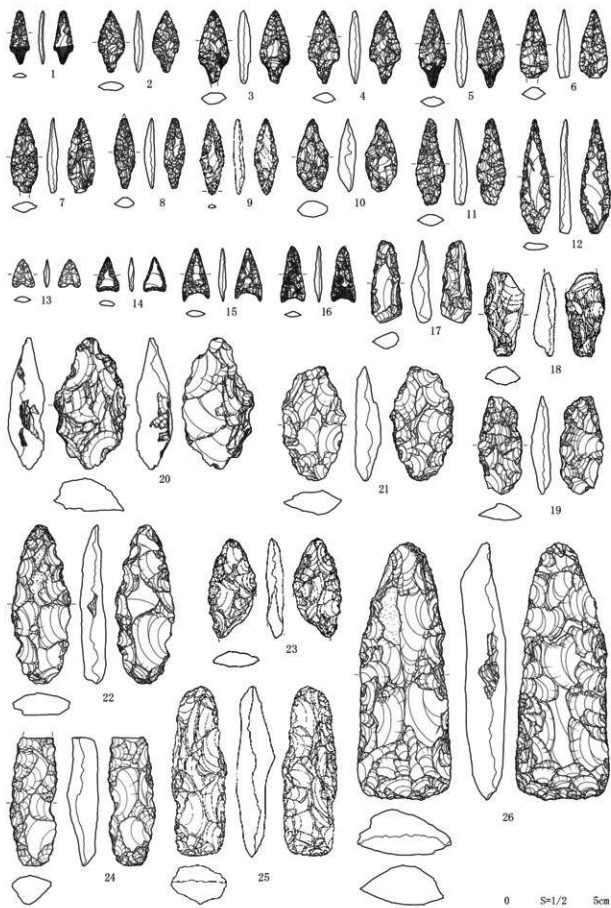


図102 遺構外出土石器①



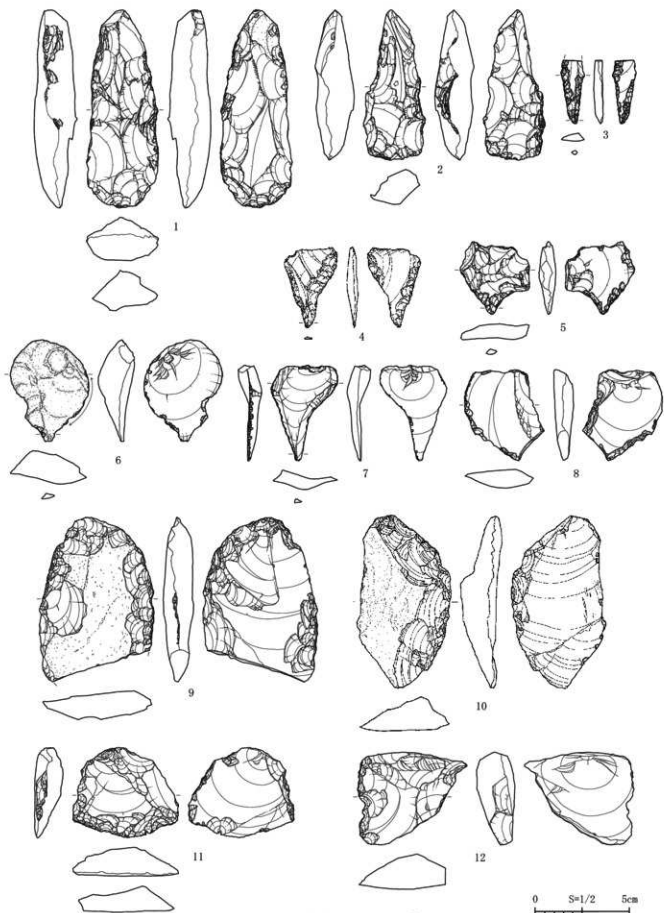


图103 遺構外出土石器②

「cその他」としたものは隣り合う2辺を連続して剥離調整するもので、結果として弧状の刃部を形成するものが多い。全出土数量は147点で、使用石材はいずれも珪質頁岩である。加工面による内訳は、Ⅰ類48点、Ⅱ類67点、Ⅲ類32点で、加工部位別では、a-80点、b-38点、c-29点である。加工部位と素材剥片の形状との相関は見出しがたいが、素材辺との相関を見ると、a・bでは厚みのない素材辺が選択されるのに対し、cは厚みのある素材辺が選択されている。なお表4では、スクレイパーのうち刃部が急角度に作られているものを搔器とし、それ以外を削器として扱った。Ⅱ類cとしたものに、搔器に分類できるものが多く含まれていることが理解される。

**二次加工剥片** 剥片の一部に加工が施された石器で、定型石器の未製品、欠損品のほか、器種の判断出来ない定型石器の破片を含む。408点出土した。石材は黒曜石を1点含むほかはいずれも珪質頁岩である。

**微細剥離剥片** 側縁部におよそ1mm未満の微小な剥離が認められる剥片で、刃器としての利用がほぼ確実なものから、偶発的な剥離のものまでを含んでいる。226点出土し、表5に素材剥片の形状別に微細剥離の観察位置を示した。

表5 素材剥片別の微細剥離痕跡

形状	微細剥離の観察される辺			
	一側縁	二側縁	三側縁	
縦長剥片	74	34	2	110
矩形剥片	50	23	11	84
不定形剥片	20	10	2	32
	144	67	15	226

素材剥片の形状は、縦長剥片110点、矩形剥片84点、これらのいずれにも属さない不定形剥片32点が見られる。いずれの形状においても、比較的大型の剥片、一定程度の厚みのある剥片は高い頻度で微細剥離が認められ、刃器としての利用が想定できる。一方で長軸20mm未満の小型のものや厚さ5mm程度の薄片、形状を言い表すことが困難な不定形剥片の歪んだ辺にもしばしば微細剥離が認められる。刃器として利用されたと想定されるものうち、二側縁以上に微細剥離が観察されるものを中心に、遺構内外合わせて18点掲載した。

**異形石器** (図104-11・12) 2点出土した。11・12は両面加工で「く」「へ」字が作出されている。

**剥片** 二次加工がなく、微細剥離も見られない剥片・破片で61,460g出土した。両極打撃痕のある剥片を少量(全体の1%未満)確認し、小型の黒曜石剥片(図105-11)が1点含まれている。

**石核** 素材剥片を作出後の残核で、ネガ面のみで構成されているもの。38点出土した。いずれも珪質頁岩で礫風化面の残る残核が32点認められる。残核の大きさは、5cm未満29点、10cm未満9点、15cm未満1点という構成である。また風化面の残存状況から素材礫の大きさがうかがえる資料が6点あり、5cm未満1点、10cm未満4点、15cm未満1点となる。以上から石材は多くの場合、比較的小型の転石を採取したものと思われる。なお珪質頁岩の転石は岩木川のほか第V層中にも含まれている。

**原石** SI-8新段階では床面から塊状の珪質頁岩(20×15×10cm、1,510g)が出土している。

**敲磨器類** 主に礫を素材とした石器のうち、使用痕の種類および素材礫の大きさから他と分類される一群で、以下の3種の使用痕が観察されかつこの使用痕が手に保持した状態で残された想定されるもの。使用痕については以下のように整理し、この組み合わせからなる7器種を本類の対象とした。

**磨痕** 礫表面に対し水平方向の運動の想定される使用痕で、器面が平滑になるもの(磨痕)、器表面に面や稜が形成されざらつきや荒れなどが見られるもの。また線状痕、擦痕を含む。

**凹み** 礫表面に対し水平方向の運動の想定される使用痕のうち、礫表面の1箇所ないしは一定の範囲が集中して凹んだもの。

**敲打痕** 礫表面に対し垂直方向の運動が想定される使用痕のうち、礫表面があばた状になるもの。

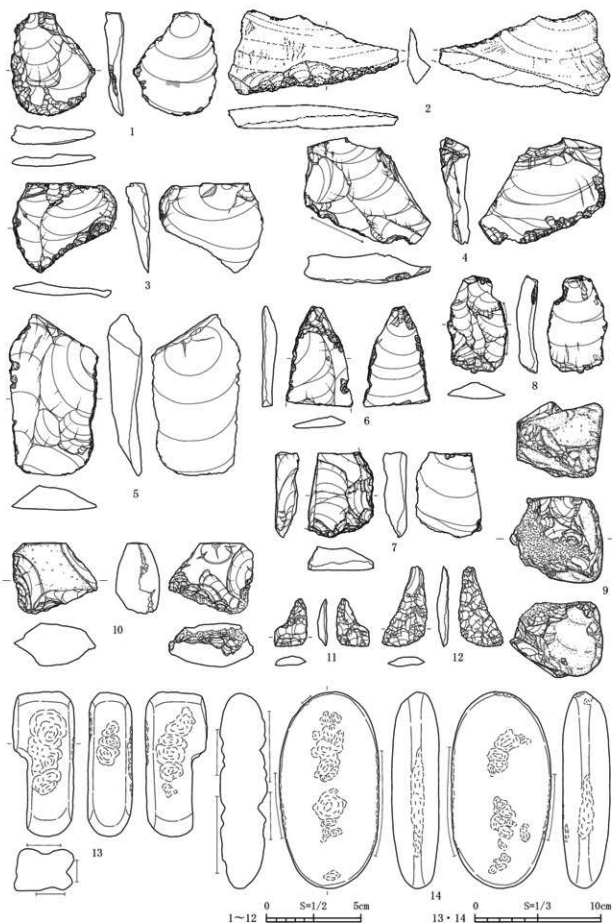


图104 遺構外出土石器③

上記の使用痕のうち、磨痕のみの石器を磨石、凹みのみの石器を凹石、また敲打痕のみの石器を敲石とした。またひとつの石器の中で上記使用痕の二種類以上が混在し、複合機能が想定される資料を敲磨器とし、A類(磨-凹石)、B類(磨-敲石)、C類(凹-敲石)D類(磨-凹-敲石)と細分した。上記を整理すると敲磨器類7器種は表6のようになる。

表6 敲磨器類の分類

機能	名称	使用痕			出土 点数	掲載資料								
		磨痕	凹み	敲打										
単独	磨石	●			14	34-5	63-4	71-1	80-4	80-6				
	凹石		●		28	30-7	34-3	36-10	45-3	45-4	93-1	93-2	104-13	
	敲石			●	4									
複合器	磨-凹 A類	●	●		11	36-5	104-9	104-10						
	磨-敲 B類	●		●	16	34-4	47-2	92-6	93-3	105-1				
	凹-敲 C類		●	●	6	67-17	67-18	67-19	89-1	92-5				
	磨-凹-敲 D類	●	●	●	2	104-14								
					2	92-7								

**磨石** 14点出土し、5点掲載した。素材礫別では円～楕円礫11点、扁平円1点、棒状礫1点、片岩1点が見られ、もっとも多く選択されるのは650～850g(平均740g)の円礫である。使用部位は1面使用7点、2面使用7点、1面使用では側面のみが1点、端部のみが2点である。

**凹石** 28点出土し、8点掲載した。使用部位は1面使用が4点、2面使用が19点、3面(以上)使用が5点である。2面使用19点の素材礫は扁平のもの、厚みのあるものがみられ、それぞれに棒状(扁平棒状礫4、長円礫2)と円形状(扁平円礫9、円～楕円礫4)のものがみられる。凹み位置と礫形状にはある程度の相関が見られ、長軸、短軸の別のある礫は凹みが長軸方向に複数並び、時に連結し、円礫や方形礫など長さや幅が等しい礫は凹みが1点に集中する。

1面使用の素材礫の形状は、長円、扁平円、楕円、三角柱状と様ではない。また3面使用の素材礫の形状は、不整形礫のみで円礫や楕円礫はなく、機能に合わせた素材礫の選択が行われている。

図45-3・図93-2の2点は凹みの位置より、割れた礫を素材としているものと思われる。

**敲石** 15点出土した。礫素材のもの(a類)が4点、珩質頁岩の石核や二次加工剥片の一部に敲打痕がある石器(b類)が11点出土した(図104-9・10)。9は石核に、10は二次加工剥片の一部に敲打痕がある資料である。

表7 敲磨器類の素材礫別の使用面数

磨石	扁平		厚みあり	片岩								
	棒状	円	長円円～楕									
1面		1	14	1	16							
2面												
3面												

凹石	扁平		厚みあり	≠凹				
	棒状	円	長円円～楕					
1面	1	1	1	1	4			
2面	4	9	2	4	19			
3面				5	5			

敲石	扁平		厚みあり	≠凹				
	a類	円	長円円～楕					
1面	1	1	1	1	4			
2面								
3面								

**敲磨器A類** 磨石と凹石の両機能が複合した石器で16点出土し、掲載したのは5点である。磨痕、凹みともに使用面数は1～3面のものがあり、使用痕の面数の組み合わせで6種類を確認した(表8)。異なる機能(使用痕)が同一面に形成されるものと、使用痕が部位により分かれているものがある。前者には使用痕どうしの新旧関係が明瞭に見られるものもあり、転用や再利用なども想定できるが、後者は磨痕を伴う行為と凹みを伴う行為が連続していたことを示すものである。図105-1は扁平礫の2面を凹石として利用し、この片側面ににぞらついた磨痕が見られる。

**敲磨器B類** 磨石と敲石の両機能が複合した石器で、6点出土し、5点掲載した。このうちSI-1038

では3点がまとまって出土している。図89-1は、敲打成形により凹み部を作出しており、本類に含めるのは不適当かもしれないが、小型の円礫を素材として各所(3面以上)の敲打痕と端部にざらついた荒れ面が観察される資料である。

**敲磨器C類** 凹石と敲石の両機能が複合した石器で、2点出土し、1点掲載した。図104-14は扁平礫の2面を凹石として利用し、この両側面を敲打使用している。

**敲磨器D類** 磨石と凹石、敲石の機能が複合した石器で、2点出土し、1点掲載した。図92-7は2面が凹み、片面に弱い磨痕、両側面に敲打痕が見られる。

出土数量26点の敲磨器のうち、A類が16点(62%)を占め、磨痕と凹みを形成する行為が連続する機能を想定できる。なお敲磨器類の使用石材は表9に示したとおりである。

**半円状扁平打製石器** 扁平礫を素材とし礫周囲に加工を施した石器で、礫側面を主な機能面としたもの。23点出土したうち20点がSK-14で出土しており、121頁で詳述している。破損資料は10点あり、欠損部に磨痕が見られる3点を図92に掲載している。全体のうかがえる資料13点のうち、全面を加工したものは7点、刃部と側面のもの2点、刃部と背部、刃部のみ、側部のみ各1点である。また、未成品ないし未使用品は2点(図90-6・91-6)出土している(表10)。

**石冠** 1点出土した。図45-5は北海道式石冠で、榎林式期の住居の堆積土で出土している。

**石錘** 2点出土し、いずれも掲載した(図49-19、図105-6)。ともに打ち欠き石錘である。

**台石** 6点出土し、いずれも掲載した。1面使用のもの2点、2面使用のもの3点のほか、図71-3は両面に細かい擦痕、片側1面の一部に磨痕が観察される。図71-2は破砕後炉石へ転用されている。

**石皿** 6点出土し、いずれも掲載した。1面使用のもの5点、2面使用のもの1点である。有脚の石皿は1点出土している(図84-1)。図71-4は機能面に黒色物質が付着している。図105-3~5は、自然の窪みを利用した、もしくは自然の窪みに一部加工を加えて利用した石器で、敲石とした凹みとは性状が明瞭に異なる。3は中央があばた状になり、端部にはざらついた磨痕が見られる。4は深い窪みの中に顕著な磨痕が、また5は自然の窪みに長軸方向の擦痕が見られる。

**磨痕のある炉石** 顕著な痕跡ではないため図示していないが、SI-1、SI-2、SI-3101等の石囲炉で、全体や部分的に磨られている(手ずれや摩擦か)炉石を確認した。SI-2の炉石1は、設置した状況での炉石上面のみに磨痕が見られ、同面が台石のような作業面として機能していた可能性がある。

表8 敲磨器A類の使用面数 16点

使用痕	面数	凹み		
		1面	2面	3面
磨痕	1面	3	2	0
	2面	3	5	1
	3面	2	0	0
部位/痕跡		掲載番号		
同部位に異なる痕跡		34-4	67-18	80-5
		92-6	93-3	105-1
別部位に異なる痕跡		67-17	67-19	
		92-5	104-14	

表9 敲磨器類の使用石材

石材	磨石	凹石	敲石		C類	D類	計		
			A類	B類					
	a	b	磨回	磨回	回数	回数	min		
凝灰岩	5	19	3	8	4	2	2	43	
緑色凝灰岩	4	5	1	4	1			15	
凝灰質砂岩	1			1				2	
砂岩	3							3	
流紋岩				2	1			3	
安山岩		4		1				5	
ひん岩	1							1	
珪質頁岩	1		11					12	
								83	
		14	28	4	11	16	6	2	2

表10 半円状扁平打製石器の分類と数量

- a 完形・半完形資料 13点  
 b 破損資料 10点  
 c 未製品・未使用品 2点

	加工部位			資料			計	
	刃部	側部	背部	(掲載図版番号)				
1	●	●	●	36-9	90-1	90-2	90-3	8
2	●	●		90-4	90-5	91-1	105-2	2
3	●		●	90-6				1
4	●			91-4				1
5		●		91-6				1

13

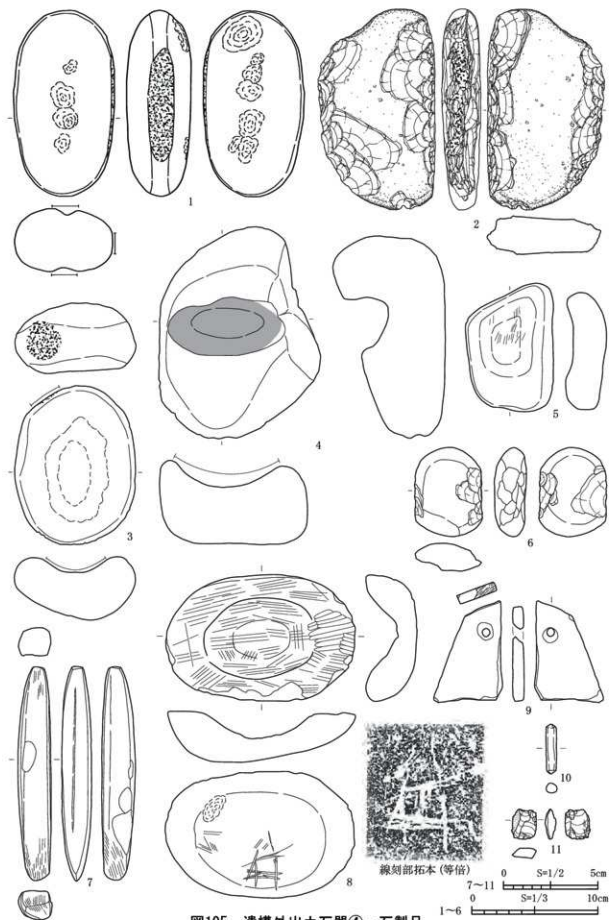


図105 遺構外出土石器④・石製品

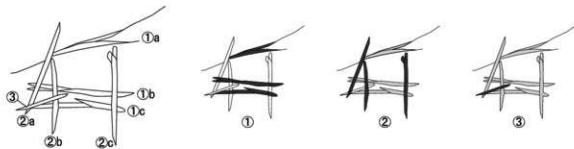
**磨製石斧** 10点(遺構内6点、遺構外1点、掲載外1点)出土し、2点は小片のため非掲載である。石材は緑色凝灰岩・緑色岩が8点、片岩が2点である。小型の磨製石斧は2点(図58-5、図72-19)で、図105-7は刃部幅17mmに対して長さ113mmと細長い。側面には擦切痕跡が見られる。

(3) 土製品

本調査区内で出土した土製品は、ミニチュア土器3点、土偶3点、土器片加工円盤4点、用途不明土製品1点である。ミニチュア土器(図77-24、図78-26、図67-7)は、全て調査区南西側の遺構内から出土している。24・26は共にSI-3106の柱穴から検出され、それぞれ口のすばまる壺(24)、脚付(26)の形状をしている。土器との共存関係から時期は中期末葉とみられる。7は、SI-3101内の後期初頭の土器の直下から潰れた状態で出土している(第5章総括に詳述)。土偶(図36-1、図67-8、図101-23)はいずれも中期末葉に相当し、調査区南西側で遺構内より2点、遺構外より1点出土した。8は、頭部から剥落した顔面部分で、鼻孔や口の表現は当該期の他資料に比べてより具象的といえる。1・23は腕部や下半身が欠落した胴部片である。色調・胎土共よく類似しており、外面が浅黄橙色(10YR8/3~8/4)、内部が黒褐色(10YR3/1)を呈している。これは、鉄の酸化状態の差が主要因で生じるとされるいわゆる「サンドイッチ構造」(大沢・二宮1983)の状態を示している。土器片加工円盤は、孔のあるもの(図16-4)と、ないもの(図46-4、図75-19、図78-21)が認められ、縁辺を全面に研磨しているもの(46-4)、部分的に研磨しているもの(16-4・19・21)などがある。図101-18は、遺構外出土の用途不明土製品である。平たい楕円形を呈しており、長軸は4.4cmである。長軸には貫通孔があり、おそらくは芯棒に粘土を巻き付けて成形した際の痕跡と推測される。全面に刺突文がめぐり、正面・裏面では十字状に施されている。

(4) 石製品

**線刻のある石製品**(図105-8、図版62) 半割した楕円礫の中央部を削り抜いた形状で、凹み部及びその周辺部には主に長軸方向の擦痕が無数に観察される。線刻は原礫面である裏面の一方に寄った位置に見られ、横方向3本、これと直行する縦方向2本、斜め方向1本の刻線(幅1mm未満、深さ1~1.5mm程度)で構成されている。刻線同士の交点の観察により、新旧関係(書き順)は下図①→②→③、a~cは順不同)のように理解される。



**その他の石製品**(図105-9・10) 図105-9は穿孔のある凝灰岩の石製品で両側穿孔である。側面は一部で成形を思わせる擦痕が見られるが、これを除けば明瞭な加工は見られない。図105-10はカルセドニー製の棒状石製品で、両端部は多角錐状の求心的な面取りが見られる。

表11 遺構一覧表

## 竪穴住居跡(S1)

遺構名	グリッド	規模			施設				時期						備考				
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	床面積 (㎡)	伊跡 地石土	ピット	柱穴 埋溝	壁溝 土器	土 坑	円形土器	四角土器	瓦	灰土		後 大 10 期			
SI-1 新	VM-P-Q-85-86	3.8	3.3	24	9.3	-	2	-	-	-	●	-	-	-	●	石囲炉2基、貼床のみ			
SI-1 旧		3.3	3.1	-	6.3	▲	-	-	-	-	-	-	-	-	●	貼床のみ			
SI-2	VM-O-84-85 VM-P-85	4.1	-	43	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	●	炉形態「□」			
SI-5	VM-U-V-91	3.5	3.0	53	6.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●			
SI-7	VM-V-95	2.9	2.7	-	6.2	-	-	●	0	無柱	-	-	-	-	-	●	貼床のみ		
SI-8 新	VM-V-X-90-91	5.7	5.2	40	23.8	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	埋設土器3基		
SI-8 旧		5.1	5.0	-	20.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●		
SI-9	VM-V-W-96-97	5.4	5.1	38	17.8	-	-	●	7	4本	-	-	-	-	-	●	貼床のみ		
SI-17	VM-I-102-103	3.5	3.4	39	-	▲	-	-	-	0	無柱	-	-	-	●	-			
SI-19	VM-I-101	1.8	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▲	土器埋設石囲炉、貼床のみ		
SI-20	VM-U-W-89-90	3.1	3.0	-	7.4	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	貼床のみ		
SI-1013	VM-M-89	2.9	2.5	-	5.6	▲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	貼床のみ	
SI-1014	VM-K-86-87	3.8	2.4	35	-	▲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▲	▲		
SI-1016	VM-T-V-87-88	6.6	5.0	24	21.7	●	●	8	4本	-	-	-	-	-	-	●	-		
SI-1017	VM-L-91 VM-M-90-91	2.6	2.0	20	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	貼床のみ	
SI-1019	VM-S-88-89	3.3	1.9	-	7.2	-	●	1	-	-	-	-	-	-	-	-	●	付属施設、貼床のみ	
SI-1020	VM-U-V-89	2.6	2.5	-	4.9	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	貼床のみ	
SI-1031	VM-K-L-83	1.9	1.6	-	-	-	●	0	無柱	-	-	-	-	-	-	-	▲	▲	
SI-1033	VM-R-89	2.6	2.1	26	2.7	-	●	0	無柱	-	-	-	-	-	-	-	-	●	
SI-1034	VM-V-98	2.8	2.7	30	4.8	-	●	0	無柱	-	-	-	-	-	-	-	-	●	
SI-1035	VM-A-B-90-91	3.1	2.1	22	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▲	▲	
SI-1036	VM-X-Y-90-91	3.8	3.2	80	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	
SI-1039	VM-M-84-85 VM-N-83-85	-	-	-	-	-	▲	●	12	-	-	-	-	-	-	-	-	●	土器埋設石囲炉か、貼床のみ
SI-1045	VM-T-82-83	4.0	3.3	22	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	
SI-1048	VM-J-K-82-83	6.6	6.2	45	26.7	●	●	10	7本	-	-	-	-	-	-	-	-	●	地床炉+石囲炉2基
SI-1049	VM-J-K-101-102	4.3	3.7	48	8.1	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	2
SI-1050	VM-L-101-102	3.8	3.5	39	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1051	VM-M-100-101	5.5	4.4	59	12.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1052	VM-U-V-81-82	5.9	-	42	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1053	VM-U-K-100-101	4.0	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1054	VM-U-X-82-83	6.9	6.2	41	26.6	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1055	VM-L-101-102	5.7	4.0	37	14.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1057	VM-J-K-100-101	8.1	5.8	33	33.7	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1058	VM-K-100-101 VM-L-101	3.5	2.5	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1059	VM-U-M-99-100	4.6	-	52	10.5	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-1060	VM-K-L-100	3.0	1.7	28	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3101	VM-X-82	5.1	-	-	-	-	●	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3102	VM-X-82	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3103	VM-V-W-82	2.4	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3104	VM-U-83	3.7	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3105	VM-U-V-83	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3106	VM-U-X-83-84 VM-V-W-82-84	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3107	VM-N-86-87	2.5	2.3	20	3.7	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3108	VM-V-93	1.8	1.3	55	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●
SI-3109	VM-R-84	3.5	2.7	20	5.2	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●

伊跡▲…可能性のあるもの

壁周溝●…全周、▲…一部

時期▲…いずれかの時期に属するもの



表12 遺構一覧表 (その他の遺構)

焼土遺構(SN)

遺構名	グリッド	規模			備考	遺構名	グリッド	規模			備考
		長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)				長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	
SN-3101	VIIW-83	53	44	3	地床が	SN-3103	VIIW-83	20	12	2	地床が
SN-3102	VIIW-83	30	16	2	地床が	SN-3104	VIIW-84	49	49	6	石附が、が石に石皿

土器埋設遺構(SR)

遺構名	グリッド	掘方規模			備考
		長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	
SR-2	VIII-97	46	40	20	縄文時代中期中葉～後葉期、胸部下半を欠いた土器
SR-1004	VIII-83	32	27	29	円筒上層c式期、壳形土器、有墓石鎌1点出土

土坑-A群

遺構名	グリッド	平面	規模			備考	遺構名	グリッド	平面	規模			備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	
SK-1021	VIIW-83-84	楕円形	140	100	31	>SI-3106柱穴1	SK-1041	VIIW-84	不明	130	80	17	>SI-3106柱穴5
SK-1023	VIIW-83	円形	110	90	20	SI-3106新旧不明	SK-1042	VIIW-83	楕円形	110	80	25	SI-3106新旧不明
SK-1024	VIIW-84	楕円形	160	120	21	SI-3106新旧不明	SK-1046	VIIW-82	不明	120	30	28	SI-3101・SI-3101 Pit1-7 新旧不明
SK-1025	VIIW-83	長円形	90	60	38	SI-3106新旧不明	SK-1052	VIIW-82	不明	110	60	34	SI-3101・SI-3101 Pit4 新旧不明
SK-1035	VIIW-83	楕円形	100	70	27	SI-3105新旧不明	SK-1056	VIIW-82	楕円形	110	80	42	<SI-3103
SK-1037	VIIW-83	楕円形	100	90	28	SI-3106新旧不明	SK-1058	VIIW-83	円形	80	70	37	SI-3105・SI-3105 Pit4 新旧不明
SK-1038	VIIW-84	楕円形	110	90	37	>SI-3106柱穴2							
SK-1039	VIIW-84	円形	70	70	24	SI-3106新旧不明							
SK-1040	VIIW-83	楕円形	70	60	26	SI-3106新旧不明							

土坑-B群

遺構名	グリッド	平面	規模			備考	遺構名	グリッド	平面	規模			備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	
SK-4	VIIW-86	楕円形	60	40	28		SK-1030	VIIW-91	楕円形	120	100	41	
SK-5	VIIW-85	円形	100	90	15	>SI-2	SK-1031	VIIW-91	溝状	90	30	18	>SI-1036
SK-7	VIIW-86	楕円形	260	240	56		SK-1032	VIIW-94	不整形	210	170	78	
SK-14	VIIW-86	不明	210	140	21	半円状扁平打製石器多量出土	SK-1033	VIIW-89	楕円形	120	80	54	
SK-64	VIIW-86	不明	210	90	26		SK-1034	VIIW-97	楕円形	60	40	19	
SK-322	VIIW-85	楕円形	170	160	44		SK-1036	VIIW-92	不整形	210	160	37	
SK-323	VIIW-84	楕円形	140	140	30		SK-1044	VIIW-102	不明	190	190	20	
SK-325	VIIW-84	楕円形	220	170	17		SK-1047	VIIW-102	不明	130	50	39	
SK-1010	VIIW-85	楕円形	50	40	37		SK-1048	VIIW-101	楕円形	300	20	87	突出部+ビット2基
SK-1013	VIIW-88	円形	110	100	26	>SI-1019	SK-1049	VIIW-101	楕円形	110	80	32	>SI-1051 SI-1051 Pit1新旧不明
SK-1019	VIIW-92	溝状	130	40	18		SK-1051	VIIW-100-101	円形	190	90	27	>SI-1058
SK-1020	VIIW-92	溝状	110	20	28		SK-1053	VIIW-100	円形	60	50	25	
SK-1022	VIIW-93	溝状	120	40	21		SK-1054	VIIW-100	円形	50	50	26	>SI-1060
SK-1027	VIIW-89	長円形	100	70	21		SK-1057	VIIW-101	楕円形	90	50	16	<SI-1055 SI-1058新旧不明
SK-1028	VIIW-92	長円形	180	120	47		SK-3101	VIIW-88	不明	30	310	49	新旧関係<(新しい)、>(古い)
SK-1029	VIIW-93	溝状	120	50	20								

ビット(SP)

遺構名	グリッド	規模			遺構名	グリッド	規模			遺構名	グリッド	規模		
		長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SP-1012	VIIW-85	118	51	53	SP-1317	VIIW-82	41	29	43	SP-3102	VIIW-89	33	28	10
SP-1024	VIIW-85	25	20	17	SP-1318	VIIW-82	32	32	11	SP-3103	VIIW-89	30	20	12
SP-1025	VIIW-87	46	39	13	SP-1319	VIIW-82	35	31	15	SP-3104	VIIW-89	33	21	18
SP-1026	VIIW-85	53	41	18	SP-1320	VIIW-84	66	62	37	SP-3105	VIIW-89	24	20	10
SP-1314	VIIW-83	45	36	30	SP-1321	VIIW-82	53	51	44	SP-3106	VIIW-89	46	41	15
SP-1315	VIIW-84	35	33	19	SP-1322	VIIW-82	32	26	14					
SP-1316	VIIW-82	34	27	19	SP-3101	VIIW-82	40	28	18					

表13 竪穴住居属性表

時期	住居番号										軒数	
円筒上層b式	8(旧)											1
円筒上層c式	8(新)	1016	1060									3
円筒上層c~d式	1031	1035										2
円筒上層d式	7	1019	1020	1034	1036							5
円筒上層d~e式	19	1014										2
円筒上層e式	1049											1
円筒上層e~覆林式	3107											1
覆林式	17	1050	1051	1055	1057	1059						6
覆林式~最花式	3109											1
最花式												0
大木10式併行	1	2	9	20	1033	1039	1045	1048	1052	1054		15
	3102	3103	3104	3105	3106							
後期初頭	3101											1
不明	5	1013	1017	1053	1058	3108						6

床面積	住居直径換算	住居番号										軒数	
~7.0㎡ (直径3m未満)	(1(旧))	5	(7)	(1013)	(1020)	1033	1034	1036					12
		1050	3107	3108	3109								
7.1~12.5㎡ (直径4m未満)	(1(新))	(2)	1049	1051	1059							5	
12.6~20.0㎡ (直径5m未満)	(9)	1055										2	
20.1~28.0㎡ (直径6m未満)	8(新)	8(旧)	(1016)	1048	1054							5	
28.1~38.0㎡ (直径7m未満)		1057										1	
38.1~50.0㎡ (直径8m未満)												0	
50.1㎡以上 (直径8m以上)		3106										1	

遺構名	方位	判断		時期	遺構名	方位	判断		時期
		柱穴	竪				柱穴	竪	
SI-1	N-44°-W	●		大木10式併行	E方向かW方向か特定できないもの				
SI-2	N-40°-W	●		大木10式併行	SI-5	N-28°-E	●		円筒上層e~覆林式
SI-20	N-72°-E	●		大木10式併行	SI-8	N-39°-W	●		円筒上層b~c式
SI-1045	N-101°-W	●		大木10式併行	SI-9	N-39°-W	●		大木10式併行
SI-1048	N-76°-W	●		大木10式併行	SI-17	N-41°-W			
SI-1051	N-38°-W	●	●	覆林式	SI-19	N-38°-E		●	円筒上層c式
SI-1054	N-70°-W	●	●	大木10式併行	SI-1016	N-38°-W		●	円筒上層c式
SI-1057	N-13°-W	●	●	覆林式	SI-1017	N-53°-W		●	覆林式か
SI-1059	N-25°-W	●	●	覆林式	SI-1049	N-40°-W	●		円筒上層e~覆林式
SI-3106	N-32°-W	●		大木10式併行	SI-1050	N-19°-W	●		覆林式

柱穴配置	住居番号										軒数
2本	5	1020									2
4本	8	9	1016	1049	1050	1053					6
6本	1048	1054									2
8本	1057	3106									2
壁柱穴	2	1052									2
柱穴無し	7	17	19	20	1013	1017	1031	1033	1034	1035	10
2本未満	1036	1045	1058	3107	3108	3109					6
配置不明	1	1014	1039	1051	1055	1059	1060	3101	3102	3103	11
	3105										

41

炉形態	住居番号										資料数
地床炉	8	17	1013	1014	1016-1	1020	1036	1049	3107	3108	13
	3101-3	3103-2	3109								
石囲炉	円	1051-1	1051-2	1052	1057	3101-1	3103				6
	方	1-1	1-2	2	20	1017	1045	3101-1			7
	只	1048	1054	1059							3
石囲炉+土器埋設炉	19	1039									2
土器埋設炉	7	9	1016-2	1019	1031	1033	1034	1060			8
無し	5	1035	1053	1055	1058	3102					6
不明	1050	3101-2	3104	3105	3106						5

屋内配石

SI-1、SI-1052、SI-1054 (いずれも大木10式併行期)

50

表14 遺物観察表(土器)

図番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	分類	備考
7-1	SI-1旧段階内 Pit-17	堆積土上部	深鉢形	口縁部	R.L.斜回→沈線(2mm)U字文→磨消・刺突文	大木10式併行	IV 外縁接合、口縁部にU字状の伏り
7-2	SI-1旧段階内 Pit-17	堆積土上部	深鉢形	口縁部	R.L.斜回→沈線(2mm)曲線文→磨消	大木10式併行	IV 内面下筆なタテミガキ
7-3	SI-1旧段階内 Pit-17	堆積土上部	深鉢形	胴部	R.L.斜回	大木10式併行	IV 底径6.4cm 外縁接合
7-4	SI-1新段階	第1層	深鉢形	胴部	L.R.斜回→沈線(2mm)曲線文→磨消	大木10式併行	IV 外縁接合
7-5	SI-1新段階 Pit-2	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L.斜回→沈線(4mm)アルファベット文	大木10式併行	V
7-6	SI-1新段階 Pit-2	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線(4mm)アルファベット文	大木10式併行	V
7-7	SI-1旧段階 第2層	深鉢形	口縁部	L.斜回		大木10式併行	IV 外縁接合、外面図化物付着
7-8	SI-1新段階 第1層	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線→磨消		大木10式併行	IV 外縁接合
7-9	SI-1新段階 第2層	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線(1mm)曲線文→磨消		大木10式併行	V 外縁接合
7-10	SI-1新段階 確認面 第1層	深鉢形	口縁→底部	折返し口縁、L.R.斜回		大木10式併行	III 器高12.4cm 底径5.9cm
7-11	SI-1新段階 確認面 第1層	深鉢形	胴部→底部	R.L.斜回→沈線(2mm)曲線文→横状筋付文		大木10式併行	IV 残存高26.1cm 底径9.5cm 底部網代版(1.8cm×1.8cm)
7-12	SI-1新段階 第2層	深鉢形	胴部	沈線(2mm)による弧線文		大木10式併行	V 文様部分に赤色の溶状斑痕
7-13	SI-1新段階 床面	深鉢形	胴部	R.L.斜回		大木10式併行	IV
7-14	SI-1新段階 確認面	深鉢形	口縁部	隆帯貼付→白帯部沈線・R.L.斜回		覆鉢式	V 外縁接合
7-15	SI-1新段階 第1層・床面	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線(2mm)→磨消		大木10式併行	IV 外縁接合
7-16	SI-1旧段階内 Pit-12	堆積土	深鉢形	口縁部	波状口縁、隆帯貼付→沈線(2mm)横手文		覆鉢式
7-17	SI-1新段階 第2層	深鉢形	胴部	沈線(2mm)横状筋付文		十層内1式	IV
9-1	SI-2	第1層	深鉢形	口縁→胴部	R.L.斜回	中期後葉～末葉	V 口径(10.5)cm
9-2	SI-2	第1層	深鉢形	底部	条線筋位	中期後葉～末葉	V 底径(6.3)cm 底部ケズリ痕か
9-3	SI-2	第1層	深鉢形	胴部→底部	R.L.斜回、底部網代版(1.8cm×1.8cm)	大木10式併行	IV 外縁接合、内面図化物付着
9-4	SI-2	確認面	深鉢形	胴部→底部	R.L.斜回、底部網代版(1.8cm×1.8cm)	大木10式併行	IV 底径9cm 外縁接合
10-1	SI-5	堆積土	深鉢形	胴部	隆帯→車輪筋条体L.押圧→刺突文	円盤上層c式	I
10-2	SI-5	堆積土	深鉢形	胴部	無文	大木10式併行か	I
10-3	SI-5	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回	大木10式併行か	I
11-1	SI-7	土器埋没区	深鉢形	胴部	結束1種R.L.L.R.横回→下筆状の沈線→隆帯筋付文→隆帯筋付文	円盤上層d式	I 器高18.6cm、口径24.0cm 857.3g
14-1	SI-8	第1号埋没区	深鉢形	口縁→胴部	4単位波状口縁、貫通孔、隆帯結束R.L.L.R.横回→隆帯筋付文→L.R.側面押圧→L.R.高脚形押圧→車輪筋条体L.R.側面押圧	円盤上層b式	I 口径23cm、残存高27.6cm 上半部吹きこぼれ痕顯著
14-2	SI-8	第3号埋没区	深鉢形	口縁→胴部	口縁部:隆帯、R.L.側面押圧、R.L.高脚形押圧、胴部:L.R.斜回、R.L.側面押圧	円盤上層b式	I 口径24.4cm、残存高31cm
14-3	SI-8	確認面	深鉢形	口縁→胴部	隆帯筋付文→刺突文、結束1種R.L.L.横回	円盤上層c式	I 口径30cm、残存高24cm 上半部図化物・スス付着
14-4	SI-8	第3層	深鉢形	口縁→胴部	結束1種R.L.L.R.横回→隆帯筋付文→ハラ工状による刻み	円盤上層c式	I 口径27cm、残存高18cm
14-5	SI-8	堆積土	深鉢形	口縁→底部	波状口縁、横形貫通孔、隆帯筋付文→結束1種R.L.L.R.横回	円盤上層d式	V 口径31cm、器高44cm 胴部帯上の縄文は地文原体と同一
15-1	SI-8	床下	深鉢形	胴部	0段多糸R.L.斜回	円盤上層c式	I 外縁接合、外面にスス
15-2	SI-8	第2号埋没区	深鉢形	口縁→胴部	口縁部:隆帯区画→車輪筋条体R.L.側面押圧・R.L.高脚形押圧、胴部:L.R.斜回	円盤上層b式	I 内面下筆なミガキ、下筆スス付着
15-3	SI-8	堆積土	深鉢形	口縁→胴部	口縁部:車輪筋条体R.L.を等間隔に斜位筋文、胴部:同一筋文を斜位筋文	中期後葉か	III 15-4と同一体
15-4	SI-8	堆積土	深鉢形	胴部→底部	車輪筋条体R.L.縦回→斜回	中期後葉	III 底径12cm 15-3と同一体
16-1	SI-9	第2層	深鉢形	胴部	L.R.斜回・横回	大木10式併行	I 内面下筆なミガキ
16-2	SI-9	第2層	深鉢形	胴部	L.R.横回	大木10式併行	I 内面下筆なミガキ
16-3	SI-9	堆積土	深鉢形	口縁部	沈線	大木10式併行	V
17-1	SI-17	第3層	深鉢形	口縁部	L.R.斜回	大木10式併行	IV
17-2	SI-17	床面直下	深鉢形	胴部	R.L.斜回→ミガキ	中期後葉～末葉	IV 外縁接合顯著
17-3	SI-17	床面直下	深鉢形	胴部	無文	中期後葉～末葉	IV 小型土器
17-4	SI-17	床面	深鉢形	胴部→底部	L.R.斜回	中期後葉	IV
17-5	SI-17	床面直下	深鉢形	胴部	条線筋位	是形式	IV 17-7と同一体
17-6	SI-17	床面直下	深鉢形	胴部	条線筋位	是形式	IV
17-7	SI-17	床面直下	深鉢形	胴部	条線筋位	是形式	IV 17-5と同一体
17-8	SI-17	床面直下	深鉢形	胴部→底部	沈線筋付文・筋付文	覆鉢式	IV 底径1.5cm
17-9	SI-17	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.斜回	覆鉢式	IV 外面図化物付着
17-10	SI-17	床面直下	深鉢形	口縁部	口縁部隆帯貼付・R.L.斜回	覆鉢式	IV
17-11	SI-17	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回→沈線(7mm)	覆鉢式	IV
17-12	SI-17	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回→沈線(4mm)	覆鉢式	IV
18-1	SI-19	土器埋没区	深鉢形	胴部	R.L.横回	円盤上層d-e式	III 外面上半スス付着 器高14.3cm 口径16.4cm、357.4g
19-1	SI-20	床面直下	深鉢形	口縁→胴部	R.L.斜回・縦回	大木10式併行	IV 外縁接合顯著
19-2	SI-20	床面直下	深鉢形	底部	底部網代版(1.8cm×1.8cm)	大木10式併行	IV
20-1	SI-1013	第3層	蓋形	底部	無文	大木10式併行	IV ほぼ全面赤彩(T.57R/4)
21-2	SI-1014	第1層・床面	深鉢形	口縁→胴部	R.L.斜回・横回→ボツン状貼付文・隆帯筋付文→沈線による下筆か→粒土線(2mm)筋付文	円盤上層d式	III
21-3	SI-1014	第1層	深鉢形	口縁部	口縁部筋付文 0段多糸R.L.横回→隆帯筋付文・弧線文	円盤上層d式	I
21-4	SI-1014	第3層	深鉢形	口縁部	折返し口縁 L.R.横回→粒土線(2mm)横状筋付文	円盤上層d式	I
21-5	SI-1014	堆積土	深鉢形	口縁部	折返し口縁 L.R.横回→斜位→沈線(4mm)	円盤上層e式	III
21-6	SI-1014	第1・2層	深鉢形	胴部	L.R.横回→隆帯筋付文→沈線(4mm)筋付文	円盤上層e式	I 外縁接合、外面上半スス付着
21-7	SI-1014	第1層	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(4mm)横状筋付文	円盤上層e式	III
21-8	SI-1014	第1・2層	深鉢形	口縁部	折返し口縁、L.R.横回→沈線(4mm)	円盤上層e式	III
21-9	SI-1014	第2層	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(4mm)	円盤上層e式	I

図番号	出土位置	層位	遺構	部位	文様等の異性	分類	備考
21-11	SI-1014	堆積土	深鉢形	胴部	R.L横切→柱土直(口~4cm)→硯突文	円筒上層c式	■ 中心を左に右側、右側で硯突文の墓文方向が異なる
21-11	SI-1014	第2層	深鉢形	胴~底部	R.L折回	中期後葉?	IV
22-1	SI-1016	土器埋没伊	深鉢形	口縁~胴部	結束第1種R.L・L.R横切。R.L末期に、別原体によるRでの結納。隆帯上に乗軸筋条体の押圧	円筒上層c式	I 残存高18.2cm, 口径21.3cm
22-2	SI-1016	床面	深鉢形	口縁~胴部	口縁部:下帯状の沈線→隆帯→硯突文・乗軸筋条体L側面押圧 胴部:結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層c式	I 残存高15.1cm, 口径18.3cm 345g
23-1	SI-1016	第2層上層	深鉢形	胴~底部	結束第1種R.L・L.R横切・隆帯上にL.R横切	円筒上層d式	I 残存高29.5cm, 口径22.6cm 底径17.7cm, 1,257.3g
23-2	SI-1016	床面	深鉢形	口縁~胴部	L.R横切	円筒上層d式	I 残存高16.6cm, 口径21.6cm 679.5g
23-3	SI-1016	第2層/床面	深鉢形	口縁~胴部	隆帯による波状文→結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層d式	I 残存高10.1cm, 口径14.2cm 底径9cm, 306.2g
23-4	SI-1016	床面	深鉢形	胴~底部	隆帯→乗軸筋条体L側面押圧・結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層d式	I 残存高12.45cm, 口径16.9cm 底径11.4cm, 636.5g
23-5	SI-1016	床面	深鉢形	胴~底部	結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層d式	I 底径6.6cm
23-6	SI-1016	床面	深鉢形	胴~底部	結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層d式	I 口径13.1cm, 底径6.6cm 355.1g、底部ケズリ
23-7	SI-1016	床面	深鉢形	胴~底部	結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層d式	I
23-8	SI-1016	床面	深鉢形	口縁~胴部	隆帯→乗軸筋条体L側面押圧→硯突文・L.R横切	円筒上層c式	I
23-9	SI-1016	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯→乗軸筋条体L側面押圧→硯突文	円筒上層c式	I
23-10	SI-1016	床面	深鉢形	口縁部	隆帯→乗軸筋条体L側面押圧・(L・L)側面押圧→硯突文・L.R横切	円筒上層c式	I
23-11	SI-1016	堆積土	深鉢形	胴部	(L・R・L)側面押圧→L.R角錐形押圧	円筒上層c式	I
23-12	SI-1016	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部厚み・L側面押圧	円筒下層d式	II
25-1	SI-1017	第2層	深鉢形	口縁部	口唇肥厚、L.R横切→沈線(1cm)	複体式	V
25-2	SI-1017	第2層	深鉢形	胴~底部	L.R折回	中期後葉小	V
26-1	SI-1019	土器埋没伊	深鉢形	口縁~胴部	結束第1種R.L・L.R横切→隆帯(5cm)懸垂文→弧線文	円筒上層d式	I 外面炭化物付着
27-1	SI-1020	第3層/床面・ 船塚	深鉢形	口縁~胴部	結束第1種R.L・L.R横切→波状柱土	円筒上層d式	II 外面スス付着
27-2	SI-1020	第3層/船塚	深鉢形	胴~底部	硯文	中期後葉	■
28-1	SI-1031	土器埋没伊	深鉢形	胴部	結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層c~d式	I 残存高35cm, 胴部径25.7cm, 上半スス
29-1	SI-1033	土器埋没伊	深鉢形	口縁部	L.R折回	中期後葉	■
29-2	SI-1033	第1層	深鉢形	胴部	L.R折回	中期後葉→末葉	V 外面炭化物付着
29-3	SI-1033	床面直上	深鉢形	胴部	L.R折回	大木10式併行	IV 外面スス付着
29-4	SI-1033	第1層	深鉢形	胴部	L.R折回	不明	■ 外面スス付着
30-1	SI-1034	土器埋没伊	深鉢形	口縁~底部	4単位の実形、L.R横切→4単位垂下隆帯→隆帯上に円形押圧→柱土直による弧線文	円筒上層d式	I 器高31.5cm, 口径22cm 1,637.1g
30-2	SI-1034	第1層	深鉢形	胴部	4単位の実形、L.R横切→隆下隆帯→隆帯上に円形押圧→柱土直による弧線文	円筒上層d式	I 器高19.5cm, 口径20.3cm 692.9g, 上半部全面にスス
30-3	SI-1034	堆積土	深鉢形	口縁部	ボタン状貼付文・柱土直・L.R側面押圧	円筒上層d式	II
30-4	SI-1034	堆積土	深鉢形	口縁部	柱土直	円筒上層d式	I
30-5	SI-1034	床面	深鉢形	胴~底部	L.R折回	不明	V 内部に顔料色の黒色付着物有り
30-6	SI-1034	土器埋没伊	深鉢形	口縁部	L.R折回	中期後葉	■
31-1	SI-1035	埋没土器	深鉢形	胴~底部	結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層c~d式	I 底径9.6cm
31-2	SI-1035	堆積土	深鉢形	胴部	0段多条L.R→沈線(2cm)	複体式	V
32-1	SI-1036	床面直上	深鉢形	口縁~底部	4単位の実形、突起部直下穿孔有り。結束第1種R.L・L.R横切→弧線文→隆帯→弧線文・波状文	円筒上層d式	I 器高51.4cm, 口径38cm 底径4cm, 6,000.5g
32-2	SI-1036	床面直上	深鉢形	口縁~底部	4単位の実形、口唇部L.R横切→弧線文の上に、別原体によるL.R押圧。突起部隆帯上L.R押圧。胴部および口唇部隆帯のL.R横切→弧線文。一部別原体によるL.R横切→弧線文	円筒上層d式	II 器高46.5cm, 口径36cm 底径1cm, 3,046.7g
32-3	SI-1036	床面直上	深鉢形	口縁~底部	平縁。結束第1種R.L・L.R横切	円筒上層d式	I 器高34.2cm, 口径26.7cm 底径12cm, 2,520.7g
33-1	SI-1036	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L横切→隆帯→折み	円筒上層d式	■ 33-3と同一体
33-2	SI-1036	堆積土	深鉢形	口縁部	硯文→隆帯→折み	円筒上層d式	■
33-3	SI-1036	堆積土	深鉢形	胴部	R.L横切→隆帯→折み	円筒上層d式	■ 33-1と同一体
33-4	SI-1036	堆積土	深鉢形	胴部	隆帯→硯突文・L.R横切	円筒上層c式	I
33-5	SI-1036	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部L.R横切→L側面押圧。胴部付加条	円筒上層c式	II
33-6	SI-1036	堆積土	深鉢形	胴部	結束第1種0段多条R.L・L.R横切	円筒上層d式	■
33-7	SI-1036	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯→隆帯上にL.R側面押圧	円筒上層d式	■
34-1	SI-1039	埋没土器	深鉢形	胴~底部	底面網代版(1超え1磨り) L.R横切→2本沈線(2mm)U字文→磨消	大木10式併行	■ 器高31.4cm, 口径21.2cm 底径9.5cm, 1,571.4g
34-2	SI-1039	堆積土	深鉢形	胴部	L.R横切→2本沈線(2mm)U字文→磨消	大木10式併行	■ 外面炭化物付着
35-1	SI-1045	床面 堆積土	深鉢形	口縁~胴部	波状口縁、ボタン状貼付文→L.R横切→沈線(2cm)→硯突文・磨消	大木10式併行	IV 35-2~4と同一体
35-2	SI-1045	壁面	深鉢形	口縁部	波状口縁、ボタン状貼付文→L.R横切→沈線(2cm)→硯突文・磨消	大木10式併行	IV 35-1・3・4と同一体 外縁縁合
35-3	SI-1045	堆積土	深鉢形	胴部	L.R横切→沈線(2cm)→硯突文	大木10式併行	IV 35-1・2・5と同一体
35-4	SI-1045	床面	深鉢形	口縁部	口縁部隆帯→L.R横切	大木10式併行	IV 35-1~3と同一体 外面炭化物付着
35-5	SI-1045	壁面	深鉢形	胴部	L.R→沈線(2cm)	大木10式併行	IV
35-6	SI-1045	堆積土	深鉢形	胴~底部	L.R横切、底面網代版(1超え1磨り)	大木10式併行	IV
35-7	SI-1045	堆積土	深鉢形	胴部	0段多条L.R・沈線(2cm)	大木10式併行	IV
35-8	SI-1045	堆積土	深鉢形	胴部	L.R横切→沈線(1cm)曲線文	大木10式併行	IV
35-9	SI-1045	堆積土	深鉢形	口縁部	磨消状工具による条線→沈線(1cm)	複体式	V
35-10	SI-1045	堆積土	深鉢形	胴部	沈線(2cm)	土層内1式	V

水上(2)遺跡

調査号	出土位置	層位	遺構	構造	文様等の属性	分類	加工	備考
30-11	SI-1045	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回・胴回	大木10式併行	IV	外縁接合
30-1	SI-1048	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	折返し口縁、R.L.横回・斜回	大木10式併行	V	
30-2	SI-1048	貼床	深鉢形	胴部	R.L.横回→沈線(2mm)一體状貼付文	大木10式併行	Ⅲ	
30-3	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(2mm)一體状	大木10式併行	Ⅲ	
30-4	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(2mm)	大木10式併行	Ⅲ	
30-5	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴部	端部絶縁L.R.横回→沈線(2mm)	大木10式併行	Ⅲ	
30-6	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.斜回→沈線(2mm)	大木10式併行	V	
30-7	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴～底部	胴部:L.R.横回 底部:胴状底(1冊式1冊り)	大木10式併行	V	
30-8	SI-1048	堆積土	深鉢形	底部	隆帯・車軸筋条体L.側面押圧・刺突文	円盤上層c式	V	タテミガキ
30-9	SI-1048	床面直上	深鉢形	口縁～胴部	R.L.斜回	中間後葉小		器高35.4cm、口径33cm 2.033.6g
30-10	SI-1048	床面	深鉢形	口縁～胴部	山形突起、貼付部・L.R.横回・貼上線による飾文	円盤上層d式		底面ケズリ、器高26.7cm、底径8cm
30-11	SI-1048	貼床	深鉢形	胴部	R.L.横回→波状粘土線	円盤上層d式	I	
30-12	SI-1048	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	L.R.横回→粘土線・貼付文→沈線(3mm)	円盤上層e式	IV	
30-13	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(2mm)	円盤上層e式	Ⅲ	
30-14	SI-1048	堆積土	深鉢形	胴～底部	R.L.横回	時期不明		
30-1	SI-1049	堆積土 床面	深鉢形	口縁～底部	4単位波状口縁・口唇部L.R.押圧・L.R.横回→粘土線による弧線文	円盤上層d式	I	器高19.6cm、口径17cm 底径7.2cm、542.4g
30-2	SI-1049	床面	深鉢形	口縁～底部	4単位の二股山形突起、口唇部弱み・L.R.横回	円盤上層e式		外面上半吹きこぼれ痕、 ボタン状突起は欠損 器高13.5cm、口径2.3cm 底径2.2cm、410.4g
40-1	SI-1049	床面	深鉢形	口縁～底部	山形突起、口唇部粘土線貼付・R.L.斜回	円盤上層e式		器高13.5cm、口径2.6cm 底径2.2cm、313.6g
40-2	SI-1049	堆積土	深鉢形	口縁～底部	1単位山形突起、L.R.斜回	円盤上層e式	I	器高12.2cm、口径11.3cm 底径5.6cm、261.2g
40-3	SI-1049	堆積土	深鉢形	口縁部	波状口縁、R.横回・ヘラ弱み	円盤上層d式	I	
40-4	SI-1049	伊直上	深鉢形	口縁～底部	車軸筋条体1層L.斜位	覆鉢式小		器高13.5cm、口径11.6cm 底径16.27cm 217g 外面上半凹化跡付着
40-5	SI-1049	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	L.R.横回→沈線による区画文・弧線文	覆鉢式		器高23.9cm、口径(28.7)cm 733.7g
40-6	SI-1049	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	車軸筋条体L.R.沈線(2mm)渦巻文	覆鉢式		
40-7	SI-1049	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.斜回→沈線(2mm)	覆鉢式		
40-8	SI-1049	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.斜回	覆鉢式		
40-9	SI-1049	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回	覆鉢式		
40-10	SI-1049	堆積土	深鉢形	胴部	車軸筋条体L.横回	覆鉢式		
40-11	SI-1049	堆積土	深鉢形	胴～底部	L.R.横回	覆鉢式		
42-1	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	R.L.斜回→沈線(2mm)渦巻文・扇部刺突文	覆鉢式		残存高22.6cm、口径38.5cm 944.1g
42-2	SI-1050 SI-1055	堆積土	深鉢形	口縁～底部	車軸筋条体L.R.沈線(2mm)→山形刺突文	覆鉢式		SI-1055埋蔵土出土土器片と接合 残存高11.1cm、口径14.5cm 底径9cm、194.5g
42-3	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～底部	4単位波状口縁、L.R.横回→沈線(3mm)	覆鉢式		残存高29.4cm、口径(24)cm 646.9g
42-4	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～底部	口縁部横方向に低平な隆帯を貼付→L.R.斜回	覆鉢式		底部葉脈痕 残存高20cm、口径(14.6)cm 底径6.6cm、364.1g
42-5	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	R.L.斜回	覆鉢式		残存高34cm、口径25.5cm 明褐色
42-6	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部下半	L.R.横回	覆鉢式		接合面で割離
43-1	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	L.R.斜回	覆鉢式		残存高35cm、口径19.7cm 777.8g
43-2	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	口唇部は玉線状に肥厚、L.R.斜回	覆鉢式		残存高18.6cm、口径38cm 712.6g、口縁部L.片着
43-3	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回・斜回	覆鉢式		
44-1	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	口縁部:隆帯貼付→凹線、胴部:L.R.斜回	覆鉢式		
44-2	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	口縁部隆帯・沈線渦巻文・R.L.横回	覆鉢式		
44-3	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁部	口縁部:隆帯→沈線 胴部:L.R.横回→沈線	覆鉢式		
44-4	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯貼付→L.横回→沈線(2mm)による横区画→山形刺突文	覆鉢式		
44-5	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.横回	中間後葉		
44-6	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	波状口縁、L.R.横回	覆鉢式		
44-7	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	車軸筋条体L.R.沈線(3mm)渦巻文	覆鉢式		外縁接合
44-8	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(2mm)渦巻文	覆鉢式	IV	
44-9	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈線(2mm)	覆鉢式	Ⅲ	外縁接合
44-10	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.横回・斜回	覆鉢式小	Ⅲ	外縁接合
44-11	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～底部	L.R.横回	中間後葉→末葉	I	補修色
44-12	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回	覆鉢式		明褐色
44-13	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴～底部	車軸筋条体の引きずりか	中間後葉小		
45-1	SI-1050	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回	覆鉢式		明褐色
45-2	SI-1050	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	隆帯・車軸筋条体L.側面押圧・刺突文・L.R.横回	円盤上層c式	I	
46-1	SI-1051	堆積土	深鉢形	口縁～底部	口唇部一部肥厚、胴部文様4単位、胴部上半L.R.横回・下半L.R.横回→沈線(2mm)渦巻文・刺突文	覆鉢式		器高30.5cm、口径25cm 底径10cm、1,041.9g
46-2	SI-1051	堆積土	深鉢形	胴～底部	L.R.横回	覆鉢式		残存高24.5cm、口径(22)cm 底径10cm、843.1g
46-3	SI-1051	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	隆帯貼付→凹線による渦巻文・沈線(2mm)	覆鉢式		
46-4	SI-1052	第1層	深鉢形	口縁部	L.R.横回	大木10式併行		

図番号	出土位置	層位	遺構	種別	文様等の属性	分類	加工	備考
49-2	SI-1052	第1層	深鉢形	口縁部	外面:L.R.縦回→沈澱(2mm) 内面:縁状貼付文	大木10式併行	■	外面スチ付層
49-3	SI-1052	第5層	深鉢形	口縁部	縁部貼付→半輪筋糸体L.側面押圧	円筒上層c式	■	
49-4	SI-1052	堆積土	深鉢形	口縁部	内外面粘土貼付層	円筒上層e式	I	
56-1	SI-1054	第8層	蓋形	口縁→底部	平縁、R.L.斜回回転、一部横位回転、底部網代板(1超え1層り)	大木10式併行	IV	器高21cm、口径9cm 底径6.5cm、300.8g
56-2	SI-1054	第8層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	覆鉢式	■	
56-3	SI-1054	第8・10層	深鉢形	胴→底部	R.L.斜回	覆鉢式	I	底径6cm
56-4	SI-1054	第8層	深鉢形	口縁→胴部	段状口縁、口縁部沈澱・L.R.斜回	覆鉢式	■	外縁接合
56-5	SI-1054	第8層	深鉢形	胴→底部	0段多条R.L.斜回	覆鉢式小	IV	外縁接合
56-6	SI-1054	第8層	深鉢形	胴部	沈澱・端部結束R.L.横回・R.L.斜回	中層?	■	
59-1	SI-1055	堆積土	深鉢形	胴→底部	L.R.縦回	覆鉢式	■	底面ケズリ
60-1	SI-1057	確認面	深鉢形	口縁部	R.L.斜回	覆鉢式	■	
60-2	SI-1057	確認面	深鉢形	胴部	L.R.縦回→沈澱(4mm)	覆鉢式	■	60-3と同一個体
60-3	SI-1057	確認面	深鉢形	胴部	L.R.縦回→沈澱(4mm)	覆鉢式	■	60-2と同一個体
62-1	SI-1059	堆積土	深鉢形	口縁→胴部	平縁、R.L.斜回→沈澱(5mm) 笠縁文→刺突文	覆鉢式	V	SI-1059と1060が接合 残存高36.8cm、口径36cm 2.220.9g
62-2	SI-1059	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈澱(4mm)→玉抱き三叉文	覆鉢式	V	
62-3	SI-1059	堆積土	深鉢形	胴部	付加糸L.R.沈澱(2mm)	覆鉢式	V	
62-4	SI-1059	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L.・隆帯渦巻文・隆帯輪ナゲ	大木8式	V	継入土器の可能性有り
64-1	SI-1060	土器埋設区	深鉢形	口縁→胴部	網代板4単位、結束第1種R.L.横回→隆帯渦巻文→隆帯上へつ局み(1面のみ)→刺突文	円筒上層c式	I	残存高16.8cm、口径18.7cm 698.8g
64-2	SI-1060	堆積土	深鉢形	胴部	隆帯→刺突文	円筒上層c式	I	
66-1	SI-3101	床面上	深鉢形	口縁→胴部	口縁に4単位の耳状突起、口唇部L.R.横回回転・口唇下→胴部L.R.側面押圧・胴部R.L.縦回回転→口縁による段縁	後期初層	V	残存高27.4cm、口径21cm 1,041.4g
66-2	SI-3101	堆積土	深鉢形	口縁→胴部	R.L.横回→斜回	大木10式併行	IV	口径19cm、残存高14cm 外縁接合
66-3	SI-3101	堆積土	深鉢形	口縁→胴部	L.R.縦回	大木10式併行	■	外縁接合
66-4	SI-3101	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部:L.R. 口縁部:L.R.側面押圧	後期初層	■	
66-5	SI-3101	石面区	深鉢形	口縁部	L.縦回→R.側面押圧	時期不明	V	
66-6	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	粗環帯→ボーン状貼付文→刺突文	後期初層	IV	
66-7	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	隆帯→刺突文	後期初層	V	
66-8	SI-3101	貼床	深鉢形	口縁→胴部	縁状隆帯→R.L.縦回	中層末層→後期初層	■	
66-9	SI-3101	覆土	深鉢形	口縁部	段状口縁・刺突文	大木10式併行	■	
66-10	SI-3101	貼床	深鉢形	口縁部	L.R.縦回	大木10式併行	IV	外縁接合
66-11	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.R.縦回	大木10式併行?	IV	外縁接合
66-12	SI-3101	貼床	深鉢形	胴部	R.L.縦回→沈澱(2mm) アルファベット文	大木10式併行	V	
66-13	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.縦回→沈澱(3mm)	大木10式併行	■	
66-14	SI-3101	貼床	深鉢形	口縁→胴部	段状口縁 結土帯貼付(口縁部絶厚)→0段多条R.L.縦回→沈澱(2mm)による懸垂文→刺突文	曇花文	■	
66-15	SI-3101	貼床	深鉢形	胴部	0段多条R.L.斜回→沈澱(2mm)	曇花文	■	
66-16	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回→半籠竹管による逆り字文→門形刺突文	曇花文	V	
66-17	SI-3101	貼床	深鉢形	口縁部	口唇部ミガキ 0段多条R.L.縦回→沈澱(1mm)	覆鉢式	I	66-21と同一個体
66-18	SI-3101	堆積土	深鉢形	口縁→胴部	口縁部沈澱・付加糸R.L.	覆鉢式	I	外面付着炭化物
66-19	SI-3101	貼床	深鉢形	口縁部	口縁上部沈澱渦巻文	覆鉢式	■	
66-20	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈澱(4mm)	円筒上層e式?	■	
66-21	SI-3101	貼床	深鉢形	胴部	0段多条R.L.沈澱(1mm)	覆鉢式	I	外縁接合、66-17と同一個体
66-22	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴部	凹縁(5mm)渦巻文	覆鉢式	V	
66-23	SI-3101	貼床	深鉢形	胴部	0段多条R.L.縦回→沈澱(2mm)渦巻文	覆鉢式	V	
67-1	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴→底部	L.R.縦回	中期後層→末層	■	底部に網代板があるが調整のための詳細不明。1超え1層りの可能性有り
67-2	SI-3101	床面	深鉢形	胴部	L.R.縦回→斜回→半籠竹管による沈澱	円筒上層c式	V	
67-3	SI-3101	堆積土	深鉢形	底部	管束状の動物痕	中期後層→末層	■	
67-4	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴→底部	0段多条R.L.横回	中層	■	
67-5	SI-3101	堆積土	蓋形	口縁部	蹄状隆帯→把手貼付	中期後層	V	
67-6	SI-3101	堆積土	深鉢形	胴→底部	結束第1種R.L.L.R.	円筒上層I	■	
68-1	SI-3102	貼床	深鉢形	胴部	0段多条R.L.沈澱(1mm)玉抱き三叉文	覆鉢式	■	外縁接合
68-2	SI-3102	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.横回→沈澱(4mm)	大木10式併行	V	68-3と同一個体
68-3	SI-3102	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.沈澱(1mm)渦巻文	大木10式併行	V	68-2と同一個体
68-4	SI-3102	貼床	深鉢形	胴部	0段多条R.L.沈澱(2mm)	覆鉢式	■	
68-5	SI-3102	堆積土	深鉢形	胴部	半輪筋糸体R.縦回	中期後層	■	
68-6	SI-3102	貼床	深鉢形	胴部	R.L.斜回	中期後層小	■	外縁接合
68-7	SI-3102	堆積土	深鉢形	胴部	隆帯→刺突文	円筒上層c式	I	
68-8	SI-3102	貼床	深鉢形	口縁→胴部	段状口縁、内面玉孔有り、R.L.横回→斜回→結土貼	円筒上層d式	■	68-10と同一個体
68-9	SI-3102	堆積土	深鉢形	口縁部	口縁部貼付層・R.L.横回	円筒上層d式	I	
68-10	SI-3102	貼床	深鉢形	口縁部	段状口縁、内面玉孔有り、R.L.横回→斜回→結土貼	円筒上層d式	■	68-8と同一個体
68-11	SI-3102	貼床	深鉢形	口縁部	段状突起、結土貼・L.R.横回→沈澱	円筒上層c式	V	
68-12	SI-3102	堆積土	深鉢形	胴部	結束第1種R.L.L.R.横回	円筒上層c式	V	
70-1	SI-3103	第2層	深鉢形	口縁部	半輪筋糸体R.斜回→同一施文具縦回	中層末層→後期初層	IV	
70-2	SI-3103	床面直上	深鉢形	口縁部	半輪筋糸体R.斜回→同一施文具縦回	中層末層→後期初層	IV	
70-3	SI-3103	確認面	深鉢形	胴部	半輪筋糸体R.斜回→同一施文具縦回	中層末層→後期初層	IV	
70-4	SI-3103	貼床	深鉢形	胴部	半輪筋糸体R.斜回→同一施文具縦回	中層末層→後期初層	IV	
70-5	SI-3103	床面直上	深鉢形	口縁→胴部	R.L.側面押圧→R.L.縦回	中層末層→後期初層	IV	輪縁板明瞭
70-6	SI-3103	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯凹文→刺突文	大木10式併行	■	

水上(2)遺跡

調査号	出土位置	層位	品種	部位	文様等の属性	分類	加工	備考
70-7	SI-3103	堆積土	深鉢形	口縁部	縄文(原形不明)→沈線による曲線文	大木10式併行か	V	補修孔
70-8	SI-3103	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R横回	大木10式併行か	IV	
70-9	SI-3103	床面	深鉢形	口縁部	R.L斜回	大木10式併行か	V	
70-10	SI-3103	貼床	深鉢形	口縁部	0段多糸L.R横回	大木10式併行か	IV	接合痕明確
70-11	SI-3103	貼床	深鉢形	胴部	R.L縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	
70-12	SI-3103	堆積土	深鉢形	胴部	沈線(2mm)→刺突文	大木10式併行	V	
70-18	SI-3104	堆積土	深鉢形	口縁部	波状口縁、内面縁状突起、沈線(2mm)→刺突文	大木10式併行	V	
70-19	SI-3104	堆積土	深鉢形	口縁部	大小2単位のリボン状突起文→L.R斜回→沈線(1mm)→横回→刺突文	大木10式併行	IV	内外面に炭化物多量に付着
70-20	SI-3104	堆積土	深鉢形	口縁部	沈線(2mm)→L.R充填	大木10式併行	IV	
70-21	SI-3104	堆積土	深鉢形	胴部	縁状突起文→刺突文	大木10式併行	IV	内外面赤色塗彩
70-22	SI-3104	堆積土	深鉢形	胴部	R.L斜回	大木10式併行	IV	外縁接合
70-23	SI-3104	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(2mm)U字文	大木10式併行	IV	
70-24	SI-3104	堆積土	深鉢形	胴部	R.L斜回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	
70-25	SI-3104	堆積土	深鉢形	胴部	車輪条体系L縦回	縄文式か	IV	外縁接合
72-1	SI-3105	堆積土	深鉢形	胴部	R.L斜回→沈線(2mm)アルファベット文	大木10式併行	IV	外縁接合
72-2	SI-3105	堆積土	深鉢形	胴部	付加糸L.R縦回	中期後葉か	IV	
72-3	SI-3105	堆積土	深鉢形	胴部	端部結束L斜回→沈線(2mm)曲線文	大木10式併行	IV	外縁接合
72-4	SI-3105	堆積土	深鉢形	胴部	R.L斜回→沈線(2mm)→帯渦	大木10式併行	V	
72-5	SI-3105	堆積土	深鉢形	口縁部	耳状突起 外面に刺突文	大木10式併行	V	
72-6	SI-3105	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L斜回	時期不明	V	外面スス付着
72-7	SI-3105	貼床	深鉢形	口縁部	車輪条体系L縦回	中期後葉か	V	
72-8	SI-3105	床面	深鉢形	胴部	L縦回→沈線(1mm)波状文	大木10式併行	V	外縁接合
72-9	SI-3105	堆積土	深鉢形	胴部	R.L斜回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	外縁接合
72-10	SI-3105	堆積土	深鉢形	胴部	0段多糸L.R斜回	中期後葉か	IV	外縁接合
72-11	SI-3105	堆積土	浅形	胴部	R.L斜回→横状沈線(2mm)→刺突文	縄文式	IV	
72-12	SI-3105	堆積土	深鉢形	底部	網代文(1組x1層り)	大木10式併行	IV	外縁接合
75-1	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L斜回→沈線(2mm)弧線文 内面・縁部貼付	大木10式併行	IV	内外面スス付着
75-2	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	胴部	R.L縦回→沈線(2mm)横S字文	大木10式併行	IV	外面スス付着
75-3	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	IV	外面に炭化物付着
75-4	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	IV	内外面スス付着
75-5	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	胴部	R.L横回→沈線(2mm)U字文・帯文	縄文式	IV	外面炭化物付着
75-6	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回 底部・網代文(1組x1層り)	大木10式併行	IV	
75-7	SI-3106 柱穴1	堆積土	深鉢形	底部	底部網代文(1組x1層り)	中期後葉～末葉	IV	底径9.5cm
75-10	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R斜回→沈線(2mm)によるアルファベット文	大木10式併行	IV	75-13と同一体
75-11	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	外面スス付着
75-12	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	
75-13	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	胴部	L.R斜回→沈線(2mm)によるアルファベット文	大木10式併行	IV	75-10と同一体
75-14	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	
75-15	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R縦回	縄文式	I	
75-16	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	胴部	複線R.L.R斜回→沈線(2mm)	縄文式	IV	
75-17	SI-3106 柱穴2	堆積土	深鉢形	口縁部	縁部貼付→沈線	大K8b式小V	V	外面スス付着
75-18	SI-3106 柱穴2	堆積土	浅形	胴部	幅状帯手・車輪条体系L縦回	大K8b式	V	内外面赤色塗彩
76-1	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	口縁部	口筒端部に1単位の刻み 外面・R.L斜回→沈線(2mm) 内面・沈線	大木10式併行	V	赤色塗彩・商標部を多量に含有
76-2	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	口縁部	沈線(2mm)	縄文式	I	外面スス付着
76-3	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R横回	大木10式併行か	IV	外面スス付着
76-4	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	I	外面スス付着
76-5	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回・縁状縄文(L.R)縦回	大木10式併行	IV	外面スス付着
76-6	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	R.L縦回	縄文式	IV	外面スス付着
76-7	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	口縁部	縁部による溝付→沈線・付加糸L.R縦回	縄文式	IV	
76-8	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	口縁部	付加糸R.L→沈線(2mm)内面文→弧線文	縄文式	IV	
76-9	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(2mm) 溝状文	縄文式	IV	
76-10	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	胴部・L.R横回 底面・ケズリ調整	中期後葉	IV	
76-11	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	縄文(復元著しく原形不明)	円筒上層式 I	I	縁部
76-12	SI-3106 柱穴3	堆積土	深鉢形	胴部	結束第1層の0段多糸L・L・R横回	円筒上層式	IV	
76-13	SI-3106 柱穴4	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L斜回	縄文式	IV	76-16と同一体
76-14	SI-3106 柱穴4	堆積土	深鉢形	胴部	R.L斜回	縄文式	IV	76-15と同一体
76-15	SI-3106 柱穴4	堆積土	深鉢形	胴部	L.R斜回→沈線によるアルファベット文(2mm)	接合面が割離	IV	
76-16	SI-3106 柱穴4	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L斜回→突起彫付→粘土線	円筒上層式 I	I	
76-17	SI-3106 柱穴4	堆積土	深鉢形	胴部	L.R斜回	大木10式併行	IV	
76-18	SI-3106 柱穴4	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L斜回→突起彫付→粘土線	円筒上層式 I	I	
76-20	SI-3106 柱穴5	堆積土	深鉢形	胴部	L.R斜回	大木10式併行	IV	
77-1	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	外面:L.R縦回→沈線(2mm)によるU字文→刺突文 内面:粘土塗を貼付→指輪彫形	大木10式併行	IV	
77-2	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	粘土貼付→指輪彫形	大木10式併行	IV	
77-3	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L横回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	
77-4	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	刺突文・沈線(2mm)	大木10式併行	IV	
77-5	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	胴部	沈線(2mm)による逆U字文→L.R縦回	大木10式併行	IV	
77-6	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	外縁接合
77-7	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	縁部→刺突文	大木10式併行	IV	
77-8	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	外面スス付着
77-9	SI-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	胴部	L.R縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	IV	外縁接合

図番号	出土位置	層位	遺種	部位	文様等の属性	分類	加工	備考
77-10	S1-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.斜回	大木10式併行	■	外面スチ付着
77-11	S1-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	胴部	直政反巻L.R.縦回	大木10式併行	■	外縁接合
77-12	S1-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	胴~底部	胴部:L.R.縦回 底部:胴代版(1超え1摺り)	中期後葉	■	
77-13	S1-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯による滑巻文・沈線(1mm)	覆鉢式	■	
77-14	S1-3106 柱穴6	堆積土	深鉢形	口縁部	L.側面押圧	円筒上層c式	■	
77-15	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	口縁部	波状口縁、隆帯→刺突文	大木10式併行	■	外面炭化物付着
77-16	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L.縦回	大木10式併行	■	77-20と同一体、外縁接合
77-17	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.縦回→沈線(2mm)	大木10式併行	■	外面スチ付着
77-18	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	胴部	O段多条R.L.縦回	大木10式併行	■	77-18と同一体、外縁接合
77-19	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	胴~底部	O段多条R.L.斜回 底部:胴代版(もじり編み)	中期後葉	■	外縁接合
77-20	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、単軸器体形使用か、沈線・円形刺突	中期後葉	■	
77-21	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯貼付→沈線・L.R.縦回	覆鉢式	■	
77-22	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	胴~底部	底部:胴代版(1超え1摺り)	中期後葉	■	
77-23	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯貼付→沈線・L.R.縦回	覆鉢式	■	
77-25	S1-3106 柱穴7	堆積土	深鉢形	底部	底部:胴代版(1超え1摺り)	大木10式併行	■	外縁接合
78-1	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部に刻みの入る山形突起、ボタン状貼付文・R.L.縦回・沈線(1mm)	大木10式併行	■	78-2と同一体
78-2	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁~胴部	R.L.縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	78-1と同一体
78-3	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯貼付→R.L.縦回→沈線(4mm)・円形刺突文	大木10式併行	■	
78-4	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.縦回→刺突文	大木10式併行	■	
78-5	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L.斜回→沈線(2mm)	大木10式併行	■	
78-6	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.縦回	大木10式併行	■	内面丁寧なコシガキ
78-7	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	R.L.斜回→沈線(2mm)	大木10式併行	■	
78-8	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	波状口縁 L.R.斜回	大木10式併行	■	
78-9	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	口縁部	円形刺突文・沈線	覆鉢式	■	
78-10	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	貼付文→R.L.縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	
78-11	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	
78-12	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	L.縦回	大木10式併行	■	外面スチ付着
78-13	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	
78-14	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	
78-15	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	外面付着炭化物、外縁接合顕著
78-16	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	外縁接合、外面スチ付着
78-17	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.縦回→沈線(1mm)	大木10式併行	■	
78-18	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回	中期後葉小	■	
78-19	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴~底部	胴部:R.L.斜回 底部:胴代版(1超え1摺り)	大木10式併行	■	
78-20	S1-3106 柱穴8	堆積土	深鉢形	胴~底部	底部:胴代版(1超え1摺り)	大木10式併行	■	
78-23	S1-3106 柱穴9	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.縦回	覆鉢式	■	
78-24	S1-3106 柱穴9	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回	大木10式併行	■	外面赤彩(ベンガラ?)
78-25	S1-3106 柱穴9	堆積土	深鉢形	胴部	沈線→R.L.斜回	大木10式併行	■	
79-1	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	単軸器体形器5型R小	中期後葉→前期中葉	■	
79-2	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	口縁部	縄文・沈線	中期後葉小	■	V
79-3	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	口縁部	粘土・刺突文	大木10式併行	■	
79-4	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.斜回→沈線	大木10式併行	■	
79-5	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	沈線(4mm)→O段多条R.L.光境	大木10式併行	■	I
79-6	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	口縁部	L.R.縦回	大木10式併行	■	IV
79-7	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.縦回→沈線(2mm)弧線文	大木10式併行	■	IV
79-8	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯起帯→L.R.斜回→沈線→刺突文	覆鉢式	■	
79-9	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回→沈線(2mm)滑巻文・刺突文	覆鉢式	■	V
79-10	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	O段多条R.L.沈線(2mm)	覆鉢式	■	
79-11	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回	中期後葉	■	
79-12	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回→沈線(2mm)滑巻文	覆鉢式	■	
79-13	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.斜回	大木10式併行	■	接合部で割離
79-14	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	縄文→沈線(2mm)	覆鉢式	■	
79-15	S1-3106 堆積土	堆積土	脚付鉢	胴~底部	多数の縦位沈線	中期後葉	■	胴部は推定4単位
79-16	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯→折み→刺突文	円筒上層c式	■	
79-17	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	口縁部	隆帯波状文→刺突文	円筒上層c式	■	
79-18	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	結束1種R.L.・L.R.横回	円筒上層式	■	
79-19	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	R.L.斜回→半横帯による沈線	最古式小	■	外縁接合
79-20	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴~底部	R.L.斜回→沈線(2mm)弧線文	大木10式併行	■	外縁接合
79-21	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	胴部	L.R.縦回	時期不明	■	外縁接合、内面に赤色顔料付着
79-22	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	底部	R.L.斜回、胴代版(1超え1摺り)	大木10式併行	■	外縁接合
79-23	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	底部	胴代版(1超え1摺り)	時期不明	■	
79-24	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	底部	木葉底	時期不明	■	I
79-25	S1-3106 堆積土	堆積土	深鉢形	底部	胴代版(1超え1摺り)	大木10式併行小	■	外縁接合
81-1	S1-3107	床面	深鉢形	口縁~底部	4単位波状口縁 口縁部:波頂部に3単位の粘土帯貼付→滑巻びび文→S字文 胴部:R.L.横回・斜回編文	円口上層c-種別式	■	V 器高34.5cm 口径26cm
81-2	S1-3107	床下	深鉢形	口縁~胴部	L.R.横回→口唇部ミガキ→沈線(4mm)・胸文	円口上層c-種別式	■	81-3と同一体、口唇部・内面丁寧なコシガキ、外面スチ付着
81-3	S1-3107	床下	深鉢形	胴部	L.R.横回・胸文	円口上層c-種別式	■	81-2と同一体、口唇部・内面丁寧なコシガキ、外面スチ付着
81-4	S1-3107	床面	深鉢形	胴部	R.L.横回	円筒上層式	■	I
81-5	S1-3107	第1層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	中期後葉?	■	内面スチ付着



水上(2)遺跡

図番号	出土位置	層位	遺構	高さ	文様等の属性	分類	加工	備考
81-6	SI-3107	床面	深鉢形	胴～底部	無文	時期不明	Ⅳ	
82-1	SI-3109	第2層	深鉢形	胴部～底部	L,R斜削・縦溝	中期後葉～末葉	Ⅳ	底径11cm
85-1	SR-1004	伊体土器	深鉢形	口縁～底部	4単位の変形、隆部に刻み、右側面突起部直下の隆部にL字押圧、L,R横位向転輪文、刺突文。	円筒土層c式	I	器高24.3cm、口径19.7cm 底径7.3cm、811.5g
85-3	SR-02	第1・2層 壁方直土 第3層	深鉢形	口縁～胴部	L,R斜削・縦位	中期中葉～後葉	Ⅳ	口径27.57cm
85-4	SR-02	第2層 壁方直土	深鉢形	胴部	L,R斜削・沈線(4mm)	中期中葉～後葉	Ⅳ	
86-1	SK-1021	堆積土	深鉢形	胴部	沈線(2mm)によるL字文	大木10式併行	Ⅳ	外面スチ付着
86-2	SK-1021	堆積土	深鉢形	口縁部	粘土貼付・幅3mmの円形刺突文→半輪筋条体L縦削	大木10式併行	Ⅳ	
86-3	SK-1037	堆積土	深鉢形	胴部	L,R縦削・沈線(2mm)	大木10式併行	Ⅳ	内面ミダキ痕
86-4	SK-1037	堆積土	深鉢形	口縁部	R,L縦削・沈線(1mm)	大木10式併行	Ⅳ	
86-5	SK-1040	第1層	深鉢形	胴部	R,L斜削・沈線(4mm)	大木10式併行	Ⅳ	
89-2	SK-05	第1層	深鉢形	胴部	R,L横削	円筒土層式	I	
89-3	SK-3101	堆積土	深鉢形	口縁部	筋条体のような条線有り	中期後葉	Ⅳ	
89-4	SK-3101	第1層	深鉢形	胴部	O段多条R,L・L,R	円筒土層式	I	
89-5	SK-3101	確認面	深鉢形	胴部	R,L斜削	覆鉢式	Ⅳ	
89-6	SK-64	底面	深鉢形	口縁部	沈線→粘土貼	円筒土層d式	V	
89-7	SK-64	底面	深鉢形	胴部	R,L横削	円筒土層式	V	
89-8	SK-1028	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、R,L横削	円筒土層式	V	
89-9	SK-1032	堆積土	深鉢形	口縁部	L,R縦削	大木10式併行	Ⅳ	
89-10	SK-1034	堆積土	深鉢形	胴部	L,R縦削→粘土貼	円筒土層d式	I	
89-11	SK-1034	堆積土	深鉢形	口縁部	縦文→粘土貼	円筒土層d式	I	
89-12	SK-1048	堆積土	深鉢形	口縁部	複層L,R,L縦削	中期後葉	Ⅳ	
89-13	SK-1048	堆積土	深鉢形	胴部	半輪筋条体L縦削	覆鉢式	Ⅳ	
89-14	SK-1048	堆積土	深鉢形	胴部	複層L,R斜削→沈線(4mm)	覆鉢式	Ⅳ	
89-15	SK-1057	堆積土	深鉢形	胴部	複層L,R,L縦削	覆鉢式	Ⅳ	
89-16	SK-1057	堆積土	深鉢形	口縁部	隆部→L,R一沈線	覆鉢式	Ⅳ	外面脱化粧付着
89-17	SK-1057	堆積土	深鉢形	胴部	L,R縦削→沈線(2mm)縦線	覆鉢式	Ⅳ	
89-18	SK-1057	堆積土	深鉢形	口縁部	隆部帯付→L,R横削	円筒土層式	Ⅳ	
90-4	SK-14	堆積土	深鉢形	胴部	輪条状条線縦位	曼陀式	Ⅱ	90-5と同一体
90-5	SK-14	確認面	深鉢形	胴部	輪条状条線縦位	曼陀式	Ⅱ	90-4と同一体
94-1	遺構外	第1層	深鉢形	口縁～胴部	粘土貼による縦線文→刺突文・R,L横削	円筒土層c式	I	器高15.3cm、口径14.2cm 164.8g
95-1	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	L,R斜削→半輪筋条体側面押圧→円形刺突→口唇部L,R側面押圧	円筒土層d式	V	縁部含有 内面丁寧なロコミガキ
95-2	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	口唇部刻み・R側面押圧	円筒土層d式	V	縁部含有
95-3	調査区中央	第5層	深鉢形	口縁部	口唇部L,R側面押圧、口縁部L,R側面押圧・結実R	円筒土層d式	V	内面丁寧なミダキ
95-4	調査区中央	第5層	深鉢形	口縁～胴部	L,R斜削→R,L側面押圧・多輪筋条体R側面押圧	円筒土層d式	V	縁部含有 内面丁寧なミダキ
95-5	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	山形突起、隆部帯付文・横状把手・R,L側面押圧	円筒土層a式	V	器面化粧化有り、砂粒多量に含有
95-6	調査区南西	第5層	深鉢形	口縁部	横状把手・半輪筋条体R・刺突文・O段多条R,L	円筒土層c式	Ⅳ	
95-7	VW-81	第5層	深鉢形	口縁部	波状口縁・隆部・半輪筋条体R・R側面押圧・刺突文	円筒土層c式	I	
95-8	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	山形突起・横状把手・変形文・R側面押圧・R馬蹄形押圧	円筒土層b式	I	内面ロコミガキ
95-9	遺構外	第1層	深鉢形	胴部	横状把手・隆部・R側面押圧・縦文・(R・R・L)側面押圧・R馬蹄形押圧・R,L横削	円筒土層b式	V	
95-10	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	口縁部山形突起。R側面押圧・(R・L・L)側面押圧	円筒土層a式	V	縁部含有
95-11	調査区南西	第5層	深鉢形	口縁部	隆部→半輪筋条体L側面押圧・L馬蹄形押圧・(L・L・L)側面押圧	円筒土層b式	V	
95-12	VW-81	第5層	深鉢形	口縁部	半輪筋条体L側面押圧・縦文側面押圧	円筒土層b式	V	
95-13	遺構外	第5層	深鉢形	口縁部	隆部→半輪筋条体L側面押圧→刺突文	円筒土層c式	I	
95-14	遺構外	第1層	深鉢形	口縁～胴部	隆部→半輪筋条体L側面押圧→L側面押圧・刺突文	円筒土層c式	I	
95-15	遺構外	第5層	深鉢形	口縁部	内面湾門形突起あり。外面隆部・半輪筋条体L・刺突文	円筒土層c式	V	
95-16	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	内面横長の凹線(穿孔) 隆部→刺突文	円筒土層c式	I	
95-17	調査区北東	第1層	深鉢形	口縁部	横状把手、把手上には受け口状の凹み、隆部・半輪筋条体L側面押圧・馬蹄形押圧L	円筒土層b式	I	
95-18	VW-84	第1層	深鉢形	胴部	隆部→半輪筋条体R側面押圧→刺突文	円筒土層c式	I	
95-19	遺構外	第5層	深鉢形	口縁部	突起部、隆部→刺突文	円筒土層c式	I	
96-1	遺構外	第5層	深鉢形	口縁～底部	結束第1種R・L,R横削・隆部・半輪筋条体L側面押圧	円筒土層d式	V	口径51cm 残存高41cm 底化黒炭層、角閃石を多量に含有
96-2	遺構外	第5層	深鉢形	口縁～底部	結束第1種R・L,R横削	円筒土層式	I	
96-3	遺構外	第5層	深鉢形	口縁～胴部	O段多条R,L・L,R横削→隆部→へつ折み	円筒土層d式	Ⅳ	外縁接合、96-4と同一体
96-4	遺構外	第5層	深鉢形	口縁～胴部	O段多条R,L・L,R横削→隆部→へつ折み	円筒土層d式	Ⅳ	外縁接合、96-3と同一体
96-5	遺構外	第5層	深鉢形	口縁～胴部	口縁部・隆部→L側面押圧→刺突文・胴部L,R横削	円筒土層c式	Ⅳ	
96-6	遺構外	第5層	深鉢形	口縁～胴部	隆部→半輪筋条体L側面押圧→刺突文	円筒土層c式	I	
97-1	遺構外	第1・2層	深鉢形	口縁～胴部	結束第1種R・L,R横削	円筒土層式	I	
97-2	遺構外	第5層	深鉢形	胴部	結束第1種R・L,R横削→隆部→半輪筋条体L側面押圧	円筒土層d式	Ⅳ	
97-3	遺構外	第1層	深鉢形	胴～底部	L,R横削・北端結節	円筒土層式	I	
97-4	調査区中央	第1・2層	深鉢形	口縁～胴部	結束第1種R・L,R横削→隆部	円筒土層d式	I	
97-5	VW-81	第5層	深鉢形	胴部	L,R横削→粘土貼	円筒土層c式	I	器厚4mm
97-6	VW-81	第1層	深鉢形	口縁部	ボタン状貼付文・O段多条R,L・半輪筋条体L	円筒土層c式	Ⅳ	
97-7	VW-81	第1層	深鉢形	口縁部	波状口縁、口唇部肥厚 L,R横削→斜削・L,R側面押圧	円筒土層c式	V	
97-8	VW-81	第1層	深鉢形	口縁～胴部	L,R横削→下端上用刺突→隆部→粘土貼	円筒土層d式	I	粘土貼を貼り付けた箇所を決定する下抜きとして、先に刺突が施されている
97-9	VW-81	第5層	深鉢形	口縁～胴部	波状口縁・口唇部半輪筋条体L側面押圧・L,R斜削→沈線(2mm)縦線	円筒土層c式	Ⅳ	外面スチ付着
97-10	遺構外	第1層	深鉢形	口縁部	波状口縁、O段多条R,L横削→粘土貼	円筒土層d式	I	
97-11	VW-81	第1層	深鉢形	口縁部	L,R横削・R,L縦削・沈線(2mm)・粘土貼	円筒土層c式	V	
97-12	VW-80	第2・3層	深鉢形	口縁～胴部	波状口縁 口唇部L側面押圧→L,R横削	円筒土層c式	Ⅳ	外縁接合

図番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	分類	出土	備考
97-13	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	波状口縁 R.L横回・粘土紐	円筒上層e式	Ⅱ	
98-1	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	L.R横回→粘土紐貼付	円筒上層e式	I	98-2と同一個体
98-2	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	L.R横回→粘土紐貼付	円筒上層e式	I	98-1と同一個体
98-3	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	大型山形突起、隆帯貼付	円筒上層e式	Ⅱ	
98-4	調査区北東	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	二股山形 山形突起、口唇部；隆帯貼付→L.R横回 口縁部→胴部；R.L斜回・沈線・粘土紐	円筒上層e式	Ⅱ	外縁接合
98-5	調査区北東	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	二股山形 山形突起、隆帯→R.L斜回→沈線(3mm) →粘土紐	円筒上層e式	Ⅱ	
98-6	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	二股山形 山形突起、ボタン状貼付文、R.L斜回	円筒上層e式	I	
98-7	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	波状口縁、Y字状粘土紐	円筒上層d式?	V	
98-8	調査区南西	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	突起線面凹部、R.L横回・斜回→粘土紐拡張文→ 垂下隆帯→沈線(3mm)	円筒上層e式	V	
98-9	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁→胴部	4単位突起、突起線に比べて、R.L横回→垂下隆 帯、粘土紐による拡張文→沈線(4mm)	円筒上層e式	Ⅱ	器高26.2cm、口径(26.4)、698.7g
98-10	ⅧE-81	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	R.L斜回→粘土紐拡張文→沈線(3mm)	円筒上層e式	V	
98-11	ⅧE-81	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	L.R.L横回→垂下隆帯→凹形押圧・粘土紐	円筒上層e式	Ⅳ	
98-12	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	胴部	R.L横回→沈線(3mm)	円筒上層e式	V	
98-13	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	胴部	R.L横回→沈線(3mm)	円筒上層e式	V	
98-14	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	波状口縁 R.L斜回・縦回	中期	Ⅱ	外縁接合
99-1	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	口縁部；隆帯貼付→沈線隆帯文、 胴部；単軸条体系L.R縦回	複式式	Ⅱ	
99-2	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	口縁部隆帯、沈線隆帯文、L.R縦回	複式式	Ⅱ	
99-3	調査区南西	第Ⅰ層	深鉢形	口縁→胴部	隆帯、沈線隆帯文、拡張文、R.L斜回	複式式	Ⅱ	
99-4	調査区南西	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	波状口縁 L.R縦回→沈線(4mm)	複式式	Ⅳ	
99-5	調査区北東	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	口縁部凹部 O形多量L.L横回→沈線(3mm)拡張文	複式式	Ⅱ	
99-6	調査区北東	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	隆帯、沈線隆帯文、凹線(5mm)、刺突文	複式式	Ⅱ	
99-7	調査区北東	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	隆帯、沈線、L.R縦回	複式式	Ⅱ	
99-8	調査区中央	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	L.R縦回→沈線(2mm)	複式式	Ⅱ	
100-1	ⅧE-80	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	口縁→胴部	口縁部；隆帯→沈線、胴部；L.R斜回→沈線(2mm)→ 刺突文	複式式	Ⅱ	
100-2	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁→胴部	口唇部肥厚 L.R縦回・斜回	複式式	Ⅱ	
100-3	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚 L.R横回・斜回	複式式	Ⅱ	
100-4	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	胴部	縄文→印線(5mm)	複式式	Ⅳ	100-9と同一個体
100-5	ⅧE-80	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	胴部	単軸条体系R.L斜回→沈線(2mm)曲線文	複式式	Ⅳ	
100-6	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	L.R斜回→沈線(3mm)	複式式	Ⅱ	
100-7	遺構外	第Ⅱ層	深鉢形	胴→底部	R.L斜回	複式式	Ⅱ	
100-8	調査区北東	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	4単位波状口縁 L.R縦回	複式式	Ⅱ	
100-9	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	L.R縦回→沈線(5mm)	複式式	V	
100-10	ⅧE-100	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	R.L斜回→隆帯隆帯文	大木8b式	V	購入土器の可能性あり
100-11	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	R.L横回・粘土紐	大木8b式	V	購入土器の可能性あり
100-12	調査区北東	第Ⅱ層	深鉢形	胴部	突起、沈線縮小文	大木8b式	V	購入土器の可能性あり
100-13	調査区南西	第Ⅱ層	深鉢形	胴→底部	R.L斜回、底縁縮小文(1縮え1磨り)	中期後葉→末葉	Ⅱ	
100-14	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	胴→底部	無文	中期後葉?	Ⅱ	底部ケズリ
100-15	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	胴→底部	網代文(1縮え1磨り)、L.R縦回	大木の式併行	Ⅳ	
101-1	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁→胴部	口唇部粘土紐貼付、L.R斜回	大木の式併行	Ⅳ	
101-2	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	折返し口縁、L.R縦回→沈線凹面→沈線凹面文	大木の式併行	V	聖線
101-3	SI-1015	第Ⅰ層	深鉢形	口縁部	折返し口縁、L.R斜回	大木の式併行	Ⅳ	補修孔
101-4	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁→胴部	付加条L.L横回	大木の式併行	Ⅳ	
101-5	ⅧE-79	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	口縁→胴部	単軸条体系R→沈線(3mm)	大木の式併行	Ⅳ	外縁接合、聖線
101-6	ⅧE-79	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	口縁部	粘土紐・刺突文・O設多量L.R	大木の式併行	V	101-6と同一個体
101-7	ⅧE-79	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	口縁→胴部	粘土紐・刺突文・O設多量L.R・沈線(1mm)	大木の式併行	V	101-6と同一個体
101-8	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	口縁→胴部	L.R縦回→沈線(2mm)波状文	大木の式併行	Ⅳ	外面スス付着
101-9	ⅧE-79	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	胴部	L.R斜回→沈線(3mm)拡張文	大木の式併行	Ⅳ	
101-10	遺構外	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	L.R横回・斜回	大木の式併行	Ⅳ	外縁接合、底縁良好
101-11	ⅧE-81	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	R.L横回	中期末葉?	Ⅱ	
101-12	ⅧE-81	第Ⅰ層	深鉢形	胴部	縮部縮小L.R縦回	中期後葉?	Ⅱ	
101-13	ⅧE-100	第Ⅱ層	深鉢形	胴→底部	単軸条体系L.R縦回	中期後葉?	Ⅱ	
101-14	調査区北東	第Ⅰ層	台付鉢	脚部	脚部に限定4単位貫通孔、脚部には連続する刺突 文、胴部には単軸条体系R縦回→沈線縮小文	中期後葉?	Ⅳ	
101-15	ⅧE-100	第Ⅱ層	野付鉢	脚部	R.L斜回	中期?	Ⅱ	
101-16	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	口縁→胴部	波状口縁、R.L斜回・縦回→沈線(1mm)によるク ラク文、U字文	型式不明	V	
101-17	ⅧE-84	第Ⅱ層	深鉢形	口縁部	単軸条体系R斜回→単軸条体系R縦回	大木の式併行	Ⅱ	101-19と同一個体
101-19	ⅧE-84	第Ⅱ層	深鉢形	胴部	単軸条体系R斜回→単軸条体系R縦回	大木の式併行	Ⅱ	101-17と同一個体
101-20	ⅧE-81	第Ⅱ層	鉢形?	胴部	沈線→L.R横回	後期中間	Ⅳ	外縁接合、内面に産みとみられる磁粉付 着
101-21	ⅧE-81	第Ⅱ層	深鉢形	胴部	筋条文?	不明	V	内面に準々タテガキ 砂痕多量
101-22	ⅧE-80	第Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	胴→底部	縄文	不明	Ⅱ	底径5cm、内面に黒漆付着

### 胎土の分類

縄文土器の胎土には複数の種類があり、時期や型式によって異なる傾向がある。ここでは既報告(青埋文報第514集)で記載されている胎土の分類案を参照し、ほぼ同様の項目に従って本調査区出土土器の分類も試みている。

- I類**：粘土基質の量が高く、説和される鉱物組成や岩片組成の割合が低い特徴がある。また、海綿骨針の比率が高い例もある。
- II類**：白色粒子の組成比率が極めて高いに特徴があり、白色粒子は凝灰質に由来する岩片の可能性が高く、粒径が0.5mmを超える粗粒子の粒径組成が高い。
- III類**：白色粒子の組成比率はII類よりも低く、粒径も微細の量比が高い。粗粒砂や角閃石等の鉱物片も組成に含まれる。
- IV類**：粗粒砂の組成比率が高く、石英、長石等の鉱物片が含まれる。
- V類**：上記分類とは異なる組成をもつもの、もしくは風化等の理由で判別が困難であったものを一括する。

参照標を通して、I類はとりわけ円筒上層b～d式、IV類は大木10式併行以降の土器群との相関性が高いことが認められた。ただし、これらは内照による判断であることから、判別の誤差も生じていると考えられ、その特定と検証には顕微鏡観察に基づく岩石学的な胎土分析を行う必要がある。

表15 遺物観察表(石器)

調査号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
8-1	SI-1	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	60	29	9	12.1	II類b 縦長剥片
8-2	SI-1	確認面	スタレイバー	珪質頁岩	62	51	14	26.0	II類a 矩形剥片
8-3	SI-1	確認面	微細刺離剥片	珪質頁岩	67	28	9	15.9	一個縁 縦長剥片
8-4	SI-1	第2層	微細刺離剥片	珪質頁岩	60	48	14	33.4	II類a 矩形剥片
8-5	SI-1	第2層	スタレイバー	珪質頁岩	66	43	14	39.7	II類c
8-6	SI-1	確認面	石鏟	珪質頁岩	28	15	5	1.2	無茎凹基 先端欠損
9-5	SI-2	第1層	スタレイバー	珪質頁岩	74	51	10	40.4	I類b 矩形剥片
10-4	SI-5	堆積土	台石	安山岩	345	382	116	2210.0	磨痕-1面 敲打直-2面(側縁部)
15-5	SI-8	堆積土	石鏟	赤鉄鉱	23	15	4	1.8	有茎平基 アスファルト付着
15-6	SI-8	床面	石鏟	珪質頁岩	49	15	10	5.1	無茎尖基
15-7	SI-8	第1層	石鏟	珪質頁岩	64	23	10	11.0	有茎凸基 片側は基部の狭入弱い
15-8	SI-8	床面	石鏟	珪質頁岩	35	47	7	7.3	横型 粗刃
15-9	SI-8	堆積土	石鏟	珪質頁岩	48	59	5	10.9	横型 剥片末端部に調整
15-10	SI-8	床面一括	石鏟	珪質頁岩	40	30	12	11.6	片面加工 剥片先端部を両側から調整
15-11	SI-8	第3層	石鏟	珪質頁岩	58	29	14	16.2	片面加工 縦長剥片の先端部を部分的に調整
15-12	SI-8	第3層	スタレイバー	珪質頁岩	81	54	28	77.2	II類b 縦長剥片
16-5	SI-9	確認面	台石	敲打頁砂岩	513	263	87	2100.0	磨痕-1面 敲打直-1面
17-13	SI-17	堆積土	石鏟	珪質頁岩	18	11	3	0.5	無茎凹基
20-2	SI-1013	第3層	スタレイバー	珪質頁岩	88	56	18	80.7	I類a 縦長剥片 挟り部作出の可能性 石匙未製品か
21-1	SI-1014	第1・2層	二次加工剥片	珪質頁岩	89	57	33	118.8	一個縁に微細刺離あり 縦長剥片
24-1	SI-1016	堆積土	石鏟	カルセドニー	24	12	3	0.6	無茎凹基 先端部欠損
24-2	SI-1016	床面	スタレイバー	珪質頁岩	58	33	17	23.3	I類b 錯向 縦長剥片
24-3	SI-1016	床面	スタレイバー	珪質頁岩	47	63	22	37.7	I類c 矩形剥片
24-4	SI-1016	堆積土	石鏟	珪質頁岩	97	46	25	102.3	
30-7	SI-1034	堆積土	凹石	凝灰岩	112	67	56	508.3	凹み-3面
33-8	SI-1036	堆積土	石鏟	珪質頁岩	65	45	18	49.9	
34-3	SI-1039	堆積土	凹石	凝灰岩	133	59	40	425.2	凹み-2面 長円縁
34-4	SI-1039	堆積土	敲磨器	緑色凝灰岩	120	87	44	650.4	A類 磨痕-2面 凹み-1面 扁平槽円縁
34-5	SI-1039	堆積土	磨石	緑色凝灰岩	100	97	72	893.7	磨痕-2面
34-6	SI-1039 伊能方	第3層	微細刺離剥片	珪質頁岩	46	35	14	18.5	一個縁 矩形剥片
36-2	SI-1045	堆積土	石鏟	珪質頁岩	29	11	4	1.0	片面加工 剥片先端部を両側から調整 先端部摩滅
36-3	SI-1045	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	44	40	14	25.1	II類c 矩形剥片
36-4	SI-1045	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	98	52	19	88.2	II類c 側縁から末端まで連続的に調整 弧状
36-5	SI-1045	堆積土	敲石	珪質頁岩	50	63	18	55.7	二次加工剥片を転用 一部に敲打直
36-6	SI-1045	堆積土	微細刺離剥片	珪質頁岩	43	35	13	17.6	二個縁 矩形剥片
36-7	SI-1045	堆積土	微細刺離剥片	珪質頁岩	74	38	8	23.1	二個縁 縦長剥片
36-8	SI-1045	堆積土	磨製石斧	片岩	186	55	25	265.3	半身および基部欠損
36-9	SI-1045	堆積土	平均粒細平打石鏟	砂岩	155	83	38	484.6	機能面、両側、背面に加工
36-10	SI-1045	堆積土	凹石	安山岩	132	96	35	586.2	凹み-2面 扁平円縁
37-1	SI-1048	堆積土	石鏟	珪質頁岩	25	7	3	1.0	つまみ部をもたない、全面加工の棒状の石鏟
37-2	SI-1048	堆積土	石鏟	珪質頁岩	31	21	5	3.0	つまみ部あり 素材剥片の端部を両側から加工
37-3	SI-1048	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	41	31	8	9.5	素材剥片の打点側両面に両側からの剥離 二個縁に連続する微細な刻線
37-4	SI-1048	堆積土	石槍	珪質頁岩	55	30	14	22.6	両面加工 自然面あり 未製品か
37-5	SI-1048	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	74	43	14	31.0	横長剥片 側縁から末端部にかけて急斜度・弧状の刃部作出
37-6	SI-1048	堆積土	磨製石斧	片岩	130	25	7	26.6	片側は未加工 基部側欠損か
40-12	SI-1049	堆積土	石鏟	珪質頁岩	27	12	6	1.6	無茎尖基 先端部摩滅
40-13	SI-1049	堆積土	石鏟	珪質頁岩	34	14	5	2.4	有茎凸基 石鏟の可能性
40-14	SI-1049	堆積土	二次加工剥片	珪質頁岩	35	35	11	12.8	両極加撃痕あり
45-3	SI-1050	堆積土	凹石	緑色凝灰岩	105	96	30	381.1	凹み-2面 扁平円縁
45-4	SI-1050	堆積土	凹石	凝灰岩	76	56	46	224.6	凹み-2面 円縁
45-5	SI-1050	堆積土	石冠	流紋岩	111	61	50	558.0	北海道式石冠 磨痕-1面 敲打成形により浅い溝作出
45-6	SI-1050	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	81	43	18	63.0	縦長剥片 二個縁 主に背面と一部側面に調整
46-5	SI-1051	堆積土	石槍	珪質頁岩	82	27	18	34.5	素材剥片の末端部を先端側に 自然面あり 未製品か
47-1	SI-1051	堆積土	石鏟	珪質頁岩	91	39	22	59.8	縦長剥片の鋭利な基部側を先端部に 調整は部分的
47-2	SI-1051	堆積土	敲磨器	緑色凝灰岩	160	110	43	758.1	A類 磨痕-1面(線痕) 凹み-2面 扁平円縁
47-3	SI-1051	堆積土	石皿	凝灰岩	441	356	113	14500.0	有縁の石皿 敲打成形により縁作出
49-5	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	29	12	4	1.2	有茎凸基 アスファルト付着
49-6	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	28	14	5	1.3	有茎凸基 アスファルト付着 基部欠損
49-7	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	37	13	5	1.8	有茎平基 アスファルト付着
49-8	SI-1052	第1層	石鏟	珪質頁岩	38	13	7	2.8	有茎凸基 素材面一部残存
49-9	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	37	1	4	2.3	有茎凸基 先端部欠損
49-10	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	38	12	5	1.4	有茎凸基 先端部欠損
49-11	SI-1052	第1層	石鏟	珪質頁岩	43	12	7	3.4	無茎尖基
49-12	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	24	14	4	1.2	無茎平基 先端部・基部欠損
49-13	SI-1052	第1層	石鏟	珪質頁岩	39	15	7	3.6	無茎凹基 素材面一部残存
49-14	SI-1052	堆積土	石鏟	珪質頁岩	35	31	8	5.8	つまみ部あり 矩形剥片の末端側先端部を両面加工
49-15	SI-1052	堆積土	石槍	珪質頁岩	75	37	21	52.3	木葉状
49-16	SI-1052	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	73	26	10	27.0	II類c 縦長剥片の側縁から末端部にかけて、急角度の調整を連続的に施す 棒状

図番号	出土位置	層位	器種	石材	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
49-17	SI-1052 石函伊	伊内堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	70	38	11	23.7	二個縁 縦長削片 腹面に光沢あり
49-18	SI-1052	堆積土	両面調整石器	珪質頁岩	103	52	31	133.5	石槍未製品か 上端欠損部に二次加工痕
49-19	SI-1052 石函伊	第1層	石 錐	緑色凝灰岩	75	59	18.4	114.3	打ち欠き石錐
図50									
接合資料 1		堆積土	接合資料	珪質頁岩	66	87	34	138.0	削片 8 点の接合資料 微細刻離削片 4 点 風化面あり
接 1-1		堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	62	40	10	19.7	二個縁 縦長削片
接 1-2		堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	67	46	11	30.6	一個縁の一部 矩形削片
接 1-3		堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	41	62	12	25.7	二個縁 矩形削片
接 1-4	SI-1052	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	45	43	10	13.6	一個縁の一部 矩形削片
接 1-5	Pit1	堆積土	削片	珪質頁岩	45	35	8	11.9	矩形削片
接 1-6		堆積土	削片	珪質頁岩	42	37	7	7.3	矩形削片
接 1-7		堆積土	削片	珪質頁岩	53	56	13	21.8	矩形削片
接 1-8		堆積土	削片	珪質頁岩	33	33	7	7.4	一部に微細刻離 矩形削片
図51									
接合資料 2		堆積土	接合資料	珪質頁岩	78	60	23	84.1	削片 3 点の接合資料 二次加工削片 1 点 微細刻離削片 2 点 風化面あり
接 2-1	SI-1052	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	54	33	8	7.9	末端および一個縁の一部 縦長削片 折れ
接 2-2	Pit1	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	65	47	14	38.1	二個縁の一部 縦長削片
接 2-3		堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	53	60	14	38.1	版面打点個に二次加工 矩形削片
接合資料 3		堆積土	接合資料	珪質頁岩	35	40	26	28.5	削片 4 点の接合資料 微細刻離削片 2 点 風化面あり 10cm 未満の転石を石材とする
接 3-1		堆積土	削片	珪質頁岩	36	26	9	5.3	縦長削片
接 3-2	SI-1052	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	38	39	10	11.1	末端部の一部 矩形削片
接 3-3	Pit1	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	37	34	7	6.3	一個縁と末端部の一部 矩形削片
接 3-4		堆積土	削片	珪質頁岩	38	27	7	5.8	縦長削片
図52									
接合資料 4		堆積土	接合資料	珪質頁岩	64	48	18	36.7	削片 3 点の接合資料 微細刻離削片 2 点 風化面一部
接 4-1		堆積土	削片	珪質頁岩	37	35	10	10.0	矩形削片 折れ
接 4-2	SI-1052	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	38	31	9	10.0	二個縁 矩形削片
接 4-3	Pit1	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	54	41	11	16.7	一個縁の一部 矩形削片
接合資料 5		堆積土	接合資料	珪質頁岩	40	36	20	20.6	削片 2 点の接合資料 二次加工削片 2 点
接 5-1	SI-1052	堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	41	31	10	10.5	版面一個縁の一部に二次加工
接 5-2	Pit1	堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	33	34	11	10.1	表裏ともに背面 削片剥離過程の残核
接合資料 6		堆積土	接合資料	珪質頁岩	38	51	19	27.9	3 点の削片の接合資料 風化面あり 接合資料の表裏が腹面に 削片分離後それぞれ打面を覚えて削片剥離を実施
接 6-1	SI-1052	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	47	42	8	13.6	一部に微細刻離 矩形削片
接 6-2	Pit1	堆積土	削片	珪質頁岩	32	24	6	3.8	一個縁 矩形削片
接 6-3		堆積土	削片	珪質頁岩	28	43	10	10.5	矩形削片 折れ
図53									
接合資料 7		堆積土	接合資料	珪質頁岩	50	40	15	20.3	削片 2 点の接合資料 一部に風化面
接 7-1	SI-1052	堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	43	39	9	13.0	背面の一個縁に連続的な加工 矩形削片
接 7-2	Pit1	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	50	25	11	7.3	末端に微細刻離 縦長削片
53-1		堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	43	35	10	9.7	二個縁 背面両面調整 矩形削片
53-2	SI-1052	堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	47	34	11	19.1	一個縁 微細な連続的剥離 矩形削片
53-3	Pit1	堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	33	17	4	1.4	二個縁に右足状の快入部を作出 縦長削片
53-4		堆積土	二次加工削片	珪質頁岩	23	31	11	5.8	一個縁 二次加工+微細刻離 矩形削片
57-1	SI-1054	第8層	石 錐	珪質頁岩	32	12	5	1.4	つまみあり 縦長削片の先端部に二次加工
57-2	SI-1054	第8層	石 錐	珪質頁岩	31	18	6	3.3	無蓋平基 未製品か
57-3	SI-1054	第8層	石 槍	珪質頁岩	51	19	12	10.5	小型の石槍 先端部摩滅
57-4	SI-1054	第8層	石 槍	珪質頁岩	77	22	11	15.3	基部の一部欠損
57-5	SI-1054	第8層	石 錐	珪質頁岩	80	54	15	71.8	撥型 縦長削片の末端部にやや角度のある二次加工を施す 刀部は緩い弧状
57-6	SI-1054	第8層	スタレイバー	珪質頁岩	61	76	18	61.2	I 類 c 矩形削片の側縁から末端にかけて連続的に調整
57-7	SI-1054	第8層	スタレイバー	珪質頁岩	62	32	16	29.1	II 類 b 縦長削片 末端部欠損
57-8	SI-1054	第8層	スタレイバー	珪質頁岩	51	27	8	11.2	II 類 c 側縁から末端にかけて連続的に調整 縦長削片
57-9	SI-1054	第2層	スタレイバー	珪質頁岩	44	38	16	26.2	II 類 a 矩形削片
57-10	SI-1054	第8層	スタレイバー	珪質頁岩	108	61	25	116.0	II 類 a 大型の縦長削片 一個縁に連続的な調整
57-11	SI-1054	第2層	石 匙	珪質頁岩	60	38	7	13.0	縦長削片の幅員の打点個に調整を施しつまみ部を形成 粗刃の石匙 一個縁に微細刻離あり
58-1	SI-1054 石函伊	第1層	微細刻離削片	珪質頁岩	73	36	14	31.4	両側縁および末端部 縦長削片
58-2	SI-1054	第8層	微細刻離削片	珪質頁岩	70	40	11	20.4	二個縁 縦長削片 一部光沢あり
58-3	SI-1054	第8層	微細刻離削片	珪質頁岩	49	40	14	26.9	二個縁 矩形削片
58-4	SI-1054	第8層	磨製石斧	緑色片岩	82	52	24	167.3	スス付着 先端部摩滅
58-5	SI-1054	第8層	磨製石斧	緑色凝灰岩	60	20	10	18.5	小型の磨製石斧
58-6	SI-1054	第8層	台石	流紋岩	338	496	51	13000.0	台形状の削石 磨痕-2面
59-2	SI-1055	堆積土	磨製石斧	緑色凝灰岩	67	49	18	97.0	欠損、基部のみ
59-3	SI-1055	堆積土	石 錐	珪質頁岩	47	36	14	14.0	削片の突端部を利用 側縁に連続刻離を施し鎌部に
61-1	SI-1058	堆積土	スタレイバー	珪質頁岩	50	40	13	27.3	III 類 a
63-1	SI-1059	堆積土	石 錐	珪質頁岩	46	40	21	24.7	つまみ部あり 削片突端部を両面側から調整
63-2	SI-1059	堆積土	微細刻離削片	珪質頁岩	41	44	24	31.0	厚みのある矩形削片の一個縁に連続する微細刻離

水上(2)遺跡

図番号	出土位置	層位	器種	石材	口径(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	
63-3	SI-1059	堆積土	石 籠	珉質頁岩	50	26	12	17.2	円刀 風化面あり	
63-4	SI-1059	堆積土	磨 石	緑色凝灰岩	70	58	46	225.0	磨板-1面 (擦痕あり)	
67-9	SI-3101	堆積土	石 籠	珉質頁岩	19	10	4	0.6	無塞固基 基部欠損	
67-10	SI-3101	堆積土	石 籠	珉質頁岩	25	14	3	0.9	無塞固基 先端部欠損 アスファルト付着	
67-11	SI-3101	貼床	石 籠	珉質頁岩	33	17	6	3.2	有塞凸基	
67-12	SI-3101	石函内堆積土	石 籠	珉質頁岩	34	12	6	2.3	無塞実基	
67-13	SI-3101	堆積土	石 籠	珉質頁岩	37	13	7	3.4	無塞実基 先端部欠損 アスファルト付着	
67-14	SI-3101	堆積土	石 槍	珉質頁岩	41	16	9	5.5	小型の石槍	
67-15	SI-3101	貼床	微細刺離剥片	珉質頁岩	76	30	14	26.5	二個縁と木端部 縦長剥片	
67-16	SI-3101	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	35	35	12	13.2	田箱a 欠損	
67-17	SI-3101	貼床	融磨器	緑色凝灰岩	92	81	68	695.4	B類 磨板-1面 敲打-1面(端部)	
67-18	SI-3101	貼床	融磨器	凝灰岩	94	86	61	651.0	B類 磨板-3面 敲打-2面(両端)	
67-19	SI-3101	貼床	融磨器	流紋岩	116	83	56	669.8	B類 磨板-2面 敲打-1面(端部)	
68-13	SI-3102	貼床	石 籠	珉質頁岩	40	12	7	3.0	有塞凸基	
68-14	SI-3102	堆積土	石 籠	珉質頁岩	40	13	6	2.5	有塞凸基 アスファルト付着	
68-15	SI-3102	貼床	石 籠	珉質頁岩	48	13	6	3.5	有塞凸基 先端部欠損 アスファルト付着	
68-16	SI-3102	堆積土	石 籠	珉質頁岩	21	24	5	1.8	つまみ部あり(欠損) 剥片先端部利用 両面加工	
68-17	SI-3102	貼床	石 槍	珉質頁岩	49	30	14	15.2	基部部欠損	
68-18	SI-3102	堆積土	微細刺離剥片	珉質頁岩	54	30	9	9.7	二個縁 縦長剥片	
68-19	SI-3102	貼床	スタレイバー	珉質頁岩	88	71	34	176.4	I類a 厚みのある矩形剥片	
68-20	SI-3102	貼床	石 槌	珉質頁岩	26	45	33	44.5	弦角種(5cm程度) 作業面は1面	
68-21	SI-3102	貼床	石 槌	珉質頁岩	33	68	35	71.6	角種を素材とした石槌 風化面あり 打面転移線り返し	
70-13	SI-3103	床面直上	石 匙	珉質頁岩	72	24	9	13.9	縦型石匙 素材剥片の末端部につまみを形成	
70-14	SI-3103	床面直上	微細刺離剥片	珉質頁岩	75	30	13	28.6	二個縁 縦長剥片	
70-15	SI-3103	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	41	26	6	6.6	I類c 厚みのある末端部に急斜度の刃部 掻器	
70-16	SI-3103	床面直上	スタレイバー	珉質頁岩	37	35	9	12.3	II類c 矩形剥片の隣接する二辺に連続的に調整	
70-17	SI-3103	床面直上	スタレイバー	珉質頁岩	50	38	11	25.0	I類b 矩形剥片	
71-1	SI-3103	堆積土	磨 石	凝灰岩	111	91	50	663.1	磨板-2面	
71-2	SI-3103	石函内	台 石	凝灰岩	401	617	57	1500.0	磨板-1面(弱い) 6片(以上)に分割して石石に転用	
71-3	SI-3104	堆積土	台 石	砂岩	287	111	61	2171.7	磨板-2面(1面は擦痕)	
71-4	SI-3104	堆積土	石 籠	緑色凝灰岩	192	154	55	1914.8	敲打成形 機能面に黒色物質付着	
72-13	SI-3105	堆積土	石 籠	珉質頁岩	20	13	4	0.8	無塞固基 アスファルト付着	
72-14	SI-3105	第3層	石 籠	珉質頁岩	39	11	3	1.3	有塞凸基 アスファルト付着	
72-15	SI-3105	堆積土	石 槍	珉質頁岩	51	23	9	10.7	小型の石槍 素材剥片の末端部を先端に	
72-16	SI-3105	堆積土	石 槍	珉質頁岩	60	29	11	17.1	小型の石槍	
72-17	SI-3105	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	59	26	10	12.8	II類c 二個縁と木端部を連続して調整 縦長剥片	
72-18	SI-3105	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	42	40	14	18.3	田箱a 末端部を連続調整 矩形剥片	
72-19	SI-3105	堆積土	磨製石斧	緑色石	35	10	6	3.7	小型の磨製石斧	
75-8	SI-3106	柱穴1	堆積土	石 籠	珉質頁岩	81	34	18	50.5	刃部欠損
75-9	SI-3106	柱穴1	堆積土	微細刺離剥片	珉質頁岩	82	43	17	46.1	二個縁 黒色物質付着 縦長剥片 光沢(背面)
75-20	SI-3106	柱穴2	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	40	32	11	11.8	II類c 個縁から末端部にかけて急角度の刃部作出 光沢(背面) 掻器
76-13	SI-3106	柱穴3	堆積土	石 籠	珉質頁岩	36	26	8	6.9	両面加工 先端部欠損
76-14	SI-3106	柱穴3	堆積土	石 匙	珉質頁岩	80	45	9	25.7	縦型石匙 打点部に挿入部作出 二個縁に微細刺離
76-19	SI-3106	柱穴4	堆積土	二次加工剥片	珉質頁岩	58	53	21	43.5	末端部に二次加工 一個縁に連続する微細刺離
76-21	SI-3106	柱穴5	堆積土	石 籠	珉質頁岩	25	13	3	0.7	無塞平基 アスファルト付着
77-15	SI-3106	柱穴6	堆積土	石 籠	珉質頁岩	48	16	9	5.0	有塞凸基
77-16	SI-3106	柱穴6	堆積土	微細刺離剥片	珉質頁岩	39	36	11	13.9	二個縁 矩形剥片
77-26	SI-3106	柱穴7	堆積土	微細刺離剥片	珉質頁岩	53	41	13	23.0	三個縁 矩形剥片
78-22	SI-3106	柱穴8	堆積土	石 槍	珉質頁岩	69	25	12	19.6	小型の石槍
78-27	SI-3106	柱穴9	堆積土	石 槍	珉質頁岩	48	20	5	4.9	小型の石槍
79-26	SI-3106	堆積土	石 籠	珉質頁岩	17	14	3	0.5	無塞固基 アスファルト付着	
79-27	SI-3106	貼床	石 籠	珉質頁岩	26	11	4	0.7	有塞凸基	
79-28	SI-3106	堆積土	石 籠	珉質頁岩	33	23	5	2.6	つまみあり 剥片先端部を両側から加工して鎌部に	
79-29	SI-3106	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	71	42	15	46.7	田箱a 一個縁に微細刺離(粗刃削器)	
79-30	SI-3106	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	60	32	13	19.8	I類c 個縁から末端部に連続的な調整 一個縁に微細刺離 縦長剥片	
80-1	SI-3106	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	49	6	16	56.2	I類b 矩形剥片の背面末端部、腹面打点部に連続調整 打点部は急角度の刃部	
80-2	SI-3106	堆積土	スタレイバー	珉質頁岩	36	42	8	12.0	II類b 矩形剥片	
80-3	SI-3106	貼床	微細刺離剥片	珉質頁岩	45	23	6	4.9	二個縁 縦長剥片	
80-4	SI-3106	堆積土	磨 石	流紋岩	142	62	45	528.0	磨板-2面 長内縁	

図番号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
80-5	SI-3106	堆積土	融磨器	凝灰岩	130	89	35	586.8	B類 磨痕-2面 敲打-2面 扁平摩
80-6	SI-3106	堆積土	磨石	ひん岩	164	95	61	1354.0	磨痕-2面 (片面は軽微) 楕円摩
82-2	SI-3109	確認面	石 鏝	珪質頁岩	30	41	9	7.4	割片の末端部利用 一側縁を両面加工
84-1	SI-3104	炉石	石 皿	凝灰岩	173	219	55	1410.0	有縁脚付 磨痕-2面 機能面に黒色物質付着
85-2	SR-1004	第1層	石 鏝	珪質頁岩	35	14	6	3.0	有基凸基 アスファルト付着 先端部欠損
86-6	SR-1023	堆積土	石 鏝	珪質頁岩	35	15	6	1.6	有基平基
87-7	SR-1056	堆積土	石 鏝	珪質頁岩	26	19	3	1.0	無基凹基 アスファルト付着 長辺反り
86-8	SK-1040	堆積土	スタレイパー	珪質頁岩	49	32	10	13.8	II類c 側縁から末端にかけて連続的な急角度の刃部 縁器
89-1	SK-1048	堆積土	融磨器	凝灰岩	71	630	40	203.9	B類 敲打-2面 (片面は敲打成形により凹みを作出か) 磨痕 (ざらついたあらい) -1面 (側面) 円摩
90-1	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	流紋岩	155	85	36	532.5	
90-2	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰岩	157	81	29	448.1	敲打 (ざらつき) -1面
90-3	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰岩	175	108	48	1241.2	擦痕を伴う浅い溝が側面を全周する
90-4	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	流紋岩	132	79	34	586.6	
90-5	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰質砂岩	152	80	46	750.6	
90-6	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰岩	148	130	34	682.6	機能面に磨痕無し 未製品ないし未使用品
91-1	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	閃緑岩	184	91	49	1018.3	機能面2面
91-2	SK-14	第1層	中円形扁平打撃面器	流紋岩	112	82	57	660.4	欠損
91-3	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰質砂岩	157	77	34	580.6	
91-4	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰岩	150	74	31	512.9	敲打 (ざらつき) -1面
91-5	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	緑色凝灰岩	163	80	24	542.5	
91-6	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	砂岩	135	76	30	431.8	両端打ち欠き 未製品ないし未使用品
92-1	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	ひん岩	112	102	45	776.4	欠損部に磨痕 端部摩滅
92-2	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	砂岩	95	73	38	343.1	欠損部に磨痕
92-3	SK-14	確認面	中円形扁平打撃面器	凝灰岩	112	78	30	295.0	欠損部に磨痕
92-4	SK-14	確認面	磨石	流紋岩	87	64	27	197.6	磨痕-1面 (側面) 扁平楕円摩
92-5	SK-14	確認面	融磨器	流紋岩	109	92	56	747.0	B類 磨痕-2面 敲打-1面 (2側面+2端部)
92-6	SK-14	確認面	融磨器	緑色凝灰岩	79	71	41	208.2	A類 磨痕-1面 凹み-1面 欠損部がスレ (欠損後後も利用/欠損した確利用) 円摩
92-7	SK-14	確認面	融磨器	凝灰岩	113	93	48	666.7	D類 磨痕-1面 凹み-2面 敲打-2面 (2側面+1端部)
93-1	SK-14	確認面	凹石	凝灰岩	113	103	38	613.6	凹み-2面 扁平円摩
93-2	SK-14	確認面	凹石	凝灰岩	140	95	41	540.6	凹み-2面 扁平円摩 欠損した確利用
93-3	SK-14	確認面	融磨器	凝灰岩	125	59	56	454.0	A類 磨痕-2面 凹み-2面 断面三角形摩
102-1	VIJ-83	第I層	石 鏝	珪質頁岩	28	10	2	0.6	有基平基 アスファルト付着
102-2	VIJ-81	第II層	石 鏝	珪質頁岩	33	14	5	1.8	有基凸基
102-3	VIJ-80	第II→III層	石 鏝	珪質頁岩	38	16	6	3.4	有基凸基 アスファルト付着 基部欠損
102-4	VIJ-80	第II→III層	石 鏝	珪質頁岩	38	16	6	3.0	有基凸基
102-5	VIJ-80	第II→III層	石 鏝	珪質頁岩	41	14	6	3.0	有基凸基 アスファルト付着
102-6	VIJ-85	第I層	石 鏝	珪質頁岩	36	15	7	3.1	有基凸基 アスファルト付着 基部欠損
102-7	VIJ-81	第II層	石 鏝	珪質頁岩	39	14	6	2.5	有基凸基 基部欠損
102-8	VIJ-79	第II→III層	石 鏝	珪質頁岩	37	11	5	1.9	無基尖基 先端部欠損
102-9	調査区北東	第I層	石 鏝	珪質頁岩	40	12	5	2.4	無基尖基
102-10	VIJ-81	第II層	石 鏝	珪質頁岩	38	16	8	5.2	無基尖基
102-11	VIJ-83	視乱	石 鏝	珪質頁岩	45	15	7	3.8	無基尖基
102-12	VIJ-91	第II層	石 鏝	珪質頁岩	60	16	6	4.7	有基凸基
102-13	VIJ-88	第II層	石 鏝	黒曜石	15	12	3	0.3	無基凹基
102-14	VIJ-100	第I層	石 鏝	珪質頁岩	17	12	3	0.5	無基凹基
102-15	VIJ-86	第II層	石 鏝	珪質頁岩	23	14	4	1.1	無基凹基
102-16	VIJ-80	第II→III層	石 鏝	珪質頁岩	27	13	4	1.0	無基凹基 アスファルト付着
102-17	VIJ-81	第II層	石 槍	珪質頁岩	43	16	9	5.7	小型の石槍
102-18	出土地不明	第II→III層	石 槍	珪質頁岩	45	21	11	8.0	小型の石槍
102-19	VIJ-80	第II→III層	石 槍	珪質頁岩	51	23	9	10.3	小型の石槍
102-20	VIJ-81	第II→III層	石 槍	珪質頁岩	69	37	19	41.7	木葉状
102-21	VIJ-83	第II層	石 槍	珪質頁岩	60	33	13	23.0	木葉状
102-22	VIJ-81	第II層	石 槍	珪質頁岩	83	31	13	32.5	柳葉状
102-23	調査区南西	第I層	石 槍	珪質頁岩	53	26	9	10.7	基部欠損
102-24	VIJ-81	第II層	石 槍	珪質頁岩	68	23	17	27.7	先端部欠損
102-25	調査区南西	表証	石 槍	珪質頁岩	92	29	21	44.9	
102-26	VIJ-93	第II層	石 槍	珪質頁岩	13	49	22	151.9	擬型 直線状の刃部
103-1	VIJ-81	第II層	石 槍	珪質頁岩	104	38	23	81.4	弧状の刃部 急角度の調整
103-2	VIJ-99	第II層	石 槍	珪質頁岩	79	32	20	36.0	直線状の刃部
103-3	VIJ-80	第I→II層	石 鏝	珪質頁岩	33	12	5	1.9	つまみ部側欠損 割片の末端部に両面側削への加工
103-4	調査区中央	第II層	石 鏝	珪質頁岩	43	28	5	3.9	つまみ部あり 割片端部利用 両面加工 一側縁に連続刻線で縁部作出
103-5	VIJ-93	III層	石 鏝	珪質頁岩	36	27	9	10.6	つまみ部あり 割片端部利用 両面加工
103-6	VIJ-82	第II層	石 鏝	珪質頁岩	53	41	18	27.7	つまみ部あり 先端部摩滅 突端部のある割片を微少加工で縁部とする
103-7	VIJ-79	第II→III層	石 鏝	珪質頁岩	50	34	10	8.9	つまみ部あり 割片の突端部利用 一側縁には微少な刻線を連続的に施す
103-8	VIJ-81	第II層	スタレイパー	珪質頁岩	52	8	10	19.3	III類b 背面面は無縁刻線か
103-9	VIJ-82	視乱	スタレイパー	珪質頁岩	81	60	16	77.1	I類b 末端部欠損
103-10	調査区南西	第I層	スタレイパー	珪質頁岩	91	50	19	64.7	I類a 縦長欠損

水上(2)遺跡

調査号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
103-11	VM-100	第1層	スタレイバー	建質頁岩	47	56	15	35.1	I類c 矩形削片
103-12	VM-79	第Ⅱ～Ⅲ層	スタレイバー	建質頁岩	48	57	20	51.9	II類a 矩形削片
104-1	VM-82	第Ⅱ層	スタレイバー	建質頁岩	55	44	10	19.4	II類c 一個縁から末端にかけて連続剥離することで弧状の刃部を作出 縁部
104-2	調査区南西	第Ⅱ層	スタレイバー	建質頁岩	45	50	12	27.5	II類a 横長削片の末端部連続調整 一個縁に微細剥離
104-3	VM・NS5	第1層	スタレイバー	建質頁岩	47	54	11	18.9	II類b 矩形削片
104-4	VM-80	第Ⅱ～Ⅲ層	スタレイバー	建質頁岩	50	59	15	38.7	I類a ただし背面は不連続 矩形削片
104-5	VM-80	第Ⅱ～Ⅲ層	スタレイバー	建質頁岩	84	47	18	61.0	II類a 連続する微少な剥離 縦長削片
104-6	VM-81	第Ⅲ層	スタレイバー	建質頁岩	52	35	7	11.5	I類b 連続する微少な剥離 打点側に部分的剥離 石底の可能性
104-7	VM-80	第Ⅱ～Ⅲ層	スタレイバー	建質頁岩	44	34	12	23.0	II類c 一個縁に微細剥離
104-8	VM-80	第Ⅱ～Ⅲ層	石 匙	建質頁岩	51	31	10	15.2	打点側一個縁にノッチ 粗刃か 二個縁に微細剥離
104-9	SI-1057 周辺	第1層	礫石	建質頁岩	45	49	39	102.0	b 類 二次加工削片転用 剥離に敲打痕
104-10	VM-81	第Ⅱ層	礫石	建質頁岩	37	43	23	35.6	b 類 石核転用 敲打痕1面
104-11	調査区南西	第1層	異形石器	建質頁岩	26	18	5	1.7	両面加工
104-12	調査区南西	第Ⅱ層	異形石器	建質頁岩	43	24	6	4.2	両面加工
104-13	VM-87	第Ⅲ層	閃石	凝灰岩	117	50	36	246.4	凹み-3面
104-14	VM-101	第Ⅲ層	敲磨器	凝灰岩	159	80	38	619.8	C 類 凹み-2面 敲打-2面 長円縁の側面敲打
105-1	調査区北東部	第Ⅲ層	敲磨器	凝灰岩	150	81	51	728.6	A 類 磨痕(ざらつき)-1面 凹み-2面 長円縁の側面磨痕
105-2	調査区南西	第Ⅱ層	平円錐形打撃石	緑色凝灰岩	163	85	26	602.4	縁端部に抉り状の剥離
105-3	調査区北東部	第1層	石 皿	凝灰岩	128	97	50	755.3	自然の凹みか 凹み部を作出 端部に磨痕(あれ)
105-4	VM-85	第Ⅲ層	石 皿	凝灰岩	172	129	68	2179.8	自然の凹みを利用 磨痕-1面(顯著)
105-5	調査区南西	第Ⅲ層	石 皿	緑色凝灰岩	104	71	32	262.2	自然の凹みを利用 磨痕(痕) -1面
105-6	調査区南西	第1層	石 錘	凝灰岩	72	54	24	130.6	打ち欠き石錘
105-7	調査区中央部	第Ⅱ層	磨製石斧	緑色凝灰岩	113	17	16	51.7	側面に擦切磨痕
105-11	VMS-83	第Ⅱ層	剥片	黒曜石	16	13	6	0.9	両端打撃痕あり

表16 遺物観察表(土製品)

番号	出土位置	層位	種類	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
16-4	SI-9	第1層	土器加工孔内物	大木10式併行	49	53	10	20.2	一部研磨 外面から穿孔 土器属性: RL
46-4	SI-1051	貼床	土器片加工円盤	大木10式併行	29	35	6	9.4	全周研磨 土器属性: L斜位施文
75-19	SI-3106 柱穴2	堆積土	土器片加工円盤	大木10式併行	40	47	6	15.8	一部研磨 土器属性: LR縦位 沈蝕
78-21	SI-3106 柱穴8	堆積土	土器片加工円盤	大木10式併行	32	42	6	12.4	一部欠損 土器属性: L斜位施文 外面炭化物付着
101-18		表採	用途不明土製品	大木10式併行	44	28	15	18.0	長軸方向に芯棒痕 正面・裏面に十字状の刺突文
67-7	SI-3101	床面	ミニチュア土器	後期初頭	47	47	13	32.6	丸底 RL横位-ジグザグ文・波頭文-口唇部刺突文
77-24	SI-3106 柱穴7	堆積土	ミニチュア土器	大木10式併行	47	47	13	32.6	底縁42 底径42
78-26	SI-3106 柱穴9	堆積土	ミニチュア土器	大木10式併行	48	48	13	32.6	底縁42 底径42
36-1	SI-1045	第4層	土偶	大木10式併行	108	105	27	285.9	2枚の粘土板を組み合わせて造形される
67-8	SI-3101	床面	土偶	大木10式併行	40	25	12	9.8	顔の部分のみが割部 眉丘から鼻梁には左右対称に刺突文が施文
101-23	調査区北東部	第Ⅱ層	土偶	大木10式併行	71	51	14	35.1	断面形は凸レンズ状を呈する 正面には印綫で正中線が表現される

表17 遺物観察表(石製品)

番号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
63-5	SI-1059	堆積土	石製品	凝灰岩	66	46	15	35.8	隅丸方形 中心に両側からの穿孔
105-8	調査区南西	第Ⅱ層	石製品	凝灰岩	101	68	27	151.0	円縁を半割し内部を削り抜いた形状 半割面擦痕無数 裏面(自然面)に磨痕
105-9	調査区北東部	第Ⅱ層	石製品	凝灰岩	54	36	6	14.2	両側からの穿孔あり 側面一部に磨痕
105-10	調査区中央部	第Ⅱ層	石製品	カルセドニー	27	5	5	1.4	両端部は求心面取(多角錐状)

## 第3章 水上(3)遺跡

### 第1節 検出遺構の概要と基本層序

#### 1 概要

本遺跡は、岩木川右岸の標高約170～175mの河岸段丘の先端部に位置している。東側には目屋ダム堰堤があり、ダム満水時には美山湖の湖底の一部となる。平成18年度に美山湖右岸下流域の確認調査で水上(3)遺跡として登録され、平成19年度にダム工事用道路の拡幅に伴い発掘調査されている。

平成19年度の調査では、土坑1基とピット4基が検出され、遺物では縄文時代後期末葉から末葉に比定される注口土器のみが集中して出土する特異な状況がみられた(青理文報第466集)。

平成23年度は、平成19年度の調査区に隣接する部分を主体に、未調査区域を加えて実施した。

検出した遺構は、土坑14基と焼土遺構9基であり、これらは段丘の東南端部分からのみ検出され、他の区域から遺構の検出はなかった。遺構の時期については、周辺から出土する土器の時期からみて縄文時代後期初頭から後期末葉とみられるが、フラスコ状土坑などは縄文時代前期末葉の可能性もある。

遺物は、縄文時代の土器が段ボール箱で2箱、石器が4箱出土した。大多数は遺構と同様に東南端部分の調査区から出土したもので、他からは土器片が数点出土したにとどまる。土器の時期は、縄文時代前期末葉から後期末葉にかけてのものであり、量的には前期末葉と後期初頭が大半を占める。

#### 2 基本層序(図106)

基本層序については、調査区内の2箇所で見出された。第Ⅲ層は、平成19年度の地層の調査所見とは異なっている。

第Ⅰ層はダム湖の堆積土で浸水期に現れる現表土である。

第Ⅱ層は黒褐色土(黒色土)で、第Ⅱ-1層は現代から縄文時代後期末葉の遺物を包含する。第Ⅱ-2層は炭化物粒を含む黒色土で、部分的に小規模な沢状の窪地である。

第Ⅲ層は黒褐色土で、縄文時代前期初頭から後期前葉の遺物を包含する。この層より確認される遺構もある。下位では、縄文時代前期初頭の土器が出土している。

第Ⅳ層は暗褐色土の地山層で、遺構の主体的な検出面である。平成19年度調査分報告書第466集に

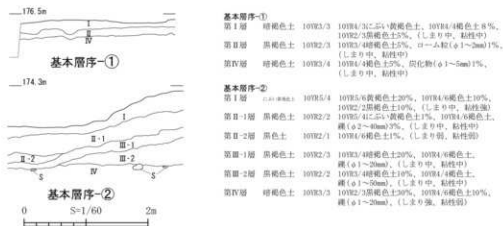


図106 基本層序図



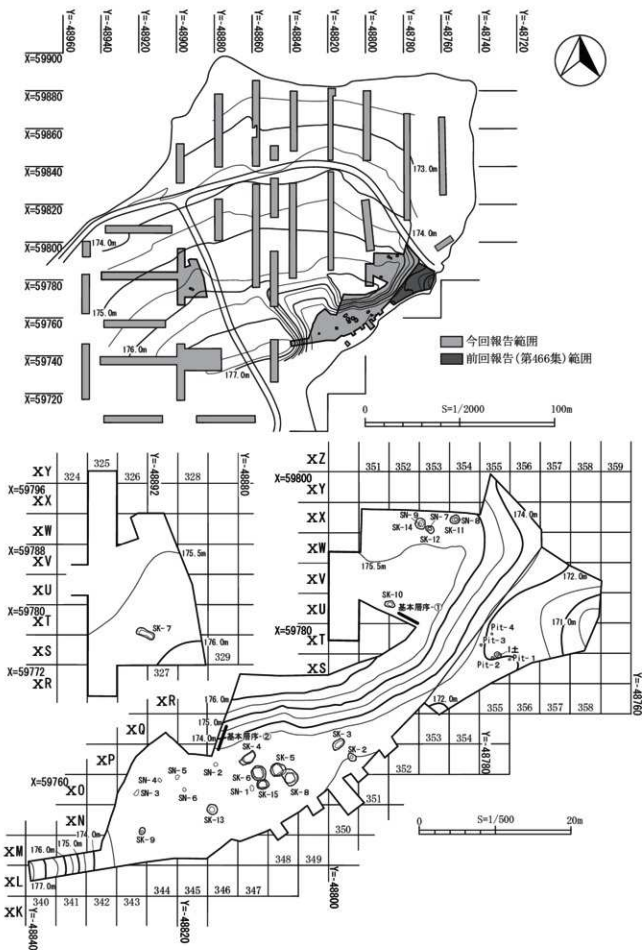


図107 グリッド・遺構配置図

記載されている第Ⅲ層に相当するもので、大型礫を層中に多量に含む無遺物層である。第Ⅳ層の下部層については深く掘り下げて確認はしていない。

## 第2節 検出遺構と出土遺物 (図108～114)

平成23年度で検出した遺構は、土坑14基と焼土遺構9基であり、最初に検出したSK-1は精査後に欠番となった。検出した土坑は形態別に次の3タイプに分けられる。一つは、平面形状が不整な楕円形で掘り込みが浅い皿状の土坑。次に、フラスコ状の土坑と、筒形状に掘り込まれた土坑がある。また、浅い皿状土坑の中には堆積土の上面に焼土が検出されるものがある。

土坑については番号順に記述するが、焼土遺構についてはまとめて記述する。

### 1 土坑 (SK-2～15) (図108～110)

#### 第2号土坑 (SK-2) (図108)

【検出位置】 XP-350グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.2m、短軸が約1.0mの楕円形である。検出面からの深さは10cmで断面形状は皿状であり、底面は平坦である。

【堆積土】 暗褐色土の単一層で自然堆積と思われる。

【出土遺物】 堆積土内からスクレイパー1点が出土している。

【小結】 帰属時期を特定できない。

#### 第3号土坑 (SK-3) (図108)

【検出位置】 XP-350グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.9m、短軸が約1.1mの楕円形である。検出面からの深さは30cmで断面形状はボウル状であり、底面にはやや起伏がある。

【堆積土】 3層に分けられる。自然堆積と思われ、黒色土と黒褐色土を主体にする。

【出土遺物】 第1層から土器片が少量出土している。

【小結】 帰属時期は明確に特定できないが、出土土器から縄文時代前期末葉の可能性がある。

#### 第4号土坑 (SK-4) (図108)

【検出位置】 XP-347グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約2.3m、短軸が約1.2mの歪な楕円形である。検出面からの深さは25cmで、断面形状は浅い皿状で底面はほぼ平坦である。

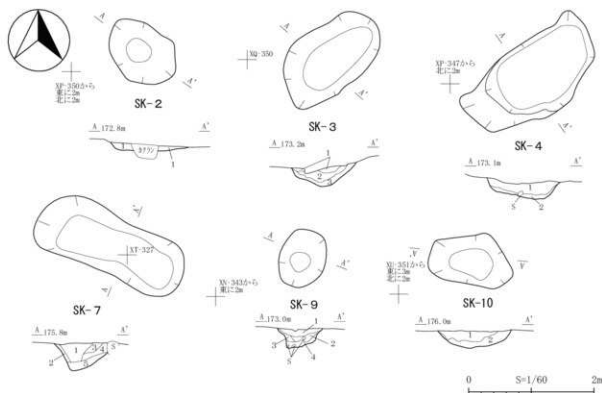
【堆積土】 2層に分けられる。褐色土を主体にし小礫を混入するもので、自然堆積と思われる。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 帰属時期を特定できない。

#### 第5号土坑 (SK-5) (図109)

【検出位置】 X0・XP-348グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で検出した。



**第2号土坑 (SK-2)**

第1層 暗褐色土 101R3/3 ローム粒(φ1~20mm)10%、小礫(φ1~15mm)2%、炭化物(φ1~2mm)1%。(しまり中、粘性中)

**第4号土坑 (SK-4)**

第1層 黒褐色土 101R2/3 褐色ローム(101R4/6)10%、暗褐色土(101R3/4)10%、礫(φ30mm)1%。(しまり中、粘性弱)  
 第2層 褐色土 101R4/6 暗褐色土(101R3/4)40%、礫(φ10~20mm)1%。(しまり中、粘性中)  
 第4層 褐色土 101R4/6 黒褐色土(101R2/3)10%、暗褐色土(101R3/4)3%。(しまり弱、粘性弱)

**第9号土坑 (SK-9)**

第1層 黒褐色土 101R2/3 褐色ローム粒(101R4/6)(φ1~5mm)3%、炭化物(φ1mm)1%、礫(φ2~10mm)1%。(しまり中、粘性中)  
 第2層 黒褐色土 101R2/3 暗褐色土(101R3/4)30%、褐色ローム(101R4/6)5%、礫(φ2~60mm)3%。(しまり中、粘性弱)  
 第3層 褐色土 101R4/4 暗褐色土(101R3/4)10%、礫(φ60mm)10%。(しまり中、粘性中)  
 第4層 褐色土 101R4/4 黒褐色土(101R2/3)5%、黒褐色土(101R2/3)5%、暗褐色土(101R3/4)10%。(しまり中、粘性中)

**第3号土坑 (SK-3)**

第1層 黒褐色土 101R2/2 ローム粒(φ~1mm以下)3%、小礫(φ3~5mm)2%、炭化物(φ~1mm以下)1%。(しまり中、粘性中)  
 第2層 黒色土 101R2/1 暗褐色土(101R2/2)10%、ローム粒(φ1~5mm)3%、凝灰岩(φ10~100mm)2%、炭化物(φ~1mm以下)1%未満。(しまり中、粘性中)  
 第3層 褐色土 101R4/4 暗褐色土(101R3/3)5%、小礫(φ20~60mm)3%、凝灰岩(φ5~20mm)2%。(しまり中、粘性中)

**第7号土坑 (SK-7)**

第1層 黒褐色土 101R2/2 暗褐色土ブロック(101R3/3)(φ40mm)1%。(しまり中、粘性中)  
 第2層 暗褐色土 101R3/3 礫(φ20~40mm)55%。(しまり中、粘性やや強)  
 第3層 黒褐色土 101R2/2 ローム粒(φ1~5mm)3%。(しまり中、粘性やや強)  
 第4層 黒褐色土 101R2/3 礫(φ20~100mm)35%。(しまり中、粘性やや強)  
 第5層 暗褐色土 101R3/4 褐色土(101R4/4)5%、礫(φ25~60mm)7%。(しまり強、粘性やや強)

**第10号土坑 (SK-10)**

第1層 暗褐色土 101R3/4 炭化物(φ1~4mm)2%。(しまり中、粘性中)  
 第2層 暗褐色土 101R3/3 暗褐色土(101R3/4)3%、褐色土(101R4/4)ブロック(φ5mm)2%、炭化物(φ1~8mm)2%。(しまり中、粘性中)

図108 土坑①

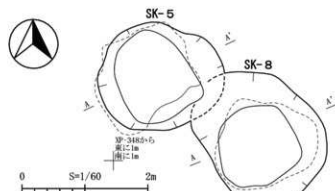
【重複】 第8号土坑と重複するが新旧は不明である。

【規模と形状】 開口部の長軸が約2.0m、短軸が約1.8mある。断面形状はフラスコ状で、検出面からの深さは125cmで、底面は平坦である。

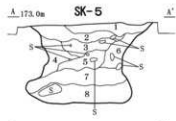
【堆積土】 8層に分けられる。褐色土が主体の土で大型の礫を混入し、礫は投棄された可能性もある。

【出土遺物】 堆積土中から多量の土器片、スクレイパー1点と剥片2点、礫石器3点が出土している。特に第7層からは、円筒下層d1式土器が多く出土しており出土量の半数を占める。廃棄されたものと考えられる。

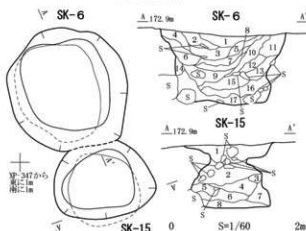
【小結】 出土土器から、縄文時代前期末葉円筒下層d1式期に帰属するものと考えられる。



- 第5号土坑 (SK-5)**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土(5YR3/2)20%、暗褐色土(10YR3/4)20%、炭化物(φ1~2mm)1%、(しまり中、粘性弱)、焼土粒入り
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR2/3)10%、褐色ローム粒(10YR4/6)φ1mm5%、礫(φ2~80mm)5%、(しまり中、粘性弱)
- 第3層 二色土褐色土 10YR4/3 暗褐色土(10YR3/4)5%、黒褐色土(10YR2/3)5%、礫(φ2~100mm)5%、炭化物(φ1~10mm)3%
- 第4層 二色土褐色土 10YR3/3 褐色ローム(10YR4/6)20%、暗褐色土(10YR3/4)10%、礫(φ2~50mm)20%、炭化物(φ1~15mm)1%、(しまり中、粘性弱)
- 第5層 二色土褐色土 10YR4/3 褐色土(7.5YR4/4)20%、暗赤褐色土(5YR3/6)20%、褐色ローム粒(10YR4/6)φ1mm3%、礫(φ2~100mm)1%、炭化物(φ1~5mm)1%、(しまり中、粘性中)
- 第6層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)40%、礫(φ2~100mm)5%、(しまり中、粘性弱)
- 第7層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4)30%、礫(φ2~70mm)1%、(しまり弱、粘性弱)、褐色土(7.5YR4/4)10%
- 第8層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4)40%、礫(φ2~200mm)5%、(しまり弱、粘性弱)

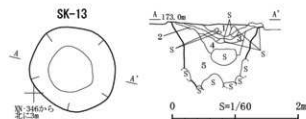


- 第8号土坑 (SK-B)**
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR2/3)10%、ローム粒(φ1~2mm)1%、(しまり強、粘性弱)
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~140mm)5%、ローム粒(φ5mm)1%、(しまり強、粘性弱)
- 第3層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4)20%、礫(φ10~60mm)5%、炭化物(φ1~5mm)1%、(しまり強、粘性中)
- 第4層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~80mm)3%、炭化物(φ1~2mm)1%、(しまり強、粘性中)
- 第5層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~20mm)2%、(しまり中、粘性中)
- 第6層 褐色土 10YR4/4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)5%、礫(φ20~60mm)3%、(しまり弱々強、粘性弱)
- 第7層 二色土褐色土 10YR4/3 礫(φ20~100mm)3%、(しまり強、粘性弱)
- 第8層 二色土褐色土 10YR4/3 礫(φ10~60mm)2%、(しまり中、粘性弱)



- 第15号土坑 (SK-15)**
- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土(10YR2/3)5%、(しまり強、粘性弱)
- 第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ30~80mm)3%、炭化物(φ1~2mm)1%未満、(しまり強、粘性中)
- 第3層 褐色土 10YR4/3 炭化物(φ1~3mm)1%、(しまり中、粘性弱)
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR3/3)7%、炭化物(φ1~4mm)1%、(しまり中、粘性中)
- 第5層 暗褐色土 10YR3/3 暗褐色土(10YR3/4)5%、炭化物(φ1~3mm)1%、ローム粒(φ1~2mm)1%、(しまり中、粘性中)
- 第6層 二色土褐色土 10YR4/3 暗褐色土(10YR3/4)2%、炭化物(φ1~5mm)1%、(しまり中、粘性中)
- 第7層 暗褐色土 10YR3/3 褐色土(10YR4/6)5%、黒褐色土(10YR2/3)2%、炭化物(φ1~3mm)1%、(しまり弱、粘性中)
- 第8層 二色土褐色土 10YR4/3 炭化物(φ1~5mm)1%、(しまり強、粘性弱)

- 第6号土坑 (SK-6)**
- 第1層 暗褐色土 10YR2/3 暗褐色土(10YR3/4)5%、褐色ローム粒(10YR4/6)φ1~2mm3%、礫(φ2~80mm)1%、(しまり中、粘性弱)
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 暗褐色土(10YR3/3)10%、褐色ローム(10YR4/4)5%、礫(φ2~120mm)3%、(しまり中、粘性弱)
- 第3層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)20%、黒褐色土(10YR2/3)3%、礫(φ2~120mm)2%、(しまり中、粘性中)
- 第4層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)5%、礫(φ2~3mm)3%、(しまり中、粘性弱)
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 褐色ローム(10YR4/4)10%、礫(φ2~4mm)5%、(しまり中、粘性弱)
- 第6層 二色土褐色土 10YR4/3 暗褐色土(10YR3/4)20%、礫(φ2~2mm)1%、(しまり中、粘性弱)
- 第7層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4)10%、黒褐色土(10YR2/3)1%、(しまり中、粘性弱)
- 第8層 二色土褐色土 10YR4/3 礫(φ2~120mm)10%、(しまり中、粘性弱)
- 第9層 暗褐色土 10YR3/4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)30%、黒褐色土(10YR2/3)10%、礫(φ2~220mm)10%、(しまり中、粘性弱)
- 第10層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)30%、礫(φ2~120mm)1%、(しまり中、粘性弱)
- 第11層 二色土褐色土 10YR4/3 暗褐色土(10YR3/4)10%、礫(φ2~60mm)3%、(しまり弱、粘性弱)
- 第12層 二色土褐色土 10YR4/3 暗褐色土(10YR3/4)5%、礫(φ1~2mm)1%、(しまり弱、粘性弱)
- 第13層 暗褐色土 10YR3/4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)3%、(しまり中、粘性弱)
- 第14層 暗褐色土 10YR3/4 褐色ローム(10YR4/4)5%、礫(φ2~20mm)3%、(しまり中、粘性中)
- 第15層 二色土褐色土 10YR4/3 褐色ローム(10YR4/6)30%、炭化物(φ1~5mm)1%、礫(φ2~180mm)10%、(しまり中、粘性弱)
- 第16層 二色土褐色土 10YR4/3 暗褐色土(10YR3/4)10%、褐色ローム(10YR4/6)20%、礫(φ2~100mm)10%、(しまり弱、粘性弱)
- 第17層 暗褐色土 10YR3/4 褐色ローム(10YR4/6)10%、礫(φ2~300mm)20%、(しまり中、粘性弱)



- 第13号土坑 (SK-13)**
- 第1層 暗褐色土 10YR2/2 暗褐色土(10YR3/4)10%、褐色ローム(10YR4/4)5%、礫(φ5~120mm)10%、(しまり中、粘性弱)
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR2/3)30%、褐色ローム(10YR4/6)2%、礫(φ2~130mm)5%、(しまり中、粘性中)
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 褐色ローム(10YR4/6)40%、礫(φ2~120mm)3%、(しまり中、粘性中)
- 第4層 暗褐色土 10YR2/3 暗褐色土(10YR3/4)10%、褐色ローム(10YR4/6)5%、礫(φ2~70mm)5%、(しまり中、粘性中)
- 第5層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(φ30mm)5%、(しまり中、粘性中)

図109 土坑②

#### 第6号土坑 (SK-6) (図109)

【検出位置】 X0・XP-347グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【重複】 第15号土坑と重複するが新旧は不明である。

【規模と形状】 開口部の長軸が約2.0m、短軸が1.9mの楕円形である。検出面からの深さは115cmで、断面形状はフラスコ状である。底面は地山礫層上面で礫により凹凸がある。

【堆積土】 17層に分けられる。褐色土を主体にする土で粘質土が互層堆積する。また、各層に礫を多量に混入する。

【出土遺物】 堆積土中から、少量の土器片と剥片が出土している。

【小結】 出土土器から、縄文時代前期末葉円筒下層d1式期に帰属するものと考えられる。

#### 第7号土坑 (SK-7) (図108)

【検出位置】 XS・XT-326・327グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約2.5m、短軸が約1.0mの長楕円形である。検出面からの深さは約45cmで、断面形状は箱形に近く、底面は歪である。

【堆積土】 黒褐色土を主体にし、5層に分けられる。

【出土遺物】 堆積土内から土器片が数点出土している。後期と前期末葉の土器が混在する。

【小結】 帰属時期は明確に特定できないが、出土土器から縄文時代後期の可能性がある。

#### 第8号土坑 (SK-8) (図109)

【検出位置】 X0-348グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【重複】 第5号土坑と重複するが新旧は不明である。

【規模と形状】 開口部の長軸が約2.2m、短軸が約1.9mの長楕円形である。検出面からの深さは約110cmで断面形状はフラスコ状である。底面は平坦である。

【堆積土】 8層に分けられる。褐色土を主体にする土で大型礫を第8層中に混入する。

【出土遺物】 土器細片数点と剥片、礫石器が1点出土している。

【小結】 土器は細片で掲載していないが縄文時代前期末葉のものであり、他に周辺の土坑の時期からも見て、前期末葉に帰属するものと考えられる。

#### 第9号土坑 (SK-9) (図108)

【検出位置】 XN-343グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.0m、短軸が約0.8mの楕円形である。検出面からの深さは約30cmで、断面形状は箱形に近く、底面はほぼ平坦である。

【堆積土】 黒褐色土と褐色粘質土を主体にする土で、4層に分けられる。

【出土遺物】 堆積土内から、土器細片数点と凹石が1点出土している。

【小結】 出土遺物からは本土坑の時期を特定できない。

## 第10号土坑 (SK-10) (図108)

【検出位置】 XU-351・352グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.4m、短軸が約0.9mの歪な楕円形である。検出面からの深さは約30cmあり、断面形状はボウル状で底面はほぼ平坦である。

【堆積土】 暗褐色土で、2層に分けられる。自然堆積の可能性がある。

【出土遺物】 剥片が出土している。

【小結】 帰属時期を特定できない。

## 第11号土坑 (SK-11) (図110)

【検出位置】 XX-354グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.3m、短軸が約1.1mのほぼ円形である。検出面からの深さは20cmで、断面形状は浅いボウル状で、底面は平坦である。

【堆積土】 暗褐色土を主体とする土で3層に分けられる。

【出土遺物】 剥片が出土している。

【その他】 堆積土第1層中で、焼土遺構(SN-8)を検出している。

【小結】 帰属時期を特定できない。

## 第12号土坑 (SK-12) (図110)

【検出位置】 XX-353グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.2m、短軸が約0.9mの歪んだ楕円形である。検出面からの深さは35cmで、断面形状は箱形状である。底面は平坦である。

【堆積土】 暗褐色土を主体とする土で2層に分けられる。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【その他】 堆積土第1層中で、焼土遺構(SN-7)を検出している。

【小結】 帰属時期を特定できない。

## 第13号土坑 (SK-13) (図109)

【検出位置】 XN-346グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【規模と形状】 長軸が約1.4m、短軸が約1.3mのほぼ円形である。検出面からの深さは100cmで、断面形状は筒形である。底面は地山礫層上面のため礫により凹凸がある。

【堆積土】 5層に分けられる。褐色土主体の土で大型の礫を混入し、礫は投棄された可能性もある。

【出土遺物】 土器片少量と礫石器が2点出土している。

【小結】 帰属時期は明確に特定できないが、出土土器から縄文時代後期初頭の可能性がある。

## 第14号土坑 (SK-14) (図110)

【検出位置】 XX-352・353グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

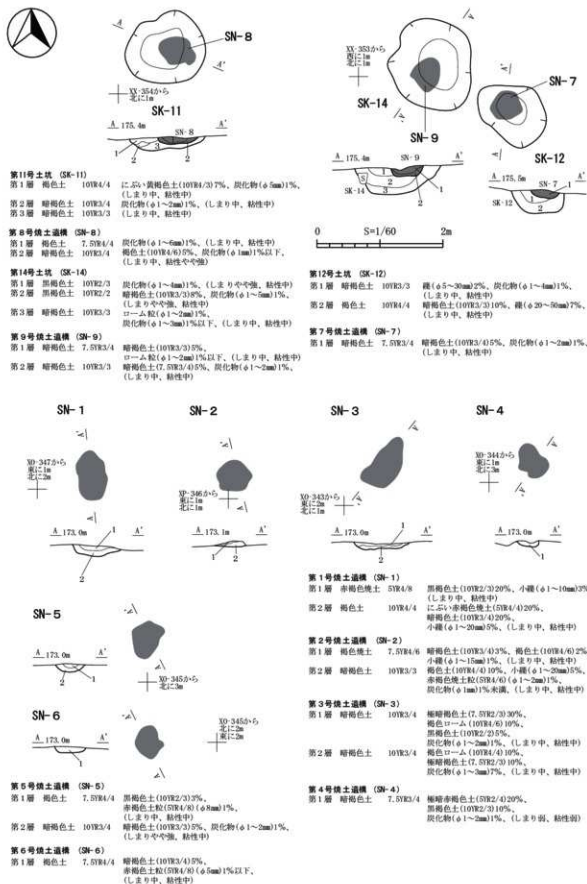


図110 土坑③・焼土遺構

【規模と形状】 長軸が約1.5m、短軸が約1.3mの不整な円形である。検出面からの深さは45cmであり、断面形状はボウル状で底面は平坦である。

【堆積土】 褐色土を主体とする土で3層に分けられる。自然堆積と思われる。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【その他】 堆積土第1層中で、焼土遺構（SN-9）を検出している。

【小結】 帰属時期を特定できない。

#### 第15号土坑（SK-15）（図109）

【検出位置】 X0-347グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。

【重複】 第6号土坑と重複するが新旧は不明である。

【規模と形状】 開口部の長軸が約1.6m、短軸が約1.3mのやや円形に近い。検出面からの深さは100cmで断面形状はフラスコ状である。底面は平坦である。

【堆積土】 8層に分けられる。褐色土を主体とする土で第1・第2層には大型の礫を多量に混入する。

【出土遺物】 土器片が16g出土している。

【小結】 土器は細片で掲載していないが縄文時代前期末葉のものであり、第8号土坑と同様に、他の周辺の土坑の時期から見て、前期末葉に帰属するものと考えられる。

## 2 焼土遺構（SN-I～9）（図110）

9基を検出した。個別の位置や層位、規模や形状については別表（表18）に示し、以下では、特徴等をまとめて記述する。

【検出位置と層位】 第1～6号の6基は、点在しているが調査区南西側にほぼまとまっている。これらの検出層位は第III層中から第IV層上面である。第7～9号の3基は、調査区北東側に位置する土坑の堆積土上面にあり、土坑の検出面は第IV層である。この3基の焼土遺構は、いずれも土坑のほぼ中央近くに位置している。

【規模形状と焼成層】 焼土遺構は、周辺の土壌とは異なる変色した範囲を捉えたが、明らかに地面が赤色に変化しているのは第1号だけである。焼成層の色調はほとんどが褐色で、土が被熱しているものの赤色変化は乏しい。しかし炭化物の量は周辺と区別されるほど多い。焼土範囲の形状は円形および楕円形と不整形がある。規模は、第1号と第3号焼土遺構の80×45cmの歪な楕円が最大で、他は50～40cm程とまとまっている。

【出土遺物】 焼土に伴う遺物としては、第2号から剥片、第3号から土器と敲石、第6号から土器が出土している。いずれの遺物も検出面上のものである。これ以外は出土していない。

【時期】 ほとんどが時期を特定できない。検出面上出土であるが、出土土器から第3号焼土遺構が縄文時代後期末葉、第6号焼土遺構が中期から後期の可能性がある。また、第1～6号までの調査区西側にあるもののなかには、前期末葉のフラスコ状土坑に関連して機能したものがあるものと推測される。



### 3 出土遺物

#### (1) 土器 (図111～114)

平成23年度の調査で出土した土器は、遺構内と遺構外を合わせて総重量10,375gである。出土土器の時期は、縄文時代前期初頭から後期末葉ないしは晩期までであり、このうち数量の多い時期は前期末葉と後期初頭である。これらの出土層位は第Ⅲ層および第Ⅳ層上面が多く、第Ⅱ層からも若干出土している。土器の大多数は破片で、復元されて全体形状がわかるものは少ない。以下に、遺構内と遺構外出土をまとめ、時期毎に記述する。

#### 第Ⅰ群 縄文時代前期の土器

**1類 前期初頭に相当する土器** (図113-1～3) 1と2は、ループ縄文が多段に施文され、内面には条痕と強いナデが施される。胎土には繊維を混入する。早稲田6類cないしは表館式に相当するものと思われる。3は0段多条L R縄文が施文され、内面は条痕が明瞭である。胎土に繊維を混入する。型式は特定できないが前期初頭に相当する土器と思われる。

**2類 前期末葉の土器** (図111-2～9、図112-1～3・11、図113-4～9) すべて円筒下層d1式に比定される土器である。図111・112は遺構内出土土器で大多数が第5号土坑から出土している。

図111-2は摩耗が著しいが縦走縄文が施されている。同3は小型の土器で、口縁部にR縄文の側面圧痕、頸部に微隆起帯、直下に結束第1種羽状縄文、胴部にはR L縄文が施文される。同4は口縁部にL R縄文の側面圧痕、その直下にL R縄文と単軸絡条体第1種が施文され、口唇端部にも同一の単軸絡条体が回転施文されている。同5はR縄文の側面圧痕、R L縄文の結束第1種羽状縄文と胴部にも斜め回転でR L縄文が施文される。同6は口縁にL縄文の側面圧痕と細かな刺突文、胴部上半にはR L縄文が、下半には単軸絡条体が施文される。

図112-1は図111-4と同一個体と思われる。同2は口縁にR縄文の側面圧痕、胴部にL R縄文が施文される。図113-4は口唇端部にR L縄文の回転施文、狭い口縁部にR縄文の側面圧痕、頸部に結束第1種羽状縄文と胴部にR L縄文が施文される。同5には縄束の側面圧痕とR L縄文が施文される。同6は小型土器とみられる。口縁に横位沈線と結節回転文が施文される。同7にはR L縄文が、同8には単軸絡条体第1種が施文される。同じく同9にもR L縄文の側面圧痕と回転文が施文される。

#### 第Ⅱ群 縄文時代中期の土器

**中期中葉に相当する土器** (図113-10・11) とともに隆帯が貼付けられる胴部片で、隆帯上の刺突から円筒上層c式の可能性がある。胴部の地文にはR L縄文が施文される。

#### 第Ⅲ群 縄文時代後期の土器

**1類 後期初頭の土器** (図112-8、図114-1～8) 図112-8は地文縄文の上から沈線による渦巻文が施文されるもので、第13号土坑から出土している。図114-1～3は同一個体である。1は胴部上半が直立し頸部から口縁部が外反する深鉢形である。小波状で無文の折返し口縁に作られており、文様は地文として単節L R縄文施文後に、頸部に2条の横位沈線文、胴部には弧状ないしは楕円形状の沈線文と縦位の連続するS字状沈線文が施される。4～8はL R縄文施文後に、4～6には沈線で長楕円形状が、7・8にはための横位沈線が施される。これらは十腰内I式直前のもと思われる。

**2類 後期前葉の土器** (図114-9～12) 十腰内I式に相当する土器ですべて緩い波状口縁の大型土

器である。同9と10は同一個体。幅の広い口縁部無文帯で、口唇は隆帯貼付けで厚く作られる。同11と12は同一個体。幅広の折返し口縁で、沈線で円形及び曲線文が施される。

**3類 後期末葉の土器** (図112-12、図114-13~21) 十腰内V式に相当する土器である。図112-12は第3号焼土遺構出土で無文地に太い沈線が施される。図114-13は壺形土器の口縁部片で口唇にR L縄文、口唇端部に沈線が施される。同14は無文の壺形土器の口縁部である。15はR L縄文に横位の沈線文とボタン状貼付文が施される。16~21は壺形注口土器である。16は注口部の破片が無い胴部上半と下半の破片である。小波状口縁で口唇と頸部にL R縄文を施文し、口縁部と胴部は無文でミガキが施される。頸部にはボタン状貼付文が施されている。底部は、丸底に小突起が付いた様な小さな上げ底状底部である。17~21もミガキ調整のみの無文土器である。

平成19年度の調査では、本3類のうち、注口土器だけが多量にまとまって(遺物集中ブロック)出土している。祭祀に関わる特別な意図があったものと思われる。これらの注口土器は型式上十腰内V式としたが、鈴木克彦の言う十腰内6式土器(鈴木2001)に対応する。

#### 第VI群 縄文時代中期から後期に相当する粗製土器

斜縄文だけが施される中期から後期の土器を一括した。(図112-4・5・14・15、図113-12~24) 図112-4は無文の口縁部。同5は摩耗しているが縦走縄文だろう。同15・16はL R縄文が施文されるもので、第6号焼土遺構から出土している。図113-12・13は口唇端部に縄が回転施文される。14~16は折返し口縁及び口縁部無文帯のものである。文様はL R縄文が施文されるものが多く、R L縄文が施文されるものは13と22である。23と24の原体は細く時期が異なる可能性もある。

#### (2) 石器 (図111・112・115)

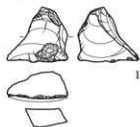
石器類は、遺構内と遺構外から剥片石器、礫石器を合わせて、18点が出土している。遺構内のは堆積土中から散漫に出土し、遺構外のは土器とともに第Ⅲ層から出土しており、特別な出土状況を示すものはない。以下に、遺構内と遺構外をまとめて各器種ごとに記述する。各石器の出土位置や石材等については観察表に示した。

**石匙** (図115-1) 1点の出土である。横型石匙である。横長剥片を素材にし、打点側につまみを設けており、背面は周縁調整されている。腹面遠端部には光沢が明瞭に残る。

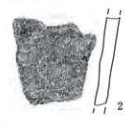
**スクレイパー** (図111-1・13、図115-2~4) 削器および搔器として使用されたと思われるものをまとめた。図111-1は第2号土坑から出土している。小剥片の遠端部に極微細な剥離が連続するもので、使用剥片の方が妥当かもしれない。図111-13は第5号土坑から出土している。薄い縦長剥片が素材で、背面の右側縁に剥離調整が左側縁にも微細な剥離がみられる。図115-2は縦長剥片の上下両端に、両面から抉り調整を施し、背面の両側縁にも剥離調整が施されている。同様な石器は、川内町(現むつ市)熊ヶ平遺跡からまとまった数量が出土しており横型石匙に分類される。図115-3は腹面の両側縁調整されるものである。図115-4は両面に粗い調整が施されるものである。

**石核** (図115-5) 1点の出土である。比較的大きな調整が両面に施されるが、刃部を意図したのものとは思えない。残核と捉えたが、腹面左辺側に極微細な連続した剥離があり使用剥片の可能性が高い。

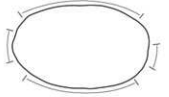
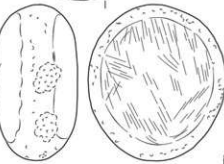
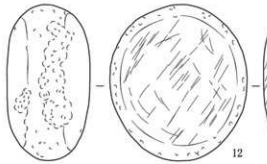
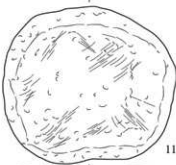
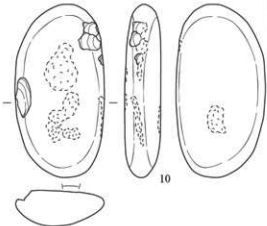
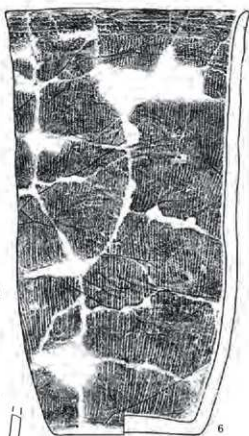
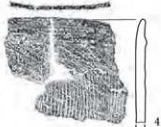
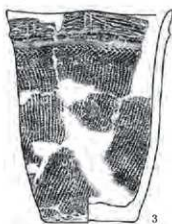
第2号土坑



第3号土坑



第5号土坑



0 S=1/2 5cm

0 S=1/3 10cm

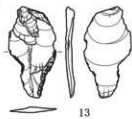
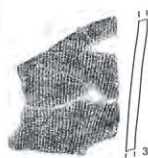
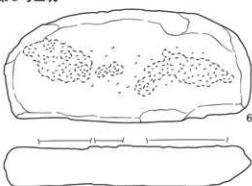


图111 土坑出土遺物

第6号土坑



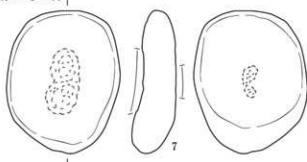
第8号土坑



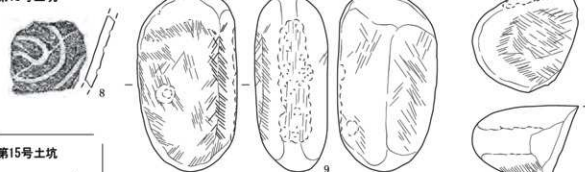
第7号土坑



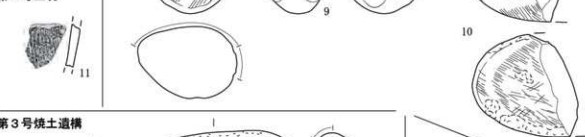
第9号土坑



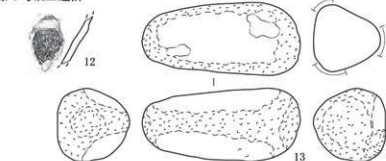
第13号土坑



第15号土坑



第3号烧土遺構



第6号烧土遺構

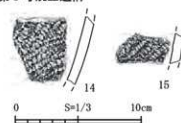


图112 土坑・烧土遺構出土遺物

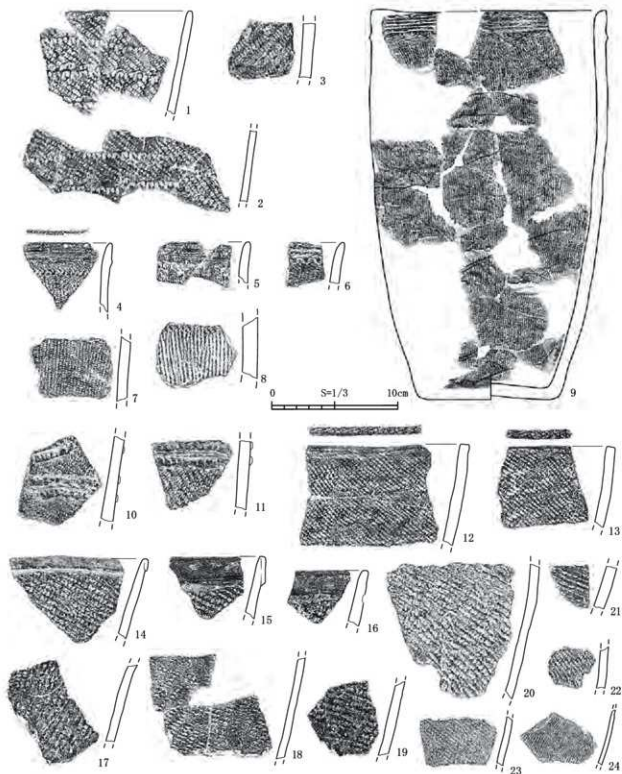


図113 遺構外出土土器①

**剥片** 図示掲載してはいないが、遺構内外から53点、1,190gの剥片が出土している。不整形な小剥片が多いが、ほかに図115-5より大型で核になり得る剥片もある。

**磨石** (図111-11・12、図112-9・10、図115-6・7) 第5・13号土坑と遺構外から各2点の総数6点が出土している。このうち5点は蔽く機能が複合している。図111-11と12は第5号土坑堆積土内出

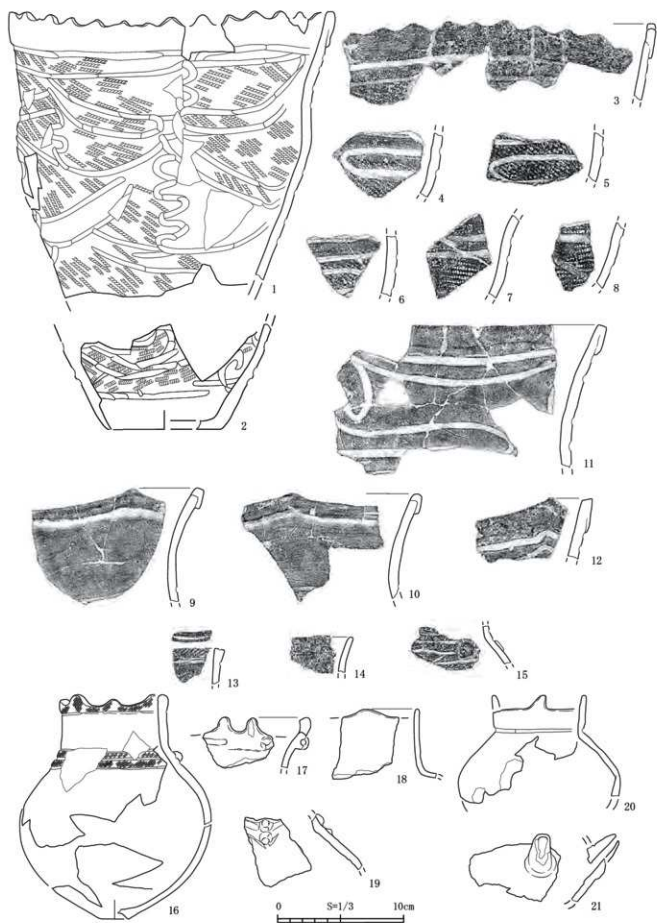


図114 遺構外出土土器②

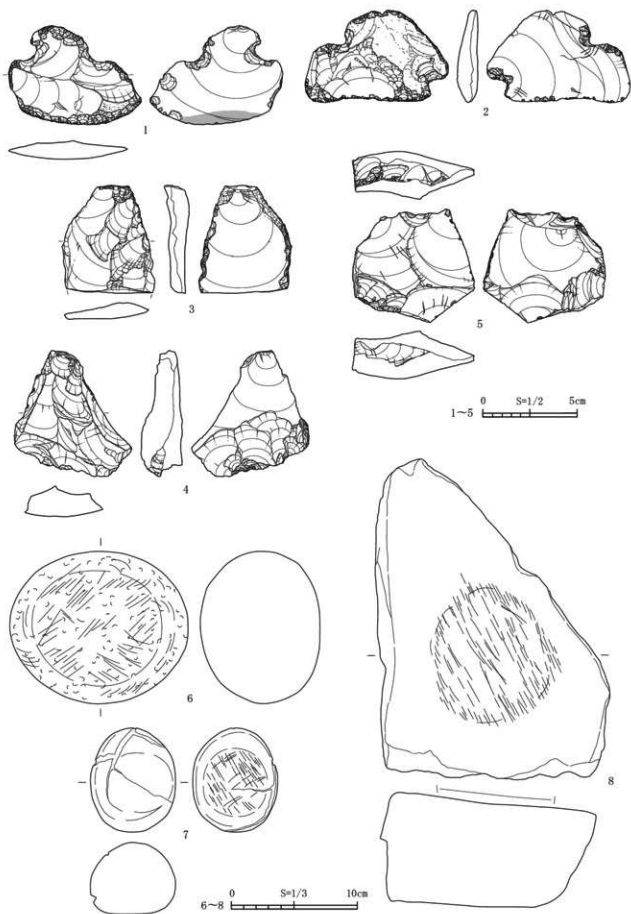


图115 遺構外出土石器

土である。11は器面全体にザラザラした擦りや弱い敲打痕をもつ。12は両器面にツルツルした磨りの摩耗と両側縁に敲打痕をもつ。図112-10と11は第13号土坑堆積土内出土である。10は楕円形礫の一面面にツルツルした磨り面が顕著にみられ、一側縁にはザラザラした擦りや弱い敲打痕をもつ。11は破損しているが、両器面にツルツルした磨り面と一側縁に敲打痕をもつ。図115-6は球状礫で器面全体にザラザラした擦りや弱い敲打痕をもつ。図115-7は平らな一器面が磨りに使われている。被熱して亀裂が入っている。

**敲石** (図112-13) 第3号焼土遺構検出面で取り上げたもので、1点出土している。断面が三角形の楕円形礫が用いられており、礫の両端部と稜線部に敲打に使用している。

**凹石** (図111-10・図112-6・7) 第5・8・9号土坑から各1点の合わせて3点出土している。図111-10は、楕円形礫の両器面と一側縁に敲打による浅いくぼみと剥離がみられる。第112図6は、板状礫の一面面に敲打による浅いくぼみが広がる。図112-7は、板状の円形礫の両器面に敲打によるくぼみがある。

**台石** (図115-8) 大型礫の平坦な一面がそのまま使われるもので、使用により中央部が円形状に摩耗し滑らかになっている。

表18 遺構一覧表

土坑(SK)						
遺構名	グラッド	平面	長軸 [cm]	短軸 [cm]	厚さ [cm]	備考
SK-2	XP-350	楕円形	1.2	1.1	10	
SK-3	XP-350	楕円形	1.9	1.1	30	
SK-4	XP-347	不整形円形	2.3	1.2	25	
SK-5	XP-348	不整形円形	2	1.8	125	
SK-6	XO-P-347	楕円形	2	1.9	115	
SK-7	XS-T-326・327	長楕円形	2.0	1	45	
SK-8	XO-348	長楕円形	2.2	1.9	110	
SK-9	XN-343	楕円形	1	0.8	30	
SK-10	XI-351・352	不整形円形	1.1	0.9	30	
SK-11	XV-354	不整形円形	1.3	1.1	20	
SK-12	XI-353	不整形円形	1.2	0.9	35	
SK-13	XN-346	不整形円形	1.1	1.3	100	
SK-14	XI-352・353	不整形円形	1.5	1.3	45	
SK-15	XO-347	不整形円形	1.6	1.3	100	

焼土遺構(SK)						
遺構名	グラッド	長軸 [cm]	短軸 [cm]	厚さ [cm]	備考	
SK-1	XO-347	80	45	15		
SK-2	XP-346	55	50	8	割片1点	
SK-3	XO-343	85	45	10	土器断面、敲石1点、講文時代後期小	
SK-4	XO-344	55	80	5		
SK-5	XO-345	55	45	12		
SK-6	XO-345	50	45	8	土器少量、講文時代中～後期	
SK-7	XI-353	45	80	12		
SK-8	XI-354	55	45	10		
SK-9	XI-353	50	45	15		

表19 遺物観察表(石器)

調査号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
111-1	SK-2	1層	スクレイパー	経質頁岩	28.7	32.1	12.7	8.2	破砕片-一縁刃に無磨削な連続剥離
111-10	SK-5	準礫土	凹石		139.0	72.0	29.0	430.7	両器面と一側縁に敲打痕・磨痕
111-11	SK-5	準礫土	磨石・敲石		139.0	126.0	106.0	2076.0	器面全体-強い敲打と磨り(ザラザラ)
111-12	SK-5	準礫土	磨石・敲石		125.0	110.0	67.0	1386.9	両器面磨り(ツルツル)両側縁敲打痕
111-13	SK-5	準礫土	スクレイパー	経質頁岩	86.1	21.6	4.2	2.4	薄-割片-両側縁に無磨削な連続剥離
112-6	SK-8	準礫土	凹石		190.0	91.0	33.0	987.8	磨り長楕円形礫→器面敲打痕
112-7	SK-9	準礫土	凹石		115.0	91.0	35.0	493.3	両器面磨り・敲打痕
112-9	SK-13	準礫土	磨石・敲石		805.0	83.0	39.0	485.7	両器面磨り(ツルツル)側縁敲打痕
112-10	SK-13	準礫土	磨石・敲石		144.0	80.0	39.0	998.9	一器面磨り(ツルツル)一側縁敲打と磨り(ザラザラ)
112-13	SK-3	検出面	敲石		127.0	59.0	58.0	441.4	両縁使用-両端部剥離
115-1	XO-P-347	單層	石匙	経質頁岩	56.5	65.5	10.5	30.7	機質・器面使用用片
115-2	XP-348	單層	石匙(スクレイパー)	経質頁岩	62.4	52.9	10.1	32.5	機質・平タイプ・ノッチスクレイパー
115-3	XP-349	單層	スクレイパー	経質頁岩	56.8	47.4	11.3	28.0	器面両側縁磨り(首面一側縁強い剥離)
115-4	XP-349	單層	スクレイパー(凹石)	経質頁岩	63.9	57.7	23.6	79.7	薄-割片-一縁刃に無磨削な連続剥離
115-5	XP-348	單層	凹石(機軸)	経質頁岩	62.2	60.6	21.4	61.6	器面縁部に強い剥離
115-6	XP-349	單層	磨石・敲石		142.0	123.0	96.0	2392.2	硬質磨石-強い敲打と磨り(ザラザラ)
115-7	XO-349	單層	磨石		84.0	68.0	36.0	407.9	一面平坦、縦長亀裂
115-8	XP-349	單層	台石		258.0	181.0	92.0	6400.0	一器面中央部に磨痕



表20 遺物観察表(土器)

調査号	出土位置	層位	器種	器名	文様等の属性	内面調整	胎土	分類	備考
111-2	SK-3	検出面	深鉢形	胴部下半	器底厚肌・縦土縄文?	ナゲ	砂・織織	内裏下層4式	
111-3	SK-5	準埋土	深鉢形	口縁~底部	横線山肌R・結東部1種羽状・R.L.斜回	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
111-4	SK-5	準埋土	深鉢形	口縁部	口縁部厚肌・横線山肌L.R.・車輪筋条体第1種	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
111-5	SK-5	準埋土	深鉢形	口縁部	横線山肌R・R.L.羽状・斜回	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	111-8同一個体
111-6	SK-5	準埋土	深鉢形	口縁~底部	横線山肌L・刺突・上半R.L.斜回・下半車輪筋条体	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
111-7	SK-5	準埋土	深鉢形	胴部	車輪筋条体第1種R	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
111-8	SK-5	準埋土	深鉢形	胴部	R.L.斜回	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	111-5同一個体
111-9	SK-5	準埋土	深鉢形	口縁部	横線山肌L・車輪筋条体第1種	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
112-1	SK-6	準埋土	深鉢形	口縁部	器底厚肌・横線山肌・L.R.横回・車輪筋条体第1種	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
112-2	SK-6	準埋土	深鉢形	口縁部	横線山肌R・R.L.斜回	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	112-3同一個体
112-3	SK-6	準埋土	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	112-2同一個体
112-4	SK-7	準埋土	深鉢形	口縁部	無文	黒色	砂・酸化鉄	後層?	
112-5	SK-7	準埋土	深鉢形	胴部	器底厚肌・縦土縄文?		砂・酸化鉄	後層?	
112-8	SK-13	準埋土	深鉢形	胴部	沈線・横位・横四角・渦巻文	ミガキ・ナゲ	砂	裏式式	
112-11	SK-15	準埋土	深鉢形	胴部	器底厚肌・横位体第1種R	ナゲ	砂・織織	内裏下層4式	
112-12	SK-3	検出面	深鉢形?	胴部?	無文・沈線・ミガキ	ミガキ	砂	後層?	
112-14	SK-6	検出面	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂・石英	内裏上層?	112-15同一個体
112-15	SK-6	検出面	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂・石英	内裏上層?	112-14同一個体
112-16	XT-300	西上層	深鉢形	口縁部	ループ縄文R.L.横回	黒色・ナゲ	砂・織織	前期原始	112-2同一個体?
112-2	XT-300	西上層	深鉢形	胴部	ループ縄文R.L.横回	黒色・ナゲ	砂・織織	前期原始	112-1同一個体?
112-3	XQ-351	西上層	深鉢形	胴部	0段垂条L.R	黒色・ナゲ	砂・織織	早稲束?~前期原始	
112-4	XQ-300	西上層	深鉢形	口縁部	横線山肌R・結東部1種羽状・R.L.斜回	ミガキ・ナゲ	砂・織織	内裏下層山式	
112-5	XP-500	埋層	深鉢形	口縁部	横線山肌L.R.斜回	ミガキ・ナゲ	砂・織織	内裏下層山式	
112-6	XP-500	埋層	深鉢形	口縁部	横位沈線・結部横回・R.L.斜回	ミガキ・ナゲ	砂・織織	内裏下層山式	
112-7	XQ-352	埋層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂・織織	内裏下層山式	
112-8	XP-352	埋層	深鉢形	胴部	車輪筋条体第1種R	ナゲ	砂	下層4式?	
112-9	XQ-300	西上層	深鉢形	口縁~底部	横線山肌R.L.・R.L.斜回	ミガキ	砂・織織	内裏下層山式	
112-10	XP-345	西上層	深鉢形	胴部	器底厚肌R.L.R.・後垂刺突	ナゲ	砂	内裏上層c式	112-11同一個体
112-11	XP-345	西上層	深鉢形	胴部	R.L.斜回・後垂刺突	ナゲ	砂	内裏上層c式	112-10同一個体
112-12	XO-300	埋層	深鉢形	口縁部	L.R.斜回	ミガキ	砂	中期~後期	
112-13	XO-300	埋層	深鉢形	口縁部	R.L.横回	ミガキ	砂	中期~後期	
112-14	XI-341	西上層	深鉢形	口縁部	首舌口縁・L.R.斜回	ナゲ	砂	中期	
112-15	XO-300	埋層	深鉢形	口縁部	首舌口縁・L.R.斜回	ミガキ	砂	中期	
112-16	XO-300	埋層	深鉢形	口縁部	口縁ミガキ無文・L.L.横回・L.R.斜回	ミガキ	砂	中期~後期	
112-17	XI-341	西上層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂	中期~後期	
112-18	XO-300	埋層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂	中期~後期	
112-19	XP-345	西上層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂	中期~後期	
112-20	XI-341	西上層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂	中期~後期	
112-21	XW-345	西上層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ナゲ	砂・石英	中期~後期	
112-22	不明	深鉢形	胴部	R.L.横回	ミガキ	砂・酸化鉄	中期~後期		
112-23	XQ-300	埋層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ミガキ	砂	中期~後期	
112-24	XQ-352	埋層	深鉢形	胴部	L.R.斜回	ミガキ・黒色	砂・石英	中期~後期	
114-1	XP-350	埋層	深鉢形	口縁~底部	波状口縁・地文縄文・沈線文	ミガキ	砂	裏式式	114-3同一個体
114-2	XO-300	埋層	深鉢形	胴部~底部	地文縄文L.R.斜回・沈線・渦巻文	ミガキ	砂	裏式式	
114-3	XP-350	埋層	深鉢形	口縁	波状口縁・器底厚肌・沈線	ミガキ	砂	裏式式	114-1同一個体
114-4	XO-300	埋層	深鉢形	胴部	地文縄文L.R.斜回・沈線横位/長條内筋文	ミガキ	砂・石英	裏式式	114-6同一個体
114-5	XO-300	埋層	深鉢形	胴部	地文L.R.斜回・沈線長條内筋文	ミガキ	砂	裏式式	
114-6	XO-300	埋層	深鉢形	胴部	地文縄文L.R.斜回・沈線横位/長條内筋文	ミガキ	砂・石英	裏式式	114-4同一個体
114-7	XP-300	埋層	深鉢形	胴部	地文縄文L.R.斜回・沈線横位	ミガキ	砂	裏式式	
114-8	XP-300	埋層	深鉢形	胴部	地文縄文L.R.斜回・沈線	ミガキ	砂	裏式式	
114-9	XO-300	埋層	深鉢形	口縁部	小鼓状首舌及無文口縁・沈線	ミガキ	砂	十層内1式	114-10同一個体
114-10	XP-300	埋層	深鉢形	口縁部	小鼓状首舌及無文口縁・沈線	ミガキ	砂	十層内1式	114-9同一個体
114-11	XO-300	埋層	深鉢形	口縁部	無文・沈線	ミガキ	砂・石英	十層内1式	114-12同一個体
114-12	XQ-300	埋層	深鉢形	口縁部	小鼓状口縁・沈線	ミガキ	砂・石英	十層内1式	114-11同一個体
114-13	沢	柴形	口縁部	口唇部横回・口唇上端沈線	ミガキ	砂・石英			
114-14	沢	柴形	口縁部	無文	ナゲ	砂	酸化鉄		
114-15	沢	柴形?	胴部?	地文縄文・沈線・ボタン状首舌	ミガキ・ナゲ	砂・酸化鉄			
114-16	沢	柴形/注口	口縁~底部	突起付波状口縁・口唇部器底L.R.横回・胴部無文	ミガキ・ナゲ	砂	十層内V式		
114-17	XW-345	西上層	柴形/注口	口縁部	可突起・無文・器具突起	ミガキ	砂	十層内V式	
114-18	XQ-352	埋層	柴形	口縁部	波状口縁・無文	ナゲ	砂	十層内V式	
114-19	XP-345	埋層	柴形/注口	胴部	無文・器具突起・沈線	ナゲ	砂	十層内V式	
114-20	XW-345	西上層	注口	口縁部	口唇突起・無文	ナゲ	砂	十層内V式	
114-21	XW-345	西上層	注口	胴部・注口部	無文	ナゲ	砂	十層内V式	

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 火山灰分析

弘前大学大学院・理工学研究科

柴 正 敏

水上(2)遺跡より採集された2個の火山灰試料(試料No. 1及びNo. 2)について、以下の観察・分析を行った。これら2試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井2003;青木・町田2006)。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー(以下EPMA)が用いられるようになってきた。本報告では、試料No. 1の1試料の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230、使用条件は加速電圧15 kV、試料電流 $6 \times 10^{-9}$ アンペアである。その結果を表1に示した。

ガラスの形態及び共存鉱物等は以下の通りである：

- (1) 試料No. 1 (採取地点：SI-1054、層位：第2層)
  - ・火山ガラス(軽石型、バブルウォール型)、オブシディアン(粗粒)、
  - ・斜長石(細粒及び粗粒)、エジリンオージャイト、アルカリ長石、石英(粗粒)、
  - ・単斜輝石(細粒及び粗粒)、斜方輝石(細粒及び粗粒)、鉄鉱、
  - ・径10mm程度の軽石粒子を含む。プラントオパールも認められる。
- (2) 試料No. 2 (採取地点：基本層序1)
  - ・火山ガラス(軽石型、バブルウォール型)、オブシディアン(粗粒)、
  - ・斜長石(細粒及び粗粒)、エジリンオージャイト、アルカリ長石、石英(粗粒)、
  - ・単斜輝石(細粒及び粗粒)、斜方輝石(細粒及び粗粒)、鉄鉱、ホルンブレンド(針状)、
  - ・径10mm程度の軽石粒子を含む。プラントオパールも認められる。

試料No. 1及びNo. 2は、主に白頭山苦小牧テフラ起源のガラスよりなる。両試料には、アルカリ長石、エジリンオージャイトが認められる。また、試料No. 1のガラスのEPMA分析値(表1)も既存のB-Tmのガラス組成データと良い一致を示す。一方、両試料とも、粗粒なオブシディアン、石英、単斜輝石及び斜方輝石や軽石粒子を含むことから十和田aテフラが混入していると判断される。試料No. 2には、針状のホルンブレンドが認められる。十和田八戸テフラ起源粒子を含んでいる可能性がある。

引用文献

青木かおり・町田 洋(2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 — K<sub>2</sub>O-TiO<sub>2</sub>図によるテフラの識別. 地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258.

Machida, H. (1999), Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress.

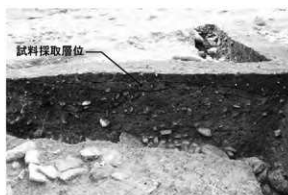
第四紀研究、第38巻、194-201.

町田 洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス — 日本列島とその周辺—. 東京大学出版会、pp. 336.

表 1 火山ガラスのEPMA分析値

試料名		SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O		
試料No. 1 SI-1054 2層	平均	67.20	0.34	14.59	5.22	0.14	0.11	1.18	5.69	5.53	n=5	WDS
	標準偏差	0.526	0.144	0.331	0.256	0.073	0.063	0.151	0.185	0.274		
	B-Tm (a)*	68.4	0.4	14.8	4.5	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	n=15	WDS
試料No. 2 基本層序 1	平均	74.77	0.16	10.48	4.50	0.10	0.02	0.28	5.15	4.53	n=7	WDS
	標準偏差	0.667	0.059	0.543	0.162	0.063	0.033	0.044	0.245	0.127		
	B-Tm (b)*	75.3	0.2	10.7	4.1	0.0	0.1	0.3	4.7	4.5	n=19	WDS

\*:Machida (1999) ; WDS:波長分散型EPMA ; n : 分析ポイント数



試料No. 1採取地点 (SI-1054)



試料No. 2採取地点 (基本層序1)

## 第2節 炭化種実同定分析

パレオ・ラボ

### 1 はじめに

青森県中津軽郡西目屋村に位置する水上(2)遺跡は、標高約170~180mの岩木川右岸の河岸段丘上に立地する、縄文時代前期末葉から中期末葉を中心とした遺跡である。ここでは、縄文時代中期中葉から末葉の竪穴住居跡から出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物の一端を明らかにする。

### 2 試料と方法

試料は、土壌を水洗して得られた29試料である。試料の内訳は、竪穴住居跡のSI-1から2試料、SI-7から1試料、SI-9から2試料、SI-17から1試料、SI-19から2試料、SI-1014から1試料、SI-1016から3試料、SI-1031から1試料、SI-1036から1試料、SI-1045から2試料、SI-1048から3試料、SI-1051から2試料、SI-1054から2試料、SI-1059から1試料、SI-1060から1試料である。試料の時期は、出土土器型式などから縄文時代中期中葉から中期末葉と考えられている。時期の詳細については、表1~3を参照されたい。

試料の採取及び水洗、炭化種実の抽出は、青森県埋蔵文化財調査センターによって行われた。試料は、最小0.5mm目の篩を用いて水洗された。種実の抽出・同定・計数は肉眼及び実体顕微鏡下で行った。同定された試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

### 3 結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核と、クリ炭化果実・炭化子葉の2分類群、草本植物ではサナエタデ-オオイヌタデ炭化果実1分類群の、計3分類群が得られた。この他に、科以下の同定ができなかった炭化種実を不明AからCにタイプ分けし、同定の識別点を欠く種実を同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した虫えいと子囊菌(塊を含む)が得られた。さらに、未炭化のヤナギタデ果実とタニソバ果実、キシギシ属果実、エノキグサ属種子、スミレ属種子、メヒシバ属果実、イヌビエ属有ふ果、キビ族有ふ果、スゲ属果実、スギナ近似種無性芽、昆虫遺体が得られたが、遺跡の立地から推定して、当時の生の種実は残存しないと考えられるため、現生の種実と判断した。

以下に、炭化種実の出土傾向を遺構別に記載する(同定不能炭化種実、虫えい、子囊菌を除く)。

SI-1：同定可能な種実は得られなかった。

SI-7：不明Cがわずかに得られた。

SI-9：オニグルミ(0.03g)と不明Bがわずかに得られた。

SI-17：同定可能な種実は得られなかった。

SI-19：同定可能な種実は得られなかった。

SI-1014：同定可能な種実は得られなかった。

SI-1016：クリ(0.20g)がわずかに得られた。

SI-1031：不明Aがわずかに得られた。

SI-1036：同定可能な種実は得られなかった。

表1 水上(2)遺跡から出土した炭化種実(1)(括弧内は破片数)

分類群	遺構名	SI-1		SI-7	SI-9		SI-17	SI-19		SI-1014
		採取位置		採取位置	採取位置		採取位置	採取位置		採取位置
		層		層	層		層	層		層
		試料番号		試料番号	試料番号		試料番号	試料番号		試料番号
		Pit 2	第1号 炉跡	炉跡	炉跡		炉跡	炉跡	炉跡	炉跡
		1層	1層	1層下部	1層		2層	1層	2層	炉面上
		②-1	②-5	③-10	②-4	③-11	③-12	③-3	③-5	②-7
		時期		時期	時期		時期	時期		時期
		大木10式併行		円筒上層 d式	大木10式併行		覆林式	円筒上層d~e式		円筒上層 d~e式
		水洗重量(g)		水洗重量(g)	水洗重量(g)		水洗重量(g)	水洗重量(g)		水洗重量(g)
		2400	1600	1700	1500	2780	600	1150	2250	520
オニグルミ	炭化核				0.03g (2)					
不明B	炭化子葉					(1)				
不明C	炭化種実			1						
同定不能	炭化種実						(1)			
子囊菌	炭化子囊	13 (3)	13	3	3			7 (2)		1 (2)
ヤナボタゲ	果実				(1)					
エノキグサ属	種子							1		
メヒシバ属	果実				4 (7)					
イヌビエ属	有ふ果				3 (1)					
キビ族	有ふ果				5 (9)					
昆虫					(+)			(+)		

1-9:+

表2 水上(2)遺跡から出土した炭化種実(2)(括弧内は破片数)

分類群	遺構名	SI-1016		SI-1031	SI-1036	SI-1045	SI-1059	
		採取位置		採取位置	採取位置	採取位置	採取位置	
		層		層	層	層	層	
		試料番号		試料番号	試料番号	試料番号	試料番号	
		炉跡		炉跡	土層(⑩32-1)内部	炉跡	炉跡	
		1層		1層	-	1層	火床面上	
		②-2	②-3	②-8	③-6	③-9	①-1	①-2
		時期		時期	時期	時期	時期	
		円筒上層c式		円筒上層 c~d式	円筒上層d式	大木10式併行	覆林式	
		水洗重量(g)		水洗重量(g)	水洗重量(g)	水洗重量(g)	水洗重量(g)	
		600	1700	550	2850	500	3800	900
オニグルミ	炭化核	0.15g (5)	0.05g (1)				0.80g (37)	
不明A	炭化種実				1			
同定不能	炭化種実				(3)		(3)	
虫食い	炭化種実		1					
子囊菌	炭化子囊	13	59	21 (1)	38 (1)	1	45 (4)	3 (1)
タニソバ	果実				1			
エノキグサ属	種子						1	
スマレ属	種子						1	
スグ属	果実							(1)
スギナ近似種	無性芽				11 (1)			
昆虫					(+)			

1-9:+

表3 水上(2)遺跡から出土した炭化種実(3)(括弧内は破片数)

分類群	遺構名	SI-1048			SI-1051	SI-1054		SI-1060	
		採取位置			採取位置	採取位置	採取位置	採取位置	
		層			層	層	層	層	
		試料番号			試料番号	試料番号	試料番号	試料番号	
		第1号炉跡	第2号炉跡	第1号炉跡	炉跡 (前庭)	炉跡 (右側炉)	炉跡		
		2a層	2b層	火床面上	5層	1層	1層		
		③-8	③-2	③-4	④-2	④-3	④-5	④-6	④-4
		時期			時期	時期	時期	時期	
		大木10式併行			覆林式	大木10式併行		円筒上層c式	
		水洗重量(g)			水洗重量(g)	水洗重量(g)	水洗重量(g)	水洗重量(g)	
		2500	2400	2580	780	1850	2350	2000	2150
オニグルミ	炭化核				0.01g (8)		0.01g (2)		
不明	炭化果実				0.01g (12)			0.01g (3)	
不明	炭化子葉				0.01g (1)			0.01g (1)	
サナエタゲ	炭化果実				(4)				
同定不能	炭化種実			(2)			1		
子囊菌	炭化子囊	19 (1)		1		(2)	19 (1)	328 (2)	2
ギンギン属	果実		1						
昆虫							(+)		

1-9:+

SI-1045: オニグルミ (0.80g) が少量得られた。

SI-1048: 同定可能な種実は何れも得られなかった。

SI-1051: オニグルミ (0.01g) とクリ果実 (0.01g)、クリ子葉 (0.01g) がわずかに得られた。

SI-1054: オニグルミ (0.01g) とサナエタデ-オオイヌタデがわずかに得られた。

SI-1059: オニグルミ (0.06g) がわずかに得られた。

SI-1060: クリ果実 (0.01g) とクリ子葉 (0.01g) がわずかに得られた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科

すべて1/2以下の破片である。完形ならば側面観は広卵形。本来は縦方向の縫合線があるが残っていない。表面には浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖るものが多い。最大の破片で、残存長11.5mm、残存幅11.7mm、残存厚5.8mm。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科

果実は、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。殻斗着痕は残存していない。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。最大の破片で、残存長2.6mm、残存幅2.0mm。子葉は、完形ならば側面観が広卵形で、表面一面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。最大の破片で、残存長8.4mm、残存幅5.2mm。

(3) サナエタデ-オオイヌタデ *Persicaria scabra* (Moench) Mold.-*Persicaria lapathifolia* (L.) S.F.Gray 炭化果実 タデ科

上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で先端が尖る。表面は平滑で、やや光沢がある。全体的に発泡する。残存長1.5mm、幅1.1mm。

(4) 不明A Unknown A 炭化種実

上面観は楕円形、側面観は片方が膨らむ楕円形。表面は平滑。ウルシ属もしくはヌルデに似るが、状態が悪く、同定できなかった。残存長3.2mm、残存幅6.5mm。

(5) 不明B Unknown B 炭化種実

破片だが、完形ならば上面観は楕円形、側面観は楕円形か。微細な割れがみられる。堅果の子葉に似る。残存長2.8mm、残存幅3.4mm。

(6) 不明C Unknown C 炭化種実

上面観は扁平、側面観は狭卵形か。全体的に反る。表面は平滑。形状はニトコに似るが、表面の特徴が確認できなかった。長さ2.4mm、幅1.3mm。

(7) 虫えい Gall 炭化

上面観は楕円形、側面観はいびつな円形。片側中央部が凹む。長さ2.8mm、幅3.8mm、厚さ2.8mm。

(8) 子囊菌 Ascomycetes 炭化子囊

球形で、表面は平滑。径1.2mm。

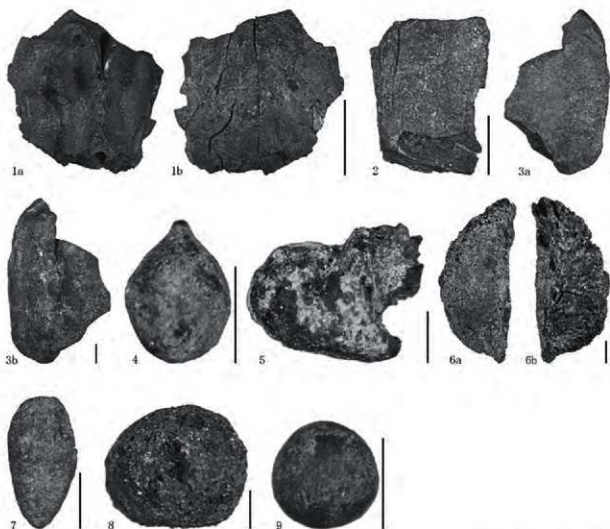
#### 4 考察

縄文時代中期中葉から末葉の15軒の堅穴住居跡から出土した炭化種実を同定した結果、8軒の堅穴住居跡から食用可能なオニグルミ、3軒からクリが得られた。この2種の堅果は、当時頻繁に利用さ

れていたと考えられ、青森県の同時期の他の遺跡から得られた種実同定の結果と総合的である。食用となるクリの子葉は炉跡から出土しており、調理もしくは加工時に炭化した子葉が残ったと考えられる。食用にならないオニグルミ核とクリの果実は、食用になる子葉を利用するために割った残滓と考えられる。不要な部分を炉などで燃やした可能性がある。

利用された可能性が低いサナエタデ-オオイヌタデは、産出数もわずかであるため、周辺に生育していたサナエタデ-オオイヌタデの果実が偶発的に混入し、炭化した可能性が考えられる。子囊菌や虫えいは、炭化材などに伴って遺構に持ち込まれたと考えられる。

(佐々木 由香・バンダリ スダルジャン)



スケール 1:5mm, 2-9:1mm

写真1 水上(2)遺跡から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核 (SI-1045, No. ①-1)、2. クリ炭化果実 (SI-1060, No. ④-4)、3. クリ炭化子葉 (SI-1016, No. ②-2)、4. サナエタデ-オオイヌタデ炭化果実 (SI-1054, No. ④-6)、5. 不明A炭化種実 (SI-1031, No. ③-6)、6. 不明B炭化種実 (SI-9, No. ③-11)、7. 不明C炭化種実 (SI-7, No. ③-10)、8. 虫えい炭化 (SI-1016, No. ②-3)、9. 子囊菌炭化子囊 (SI-1045, No. ①-1)

## 第5章 総括

### 第1節 水上(2)遺跡

水上(2)遺跡は平成18年から調査を実施しており、本書は昨年度報告に次ぐ2冊目である。調査終了区域は、半島状に突き出た河岸段丘の付け根部分で、遺跡範囲のおよそ南半城(約8200m<sup>2</sup>)に相当する。本遺跡は次年度以降も調査が継続するため、以下では現段階までの成果を整理し、まとめと代えたい。

#### 1 検出遺構について

検出遺構の総数は、竪穴住居跡43軒、焼土遺構4基、土器埋設遺構2基、土坑46基、ピット19基である。竪穴住居跡の属性については表11・13(143・145頁)に示しており、その傾向については13頁で概観したとおりである。以下ではこれに時期的傾向を加えて簡単に整理しておきたい。

#### 竪穴住居の構造について

石囲炉はA類(円形・楕円形タイプ)とB類(方形タイプ)があり、方形タイプには石組が付属するもの(只形タイプ、坂本2008の「複式炉B類」に相当)が認められる。一方、柱穴配置は無柱、2本、4本、6本、8本、9本が確認でき、後二者は平面形が長円形となる住居の柱構造である。炉形態では地床炉と石囲炉A類、また柱穴配置では無柱と4本は各期通有の住居構造とみなせる(表28)。本遺跡では、複林式期を前後する時期に住居構造の変化がうかがえる。炉形態ではそれまでの土器埋設炉が見られなくなり石囲炉B類が定量出現する。只形タイプは当該期に出現し(SI-1059)、次期に継続する。大木10式併行期には、大半の炉が石囲炉となり、位置が北西や西方向の壁際へ寄る。また只形ではないが、炉の一边に石が付加されるもの、または炉の一边が突き出し「**┐**」の形態となるもの(SI-1、SI-1045など)が見られる。このほか屋内配石も当該期にのみ見られ、他例では鱈ヶ沢町餅ノ沢遺跡第4号竪穴住居跡(大木10式併行期)の事例がある。炉に近し、炉石と方位が一致する等、炉との関係性をうかがわせる。住居の構造ではないが、竪穴住居の分布は当該時期に段丘西側の縁辺部に集中する。平面形および柱穴配置では、長円形8本柱が複林式期に出現し、これと類似する長円形9

本柱も大木10式併行期に見られる。

#### 大型建物跡について

調査区西側の段丘

表21 時期的別住居構造

時 期	炉形態					柱穴配置					屋 内 配 石	平面形		
	地床炉	土器埋設	石囲炉 円形	石囲炉 楕円	只形	無柱	2本	4本	6本	8本		9本	円・楕	長円
円筒上層 b・c 式	2	2				4		2					4	
円筒上層 d・e 式	4	3				4	1						5	
複林・蕨花式	2		3		1	3		1		1			6	1
大木10式併行	4	2	1	1	6	2	4		1	2	1	3	6	1
後期初頭	1			1										

縁辺で縄文時代中期末葉大木10式併行期の大型建物跡(SI-3106)を検出した。建物跡は遺構の重複が著しいエリアに位置しており、柱穴出土遺物から時期的上限を、また重複状況から時期的下限を捉えることができた。建物は主軸を北西に向けており、対向する4対8本の大規模な柱穴と主軸上に1本の柱穴が配される9本柱の構造をとる。長軸方向の柱筋はやや外側へ膨らむことから平面形は卵形ないしは胴張り形状と思われ、規模は長軸11.3m以上、短軸7.5m以上、主柱穴を結んだ空間の面積は56.3m<sup>2</sup>である。近年、大型竪穴住居跡については北日本7道県の集成(北日本縄文文化研究会2011)があり、当該期の類例も見られる。今後、水上(2)遺跡の調査が終了した段階で、当遺跡の集落構造とその変遷の中に位置づける必要がある。(加藤)



## 2 出土土器について

調査区内から出土した縄文土器は、点数22,000点以上、総重量にして281kgである。縄文時代前期末葉から後期中葉まで確認されたが、遺構を検出した中期中葉から中期末葉の資料が大半である。ここでは、本調査区において確認された土器の時期別傾向と所見についていくつか述べておく。

### 土器の変遷と様相 (図117・図118)

図117・図118は、遺構から出土した土器を中心に土器型式毎に配列したものである。

本調査区内では時期毎に居住活動の増減が現れており、多数の遺構を検出した中期中葉円筒上層d式、中期後葉複林式、中期末葉大木10式併行の土器の出土量が目立つ一方で、円筒上層e式、最花式は相対的に少ない傾向があり、最花式に伴う遺構は確認されなかった。

円筒上層d式土器は、円筒上層式の中では出土量が多く、少なくとも5軒の堅穴住居跡が検出されている。SI-1034とSI-1036は、出土状況が比較的良好でそれぞれ型式的にまとまる土器群(17~21)が出土しているが、その文様構成や割付方法には差異がみられる。SI-1036の17・18は弧線文を重ねたり連結しながら文様を施文するが、SI-1034の20・21は隆帯を垂下させて器面を区分しその範囲に文様を充填していく手法を採る。前者は円筒上層e式、後者は上層e式の文様構成に近似し、中にはe式と共存する事例も認められることから(SI-1014など)、上記の差異はd式期における時間的推移を示しているものと推測される。

図117-37は、いわゆる「中の平1式」(鈴木1998)、「複林1式」(小保内2008)と呼称される土器に相当し、円筒上層e式(波状突起部に付された粘土帯・縄文横位回転施文)と大木式(S字文・張り出す胴部)双方の要素が観察される。37を検出したSI-3107の床下からは、同じく中間的要素をもった38も出土している点で、前後の型式から独立する可能性も考えられる。

複林式土器は、型式別では本調査区内でもっとも多量に出土している。SI-1050の一括資料やSI-1051、SI-1054にみるように(図118)、複林式に通有の口縁部文様帯をもつ土器はわずかで無文となる例が多い。複林式の編年は、弧線文、曲線文の変化で大まかに2段階に細別されるが(鈴木1998、小保内2008)、最花式の文様構成と類似する上記の様相も時間的なメルクマールになるものと推察される。

大木10式併行期の土器群は検出した16軒の遺構に伴って多数出土したが、他土器型式と比較して完形土器が少ない傾向がある。これは、器壁の薄さと土器成形時に接合痕を明瞭に残していることに起因しているとみられ、多数の土器片が粘土帯の単位で剥離している傾向が観察された。青森市三内丸山遺跡や岩手県川目A遺跡の資料でも同様の指摘がなされているように(小林ほか2012)、当該期の一般的特徴として位置づけられるであろう。このほか、大木10式併行期から図118-52や53のようなミニチュア土器が顕著に現れるようになり、同時期の餅ノ沢遺跡では100点以上の出土例がある。

遺構を検出した中でもっとも新しい時期は、後期初頭である。中期末葉の大型建物跡であるSI-3106の堆積土中に構築されたSI-3101の炉跡直上から、当該期の図118-58と59が横倒しの状態で出土した。第2章でも詳述したように、59は口縁部文様が「牛ヶ沢(3)式」、胴部文様が牛ヶ沢式に後続する「弥栄平式」の要素をもち、通常の牛ヶ沢(3)式土器よりも時間的に新しい可能性がある。しかし、周辺地域でも類例が認められないため、ここでは型式を特定せず「後期初頭」と捉えておきたい。共存する58は丸底のミニチュア土器で、八戸市野場(5)遺跡101号住居跡の堆積土より出土したミニチュア土器と文様がよく類似している。当住居跡からも牛ヶ沢(3)式の土器片が確認されていることを考慮すれば、58も後期初頭に帰属するものと推察される。

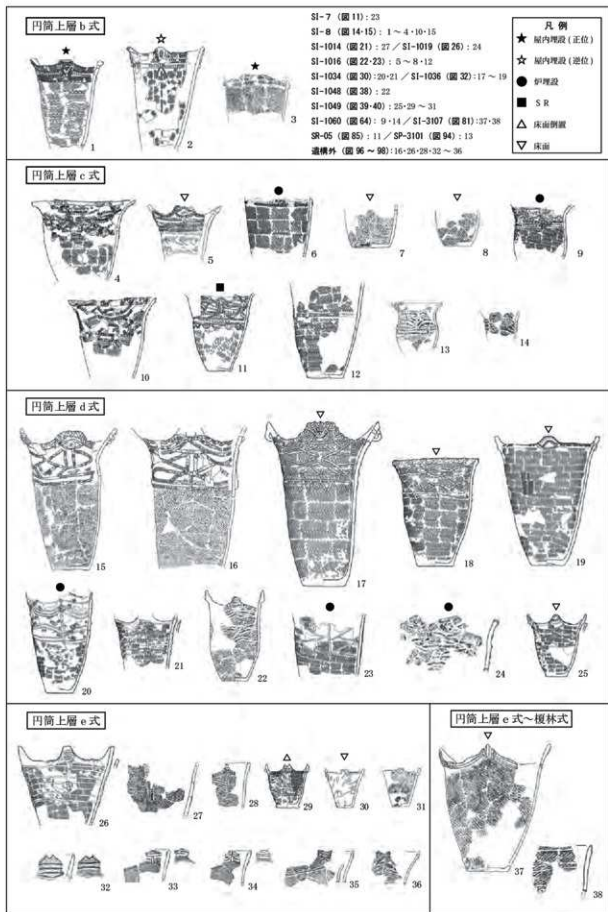
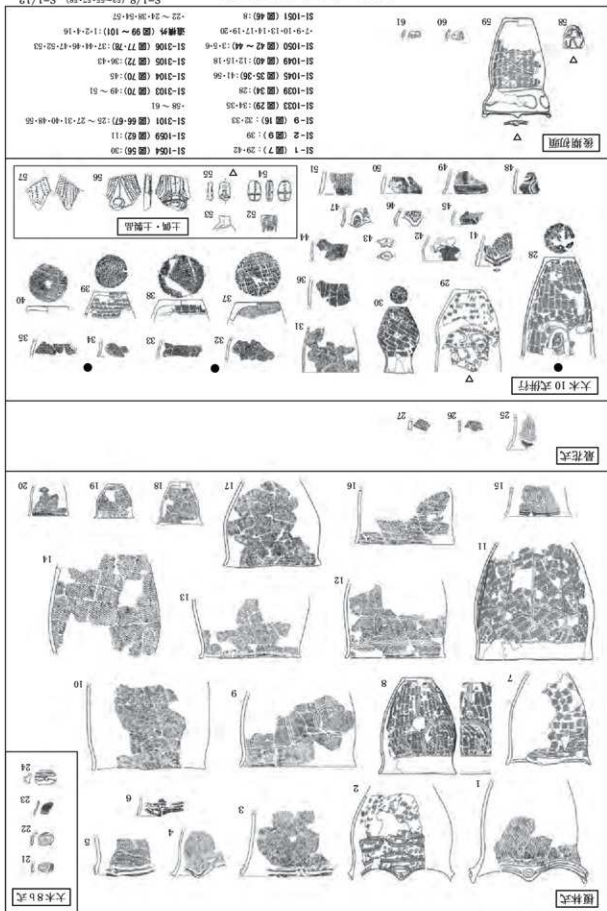


図116 出土土器集成図①

S=1/12

圖 117 出土器集成圖②

S=1/8 (53~55, 57, 58) S=1/12



### 土器の出土状況

竪穴住居跡より出土した土器のうち、円筒上層式では炉に転用される土器を含めて埋設される事例が10例あるのに対し、覆林式は円筒上層式と同様に出土量が多いにもかかわらず、土器が埋設される例は認められない(図116・図117)。このような傾向は、三内丸山遺跡の出土事例を集成した統計データ(羽生2006)や県内の屋内埋設土器を集成した論考(成田1997)でも確認できる。さらに、本調査区内においては、円筒上層式がほぼ完形の状態で床面より出土する例(SI-1036など)がある一方で、覆林式では投棄されたような状態で堆積土より出土する傾向が認められた。例えば、覆林式期の大型個体が多数出土したSI-1050では、20kgを越えるほぼ全ての土器片が堆積土中から出土している。覆林式期であるSI-1051やSI-1059なども同様の傾向が認められることから、当該期における土器の廃棄行為を示す事例と考えられるが、こうしたケースが他調査区でも同様に認められるかは、今後の調査過程の中で検討される必要がある。(永瀬)

### 3 出土石器について

表22に出土石器の点数を示した。共伴する土器は縄文時代中期中葉～後期初頭で、当該期の組成を表していると言える。剥片素材の石器は、二次加工剥片・微細剥離剥片で半数以上を占め、スクレイパー(削器)、石鏃がこれに次ぐ。石材は黒曜石(2点)、赤鉄鉱(1点)、カルセドニー(1点)を除けば、珪質頁岩が99%以上を占める。剥片石器の器種組成および石材組成は、珪質頁岩の分布域でかつ比較的石材を容易に入手できる当遺跡の特色を現したものである。黒曜石は、石鏃、微細剥離剥片各1点と両極打撃痕のある剥片1点の3点を確認した。いずれもの資料も15～20mm程度と極めて小さく、当遺跡における黒曜石利用の一端を示している。また石核や遺跡内に持ち込まれた原石の観察では、20cm程度の塊状の礫も用いられた一方で、10cm未満の比較的小型の転石も多数選択されていることが示された。

礫素材の石器は敲磨器類が圧倒的に多い。中でも凹石がもっとも多く、次いで磨石、敲磨器A類(磨石・凹石の複合)となる。半円状扁平打製石器も23点出土しており組成に占める割合は小さくないが、このうち20点が同一遺構からの出土という特異な状況にあり、組成により強く表れている可能性がある。敲磨器類の使用石材については表9(140頁)に示したとおりで、凝灰岩、凝灰岩質の石材が主体的(84%)に選択されている。

SI-1052では、壁際に珪質頁岩の剥片集積遺構が見つかっている。出土点数70点の剥片のうち35点到接合関係が認められ、12組の接合資料が得られた。一部の剥片には二次加工や微細剥離も認められ、また周辺には砕片も見られないといった状況から、石器製作の残滓というよりは便宜的使用のための刃器として、屋内の一角に備蓄されていたと想定できる。なお、県内の剥片集積遺構については斉藤慶史の作業があり、縄文時代中期から後期にかけての事例が多いことが指摘されている(斉藤2006)。

(加藤)

表22 水上(2)遺跡の石器集計表

器種	石鏃	石槍	石匙	石鏃	石鏃	表面調整	スクレイパー		二次加工	微細剥離	敲磨器類						台石皿	半円状扁平打製石器	石鏃	計			
							削器	種器			磨石	凹石	敲磨器A類	敲磨器B類	敲磨器C類	敲磨器D類							
																					a	b	A
点数	88	25	8	23	11	37	124	23	416	244	14	28	4	11	16	6	2	2	9	23	2	8	1124
比率%	7.8	2.2	0.7	2.0	1.0	3.3	11.0	2.6	13.0	21.7	1.2	2.5	0.4	1.0	1.4	0.5	0.2	0.2	0.8	2.0	0.2	0.7	

## 第2節 水上(3)遺跡

水上(3)遺跡は、北側では岩木川、また東側から南側にかけては木戸ヶ沢という小支谷に面している。岩木川の右岸の河岸段丘上にあり、水上(2)遺跡の下流1.2km、また近接する水上(4)遺跡(青森県教育委員会2009)の下流500mに位置している。調査区の地形は南東側の標高175~173m程度の段丘斜面を経て、これより上部の平坦面(標高175~176m前後)と下部の平坦面(標高172m前後)がある。遺構は遺跡範囲の南東部で、この上下の平坦面に分かれて見つかっている。上部の平坦面では、焼土遺構3基、土坑4基を検出し、下部の平坦面では、平成19年度の調査区も含め、焼土遺構6基、土坑11基、ピット4基を検出した。

検出遺構や出土遺物は、一部水上(2)遺跡と併行するが、縄文時代後期末葉ないしは晩期初頭期の出土遺物などは、近接する水上(4)遺跡の内容に近い。また縄文時代前期初頭期の遺物は、岩木川上流域域での出土例がほとんどなく、わずかではあるが貴重な資料を提供した。(加藤)

### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1983 『牛ヶ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集  
青森県教育委員会 1993 『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集  
青森県教育委員会 2000 『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集  
青森県教育委員会 2006 『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集  
青森県教育委員会 2008 『水上遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第514集  
青森県教育委員会 2009 『砂子瀬遺跡 水上(3)遺跡 水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集  
青森県教育委員会 2010 『砂子瀬遺跡Ⅱ・大川添(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第482集  
青森県教育委員会 2011 『大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第500集  
青森県教育委員会 2012 『砂子瀬遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第513集  
青森県教育委員会 2012 『水上(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第514集  
北日本縄文文化研究会 2011 『北日本縄文時代大型住居集成』  
大沢真澄・二宮修治 1983 「胎土の組成と焼成温度」『縄文文化の研究5 縄文土器Ⅲ』雄山閣  
小笠原雅行 2008 「円筒上層式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション  
小保内裕之 2008 「陸奥大木系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション  
小林正史・高木 晃・岡本 洋・永嶋 豊 2012 「縄文土器の組織み成形における「外傾接合か内傾接合か」の選択理由」『特別史跡三内丸山年報』15 青森県教育委員会  
斉藤慶史 2006 「4. 青森県内における剥片集中遺構について」『新田Ⅱ遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第410集  
坂本真弓 2008 「沢部型複式埴の現在-青森県内の複式埴集成から-」『市川金丸先生古稀記念敬呈論文集-海と考古学とロマン』  
鈴木克彦 1998 「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター  
鈴木克彦 1982 「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』第7号  
鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣出版  
成田滋彦 1997 「屋内埋設土器考-青森県の事例を中心に-」『史跡三内丸山遺跡年報』2 青森県教育委員会  
野村信生 2005 「餅ノ沢遺跡の土器について」『研究紀要』第10号 青森県埋蔵文化財調査センター  
羽生淳子 2006 「世界狩猟採集民族研究からみた三内丸山遺跡-文化景観の長期的変化とそのメカニズム-」『特別史跡三内丸山遺跡年報』9 青森県教育委員会

# 写 真 图 版



遺跡遠景（北東から）



遺跡遠景（北から）



遺跡遠景（東から）

図版 1 遺跡遠景



遺跡遠景（西から）



遺跡全景（写真上が北）



基本層序 1



基本層序 2

図版 2 遺跡遠景・遺跡全景・基本層序





SI-1 新段階 完掘 (北西から)



SI-1 第1号炉跡 検出状況 (東から)



SI-1 第1号炉跡 (南東から)



SI-1 第2号炉跡 (東から)



SI-1 屋内配石 土層 (南東から)



SI-1 土器(図7-11)出土状況 (南東から)



SI-1 旧段階 完掘 (北東から)



SI-1 旧段階 土層 (南から)



SI-2 完掘 (南東から)



SI-2 土層(A-A') (南から)



SI-2 炉跡 検出状況 (南東から)



SI-2 炉跡 検出状況 (南西から)



SI-2 炉跡 土層 (南東から)



SI-2 炉跡 炉石除去 (南東から)



SI-2と周辺遺構 (南から)



SI-5 完掘 (東から)



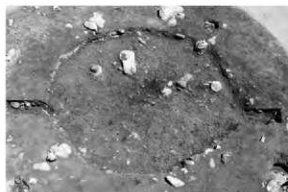
SI-5 土層(A-A') (南東から)



SI-5 土層(B-B') (北東から)



SI-7 検出状況 (東から)



SI-7 掘方 完掘 (西から)



SI-7 炉跡 完掘 (北から)



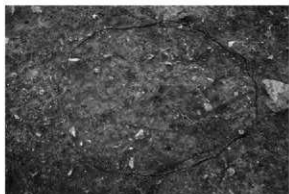
SI-7 炉跡 土層 (北から)



SI-8 完掘 (南東から)



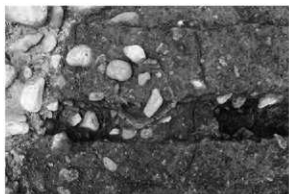
SI-8 土層(A-A') (南から)



SI-8 炉跡 検出状況



SI-8 炉跡 土層 (東から)



SI-8 第1号埋設土器 検出状況 (南から)



SI-8 第1号埋設土器 側面 (南から)



SI-8 第1号埋設土器 土層 (南から)



SI-8 第1号埋設土器 掘方完掘 (南から)



SI-8 第2号埋設土器 検出状況 (東から)



SI-8 第2号埋設土器 側面 (南から)

図版6 SI-8



SI-8 第2号埋設土器 堆積土除去 (南から)



SI-8 第2号埋設土器 掘方完掘 (南から)



SI-8 Pit1 土層 (南から)



SI-8 Pit2 土層 (南から)



SI-8 Pit3 土層 (北東から)



SI-8 Pit4 土層 (南から)



SI-9 完掘 (南から)



SI-9 完掘 (西から)



SI-9 炉跡 土層 (西から)



SI-17 完掘 (南から)



SI-17 床面土器(図17-4)出土状況 (西から)



SI-17 床面土器(図17-4)土層 (西から)



SI-17 土層 (南西から)



SI-17 土層(A-A') (南から)



SI-19 完掘 (西から)



SI-19 炉跡 完掘 (西から)



SI-19 炉跡 土層 (西から)



SI-19 炉跡 掘方完掘 (西から)



SI-20 完掘 (東から)



SI-20 炉跡 完掘 (西から)



SI-20 炉跡 土層 (西から)



SI-1013 検出状況 (東から)



SI-1013 Pit 1 土層 (北から)



SI-1014 土層 (A-A) (西から)



SI-1014 炉跡 完掘 (西から)



SI-1016 完掘 (西から)



SI-1016 第2号炉跡 完掘 (西から)



SI-1016 土器出土状況 (西から)



SI-1017 完掘 (東から)



SI-1017 炉跡 検出状況 (東から)

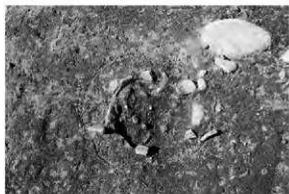


SI-1017 炉跡 土層 (東から)



SI-1019 完掘 (南から)





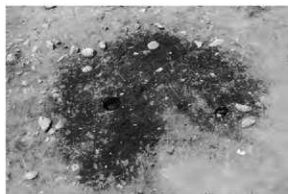
SI-1019 炉跡 検出状況 (南から)



SI-1019 炉跡 土層 (南から)



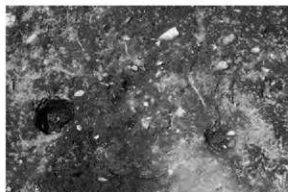
SI-1019 付属施設 検出状況 (南から)



SI-1020 完掘 (東から)



SI-1020 土層 (西から)



SI-1020 炉跡 検出状況 (東から)



SI-1031 完掘 (北から)



SI-1031 炉跡 完掘 (東から)



SI-1031 炉跡 土層 (東から)



SI-1031 炉体土器 (東から)



SI-1031 炉跡 掘方完掘 (東から)



SI-1033 完掘 (南から)



SI-1033 炉跡 検出状況 (南から)



SI-1033 炉跡 土層 (南西から)



SI-1033 土層 (A-A') (南から)



SI-1034 完掘 (北から)



SI-1034 炉跡 完掘 (北から)



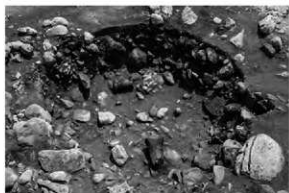
SI-1034 炉跡 土層 (北から)



SI-1034 土層 (A-A') (北西から)



SI-1035 検出状況 (北から)



SI-1036 土器出土状況 (東から)



SI-1036 炉跡 (南から)



SI-1036 床面土器(図32-1)出土状況 (東から)



SI-1036 床面土器(図32-3)出土状況 (北東から)



SI-1036 床面土器(図32-2)出土状況(南から)



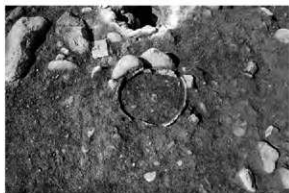
SI-1036 土層(A-A')(西から)



SI-1039 完掘(東から)



SI-1039 土層(A-A')(東から)



SI-1039 埋設土器 検出状況(南から)



SI-1039 埋設土器 土層(東から)



SI-1039 埋設土器 完掘(東から)



SI-1039 埋設土器 掘方完掘(東から)



SI-1045 完掘 (東から)



SI-1045 土層 (東から)



SI-1045 炉跡 (西から)



SI-1045 炉跡 新段階 (西から)



SI-1045 炉跡 旧段階 (西から)



SI-1045 炉跡 土層 (西から)



SI-1045 炉跡 掘方完掘 (西から)



SI-1045 土偶 (図36-1) 出土状況 (東から)



SI-1048 完掘 (西から)



SI-1048 炉跡 完掘 (西から)



SI-1048 掘方 完掘 (西から)



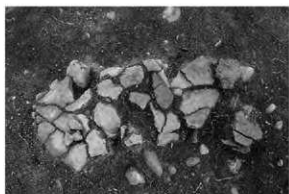
SI-1048 炉跡 完掘 (西から)



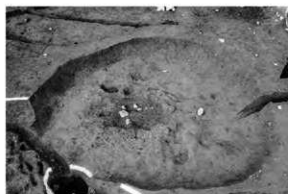
SI-1048 床面 土層 (南から)



SI-1048 炉跡 土層 (南から)



SI-1048 土器 (図38-10) 出土状況 (東から)



SI-1049 完掘 (南西から)



SI-1049 土層(A-A') (北から)



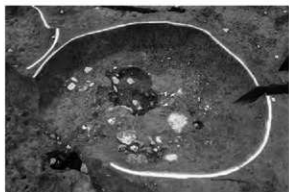
SI-1049 炉跡 土層 (西から)



SI-1049 炉跡 検出状況 (南から)



SI-1049 床面出土土器(図39-2) (南西から)



SI-1049 掘方 完掘 (南西から)



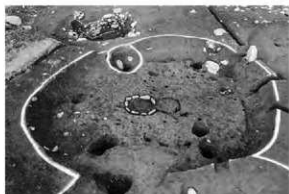
SI-1050 完掘 (西から)



SI-1050 硬化面 (北から)



SI-1050 土層(A-A') (南西から)



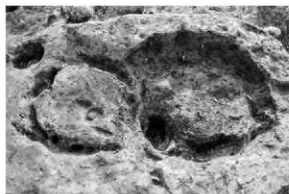
SI-1051 完掘 (西から)



SI-1051 土層(A-A') (南西から)



SI-1051 炉跡 完掘 (東から)



SI-1051 炉跡 掘方完掘 (東から)



SI-1051 掘方 完掘 (西から)



SI-1052 完掘 (東から)



SI-1052 炉跡 (西から)



SI-1052 土層 (北東から)





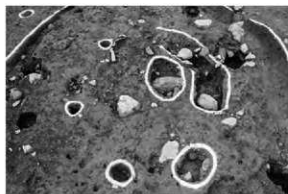
SI-1052 屋内配石 (北から)



SI-1052 屋内配石 土層 (北から)



SI-1052 Pit 1 剥片出土状況 (南から)



SI-1053 完掘 (南から)



SI-1054 完掘 (東から)



SI-1054 壁周溝 (東から)



SI-1054 炉跡 (西から)



SI-1054 炉跡 (北から)



SI-1054 土層 (北東から)



SI-1054 土層 (北東から)



SI-1054 土器 (図56-1) 出土状況 (西から)



SI-1054 土器出土状況 (北から)



SI-1054 台石 (図58-6) 出土状況 (北から)



SI-1054 炉跡北側 Pit9~11 (北西から)



SI-1054 炉跡 掘方 (西から)



SI-1055 完掘 (西から)



SI-1055 土層 (南西から)



SI-1055 掘方 完掘 (西から)



SI-1057 完掘 (北から)



SI-1057 完掘 (東から)



SI-1057 炉跡 検出 (東から)



SI-1057 炉跡 掘方 (東から)



SI-1057 掘方 完掘 (北から)



SI-1057 掘方 完掘 (西から)



SI-1058 完掘 (北東から)



SI-1058 硬化面 (南から)



SI-1058 土層 (南東から)



SI-1059 完掘 (北西から)



SI-1059 炉跡 (北西から)



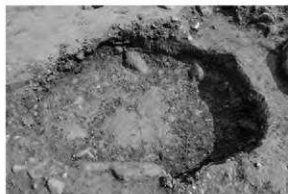
SI-1059 石囲部 (北西から)



SI-1059 石組部 (北西から)



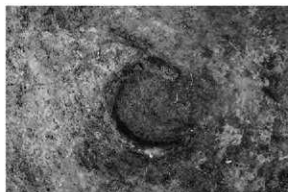
SI-1059 掘方 完掘 (西から)



SI-1059 住居内SK-1 完掘 (西から)



SI-1060 土層 (南から)



SI-1060 炉跡 検出状況 (南から)



SI-1060 炉跡 完掘 (南から)



SI-1060 炉跡 掘方完掘 (南から)



SI-3101 完掘 (東から)



SI-3101 第1号炉跡 土層 (東から)



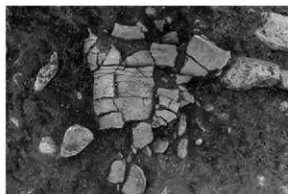
SI-3102 Pit 2 (西から)



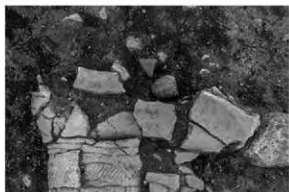
SI-3101 第2号炉跡 検出状況 (北東から)



SI-3101 土器(図66-1)出土状況 (南東から)



SI-3101 土器・土製品出土状況 (南東から)



SI-3101 土製品(図67-7)出土状況 (西から)



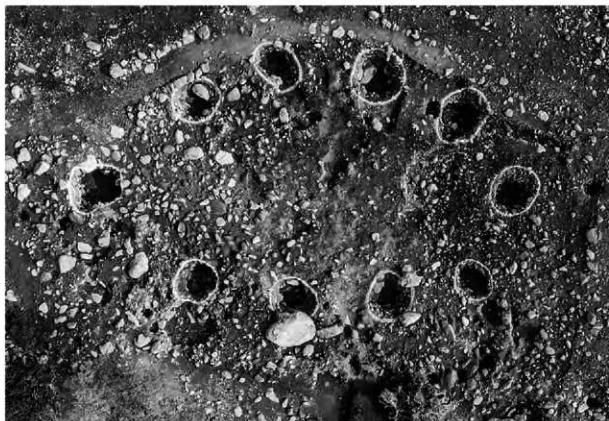
SI-3103 完掘 (北から)



SI-3103 第1号炉跡 検出状況 (東から)



SI-3103 第1号炉跡 土層 (東から)



SI-3106 完掘 (写真左が北)



SI-3106 作業風景 (南から)



SI-3106 柱穴 1 土層 (南西から)



SI-3106 柱穴 1 完掘 (南西から)



SI-3106 柱穴 2 土層 (北東から)



SI-3106 柱穴 2 完掘 (北東から)



SI-3106 柱穴 3 土層 (北東から)



SI-3106 柱穴 4 土層 (東から)



SI-3106 柱穴 4 完掘 (東から)



SI-3106 柱穴 5 土層 (東から)





SI-3106 柱穴 5 完掘 (東から)



SI-3106 柱穴 6 土層 (東から)



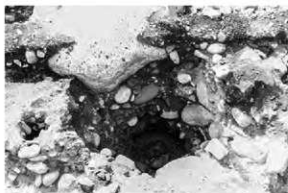
SI-3106 柱穴 6 完掘 (東から)



SI-3106 柱穴 7 土層 (東から)



SI-3106 柱穴 8 土層 (東から)



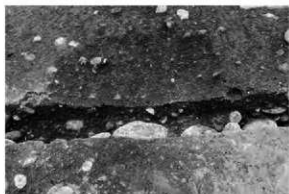
SI-3106 柱穴 8 完掘 (東から)



SI-3106 柱穴 9 土層 (東から)



SI-3106 柱穴 9 完掘 (東から)



SI-3105 炭化物集中範囲 完掘 (東から)



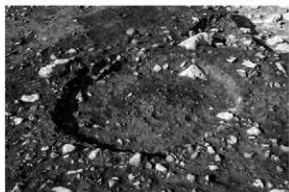
SI-3105 土層 (東から)



SI-3105 第1号炉跡 (東から)



SI-3105 土層 (東から)



SI-3107 完掘 (東から)



SI-3107 土層 (南から)



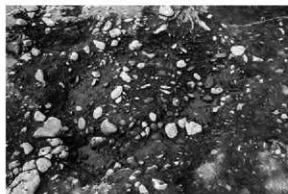
SI-3107 土器(図81-1)出土状況 (北から)



SI-3107 炉跡 土層 (南から)



SI-3108 完掘 (東から)



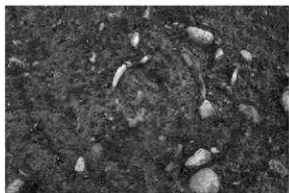
SI-3109 完掘 (東から)



SI-3109 炉跡 土層 (東から)



竪穴住居跡の調査風景



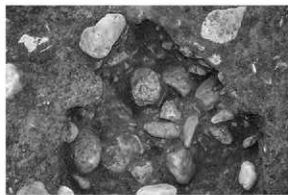
SI-1035 埋設土器 検出状況 (東から)



SI-1035 埋設土器 側面 (東から)



SI-1035 埋設土器 土層 (東から)



SI-1035 埋設土器 掘方完掘 (東から)

図版29 SI-3108・3109・SI-1035 埋設土器



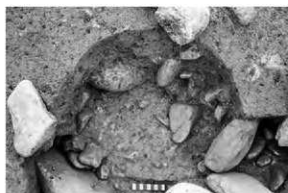
SR-2 検出状況 (西から)



SR-2 側面 (南から)



SR-2 土層 (南から)



SR-2 掘方 完掘 (南から)



SR-1004 検出状況 (南東から)



SR-1004 土層 (北東から)



SR-1004 掘方 完掘 (西から)



SP-3101 土器出土状況 (東から)



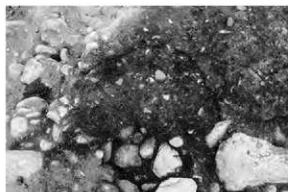
SN-3101 検出状況 (北から)



SN-3101 土層 (北東から)



SN-3102・3103 検出状況 (南西から)



SN-3102・3103 検出状況 (北西から)



SN-3104 検出状況 (西から)



SN-3104 土層 (西から)



SK-1021 完掘 (北西から)



SK-1023 完掘 (南西から)



SK-1024 完掘 (北東から)



SK-1025 完掘 (南西から)



SK-1037 土層 (西から)



SK-1038 土層 (北東から)



SK-1042 完掘 (東から)



SK-1042 土層 (東から)



SK-4 土層 (南から)



SK-7 完掘 (東から)

図版32 SK-1024・1025・1037・1038・1042・4・7



SK-14 完掘 (北から)



SK-14 土層 (東から)



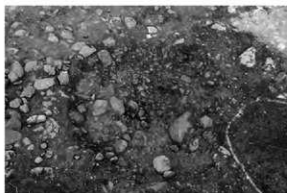
SK-14 石器出土状況 (北から)



SK-14 石器 (図91-2) 出土状況 (北東から)



SK-322 完掘 (西から)



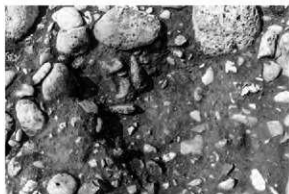
SK-325 完掘 (西から)



SK-1010 完掘 (北から)



SK-1013 完掘 (北から)



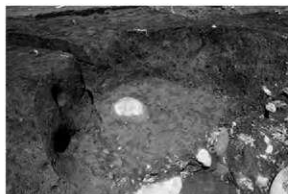
SK-1034 完掘 (南西から)



SK-1035 完掘 (南から)



SK-1044 完掘 (北から)



SK-1047 完掘 (南から)



SK-1048 検出状況 (西から)



SK-1048 土層 (南から)



SK-1048 完掘 (南から)



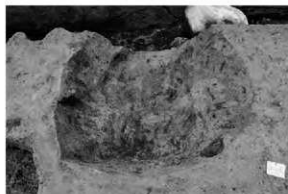
SK-1048 突出部 (南から)

図版34 SK-1034・1035・1044・1047・1048

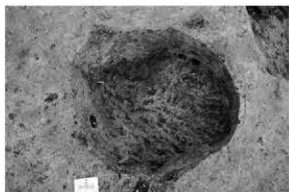




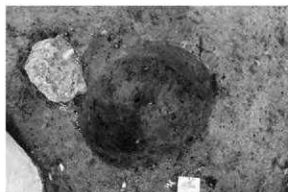
SK-1049 土層 (東から)



SK-1051 完掘 (西から)



SK-1053 完掘 (西から)



SK-1054 完掘 (西から)



SK-1057 完掘 (東から)



SK-1058 完掘 (東から)



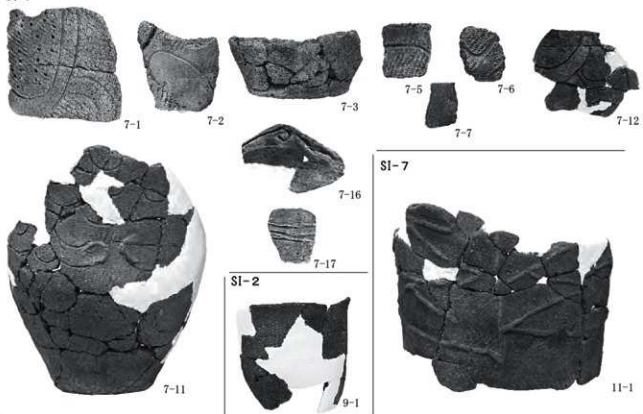
SK-3101 完掘 (東から)



SK-3101 土層 (東から)

図版35 SK-1049・1051・1053・1054・1057・1058・3101

SI-1



SI-8



図版36 遺構出土土器①

SI-8



SI-9



SI-17



SI-19



SI-1014



SI-1013



図版37 遺構出土土器②

SI-1016



22-1



22-2



23-1



23-3



23-2



23-5



23-7



23-6



23-10



23-11



23-8



23-9



23-12

図版38 遺構出土土器③

水上(2)遺跡

SI-1017



SI-1019



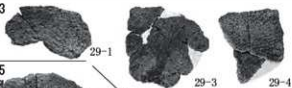
SI-1020



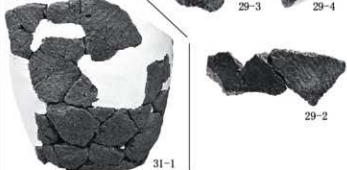
SI-1031



SI-1033



SI-1035



SI-1034



SI-1036



図版39 遺構出土土器④

SI-1036



SI-1039

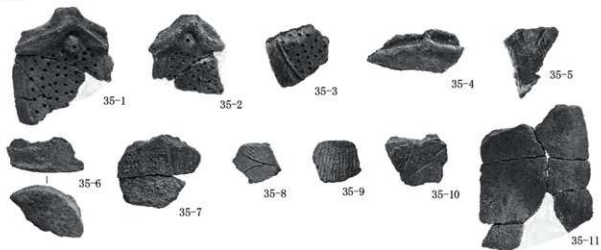


34-1

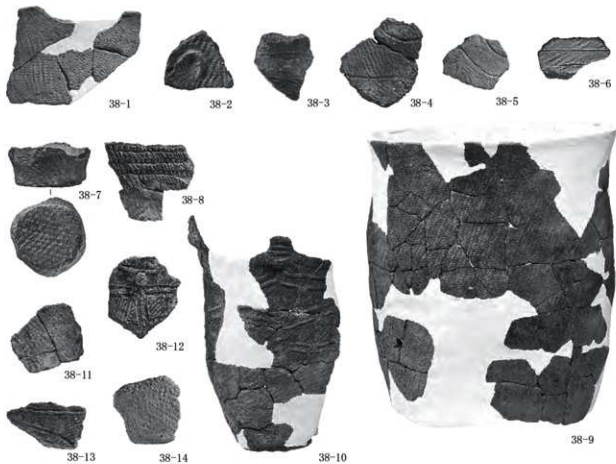
34-2

圖版40 遺構出土土器⑤

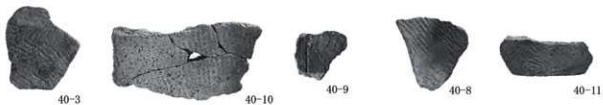
SI-1045



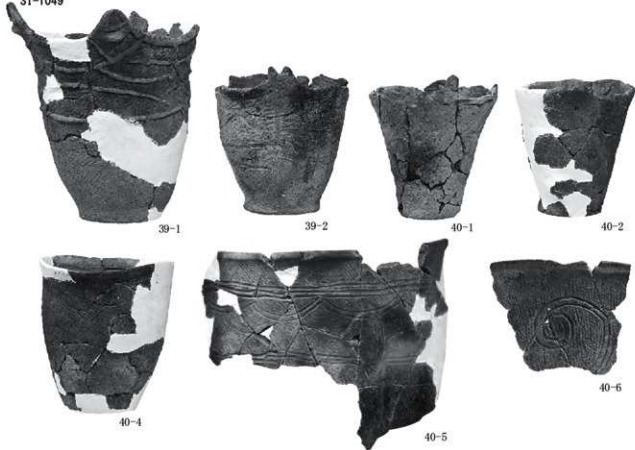
SI-1048



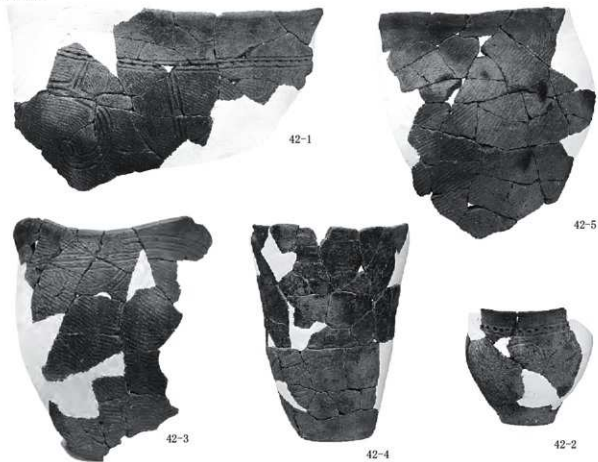
SI-1049



SI-1049



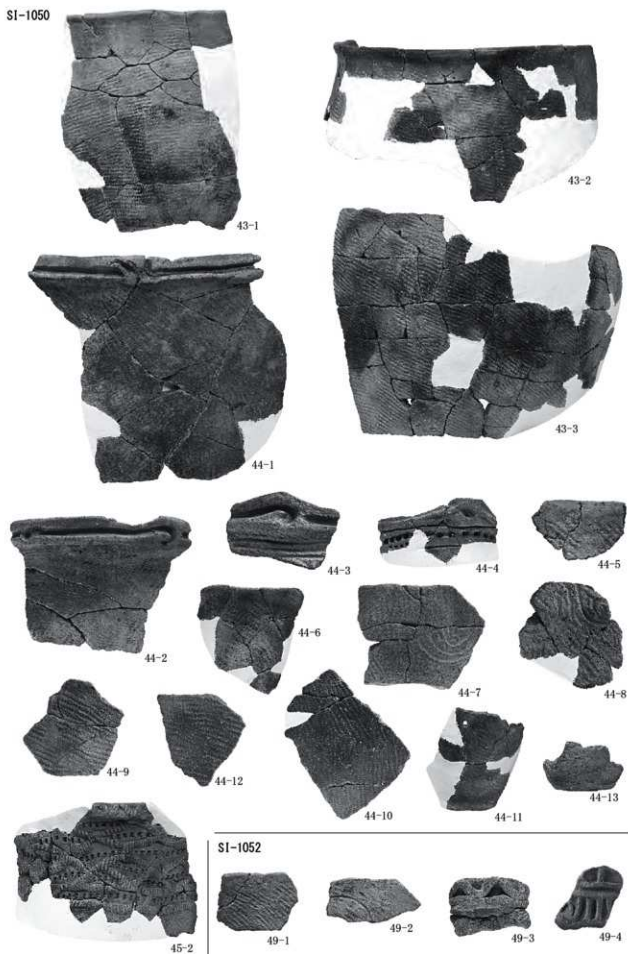
SI-1050



圖版42 遺構出土土器⑦



SI-1050



図版43 遺構出土土器⑧

SI-1051



46-1



46-2



46-3

SI-1054



56-3



56-4



56-1

SI-1055



59-1

SI-1059



62-1



62-2



62-3



62-4

SI-1060



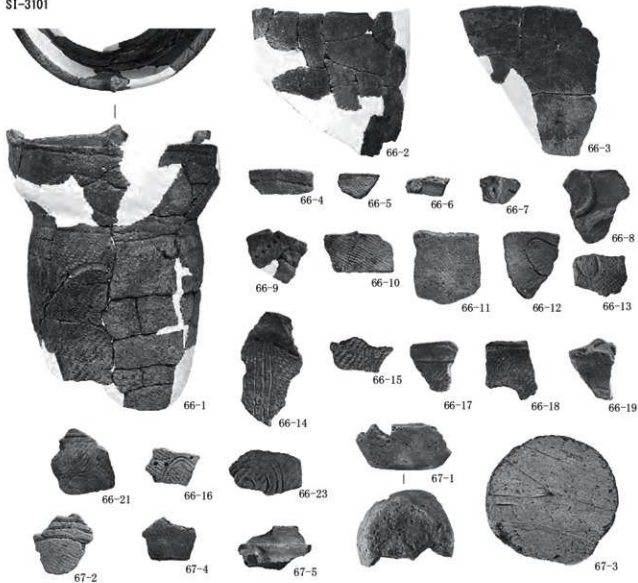
64-1



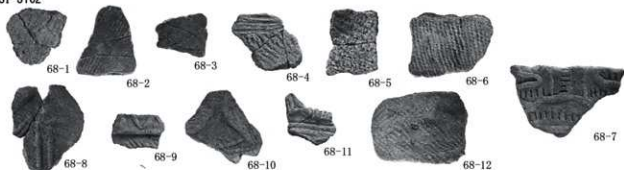
64-2

図版44 遺構出土土器⑨

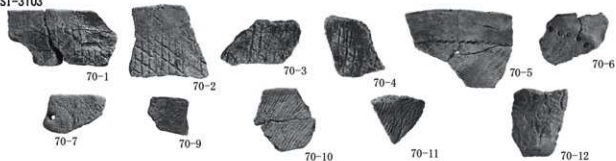
SI-3101



SI-3102

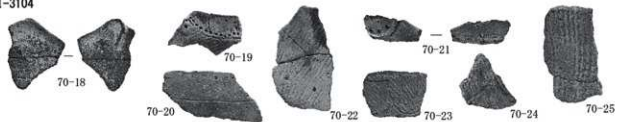


SI-3103

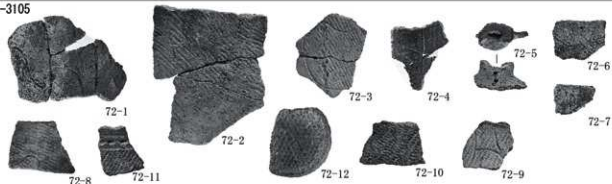


図版45 遺構出土土器⑩

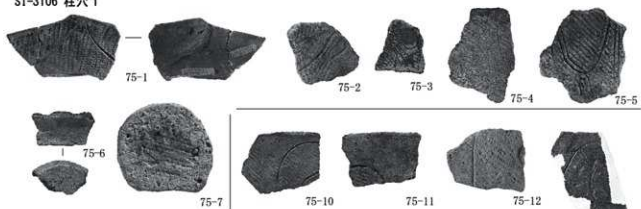
## SI-3104



## SI-3105



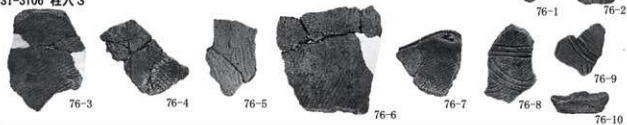
## SI-3106 柱穴 1



## SI-3106 柱穴 2



## SI-3106 柱穴 3



## SI-3106 柱穴 4



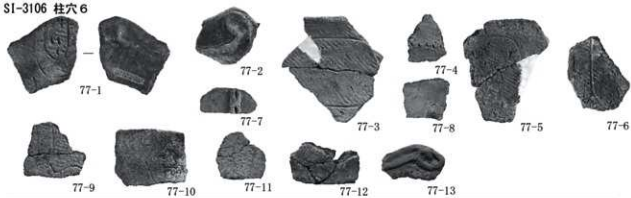
## SI-3106 柱穴 5



図版46 遺構出土土器①

水上(2)遺跡

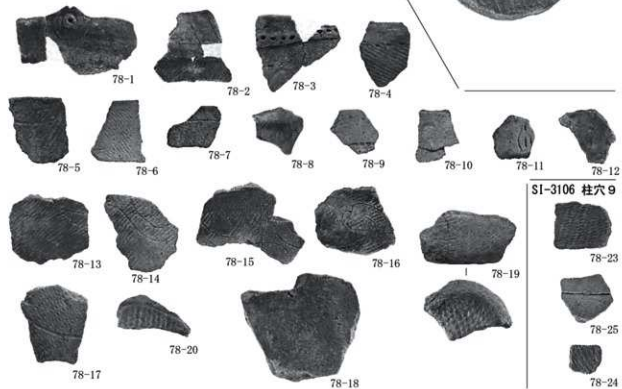
SI-3106 柱穴 6



SI-3106 柱穴 7



SI-3106 柱穴 8



SI-3106 柱穴 9

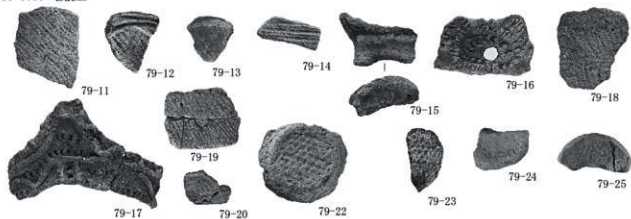


SI-3106 堆積土



図版47 遺構出土土器⑫

SI-3106 堆積土



SI-3107



SI-3109



SR-2



SR-1004



SP-3101



図版48 遺構出土土器⑬

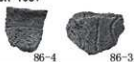
SK-1021



86-1

86-2

SK-1037



86-4

86-3

SK-1028



89-8

SK-1032



89-9

SK-1034



89-10

SK-1034



89-11

SK-1048



89-12



89-13



89-14

SK-1057



89-16



89-17



89-18

遺構外



95-1



95-2



95-3



95-4



95-5



95-6



95-7



95-8



95-9



95-11



95-12



95-10



95-14



95-13



95-16



95-15



95-19



95-18



96-3



96-5



96-4

図版49 遺構外出土土器①

遺構外



96-1



96-2



97-2



97-1



96-6

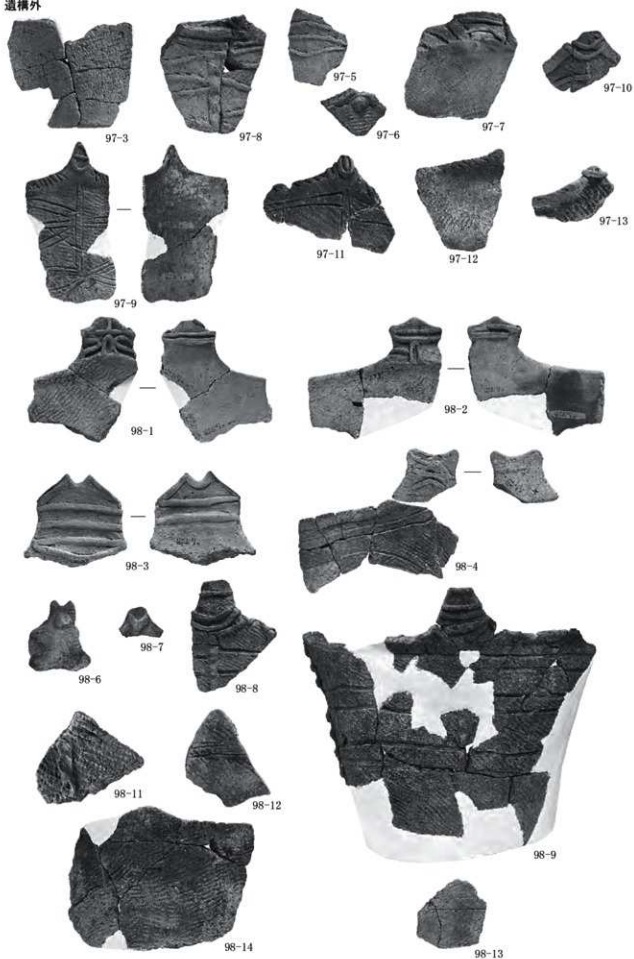


97-4

図版50 遺構外出土土器②

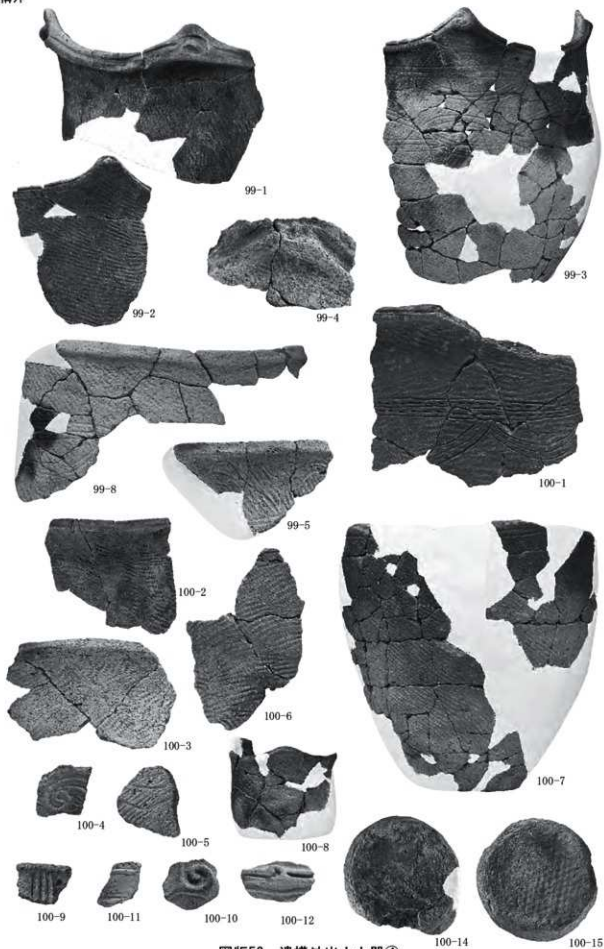


遺構外



図版51 遺構外出土器③

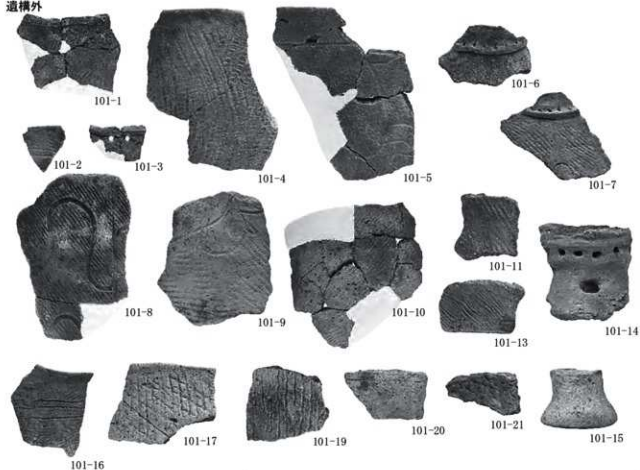
## 遺構外



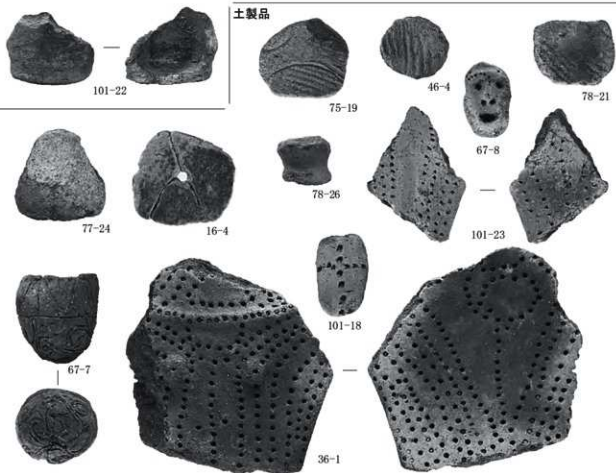
図版52 遺構外出土土器④

水上(2)遺跡

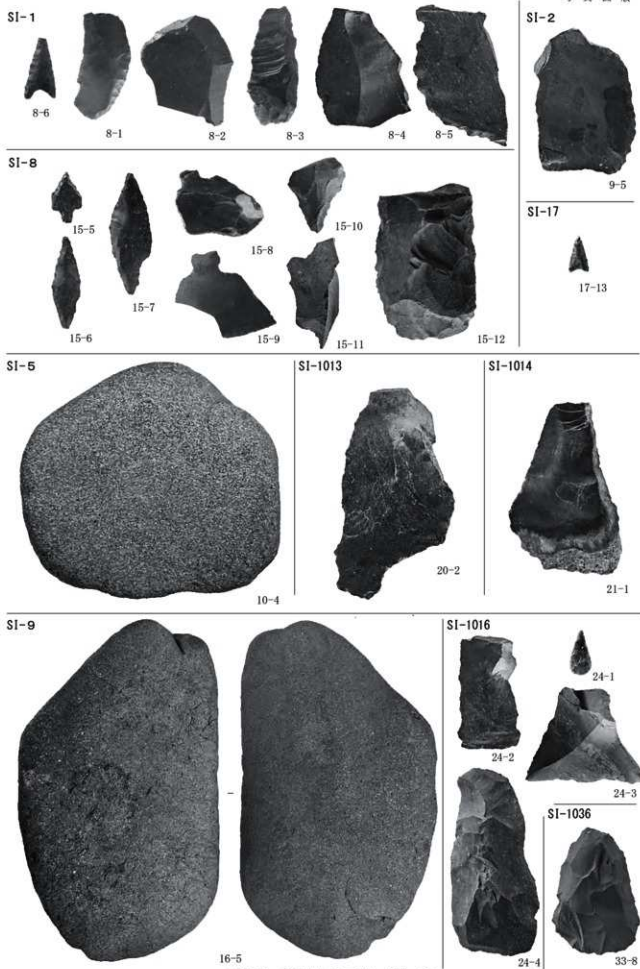
遺構外



土製品



図版53 遺構外出土土器⑤・土製品

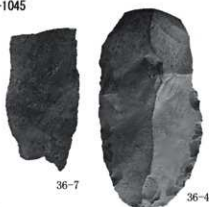


図版54 遺構出土石器 (SI) ①

SI-1039



SI-1045



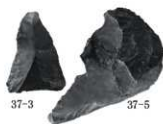
SI-1045



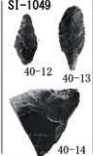
SI-1048



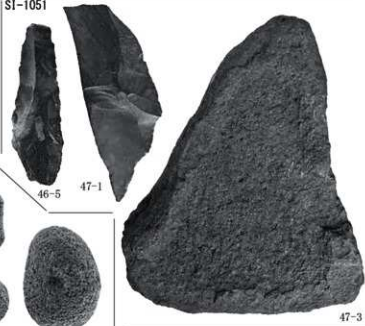
SI-1048



SI-1049



SI-1051



SI-1050

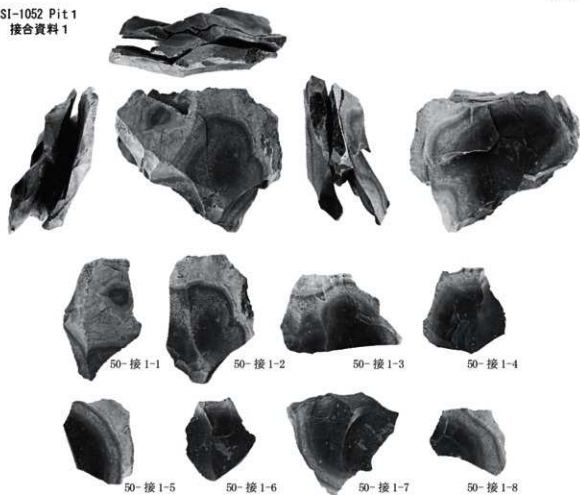


SI-1052



図版55 遺構出土石器 (SI) ②

SI-1052 Pit 1  
接合資料 1



接合資料 2



接合資料 3



図版56 遺構出土石器 (SI) ③

永上(2)遺跡

SI-1052 Pit 1

接合資料4



接合資料5



接合資料6

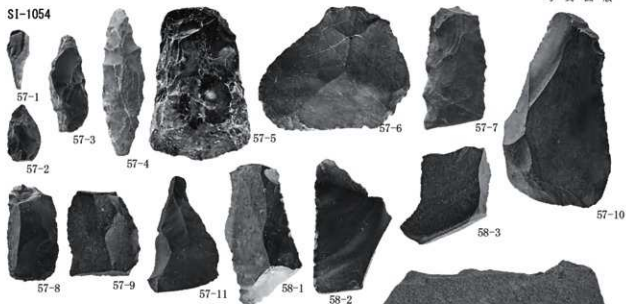


接合資料7



図版57 遺構出土石器 (SI) ④

SI-1054



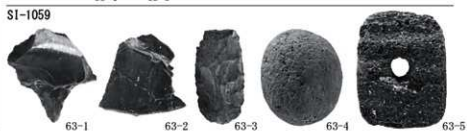
SI-1055



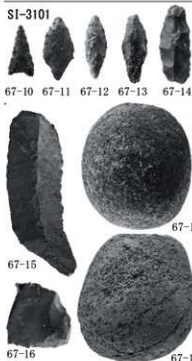
SI-1058



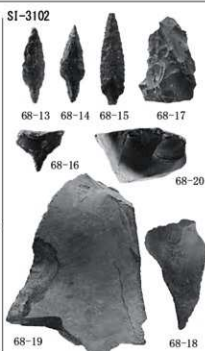
SI-1059



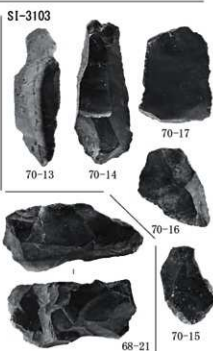
SI-3101



SI-3102



SI-3103



図版58 遺構出土石器・石製品 (SI)



SI-3103



71-2

SI-3104



71-3



71-4

SI-3106 柱穴 1



75-8



75-9

柱穴 2



75-20



76-13

柱穴 3



76-14

柱穴 4



76-19

柱穴 6



77-15



77-16

SI-3106 堆積土



79-26



79-27



79-29



79-30



80-3

柱穴 5



76-21

柱穴 7



77-26

柱穴 8



78-22

柱穴 9



78-27



80-1



80-2



82-2

SI-3109

SK-1023



86-6

SK-1056



86-7

SK-1040



86-8

SK-1048



89-1

図版59 遺構出土石器 (SI・SK) ①

SN-3104



84-1

SI-3105



72-13

72-16

72-15

72-14

72-18

72-17

72-19

SI-3106

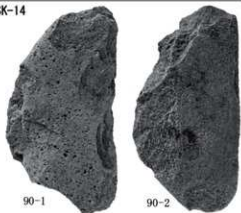


80-4

80-5

80-6

SK-14



90-1

90-2



90-3



90-4



90-5



90-6



91-1



91-3



91-4



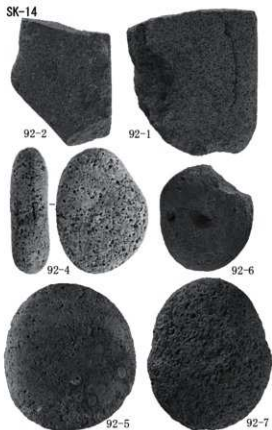
91-5



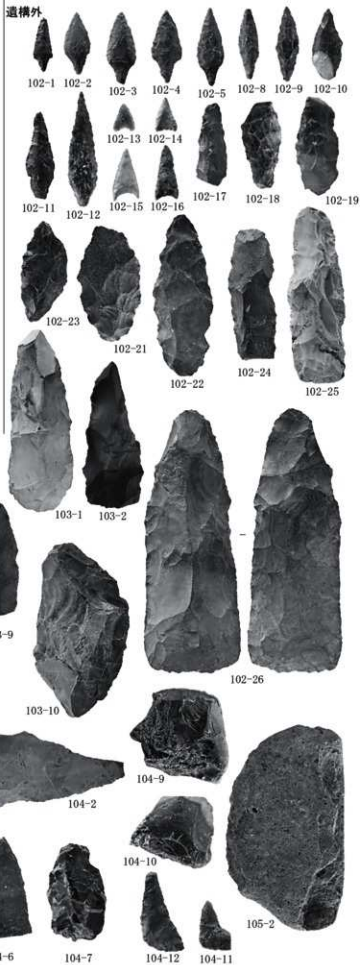
91-6

図版60 遺構出土石器 (SI-SK) ②

SK-14

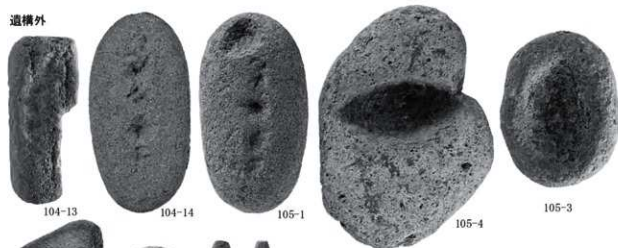


遺構外



図版61 土坑出土石器・遺構外出土石器

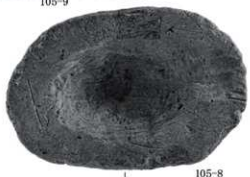
遺構外



SK-14 出土礫石器



半円状扁平打製石器（完形）



半円状扁平打製石器（欠損）



ほぼ原寸大



敲磨器類

図版62 遺構外出土石器・石製品



遺跡遠景（西から）



遺跡全景（北東から）



遺跡全景（南東から）

図版63 遺跡遠景・遺跡全景



基本層序（東から）



遺物出土状況（1）（南から）



遺物出土状況（2）（西から）

図版64 基本層序・遺物出土状況



第7号土坑 土層 (東から)



第7号土坑 完掘 (北から)



第9号土坑 土層 (南西から)



第9号土坑 完掘 (南から)



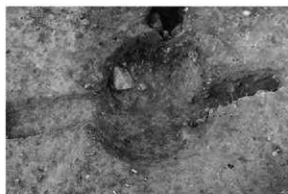
第11号土坑 土層 (南から)



第11号土坑 完掘 (南から)



第12号土坑 土層 (東から)



第12号土坑 完掘 (東から)



第13号土坑 土層 (南から)



第13号土坑 完掘 (南西から)



第14号土坑 土層 (西から)



第14号土坑 完掘 (西から)



第15号土坑 土層 (北から)



第15号土坑 完掘 (北から)



第5・8号 (写真左)・第6・15号 (写真右) 土坑 完掘 (北から)

図版66 第5・6・8・13・14・15号土坑





第1号焼土遺構 断面 (東から)



第2号焼土遺構 断面 (東から)



第3号焼土遺構 検出 (東から)



第3号焼土遺構 断面 (東から)



第5号焼土遺構 検出 (西から)



第5号焼土遺構 断面 (東から)



第6号焼土遺構 検出 (東から)



第6号焼土遺構 断面 (東から)

図版67 第1・2・3・5・6号焼土遺構

第3号土坑



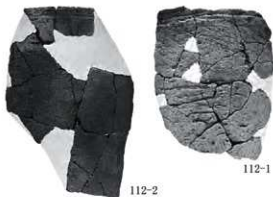
第5号土坑



第7号土坑



第6号土坑



第15号土坑



第13号土坑



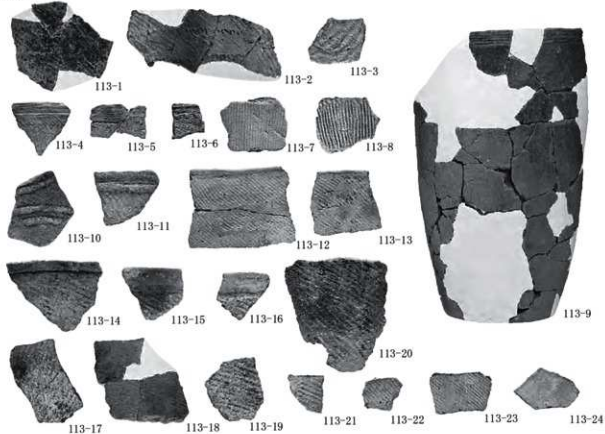
第3号烧土遺構



第6号烧土遺構

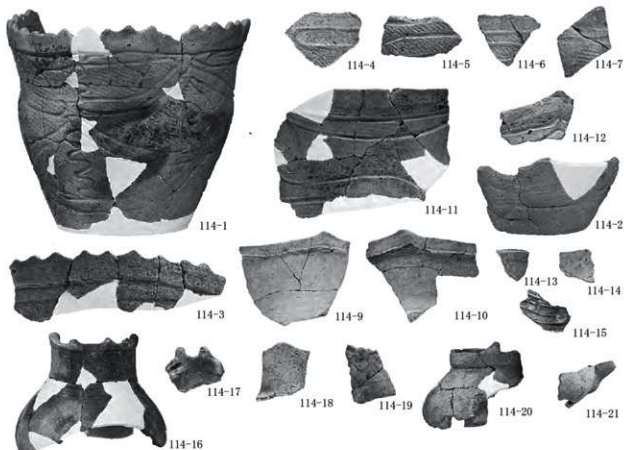


遺構外



図版68 土坑・烧土遺構・遺構外出土土器

遺構外



第2号土坑



第5号土坑



第9号土坑



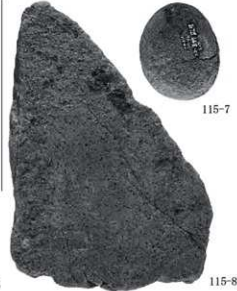
第8号土坑



第13号土坑



第3号烧土遺構



遺構外



図版69 土坑・烧土遺構・遺構外出土土器・石器

### 報告書抄録

ふりがな	みずがひかっこにいせきに みずがひかっこさんいせきに
書名	水上(2)遺跡Ⅱ 水上(3)遺跡Ⅱ
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第528集
編著者名	小田川哲彦・佐々木雅裕・加藤啓則・永瀬史人
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森県青森市新成字天田内152-15 TEL. 017-788-5701 FAX 017-788-5702
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	2013年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		世界測地系 (JGD 2000)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みずがひ いせき 水上(2)遺跡	あおもりけん なかつがほら 青森県中津軽郡 にしめやむらすなこせ 西目屋村砂子瀬 あざみずがみ 字水上	02343	343025	40° 31′ 52″	140° 14′ 55″	20110511 ～ 20111118	4,700	記録保存 調査
みずがひ いせき 水上(3)遺跡	あおもりけん なかつがほら 青森県中津軽郡 にしめやむらすなこせ 西目屋村砂子瀬 あざみずがみ 字水上	02343	343026	40° 32′ 02″	140° 14′ 43″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
水上(2)遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	43	縄文土器・石器・ 土製品・石製品	縄文時代中期末葉の大型 建物跡や竪穴住居内の剥 片集積遺構の検出 後期初頭期の土器に伴う ミニチュア土器の出土 線刻のある石製品の出土		
水上(3)遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	14	縄文土器・石器			
要約	水上(2)遺跡は岩木川の右岸、標高172～182mの河岸段丘に位置する遺跡で、今報告は遺跡南半城の段丘平坦面の調査成果である。縄文時代前期末葉～後期初頭の遺構・遺物が見られ、長軸11mを超える縄文時代中期末葉の大型建物跡の検出が特筆される。また水上(3)遺跡は、水上(2)遺跡の下流1.2kmに位置する遺跡である。調査の結果、縄文時代前期初頭から後期末葉の遺構・遺物を少量検出した。							

青森県埋蔵文化財調査報告書第528集

## 水上(2)遺跡Ⅱ

## 水上(3)遺跡Ⅱ

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2013年3月27日

発行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印刷 青森オフセット印刷株式会社

〒030-0802 青森市本町2丁目11番16号

TEL 017-775-1431 FAX 017-775-1435



